鋳師屋遺跡群

野火付遺跡

—長野県北佐久郡御代田町野火付遺跡発掘調査報告書—

1985

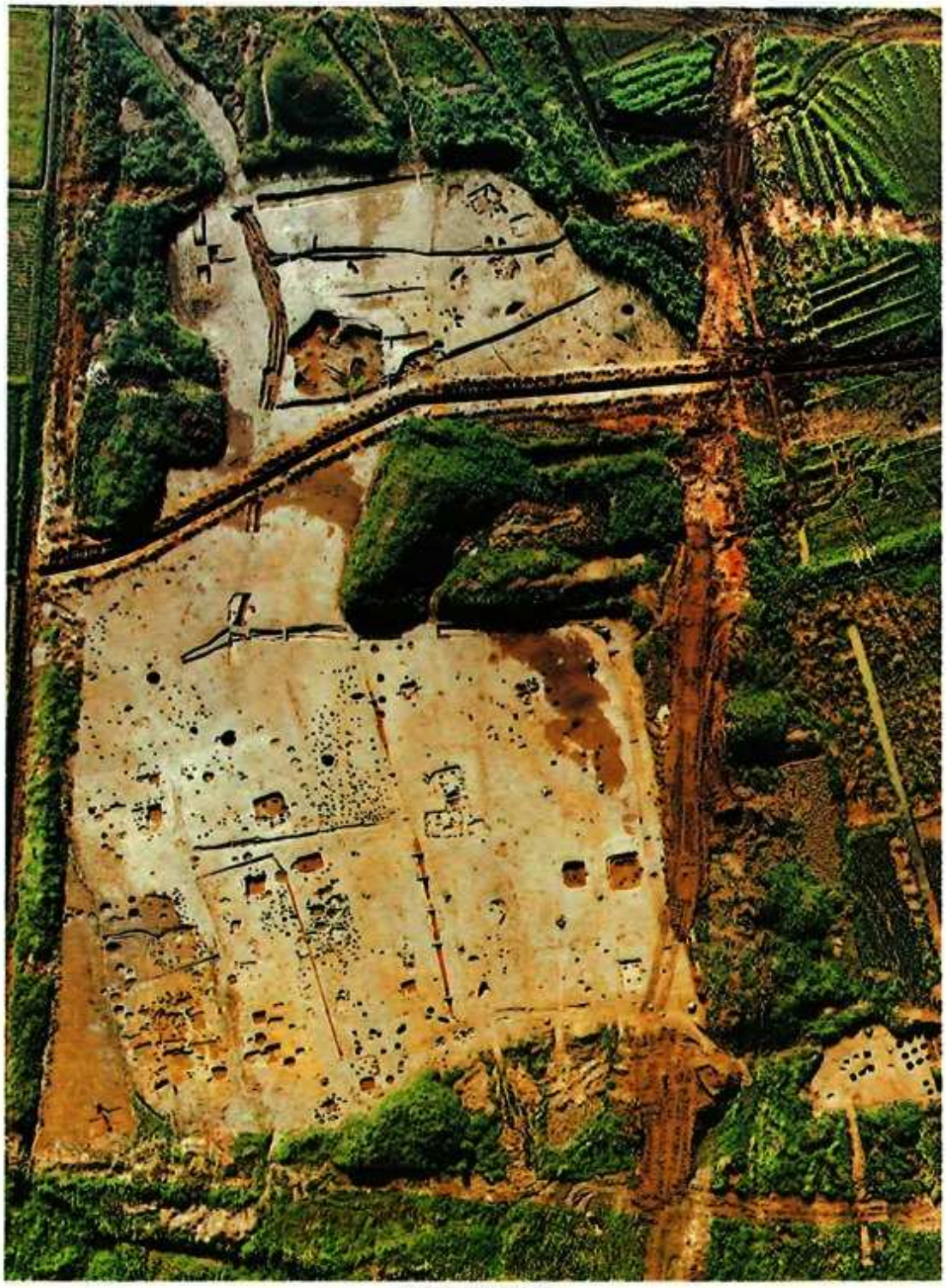
御代田町教育委員会

鋳師屋遺跡群

野火付遺跡

—長野県北佐久郡御代田町野火付遺跡発掘調査報告書—

御代田町教育委員会



野火付遺跡全景

1 平安時代埋葬馬（3号馬・D-18）

2 平安時代埋葬馬（2号馬・D-19）

序　　文

近代農業の促進と生産性向上に欠かせない圃場整備事業を施行するに伴い、御代田町小田井地籍で、当地の埋蔵文化財である鋳師屋遺跡群野火付遺跡の発掘調査が行われ、多くの出土品と共に昭和59年８月をもって終了しました。

ここ佐久地方は、縄文、奈良、平安、中世時代からの、大規模な遺跡に恵まれ、特に浅間山の南麓は、特異な地形、いわゆる〝田切地形〟が脈状に分布し、有数の遺跡密集がなされているところです。今回、多くの方々の御協力と御努力によって、発掘された遺構、遺物からは、ここに居住した先人達の生活と、数多くの歴史が脈々と波打っていることを感じさせられ、文化財保護の面だけでなく、貴重な学術的資料として、保存に務めたいと思っております。

出土資料には、佐久平では少ないと言われる奈良時代の竪穴式住居址、平安時代の竪穴式住居址、まためずらしい神功開宝や土器類などが、良好な状態で検出されました。加えて注目されるのは、奈良平安時代にはここ佐久地方は貢馬が献上されたところとして有名でありましたが、この野火付遺跡からも6頭の馬骨が発掘されました。この６頭はいずれも、ていねいに安置されており、明らかに埋葬されたものと思われます。古文献にみえる望月牧、長倉牧と共に名を連ねる塩野牧や、長倉駅家の存在・発展の証の一端といえましょう。この地の先人達が牧や駅に馬を育い中央との関りを持っていた事が伺われます。浅間山を望む雄大な大自然の中で、先人が幾多のロマンとドラマを展開していたであろうことを、時間をタイムスリップして、限り無い感動を覚えます。

圃場整備事業という新しい時代の流れの中で、生活の必然性もさることながら、郷土の歴史の重みをも充分尊重しながらの開発を、考えていきたいと思います。

なお、本調査及発掘にあたられました調査団、各方面で御協力をいただきました皆様の労苦に対しまして、心から厚く御礼を申し上げます。

御代田町長

古　越　寅　男

序　　文

此の度、昭和59年度県営圃場整備事業の施行に伴って佐久市西北境の水田（一部畑）の緊急発掘調査を行いました。鋳師屋遺跡群野火付遺跡と称せられる場所です。この地域は浅間山の南斜面にあたり、その開発も古く、古来より由緒ある場所と言い伝えられておりました。

当町としては初めて経験する緊急発掘調査であり、しかもこれに対処する組織も完備しておりませんので、当初は大変苦慮いたしましたが、理事者の理解と熱意の下に県教委文化課の御指導を得て、鋭意計画立案と事業の遂行にあたって参りました。

昭和59年４月23日佐久考古学会長由井茂也氏を団長とする調査団を結成し、５月17日に現地において発掘調査作業に入りました。この間御代田地区の老人クラブの献身的な協力を得ることができ、作業も順調に進みました。やがて調査が進むにつれて本遺跡が規模の大きいものであることが判明してきました。

本遺跡からは奈良、平安、中世各期に及び遺構、遺物が検出され、主なものとしては住居址、掘立柱建物址、特殊竪穴状遺構、溝状遺構、井戸址、土壙のほかにこの時代のものと思われる５頭分の馬骨が土壙内より検出され、その丁寧に置かれた様子から埋葬馬ではないかとみられております。これらは佐久の馬文化についての貴重な資料となろうと思われます。

さて、発掘調査は春から梅雨時を経て猛暑にかけて実施され、８月末を以て終了いたしました。その後海洋センター内の資料室において出土資料の整理を続け、その成果を今回発掘調査報告書として刊行する次第であります。本書が佐久の古代史解明の手がかりのひとつとなり、地域文化の向上に稗益できれば幸いです。

終りに県教委文化課、東信土地改良事務所、小田井御影土地改良区、地権者各位、献身的に協力いただいた佐久考古学会各位、町文化財審議委員、御代田地区老人クラブ、発掘及び整理参加者の皆様に深く感謝の意を表して序とさせていただきます。

御代田町教育委員会教育長

原　田　正　夫

例　　言

1　本書は、昭和59年５月17日より同年９月１日までにわたって発掘調査された、長野県北佐久郡御代田町大字御代田字野火付に所在する鋳師屋（いもじや）遺跡群野火付遺跡の発掘調査報告書である。

2　本発掘調査は、東信土地改良事務所の委託を受けて、御代田町教育委員会が実施した

3　本発掘調査は、堤　隆・林幸彦を担当者とし、佐久考古学会の援助を得、御代田地区老人クラブ・佐久市・御代田町の方々の協力をもって実施した。

4　遺構の実測図作成は各調査員があたり、遺物の実測図作成は主に羽毛田伸博があたった。

5　遺構・遺物のトレスは、主に鳥居亮があたった。

6　遺構・遺物の写真撮影は、堤　隆があたった。

7　本書の執筆は、各執筆者が行い、文責を文末に記した。

8　本遺跡の埋葬馬については、その生物学的な所見を以下の各位よりいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。なお、その掲載については、受付順とした。

信州大学農学部家畜生体機構学教室　　大島浩二　松尾信一　森下芳臣　先生

信州大学農学部家畜育種繁殖学教室　　辻井弘忠　先生

群馬県立前橋第二高等学校　　宮崎重雄　先生

9　本遺跡の埋葬馬については、多年にわたって馬喰をなされた小池瀬兵衛氏と、篠原富蔵氏より貴重な御教示を得た。御芳名を記して厚く御礼申し上げる。

10　本書の編集は、御代田町教育委員会の責任の基に堤　隆が行い、由井茂也が校閲した。

11　発掘調査及び報告書刊行に際しては、以下の方々に御助言・御配慮をいただいた。御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。（順不同、敬称略）

森浩一、水野正好、桐原健、宮下健司、小林孚、岡田正彦、大井隆男、井原今朝男、前原豊、伊藤稔、鋤柄俊夫、諏訪間順、樫田誠、曽根博明、川島雅人、林茂一、花岡弘、志村哲、赤羽一郎、坂爪久純、石野博信、仲野泰裕、小林敏夫、太田喜幸、伝田和良、友野一、西沢寿晃、長野県教育委員会、佐久市教育委員会、藤岡市教育委員会、東信土地改良事務所小田井・御影土地改良区

凡　　例

1　遺構の略称

H⟶住居址　　D⟶土壙　　S⟶竪穴状遺構　　M⟶溝状遺構

T⟶特殊竪穴状遺構　　F⟶掘立柱建物址　　Z⟶柱列　　P⟶ピット群

2　挿図の縮尺

遺構及び遺物について各図毎に明示してある。

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記のものを表わす。

1）　遺構

斜線＝遺構断面　　アミ点＝カマド

2）　遺物

断面のアミ点＝須恵器及原始灰釉　　内面のアミ点＝内面黒色

4　写真図版中では遺物番号は簡略化した。例えば第392図4は、392―4と表わす。

5　写真図版中の遺物の縮尺は挿図と同じである。ただし古銭については、挿図はすべて$^{1}/_{1}$であるが、写真はH―13の神功開宝を除き½とした。

6　出土遺物一覧表〈土器〉の法量は、上から口径・器高・底径の順に記載し、――は不明（　）は推定値、〈　〉は大幅な推定値、カッコがない場合は完存値を表わす。

7　出土遺物一覧表〈石器〉・〈鉄器〉においては、――は不明、（　）は現存値、カッコがない場合は完存値を表わす。

8　石器の実測は三角法を用いた。

目　　次

序　文
例　言
凡　例
目　次
I　発掘調査の経緯
1　調査に至る動機……1
2　発掘調査の概要……2
3　発掘調査経過……3
II　遺跡の環境……4
1　野火付遺跡付近の地形地質の概要……4
2　野火付遺跡付近の歴史的環境……6
III　層序……10
IV　遺構と遺物……11
1　住居址……11
（1）　H—1号住居址……11
（2）　H—2号住居址……13
（3）　H—3号住居址……15
（4）　H—4号住居址……18
（5）　H—5号住居址……20
（6）　H—6号住居址……22
（7）　H—7号住居址……28
（8）　H—8号住居址……30
（9）　H—9号住居址……34
(10)　H—10号住居址……35
(11)　H—11号住居址……41
(12)　H—12号住居址……45
(13)　H—13号住居址……51
(14)　H—14号住居址……55
(15)　H—15号住居址……62

(16)　H—16号住居址……63
(17)　H—17・18号住居址……64
2　T—1号特殊竪穴状遺構及び埋葬馬土壙墓群……66
(1)　T—1号特殊竪穴状遺構……66
(2)　埋葬馬を伴う土壙墓群……71
3　土壙……74
(1)　土壙……74
(2)　集石を伴う土壙……74
(3)　石組を伴う土壙……84
(4)　灰を伴う土壙……84
(5)　土壙墓……84
(6)　埋葬馬を伴う土壙墓……85
4　竪穴状遺構……95
5　井戸址……112
(1)　I—1号井戸址……112
(2)　I—2号井戸址……113
(3)　I—3号井戸址……114
6　掘立柱建物址……114
(1)　F—1号掘立柱建物址……114
(2)　F—2号掘立柱建物址……115
(3)　F—3号掘立柱建物址……115
(4)　F—4号掘立柱建物址……115
(5)　F—5号掘立柱建物址……116
(6)　F—6号掘立柱建物址……118
(7)　F—7号掘立柱建物址……118
(8)　F—8号掘立柱建物址……118
7　柱列……119
(1)　Z—1号柱列遺構……119
8　ピット群……120
(1)　P—1号ピット群……120
(2)　P—2号ピット群……122
(3)　P—3号ピット群……122

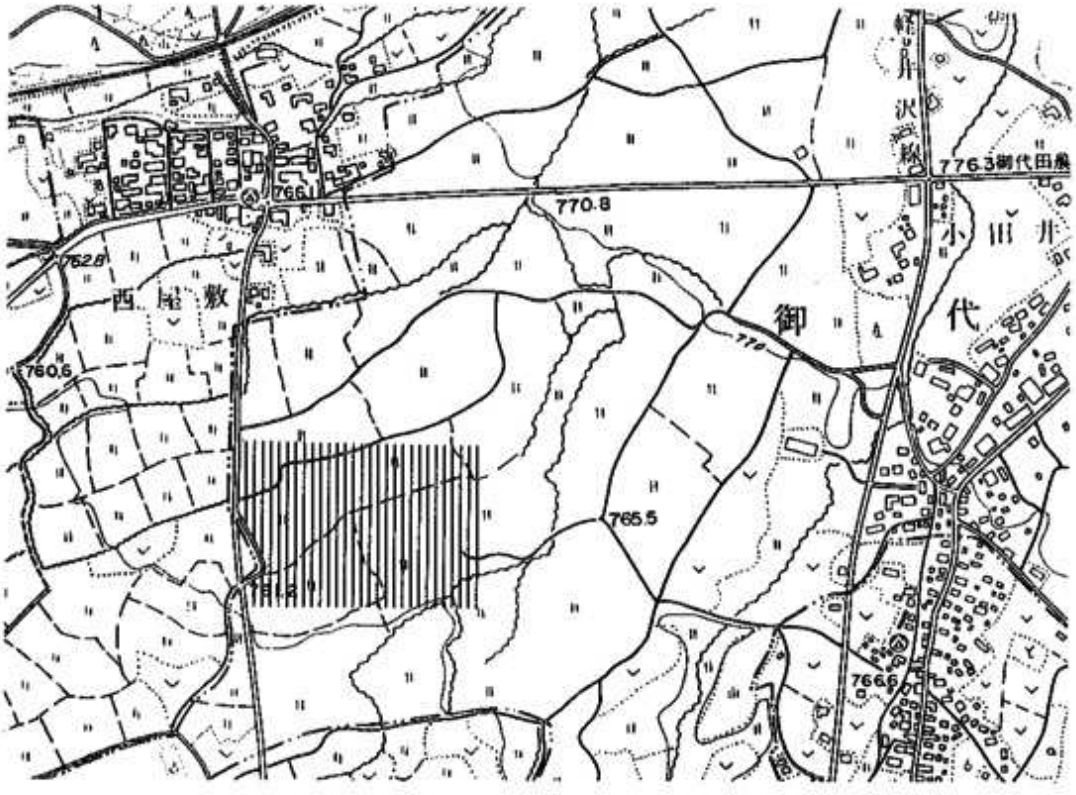
（4）　P—4号ピット群 ……122
（5）　P—5号ピット群 ……122
（6）　P—6号ピット群 ……123
8　溝状遺構 ……123
（1）　R—1溝状遺構群(M—1～M—12) ……123
（2）　R—2溝状遺構群 ……127
（3）　M—27溝状遺構 ……127
V　総　括 ……132
1　遺構 ……132
（1）　奈良時代の集落 ……132
（2）　平安時代の集落 ……134
（3）　平安時代の埋葬馬 ……137
（4）　中世にかかわる遺構 ……139
1　竪穴状遺構 ……139
2　R—1号溝状遺構群 ……141
2　遺物 ……141
（1）　奈良時代と考えられる土器について ……141
（2）　平安時代の土器群について ……145
1　平安時代の土器について ……145
2　平安時代の墨書土器について ……147
（3）　中世陶・磁器について ……148
3　野火付の地名について ……149
補　註 ……152
付　編
野火付遺跡埋葬馬についての予備調査
野火付遺跡出土の馬骨・馬歯について
野火付遺跡出土の馬骨について
引用参考文献
図　版
後　記

Ⅰ　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

農業の近代化に即応するため、東信土地改良事務所により、小田井・御影地区において長野県営圃場整備事業が昭和55年度より実施された。当該事業の実施地区である御代田町御代田字野火付は、埋蔵文化財の包蔵地としては周知されていなかったが、事前の調査によって遺跡の存在性が確認されたため、昭和58年９月14日に長野県教育委員会の指導のもと御代田町教育委員会と東信土地改良事務所によって現地協議がなされた。その結果、埋蔵文化財包蔵地である野火付遺跡について、御代田町教育委員会が主体となって記録保存を取行うこととなった。翌昭和59年５月には、東信土地改良事務所と御代田町教育委員会の依託契約が締結され、同年５月17日より発掘調査の運びとなった。

（事務局）



第１図　野火付遺跡発掘調査対象区（1：10,000）

2　発掘調査の概要

◎ 遺跡名　鋳師屋遺跡群　野火付遺跡

◎ 所在地　長野県北佐久郡御代田町大字御代田字野火付

◎ 発掘期間　昭和59年5月7日　～　昭和59年9月1日

◎ 整理期間　昭和59年9月3日　～　昭和60年2月28日

◎ 発掘調査理由

昭和59年度県営圃場整備事業（小田井・御影地区）に伴い、鋳師屋遺跡群野火付遺跡の破壊が予想されるため、緊急に記録保存を行い活用を図る。

◎ 調査団の構成

・事務局

教育次長　山本岩正

社会・同和教育係長　古越奉文（昭和60年1月退任）

〃　萩原　茂（昭和60年1月就任）

社会・同和教育係　内堀篤志

〃　堤　隆

・調査団

顧問　古越寅男（御代田町長）　原田正夫（御代田町教育委員会教育長）

参与　尾台卓一　大井豊　桜井為吉　田村泉　内山俊雄　柳沢恒三郎　小林五郎　山本宜夫　堀籠源　（御代田町文化財審議委員）

団長　由井茂也（佐久考古学会会長）

副団長　木内　捷（佐久考古学会事務局長）

調査担当　堤　隆（御代田町教育委員会）　林　幸彦

調査員　白倉盛男　三石延雄　島田恵子　大井今朝太　黒岩忠男　井上行雄　小山岳夫　高村博文　三石宗一　佐々木宗昭　森泉定勝　羽毛田伸博　井出正義　森泉かよ子　鳥居亮

協力者

（発掘調査）　与良幹雄　横尾富吉　小林夏子　高見沢好雄　黒岩英　木下芳郎　小西多美次　高橋勝　渋谷実美　渋谷富美子　中村鈴子　荻原正勝　土屋千治　柳沢与市　花岡金治郎　柳沢正晴　依田利清　白井今朝男　（以上御代田地区老人クラブ）　岩井福太　市川和子　茂木節子

田中夏江　堺益子　岡部本男　山崎泰夫　早川俊彦　並木ことみ
遠藤しづか　丸山勝子　橋詰勝子　大井和子　原文子　井出百合子
橋詰信子　佐々木春蔵　小井土節子　須藤久米子　長坂美樹　江元福江
小山いづみ　駒村英明　森泉泰和　長沼隆年　小山英次　伴野剛
山口伸彦　小池孝芳　清水彰　田中富士八　御代田中学校郷土クラブ

（遺物整理）　早川俊彦　太田和子　武井一枝　伴野有希子　尾台久美子

3　発掘調査経過

昭和59年４月23日　調査団結成式　（於　御代田町福祉センター）

５月７日　重機により調査対称区の試掘トレンチ設定

５月８日　協力者（老人クラブ）藤岡市の埋蔵文化財視察研修

５月９日　重機により第Ⅰ区拡張開始

５月14日　協力者導入、第Ⅰ区プラン確認開始

５月15日　重機により第Ⅱ区拡張開始

５月16日　第Ⅰ区グリッド設定

５月17日　第Ⅰ区遺構調査開始

６月12日　第Ⅱ区プラン確認開始

６月19日　御代田町教育委員会・長野県教育委員会・東信土地改良事務所の三者の現地での再協議

６月21日　第Ⅱ区グリッド設定、遺構調査開始

８月23日　第Ⅲ区グリッド設定、遺構調査開始

９月１日　発掘調査終了、器材撤収

９月３日　遺物整理作業開始

昭和60年１月　遺構・遺物トレース、写真撮影、原稿執筆。

昭和60年２月　遺物整理作業完了

昭和60年３月31日　発掘調査報告書刊行

II　遺跡の環境

1　野火付遺跡付近の地形地質の概要

上信国境にまたがっている上信越高原国立公園の最南端に聳え立つ三重式コニーデ火山浅間山（2560m）は、現在も活発も活発な火山活動を続けている。この浅間山の頂上から真南にかけて急傾斜面―緩傾斜山麓地帯―裾野平地面（750m）に展開するのが御代田町である。東南方向には独立した森泉山（1435.9m）平尾富士（1127m）の塊状火山の構成する旧伍賀地区の山地が続いている。

浅間山は我が国で最も若い火山で浸蝕解折の進んでいない幼年期地形を示しており、第一火口原より発源する蛇堀川、標高1500m血の池から流れ出す濁川、軽井沢町地区千ヶ滝から流出している湯川は何れも真直ぐに南下しており、山裾90m以下には古くから拓かれた御影用水・湧玉用水が発達し、水利の便に恵まれ水田灌漑に活用されて、その末端は西に向きを変えて千曲川に流入している。

鋳師屋遺跡群野火付遺跡はこの裾野平地面（760m内外）の水田地帯の中心部に位置している。

浅間火山第一次の黒斑火山は噴火口の東西径３kmに及ぶ大火山で噴火口壁は蛇骨岳・黒斑山・牙山・剣ヶ峯と続く輝石安山岩・凝灰角礫岩から成る最初の溶岩流によって構成され、蛇堀源流と長坂の二大爆烈火口によって断ち切られているが、その時の大熱泥流は佐久市中佐都附近まで及んで塚原流れ山群を形成している（黒斑溶岩㊦）。その上に流出した黒斑溶岩はかんらん石輝石安山岩で標高1200m附近まで山腹を被っている（黒斑溶岩㊤）。1200mより下部裾野一帯、西は小諸市懐古園附近、東は軽井沢町沓掛附近まで、南は佐久市中込原まで浅間火山噴出物中最広範囲に分布する火山灰砂軽石流で、これは二期に分けられているが第一次の上に第二次のものは馬瀬口以西に上部に重なり分布している。この軽石流地域は雨水流水の浸蝕力に誠に弱く新期火山麓特有の大小の田切地形がよく発達し、南部では西南方向に、西方向の美事な10～15mの垂直断崖を作っている。その谷底が原初の自然流路となっており弥生水田の拓かれた所であろうと考えられている。野火付遺跡はこの地層の上に立地している。この軽石流斜面標高900m内外に縄文時代前中期の遺跡が多く知られている。

第二次前掛火山は火口中心が東に移動し、東西径約１kmに縮小したもので火口壁は西側に僅かに認められるが昭和初期までは無限の谷と呼ばれた深い谷があり夏になっても雪氷が残っていたものである。東側は僅かに高く盛り上っていて東前掛と称されているが噴出物に被われていて明瞭ではない。この噴火口からの噴出物が追分火砕流で軽石流の上に古い岩石片や火山砂礫と共

第2図　御代田町地質図(1：100,000)

にパン皮状火山弾の大小さまざまのものを多量に含み追分原から児玉東方まで厚く分布している。この火山弾は丸味をおびた割れ目が表面に見られる異様な形態のもので浅間焼石と称されて庭作り石垣などに利用されている。前掛火口の中に更に東寄りに径310～350mの現中央火口丘・釜山が形成されたのは1783年天明3年の大噴火鬼押し以来と言われておりその後も噴火火砕流の

流出に供って釜山自身も高さを増しているようである。浅間山爆発的噴火を繰り返し、その噴出物は西は湯の平、東南は1400m等高線附近まで厚く堆積しており、火噴火の際の火山灰は東京・銚子付近まで降灰することもあるのは、上空層圏の偏西風によるものと考えられている。

御代田町の地形地質を考察するには浅間火山の活動と密接な関係があり、切り離すことはできない。野火付遺跡は黒斑火山の軽石流堆積層上に立地している訳でその層序構成については次章で述べることとする。

御代田町の旧伍賀地区の地質について簡単にふれると、湯川以南は荒船火山の多量な熱火山灰の堆積によって出来た溶岩凝灰岩が厚く広く分布している地域で、古い火山岩は浸蝕解折を受けてトロイデ火山が噴出し、輝石安山岩の塊状の山体を作って険しい山地となっている。この山地の北麓湯川沿い標高900m内外の段丘上には面替・宮平・茂沢など縄文時代遺跡が分布している。

（白倉盛男）

2　野火付遺跡付近の歴史的環境

鋳師屋遺跡群野火付遺跡は、浅間山の南麓の緩傾斜面上の水田地帯に位置する。野火付の水田は、水利の便が悪く地味廃薄なためその収穫量は少なく、一等地劣る下田とされていた。これに対し、標高780m面積およそ10万㎡の隣接地「佃（つくだ）」は、窪地で保水力に富むためその水利も整い地味肥沃で収穫量も多く、古くから一般に上田とされていた。両者の境には「佃道」と称される小田井より御影への近道となる古道が存在した。中道の入口には水神講を祀った石碑が立ち、やや進むと左側に50cm×55cm程の基礎石に高さ65cm程の六角形の陳身が置れ、中台が続き、その上に石祠が立っている。石祠は、いわゆる浅間の焼石（集塊岩）を用いたもので、石隍と石祀とがセットされた形のものである。これは当地方では道陸神（どうろくじん）と称され尊敬された。また、これより少し離れた道筋には天神石といわれる巨石２つがあり子供にも親しまれていた。この道は道幅３m位あり、小諸の物日にはよく通った道である。その付近には、古くより由来する字名がよく残っている。佃、山王、中道、曽根城、エモジヤ、シャグジ、竹花、前田、西屋敷、十二、中屋敷、八百桓内（かいど）、下ノ駅、中ノ駅、上ノ駅、ウトウ坂、長倉等である。

さて、野火付近隣の遺跡を概観してみよう。まず、野火付より４km程東方に位置するのが宮平遺跡である。宮平遺跡は、遺跡の西側を流れる湯川との比高50mを測る平坦な台地上に立地し、昭和56年農道整備事業に伴って緊急発掘調査がなされた。検出された遺構は、縄文時代中期後半から後期中葉にかけての竪穴住居址26件・土壙30基である。今回は道幅分の調査のみで、台地全体には相当数の遺構が眠っていることが予測される。宮平より西流する湯川の北岸には、縄文時代中期の草越南畑遺跡が存在し、御代田町教育委員会が主体となって昭和53年に発掘調査がなされた。草越南畑遺跡をやや下ると、児玉遺跡（25）、池尻遺跡（26）となる。昭和53年の発掘調査

によって池尻遺跡からは縄文時代後期の竪穴式住居址一軒が検出された。また、面替地籍には縄文時代中・後期の下屋敷遺跡が存在する。唄坂遺跡（23）は、縄文時代から歴史時代にわたる複合遺跡で、この遺跡を貫く平地より湯川に下る岩を掘り割った急坂は東山道の古道にも考えられている。

野火付遺跡の北方には佐久市教育委員会により発掘調査のなされた後原１号墳・２号墳（６・７）が、また、南西には小諸市教育委員会によって調査された野火付古墳（10）がある。島原古墳（20）、復原整備のなされた皎月古墳（22）は、野火付の南東に所在する。昭和42年に発掘調査された皎月古墳からは、鉄鏃・円頭柄頭・金環・須恵器等が検出された。

中世に入ると当地方では豪族により田切り地形を利用した城郭が数多く築城された。

曽根城は、後背には濁川の深い沢を控え、前面の開けた平地城でその築城は古く、天文天正の現曽根覚雲斎の籠れるものと伝承されている居館風の城郭である。

小田井城は、大永年間に小田井又六によって築城されたものである(24)。城の周囲は深い田切り地形で、その一つは久保沢と称され幅60m深さ60mを、もう一方は、江戸沢と称され同じく幅60m深さ60mを測り、それらの沢に囲まれた城の平坦部はおよそ７～８ヘクタールの広さを有する堅牢である。特にその大手には、信州にも数少ないW型の堀が築かれている。堀は、幅65m深さ10mを測るもので、その中央には底辺12m高さ３mの小山が作られている。例えば、その堀に飛び込んで攻め込もうとしても、中央の小山を乗り越える際に攻撃されたであろう。その堀は長さ180mに及ぶもので、１kmほど上方より引水されている。城内には、マイマイ状と呼ばれる蝸牛に似た窪地が作られ、低部に井戸が設けられていた。これは通常ひらじ畑と称され、１ヘルタール位にあった天然水を貯めるためのものである。

その他、出城と考えられる長倉城・谷地城・戸谷城・金井城等が野火付付近に残されている。

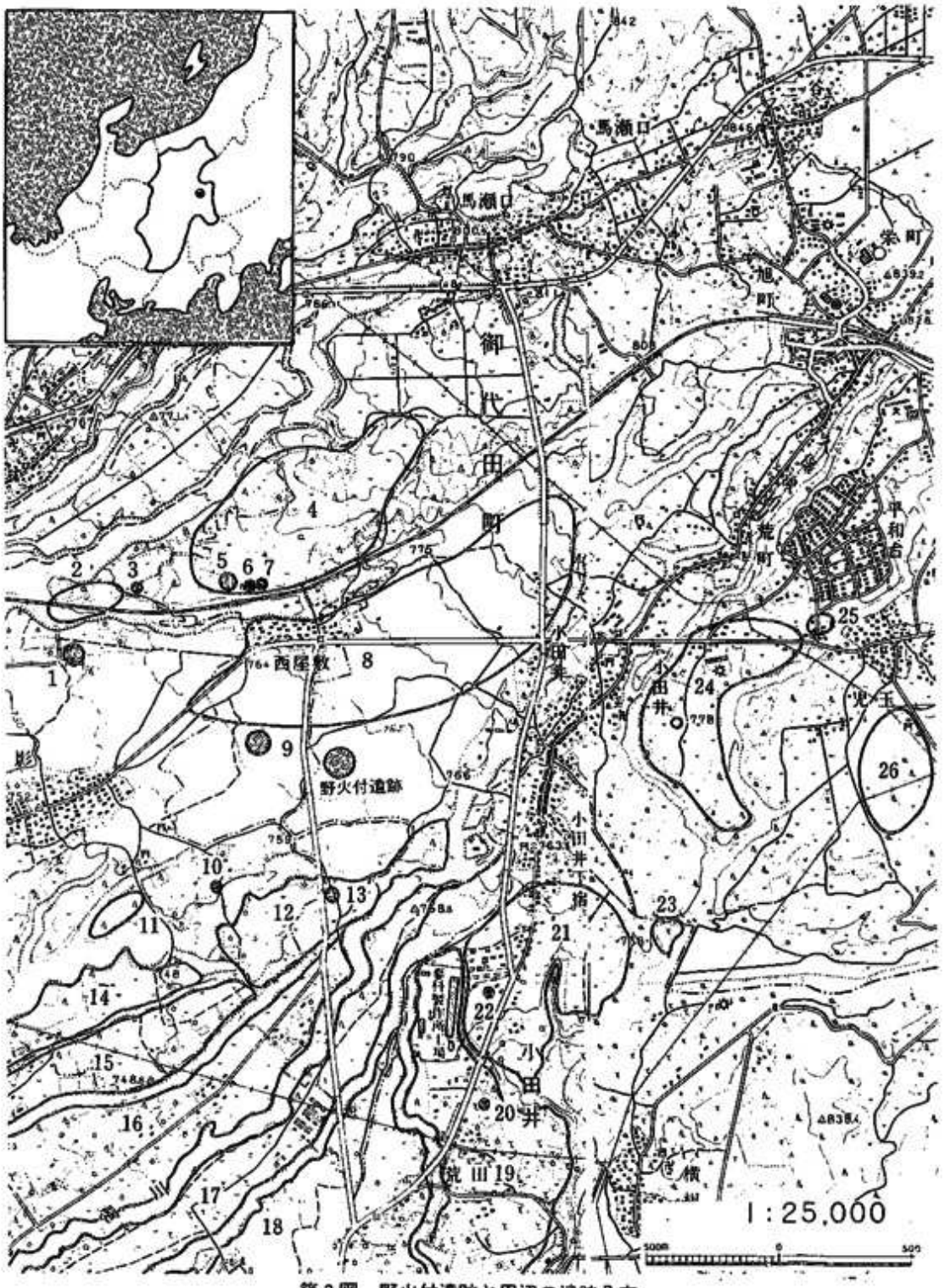
ところで、古文献（延喜式）等にみると、左馬寮では信州に369町歩余の庄田が設置されていたようで、御代田付近にも長倉牧の牧田が設置されたことであろう。また、貢馬には一年間位の入舎が必要で、小田井付近に小屋飼いされたものとも考えられる。長倉の牧で放牧された馬は大久保の難所を通い（駒形神社）荒町の棚場に集結されたのであろう。

さて、野火付付近は、東山道の古道及び新道のルートに当たるものと思われる。古道の道筋は小田井を通りウトウ坂をぬけて面替・豊昇を通り入山峠へと進むと考えられ、新道は中道―十二―馬瀬口―里塚（塩野）を通り追分へと進む道筋も考えられる。こうした東山道の道筋も今後の発掘調査等による裏付けによってより明確なものとなってこよう。

（尾台卓一）

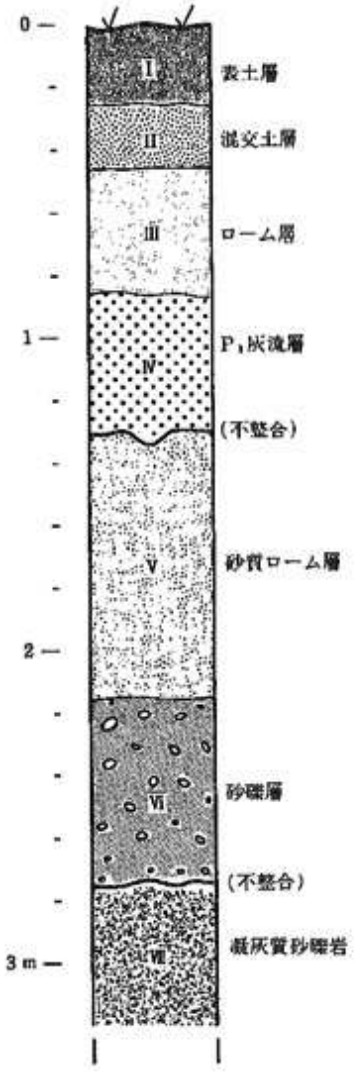
第1表　野火付遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	備考
1	宮ノ反遺跡	小諸市大字御影字宮ノ反				○	○		昭和59年度発掘調査
2	長野原遺跡	〃　平原字大豆田					○		
3	長野原塚古墳	〃　長野原				○			
4	下前田原遺跡群	佐久市大字小田井字前田原				○	○		
5	後原遺跡	〃　字後原		○					昭和57年度昭和47年度発掘調査
6	後原1号墳	〃				○			昭和47年度発掘調査
7	後原2号墳	〃				○			〃
8	前田遺跡群	〃　字前田					○	○	
9	鋳師屋遺跡	〃　字鋳師屋					○		昭和59年度発掘調査
10	野火付古墳	小諸市大字御影字野火付				○			昭和56年度発掘調査
11	野火付遺跡	〃					○		
12	曽根城遺跡群	〃　曽根城					○		
13	曽根城遺跡	〃					○		昭和57年度発掘調査
14	近津遺跡群	佐久市大字長土呂字北近津			○	○	○		
15	周防畑遺跡群	〃　字周防畑		○	○	○	○		
16	芝宮遺跡群	〃　字北上中原			○	○	○		
17	長土呂遺跡群	〃　〃　字長土呂			○	○	○	○	
18	栗毛坂遺跡群	〃　大字小田井字笹沢			○	○	○		
19	跡坂遺跡群	〃　〃　字跡坂			○	○	○		
20	島原古墳	〃　〃　字下金井				○			
21	中金井遺跡群	〃　〃　字中金井			○	○	○		
22	皎月古墳	〃　〃　字皎月				○			昭和45年度発掘調査
23	唄坂遺跡	〃　〃　字唄坂		○	○	○	○		
24	小田井城跡	御代田町大字御代田字城の内						○	
25	児玉遺跡	〃　字児玉		○			○		
26	池尻遺跡	〃　字池尻		○					昭和53年度発掘調査



第3図　野火付遺跡と周辺の遺跡分布

III 層　序



第4図　野火付遺跡層序模式図

野火付遺跡付近は、浅間山火山第一期の黒斑火山の噴出物である火山灰砂軽石流の堆積地帯にあたる。その火山灰砂軽石流は、最新の火山噴出物であるため風化分解が進まず堆積したままの状態を示し、固結不完全岩層状にはなっていない。第4図が本遺跡第I区東と—18グリッドの地層断面図である。軽石流の総体的な層厚は、付近の田切り断崖での観察によれば、場所により多少の変化はあるが10m内外に達している。今回の断面図はその上部にあたり、この軽石流は数回にわたり流出を繰り返したもので深さ130cmと270cm付近に時間的空隙と見られる僅かな不整合が観察され、その下位になると火山灰が地下水に分解されてローム化が進み滞水層となってその上部に地下水をたたえていることが認められる。これは第一軽石流と称されて浅間山麓に最大の拡がりを持つ本質火山岩礫が、極めて少い軽石と火山灰を主体とした堆積層浅間火山初期に相当長期にわたり堆積を繰り返していたものである。

表土である第I層は黒ボク土である。第II層は黒褐色を呈する混交土によって構成される。続く第III層は黄色ローム層で、その上面が本遺跡における遺構の確認面となっている。第IV層は、明赤紫色を呈する追分火山灰流で軽石や小石を含む火山灰砂流である。第V層は、第IV層とは不整合で粘性の強い黄褐色砂質ローム層である。第VI層は黄赤褐色を呈する砂礫層で、径5cm前後の軽石を含んでいる。第VII層と第VI層は不整合で、その層理には地下水が浸透してきている。第VII層は灰褐色の堅固な凝灰岩質砂礫岩層で小礫を含むものである。

（白倉盛男）

Ⅳ　遺構と遺物

1　住居址

(1)　H—1号住居址

遺構　第5・6図

本址は、II区のM—6溝址の北側に位置し、周囲にD—22～D－25号土壙が存在する、は—29・30グリッド内より検出された。

平面プランは、南北270cm、東西280cmを測る小形の隅丸形を呈する住居である。主軸方位はN－12°—Wを示す。

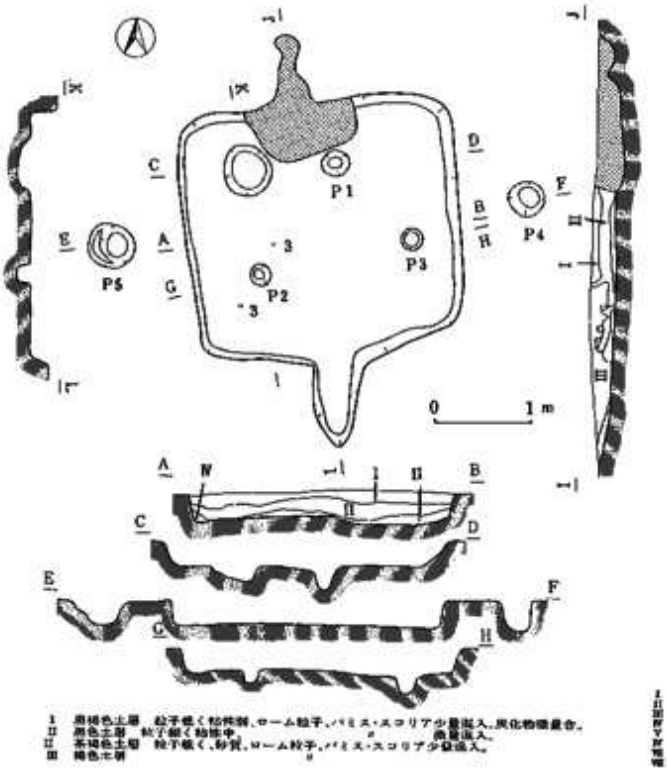
覆土は、ローム、パミス・スコリア粒子を混入した3層によって形成され、土層には炭火物が微量含まれていた。壁高は25cmを測りほぼ垂直に近い立ち上がりを見せている。床面は、壁側周辺が軟弱で所々地山が露出していたが、住居址中央は固く踏みしめられていた。

また、床面を断ち割り床下遺構及び掘方等を精査したが、入口部に50×70cm、深さ15cmの落込が認められたのみで遺構は存在しておらず、掘方は生活面から10cm程下がっていた状態で認められたが、地山が火山灰土の砂質性に富んだ軟弱な土層であったため、生活していた当時の痕跡である日常の染みが床面に付着浸透していた事も想定される。

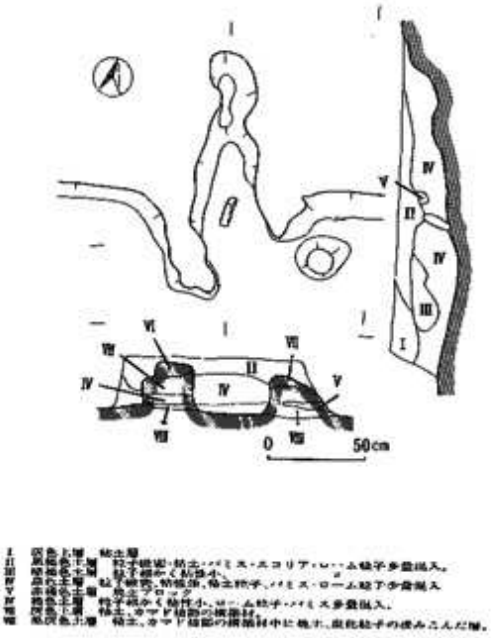
ピットは、P_1～P_3で、規模は径20～30cm、深さ15～20cmを測る。また、P_4、P_5は住居址中央から50cm外に出た屋外の両側に対をなして存在する。P_4は、35×38cm、深さ34cm、P_5は45×50cm、深さ20cmを測り、西側にテラスを有す主柱穴である。P_6はカマド左脇に存在し、径50cm、深さ20cmを測る。底面及び壁面には灰が付着して固くこびりついていた。灰溜施設であることを物語っている。

その他入口と思われる施設が、南壁中央から外に径45×85cmの規模で張り出していた。

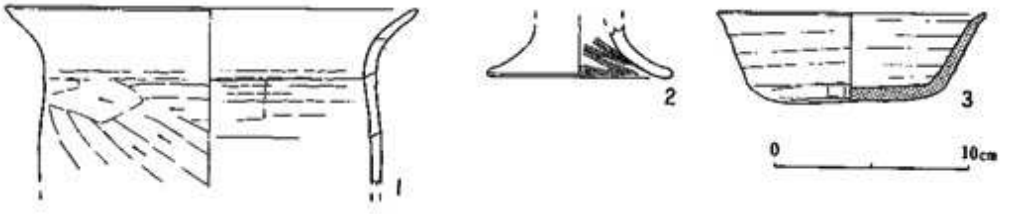
カマドは、北壁中央からやや西寄りに位置する。長さ55cm、幅100cmを測る規模であり、煙道は不正な形状で75cm屋外にのびている。緩い傾斜で立ち上がり、先端は凹み有していた。袖は粘土によって構築し、左袖のみが遺存していた。袖部の断面は、焼土、煤、炭化物の浸透した層を現わす。火床部は50×50cmの範囲で焼土は5cm程堆積していた。支脚石は火床部から10cm程奥に直立して遺存しており、赤く焼けていた。10×35cmを測り、安山岩を使用している。土中への埋め込みは5cmであった。本址カマドの掘方は、ほぼ平坦で火床部は10cm程焼けこみによる赤色が床下に浸透していた。



第5図　H-1号住居址実測図（1：80）



第6図　H-1号住居址カマド実測図（1：40）



第7図　H-1号住居址出土遺物（1：4）

遺物　第7図

出土遺物は少なく図示し得たものは3点である。1は器厚の薄い土師器甕形土器、3は赤焼きの須恵器坏で器厚あつく頑丈なつくりである。2は高坏あるいは台付甕の脚部片であると思われる。1、2は共にカマド内からの出土で、3は、P_3と西壁の中間より2つに割れて横転していた。

その他、1の甕形土器の細片、小形甕形土器の口縁部片がカマド内より出土している。

本住居址は、以上の出土遺物から奈良時代の所産と考えられる。

第2表　H－1号住居址出土物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
7-1	甕	(21.3) ——	口辺部は「く」の字状に外反する。長胴甕と思われる。	外面　口辺部ヨコナデのち胴上部斜方向のヘラケズり。 内面　口辺部ヨコナデ、頸部～胴上部にナデを施す。	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 回転実測
7-2	台付甕 台脚部	台脚部 端径 (9.4)		外面　ヨコナデ 内面	胎土茶褐色 カマド内 回転実測
7-3	坏 (須)	13.7 4.65	底部丸味をおびた平底、口縁部大きく外反する。	外面　底部ヘラケズり、体下部周縁ヘラケズりの後ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 完全実測

（島田恵子）

(2)　H－2号住居址

遺構　第8・9図

本住居址は、第Ⅱ地区む・め—34～36グリッド内に検出された。平面プランは、東5.55m南北、4.80mを測り、やや不整の隅丸方形を呈す。主軸方位は、N－17°—Wを示す。覆土は3層より成り、それらは黒色を基調とし、大小の礫を含んだ。壁高は18cmを測り、壁は真に立ち上がる。床は、カマド付近に張床が認られ、その他はやや凹凸のある面であった。回りには幅約10cm程度の細い周溝がめぐっていた。

ピットは、主柱穴と考えられるものが4個（P_1～P_4）と、壁ぎわに3個検出された。主柱穴のうちP_1とP_4付近には、改築等に伴って移動されたか、あるいは、主柱の補助柱であったかと考えられるP_5～P_7が検出されている。またP_8、P_9は入口に付随するピットとも考えられる。

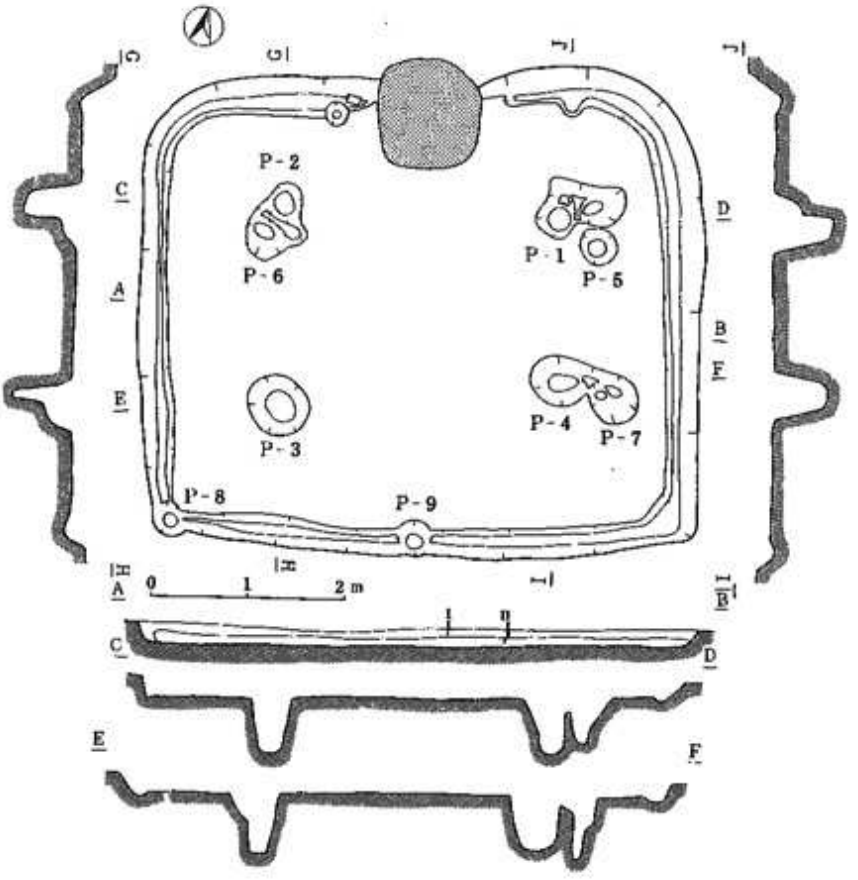
カマドは、北壁中央に検出された。焚口～煙道部までの長さ220cm、袖部最大幅200cmを測る。灰色粘土（Ⅶ～Ⅳ層）をその構築材として用い、両袖及び火床を築造している。袖部の芯には石材は用いられていない。煙道部は、壁を横長に堀り込んだものである。なお、本カマドの西脇には、支脚石と考えられる角柱状（9面）に面取りした軽石が検出された。

遺物　第10図

本住居址より検出された遺物は非常に僅かで、底部にヘラ削りのなされた坏の破片、須恵器蓋破片、須恵器蓋破片、土師器甕、2個体分の破片が検出されている。

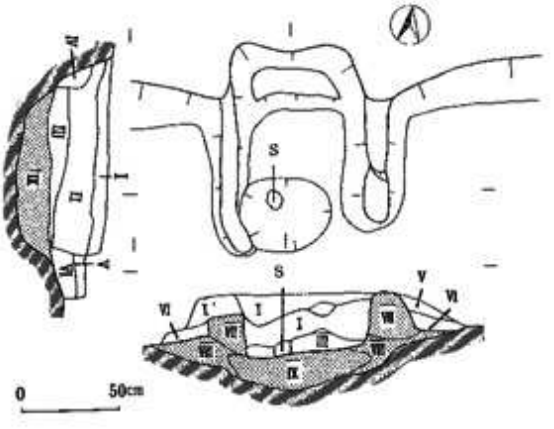
本師の所産期は僅かな出土遺物より奈良時代と考えられよう。

（三石延雄）



I 黒褐色土層　粒子細かく粘性小、ロームブロック多量に混入、スコリア小量混入。
II 淡黒色土層　〃　粘性中、　〃

第8図　H－2号住居址実測図（1：80）

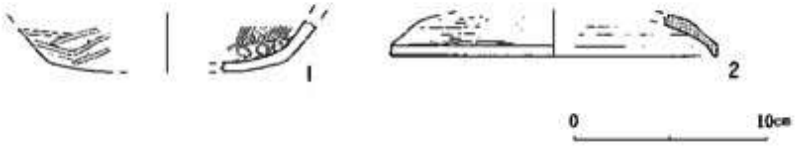


第9図　H-2号住居址カマド実測図（1：40）

I　黒色土層　粒子緻密、粘性小、スコリア・ローム粒子・炭化物粒子少量混入。
I'　灰黒褐色土層　〃　〃　、ローム粒子・粘土多量混入。
II　黒褐色土層　〃　粘性中、ローム粒子・スコリア・粘土・炭化物少量混入。
III　灰褐色土層　〃　粘性大、ローム粒子・粘土多量混入、炭少量混入。
IV　茶褐色土層　粒子細かく、粘性小、ローム粒子多量混入。
V　褐色土層　粒子緻密、　〃　ローム粒子・粘土多量混入。
VI　暗黒色土層　〃　大、〃　〃　〃　少量混入。
VII　灰褐色土層　灰色粘土層　カマド袖構築材。
VIII　黄褐色土層　ローム粒子多量混入　カマド袖構築材。
IX　黒褐色土層　ローム粒子・炭化物を含む。カマド火床構築材。

第3表　H－2号住居址出土物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
10-1	坏	― ― ―	底部丸味をおびた平底	外面　底部周縁へラケズリの後ミガキ 内面　暗文を施す。	胎土赤褐色粒子密 フク上内 回転実測
10-2	壺(須)	― ― 〈16.8〉		外面　ロクロヨコナデ　上部丁寧なヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド内 回転実測



第10図　H-2号住居址出土遺物（1：4）

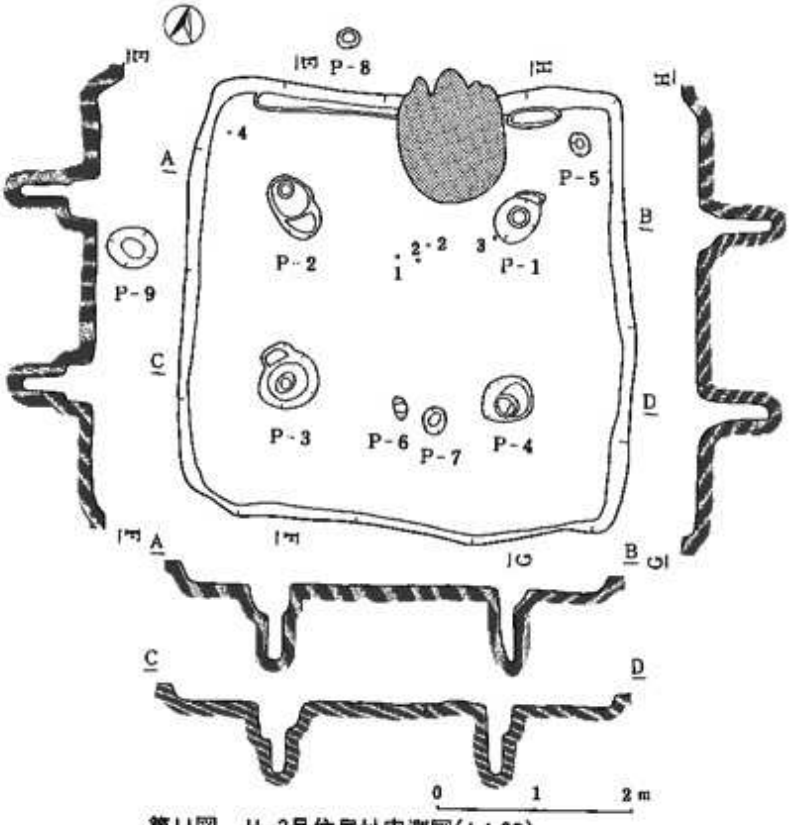
(3)　H―3号住居址

遺構　第11・12図

本住居址は、第II地区ね・の―33～35グリッド内に検出された。東側にH―18号址と近接し東側壁際にはD―191が東側を僅かに切った状態で存在した。平面プランは東西4.65m、南北4.50mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位はN―13°―Wを示す。

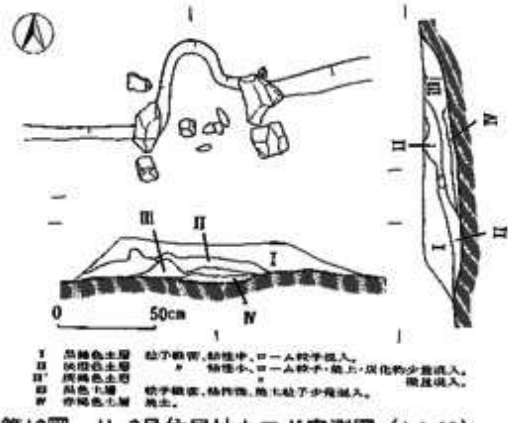
覆土は2層よりなり、第I層は黄褐色を呈しパミス粒子をふくむ。第II層は黒褐色を呈しやや大きめの軽石の粒子をふくんだ。壁高は、20cmを測り壁はやや真に立上がる。床は全体には張り床が認められ、北壁カマド西側に幅約10cm、深さ5～6cmの周構が2.5m程認められたが他には検出されなかった。住穴は計9個検出された。そのうちP_1～P_4は主柱穴と考えられるものである。P_1は東北隅に検出され40×50cm深さ56cm、P_2は西北隅に検出され45×60cm深さ76cmを測り、南東側に段を有した。P_3は南西部に検出され40×60cm深さ70cmを測り北東に段を有し上部に20～30cmの礫があった。P_4は東南隅に検出され40×50cmで東側に段があった。P_5は北東隅壁際に検出され20×25cm深さ9cmを測り、P_6・P_7はP_3・P_4の中間に検出され共に小形のものであった。P_8は北側西寄りに、P_9は西側北寄りに、共に屋外に検出された。

カマドは北壁のやや東寄りに検出された。カマドの袖部は、安山岩の切石を芯に粘土で固めたものと考えられるが、残存しているのはその芯である石材のみであった。火床部には楕円形の支脚石1点と、安山礫3点、面取りした軽石1点がみられた。覆土IV層にはカマド使用に伴う焼土がみられた。煙道部は、壁を縦長の半楕円状に掘り込んだものである。袖部最大幅は、現状で160cmを測る。



第11図　H-3号住居址実測図(1：80)

遺物　第13・14図

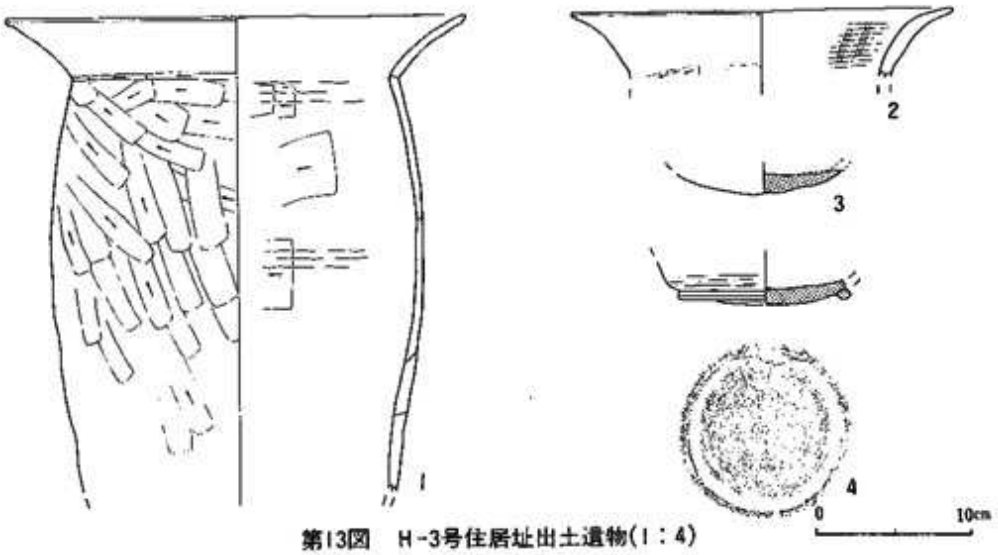


第12図　H-3号住居址カマド実測図（1：40）

本住居址より検出された遺物はほんの僅かで、そのほとんどが破片であった。その中でおおよその形態を知ることができたのは、第13図1の土師器甕のみであった。

本住居址は僅かな伴出遺物により、奈良時代の所産と考えられよう。

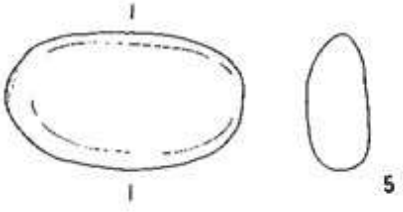
（三石延雄）



第13図　H-3号住居址出土遺物(1：4)

第4表　H－3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
13-1	甕	23.7 — —	長胴甕、器厚薄い、口辺部大きく「く」の字状に外反する。	外面　口辺部ヨコナデ　頸部～胴部ヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ　胴部丁寧なナデ施す。	胎土茶褐色 内面CO_2付着 完全実測
13-2	甕	(19.5) — —	口辺部大きく外傾外湾する	外面　口辺部ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 フク土内 回転実測
13-3	坏(須)		底部丸底	外面　底部ヘラ切り 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 完全実測
13-4	坏(須)	— — (8.9)	底部丸味をおびた平底に付け高台	外面　底部回転ヘラキリ、体下部周縁ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 完全実測



第5表　H－3号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
14-5	敲石	12.3	7.0	3.3	

第14図　H-3号住居址出土遺物（1：4）

(4) H—4号住居址

遺構　第15・16図

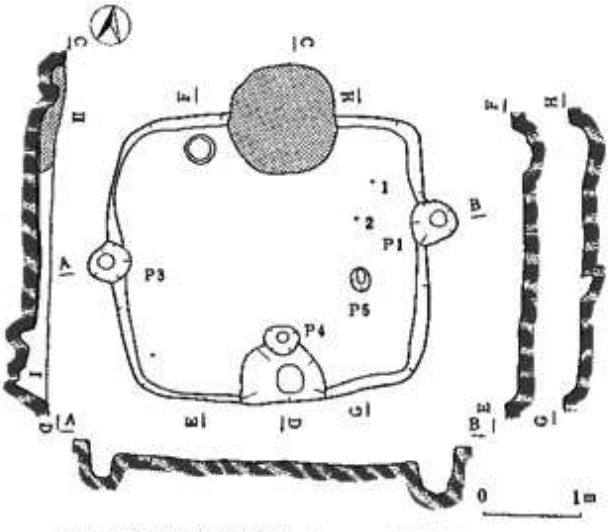
本住居址は、ぬ・ね—36・37グリッド内より検出された。西南側にH－17、H－18号住居址が隣接している。

平面プランは、南北315cm、東西295cmを測りやや西壁が張らんだ隅丸方形を呈する。カマドを中心とする主軸方位は、N－11°—Wを示す。

覆土は、粘土の緻密な黒色土を基調とした2層から成る。壁高は15cmを測り、やや緩傾斜気味に立ち上がっている。床面は、3cm大の小礫が多量に浮き出た固い床で、床下遺構等の存在は認められなかった。

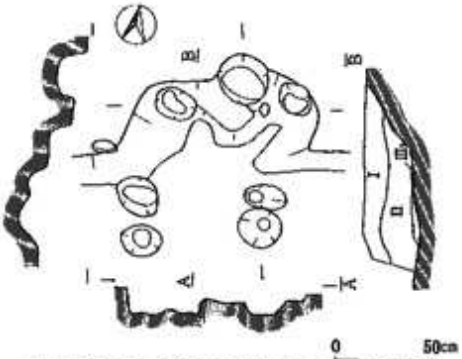
ピットは6個検出され、P_1～P_3は住居内に存在し、径20～30cm、深さ15～20cmを測る柱穴で、P_4・P_5は住居址中央の壁中に対を成して存在し、規模は径45cm、深さ30～40cmを測るU字状の掘り込みで、頑丈なつくりの主柱穴である。P_6は南壁中央の出入口部に存在していることから、出入口に関わる施設であると考えられる。規模は径70×85cm、深さ17cmを測る。

カマドは北壁中央に位置し、遺残は極めて悪く、左袖の粘土が北壁に少量付着していた程度で石を抜いた石組の穴が7個検出され、石組粘土カマドの痕跡を呈していた。北壁を95×190cmの半方形に掘り込んで7個の石で組んだ、径2×2mを測る方形のカマドである。火床部の焼土は30×30cmの範囲に1cmの堆積を呈していた。やはり平坦で床面を掘り込んだ形跡はみられなかった。



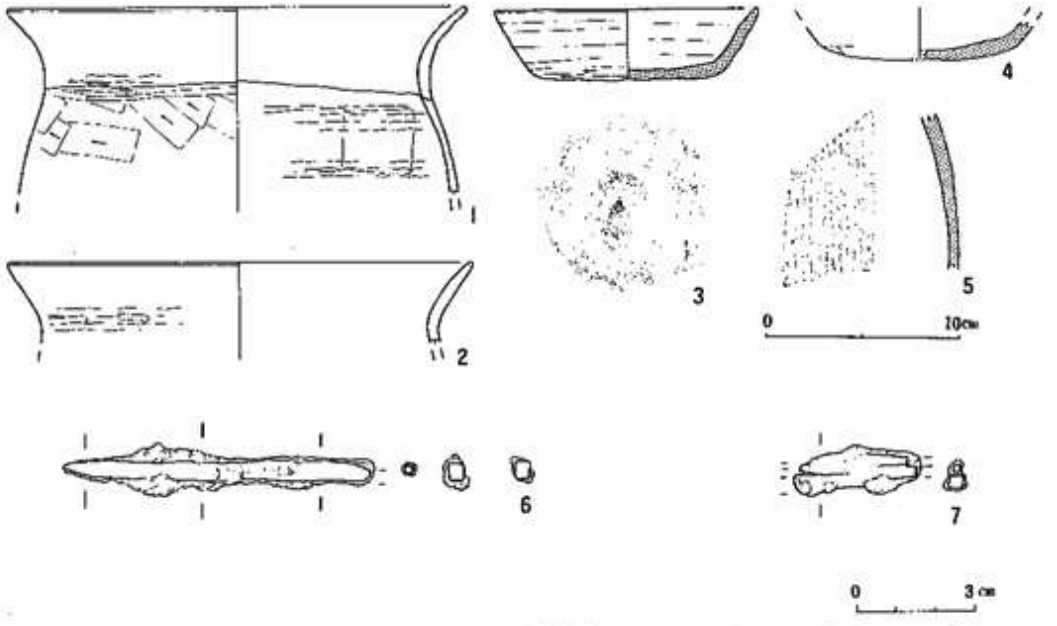
I　暗黒褐色土層　粒子緻密、粘性中、パミス・ローム粒子微量混入。
II　黒色土層　粒子緻密、粘性中、パミス・ローム粒子・小礫混入。

第15図　H-4号住居址実測図（1：80）



I　黒褐色土層　粒子緻密、粘性中、小石・ローム粒子混入。
II　黒色土層　〃　粘性強、ローム粒子・焼土少量混入。
III　淡赤褐色土層　〃　〃　ローム粒子・焼土多量混入。

第16図　H-4号住居址カマド実測図（1：40）



第17図　H-4号住居址出土遺物（1～5　1：4　，　6・7　1：2）

第6表　H－4号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
17-1	甕	(23.4)	口辺部「く」の字状に外反する。器厚薄い。	外面　口辺部ヨコナデ、胴部斜方向へラケズリ、頸部へラナデ 内面　口辺部ヨコナデ、胴部ナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 回転実測
17-2	甕	〈23.8〉 —— ——	口辺部外傾外湾する。	外面　ヨコナデ 内面　口辺部ヨコナデ	胎土茶褐色 回転実測
17-3	坏(須)	〈13.5〉 3.6 9.2	底部平底	外面　底部回転ヘラキリ、体部周縁ヘラケズリ、口辺部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
17-4	坏(須)	—— —— ——	底部丸底	外面　底部ヘラケズリ、体下部周縁ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 火捧 フク土Ⅱ区内 回転実測

第7表　H－4号住居址出土遺物一覧表〈鉄器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
17-6	鉄製品	(7.9)	0.5	0.4	
17-7	〃	(3.0)	0.85	0.4	

遺物　第17図

図示した遺物は4点と出土量は僅かである。1・2は器厚の薄い甕形土器で、その他破片共にカマド右脇より集中して出土。3・4は須恵器坏で、3は西壁の西南コーナー付近より出土、4は覆土中から出土した。その他、須恵器甕の平行叩目文を有する破片が1点出土している。

以上の出土遺物から、本住居址は奈良時代の所産と考えられよう。　（島田恵子）

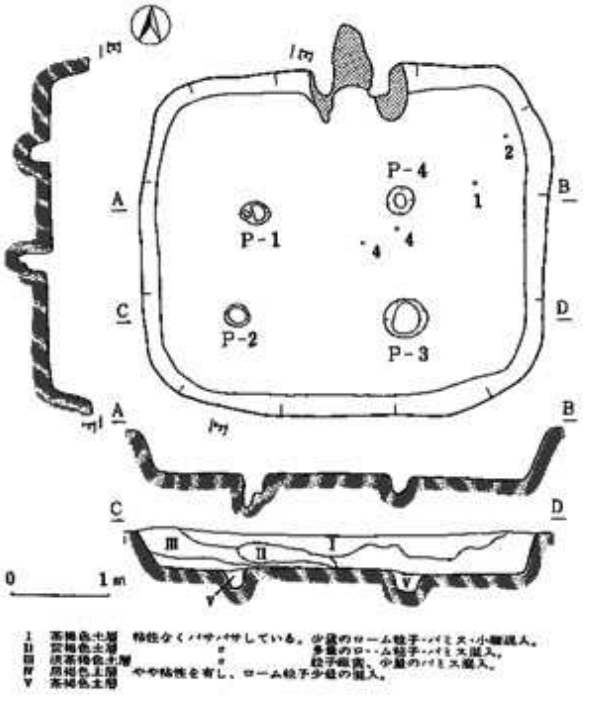
(5) H－5号住居址

遺構　第18・19図

本住居址は、発掘区第II区の北端ほぼ中央つ・て—39・40グリッド内において検出された。平面形態は東西415cm南北560cmを測り隅丸方形を呈し、主軸方向はN—4°—Wを示す。壁高は38～59cmを測り床面から緩く傾斜して立ち上がる。

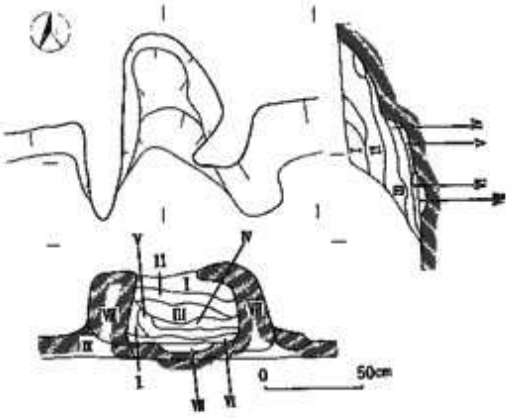
覆土は4層に分割されプライマリーな堆積状態を示す。床面は黄褐色ローム層上のほぼ全面に貼床が施される。貼床は砂質の茶褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒子白粘土、灰を混ぜた土を堅固にたたきしめ作られていた。又、カマド周辺は極めて堅固であるが、壁の周辺は全体にやや軟弱であった。レベルは中央部より東側壁面に向ってやや低く構築されていた。

ピットは非常に認識が困難であり、微妙な土層の違いをもってP_1～P_4の4個を捉えたが、その後床面を取り除いた状況では当初は認識されたピットがはたして確実なものかどうか判断し難いものとなった。したがって、図上においては当初に認識されたピットを表しておくが、本住居址に付随するピットについては不明と言わざるを得ない。



第18図　H-5号住居址実測図（1：80）

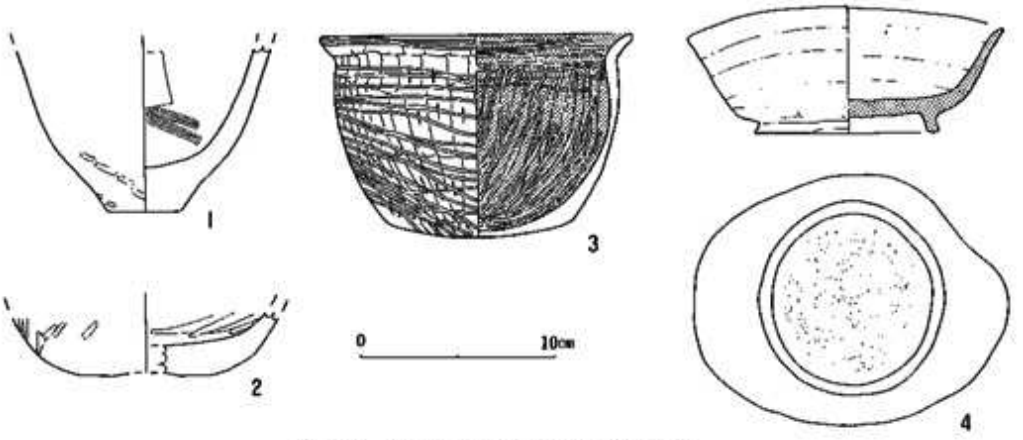
カマドは北壁のほぼ中央にあり、主軸95cm袖部の幅104cmの規模を有する。残存状況は良い煙道は、壁体を半楕円状に掘り込み底部は舟底形を有しカマド奥壁の立ち上がり面より接合して緩らかな傾斜で立ち上がっている。火床は壁下の床面を18×26cmの楕円状に掘り窪めた後、白粘土に灰が混入する土で埋めもどし構築されている。袖部は一部を残し崩落しているため旧状は明らかでないが、白粘土を主体に(IV層)小礫、灰が含まれ構築されている。天井部もその大半が崩落しているが、東側一部が残存しており、その形態は袖部から続く逆「し」の字状を呈す。カマド本体は白粘土に、灰、パミスを混ぜた層に炭化物が含まれ（IV、III層）構築されていたと考えられる。当カマ



第19図　H-5号住居址カマド実測図（1：40）

ドは袖部内部奥壁、天井部が強い熱をうけて赤変し、ボロボロとした状態で看取され長期にわたる使用が看取できる。

遺物の出土量は少なく、カマド内からの出土遺物は、甕2個体が出土し、カマド周辺から床面中央部にかけて土器片が撒布して検出されたのみであった。しかし、床面直上中央部で第20図4（須恵の歪んだ坏）が出土し、同図1（器肉の厚い甕底部）は北東床上で、同図2は北東床上壁の立ち上がり面からの出土で、同図3の鉢は、覆土内からの出土であった。これ等はいずれも出土した土器を接合し、旧状を知るに至った。



第20図　H-5号住居址出土遺物（1：4）

第8表　H－5号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
20-1	甕	― ― (3.6)	器肉厚い	内面刷毛目調整	胎土黄褐色 外面CO_2付着 カマド付近 回転実測
20-2	甕	― ― 〈7.2〉	底部丸味をおびた平底、器肉厚い。	外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	回転実測
20-3	鉢	(16.0) 10.3 ―	底部丸味をおびた平底、口辺部外反する。最大径は口縁部にある。	外面　底部～口縁部にかけヘラケズリの後ミガキを施す。 内面　黒色研磨	回転実測
20-4	坏(須)	16.2 6.5 9.4	底部平底に付け高台、器形歪んでいる。	外面　回転ヘラキリの後付け高台、体下部周縁ヘラケズリ、口辺部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 完全実測

遺物　第20図

本住居址からは、土師器片・須恵器片が出土している。土師器の器種には、鉢、甕がある。

第20図1は土師器甕で、胴部は緩やかに外傾する内面底部は丸底で肉厚である。第20図3は土師器鉢で、口辺部に最大径を有し、胴部外面はヘラケズリが施され底部から口辺部にかけて丁寧な磨きを有する。内面は底部より外面頸部周辺に至るまで黒色研磨が施される。器形は丸みをおびた逆台形を呈するもので頸部において急に変換し、外傾する短小な口辺となる。須恵器は高台付坏がある。第20図4で、口辺部は船状形に著しく歪んでいるが、意図的に焼成したのか、焼成中に歪んだのかは不明である。胎土は精選されておらず内外内に1mm程の礫が多く含まれている。

これからの出土遺物より本住居址は奈良時代の所産と考えられる。

（佐々木宗昭）

(6)　H―6号住居址

遺構　第21・22・23図

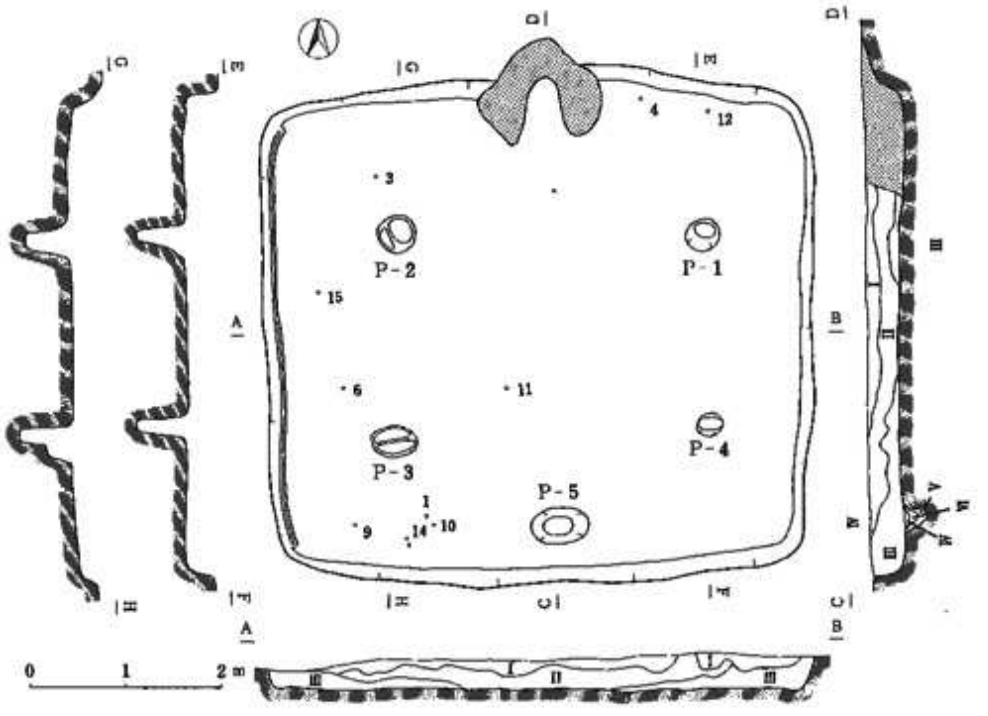
本住居址は、第II区北方た―39グリッドを中心として検出された。

平面プランは、東西5.6m南北5.25mを測る隅丸方形を呈し、主軸方向はN―2°―Wを指す。壁高は20～34cmを測り、西壁側には4cm前後の浅い周溝がみられる。

床面は、粘性弱く砂粒を多量に含む黒褐色土を用いた硬い貼り床で、若干の炭化物粒子が混じり、フラットな状態を呈している。

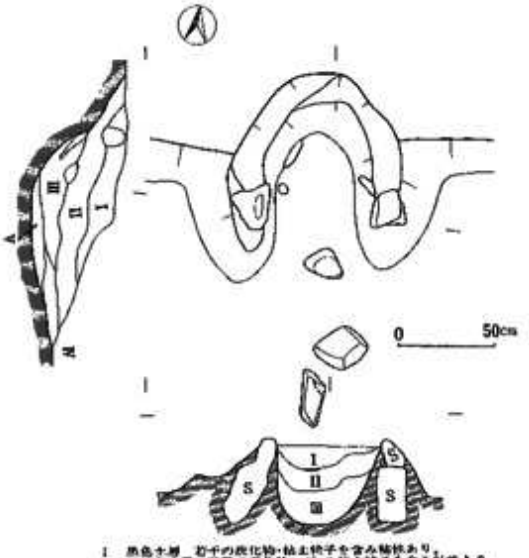
ピットは、主柱穴と考えられるP_1～P_4の4個の柱穴と、南壁側の中央にある貯蔵穴あるいは入口柱穴と考えられるもの(P_5)1個が検出された。主柱穴は円形あるいは楕円形を呈し、深さはP_1で53cm、P_2で47cm、P_3で54cm、P_4で55cmを測る。P_5は楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

カマドは北壁中央にあり、現状で焚口～煙道部までの長さ108cm、袖部最大幅136cmを測る。カ



I 暗茶褐色土層　パミス・ローム粒子少量混入、粘性なくパサパサしている。
II 黄茶褐色土層　パミス・ローム粒子を多く含み、少量のカーボンが混入する。粘性がなくパサパサしている。
III 淡茶褐色土層　粒子極かく、パミス・ロームはほとんど含まない。
IV 黒褐色土層
V 黒色土層
VI 黒褐色土層

第21図　H-6号住居址実測図（1：80）

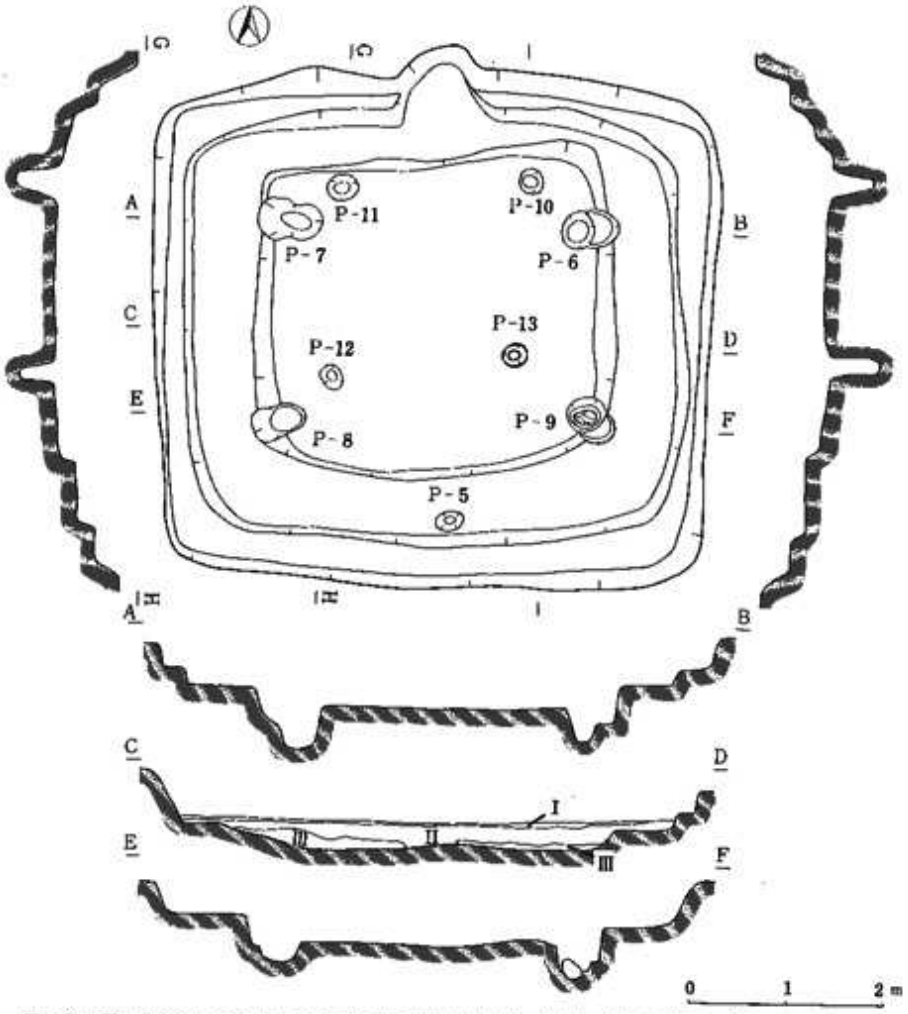


I 黒色土層　炉干の炭化物・粘土粒子を含み粘性あり。
II 暗褐色土層　煙干の炭化物・パミス・粘土粒子を含み粘性あり。
III 褐色土層　炭化物・粘土粒子を含む。
IV 赤色土層　多量の炭化物を含む、粘性あり。
V 黒色土層　炉干の炭化物を含む。

第22図　H-6号住居址カマド実測図（1：40）

マド前庭部にはカマドの袖材として用いられたものと考えられる石材が3点残置されていた。そのうち1点は軽石を角錐状に面とりしたもので、他の2点は安山岩礫である。このような状況から、本カマドは両側の袖の端部が取り壊されたものと察せられる。

本カマドの煙道部は、住居址北壁を半円状に急斜に掘り込んで設けられているものである。袖部は、左・右各2個の石材を基に粘土で硬めたもので、特に東側の袖の芯に用いられている石材は、軽石を直方体状に面取りした良好なものである。本体、煙道部における天井部は認められず、セクションにおいてもそれに関連する



I　黒褐色土層　床面として貼られた層で少量の炭化物を含む、よくしまり、砂粒子が多量に混入する。
II　黄褐色土層　多量のローム粒子によって構成される層で、僅かに黒色土ブロックが混入する。
III　黒色土層　パサパサとした粘性のない層。

第23図　H-6号住居址掘り方実測図(1：80)

土層は検出されなかった。

火床面は床面レベルより浅く窪んだV層下面で貼り床を若干掘り込んだものと考えられる西側袖よりの火床には楕円形の支脚石が立している。

遺物は、住居址の東南区を除いて散漫に分布するが、カマドの東袖に接して出土した須恵坏（第25図11）と半裁された甕の下半部は、ほぼ原位置と保っているものと考えられる。甕は床面を掘りくぼめて埋められたものである。

またカマド内からは甕4個体文の破片と小形の甑破片が検出された。うち1個体の甕は5割程

度に復原することができた（第24図５）

さて、本住居址では、床面下において２段階の掘り方がとらえられた(第23図)。これら二者はフラットな状態を示し、住居址の平面形と軌を一にする相似形で、本住居址が当初に構築されてから２回にわたって拡張されたことを示す証だといえよう。まず、当初の掘り方は、南北3.2m東西3.7m深さ、0.76mを測るもので、これにはP_{10}～P_{13}の４個の柱穴が付随する。これらの柱穴はそれぞれ円形を呈するもので深さは40～50cm前後である。

第２段階の掘り方は、南北4.5m、東西5.1m　深さ0.45mを測り、柱穴はP_6～P_9が伴う。P_6～P_9はほぼ円形を呈するもので40cm前後の深さを有する。

このように本住居址は２度にわたる拡張を経たものと考えられる。家族等の増員によるものであろうか。

遺物　第24・25図

本住居址からは土師器及び須恵器が検出された。

土師器は、薄手の甕３個体、厚手の甕３個体、厚手の小形甕１個体、小形の甑１個体、内面黒色の坏１個体分が検出されている。

第24図２は、薄手の甕の口縁部で接合はみられなかったがその胴部がカマド内より出土している。

第24図４は、上半部の切断された甕で、おそらくその状態でなんらかの機能を果していたものと考えられる。その外面にとは縦位のヘラ削りが施こされ器厚は薄い。底部の面積は狭く、ヘラ削りがなされている。

第24図５の甕は、胴部上半に最大径をもつ薄手の甕で口縁部は頸部よりゆるやかに外湾する。底部は４に比べるとやや広い。胴部にとは斜位と縦位のヘラ削りが、底部にはヘラ削りが施こされている。

第24図７は厚手の小形甕である。胎土はあまり精選されていない。

第24図８は単孔の小形甑である。底部も検出されたが接合をみなかった。

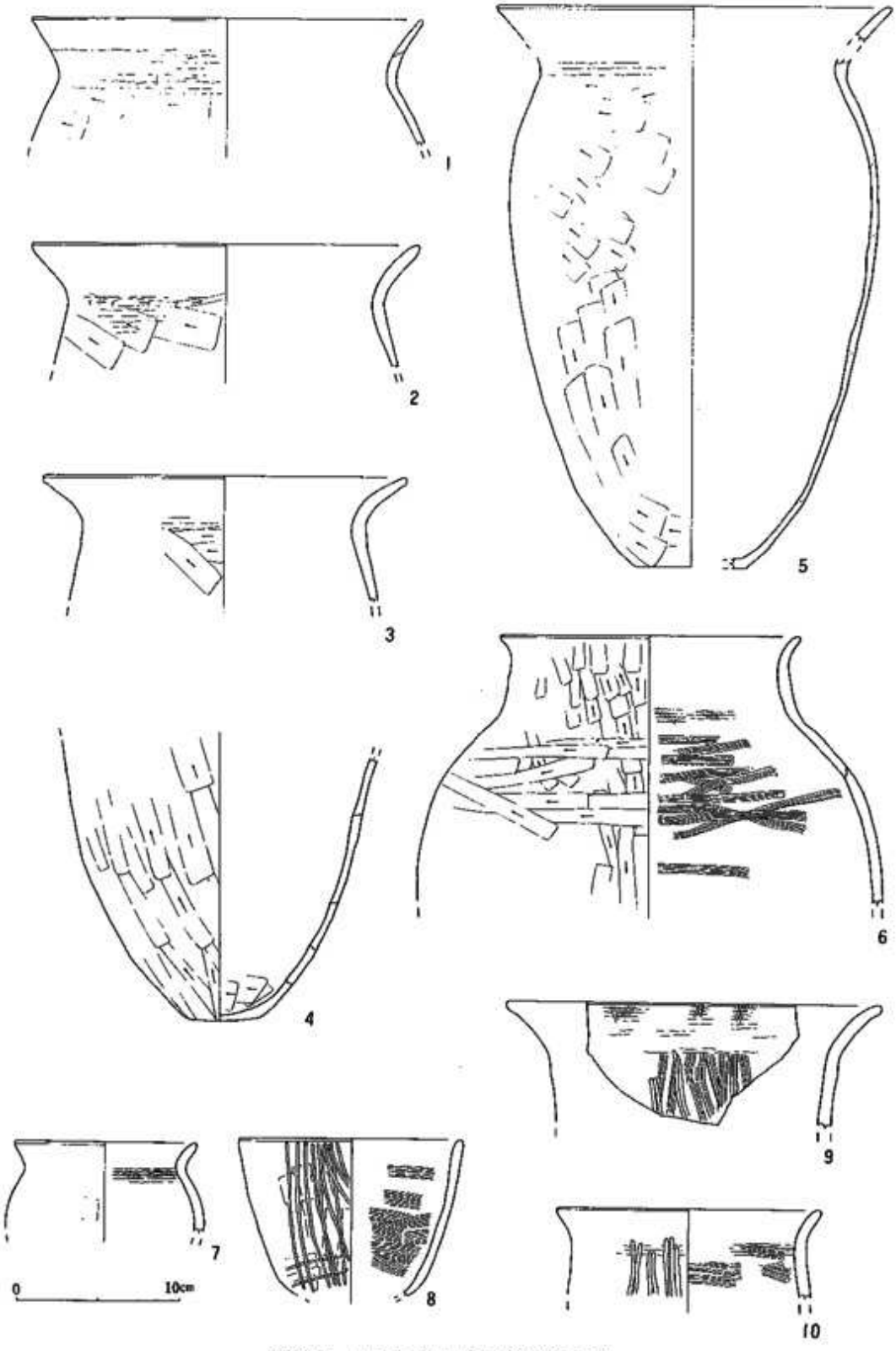
第24図９・10は、厚手の甕の口縁部で４、５の薄手の甕に比べると口縁の外傾がゆるやかである。胴部の内外面には印刷目調整がなされている点においても、ヘラ削りのなされている４、５とは異なる。

第25図11は、坏の完形で底部は回転ヘラ切りの後（×）のヘラ記号が附されている

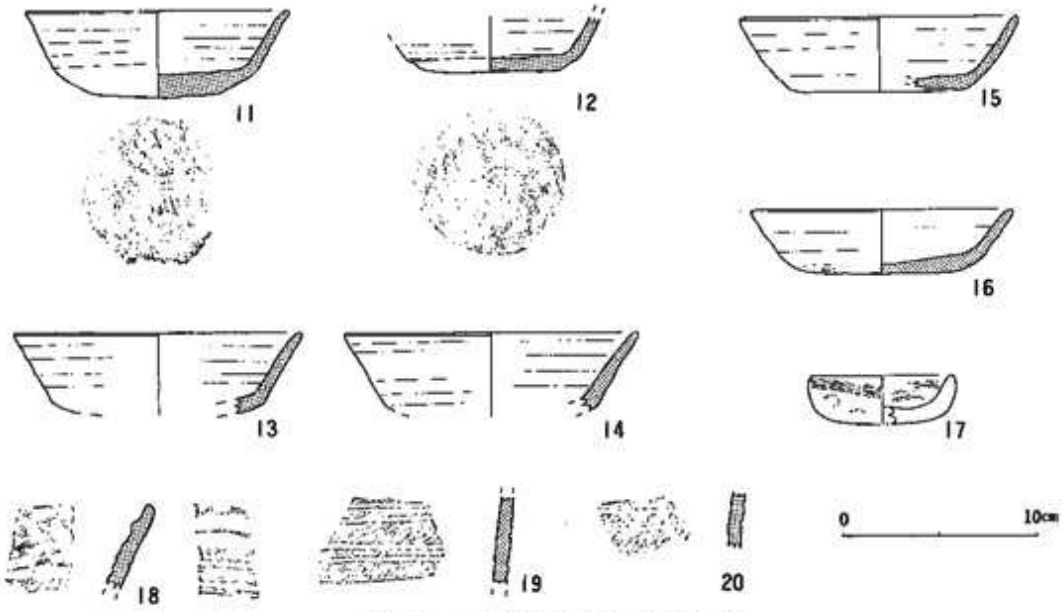
第25図12は、坏の底部で11と同様回転ヘラ切りの後、ヘラ記号が附されている。

第25図14の坏は、胎土は11、12の灰色のものとは異なり灰褐色を呈している。

第25図17は、小形の坏状の形態を呈する土師器の手捏土器でその内外面は、ヨコナデがなされている。



第24図　H-6号住居址出土遺物(1：4)



第25図　H-6号住居址出土遺物(1：4)

第9表　H－6号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
24-1	甕	〈23.9〉 —— ——	器厚薄く、長胴甕と思われる。 口辺部「く」の字状に外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部横位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土赤褐色 回転実測
24-2	甕	〈23.6〉 —— ——	口辺部「く」の字状に外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部斜方向のヘラケズリ、頸部幅0.5cm位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 回転実測
24-3	甕	〈22.1〉 —— ——	口辺部「く」の字状に外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部ヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 回転実測
24-4	甕	—— —— 4.4	器厚薄く、長胴甕と思われる。	外面　底部ヘラケズリ、胴部横位のヘラケズリ 内面　底部ヘラナデ、胴部丁寧なヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 完全実測
24-5	甕	—— —— 〈6.7〉	器厚薄く、長胴。	底部～胴中央部まで縦位のヘラケズリ、胴中央部～頸部まで斜方向のヘラケズリ 内面　丁寧なヨコナデ	胎土茶褐色内外面CO_2付着 カマド内 回転実測

※P132頁につづく

この他の土師器としては、内外面黒色の坏と内面黒色の坏の破片が各1個体検出された。

須恵器は、甕の破片1点、坏5個体分が検出された。

本住居址は、出土遺物より奈良時代の所産と考えられる。

(堤　隆)

(7) H－7号住居址

遺構　第26・27図

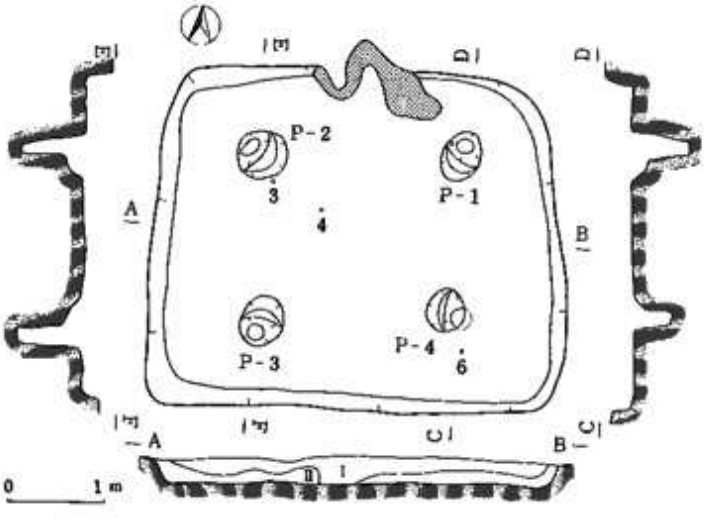
本住居址は、そ・た・ち—44・45グリッド内に検出された。M－8溝址とM—7溝址が交差する北東側に位置し、南壁側付近には、D—185～190号土壙が存在している。

平面プランは、南北430cm、東西350cmを測り、やや南西壁が角ばった不整な隅丸方形を呈する。カマドを中心とした主軸方位は、N—7°—Wを示す。

覆土は、黒褐色を基調とした2層によって形成される。壁高は29cmを測り、西壁はなだらかに立ち上がるが、その他は急傾斜な立ち上がりを見せている。

床面は、H－4号住居址と同様、3cm～10cm大の礫を含んだゴツゴツの床で、ローム層直下で踏みしめた固い床である。主柱穴はP_1～P_4と4個規則的な配列を示しており、4個共にテラスを有している。径50×45cm、深さ40～65cmを測り、P_4は東側に抉り込みオーバーハングしている。

カマドは、北壁中央に位置し、先端を舟先状に掘り込み、袖を粘土と石で構築した石組み粘土カマドである。規模は100×150cmを測り、火床部の焼土は20cmの範囲に2cm程の堆積で遺存していた。構築材は白灰色の粘土を用いており、右袖は良好な状態で残り、先端には安山岩を使用した袖石が築かれている。また、支脚石は18×9cmの軽石を用いて土中に10cm、しっかりと埋め込まれていた。右袖の北壁側には粘土が30cmの幅にわたって散在していたが、天井等の崩落したものであろう。カマド内には甕破片が散在していた。

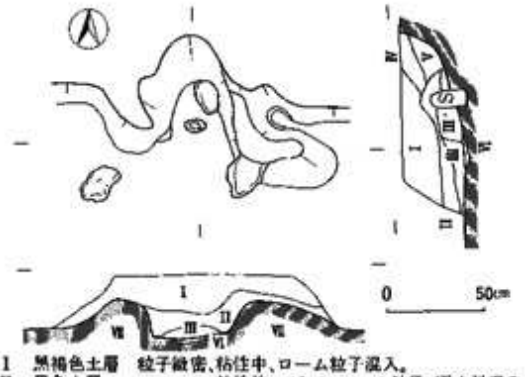


I　濃黒褐色土層　粘性なくパサパサしている。少量のパミス混入。
II　淡黒褐色土層　粘性なくパサパサしている。少量のパミス・ローム粒子・ローム粒子・炭化物混入。

第26図　H-7号住居址実測図(1：80)

遺物　第28・29図

出土遺物は、ほぼ復原が可能となった3・4の土師器小形甕があり、口縁部ヨコナデ・胴部はヘラ削りが施され丸底を呈している。4は摩滅が著しく、頸部くの字状に外反し、7段の輪積みの痕跡が顕著である。1・2は甕形土器の口縁部片で器厚7mmを測り、比較的厚手である。5は内面黒色で丸底を呈す坏形土器の破片であり、内外面共にミガキが顕著で、鬼高期の要



Ⅰ　黒褐色土層　粒子緻密、粘性中、ローム粒子混入。
Ⅱ　黒色土層　〃　粘性強、パミス・ローム粒子・灰少量混入。
Ⅲ　白灰色土層　灰層・炭化物微量混入。
Ⅳ　灰褐色土層　粒子緻密、粘性強、粘土を多量に含む。
Ⅴ　灰色土層　黒色土の少量まじった粘土層。
Ⅵ　褐色土層　焼土層
Ⅶ　灰色土層　カマド構築材の粘土層。

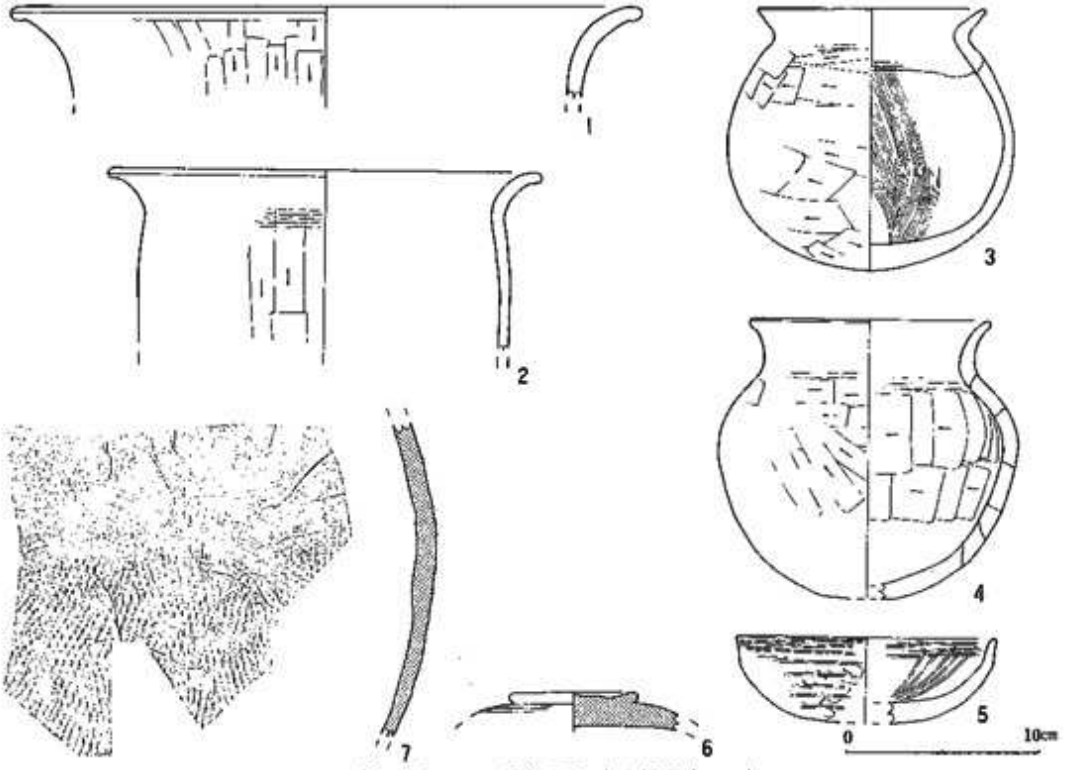
第27図　H-7号住居址カマド実測図（1：40）

素をとどめている。6は、大形の須恵器蓋である。摘み部分の直径は6cmを測り、中央が僅かに凹んだ偏平状を呈している。他に同個体の破片が2点出土している。

その他、平行叩目文を有する須恵器甕の破片3点、須恵器蓋細片5点、坏1点がある。土師器は、器厚の厚い内面黒色の甕形土器片、茶褐色を呈する同厚の甕形土器片、図化できる資料のなかった器厚の薄い胴部にヘラケズリの施される甕形土器片21点と敲石・石鏃も検出されている。

本住居址は、以上の出土土器から判断して奈良時代の所産と考えられよう。

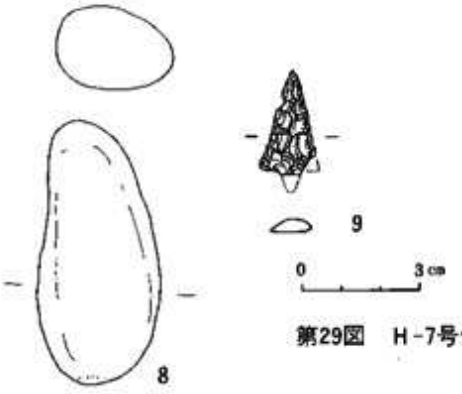
（島田恵子）



第28図　H-7号住居址出土遺物（1：4）

第10表　H－7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
28-1	甕	〈32.5〉 —	最大径口縁部、口辺部大きく外傾外湾する。	外面　口唇部ヨコナデ、口辺部～頸部縦位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土黄褐色粒子粗い 内面剥落著しい。 外面CO_2付着 フク土Ⅰ区内 回転実測
28-2	甕	〈22.1〉 —	最大径口縁部、胴部からやや直立ぎみに立ち上がり口辺部大きく外傾外湾する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴部縦位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土黄褐色 内面CO_2付着 フク土内 回転実測
28-3	小形壺	(11.6) 13.4	底部丸底を呈し、胴部球形をなす。口辺部「く」の字状に大きく外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴部横位ヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ、胴部縦位刷毛目調整	胎土茶褐色 外面CO_2付着 カマド内 完全実測
28-4	小形壺	(12.2) 〈14.4〉	底部丸底を呈し、胴部球形をなす。口辺部「く」の字状に大きく外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部横位ヘラケズリ、胴中央方向にヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	胎土茶褐色 外面CO_2付着 回転実測
28-5	坏	〈13.3〉 〈4.4〉	底部肉厚丸底、体部外傾内湾、口辺部で稜をなし直立ぎみに立ち上がる。	外面　ヘラケズリの後ミガキ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 フク土内 回転実測
28-6	壺(須)	— — —	つまみ部残存	外面ロクロヨコナデ 内面ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測



第11表　H－7号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
29-8	砥石	13.4	6.3	4.2	
29-9	有茎石鏃	(2.7)	(1.4)	0.35	

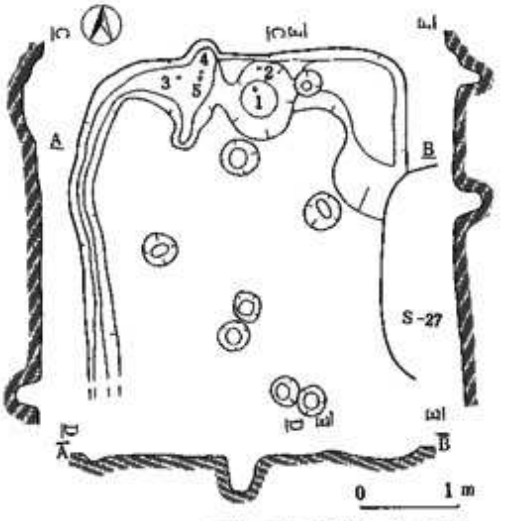
第29図　H-7号住居址出土遺物（8　1：4　，　9　1：2）

(8)　H－8号住居址

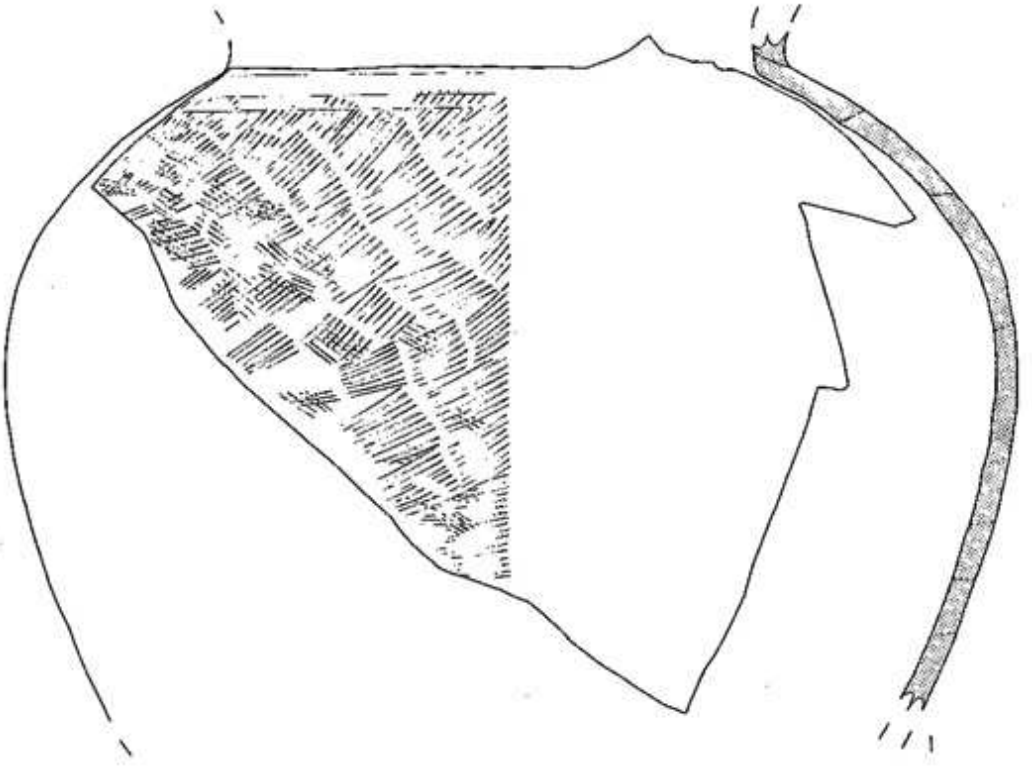
遺構　第30図

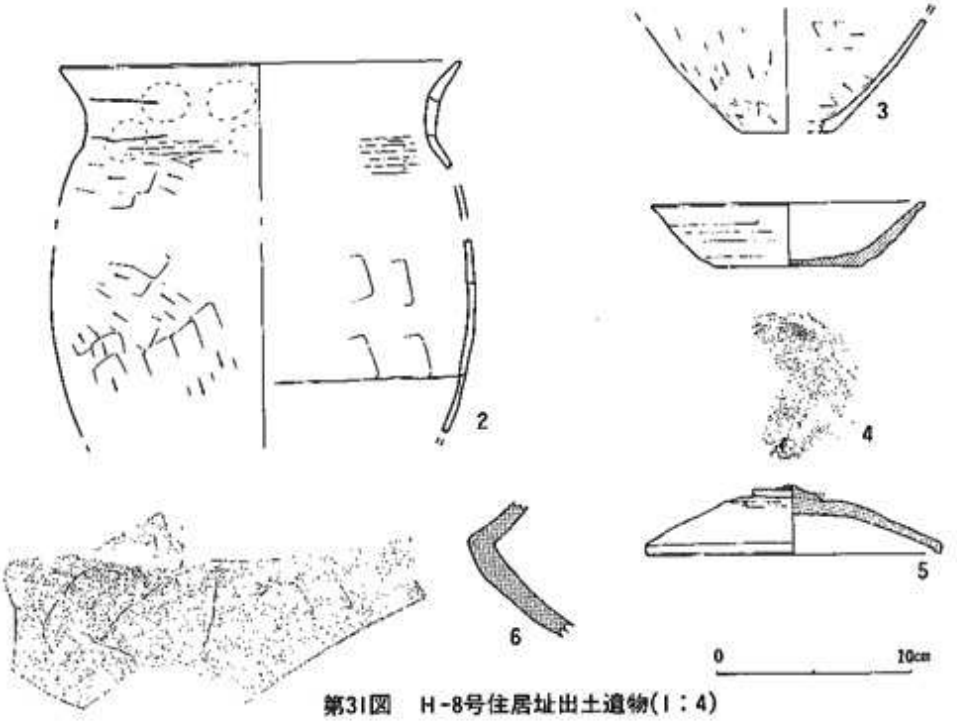
本住居址は、第Ⅱ区東ほ—48グリットにかけて位置する。本住居址は床面近くまで削平され、南壁はすでに消滅してしまっているが、その平面はプランは南北を長軸とする隅丸方形を呈するものと考えられ、東西3.4mを測る。本住居址の一部はS—27に切られている。主軸方向はN－6°—Wである。

本住居址内にはいくつかのピットがみられ

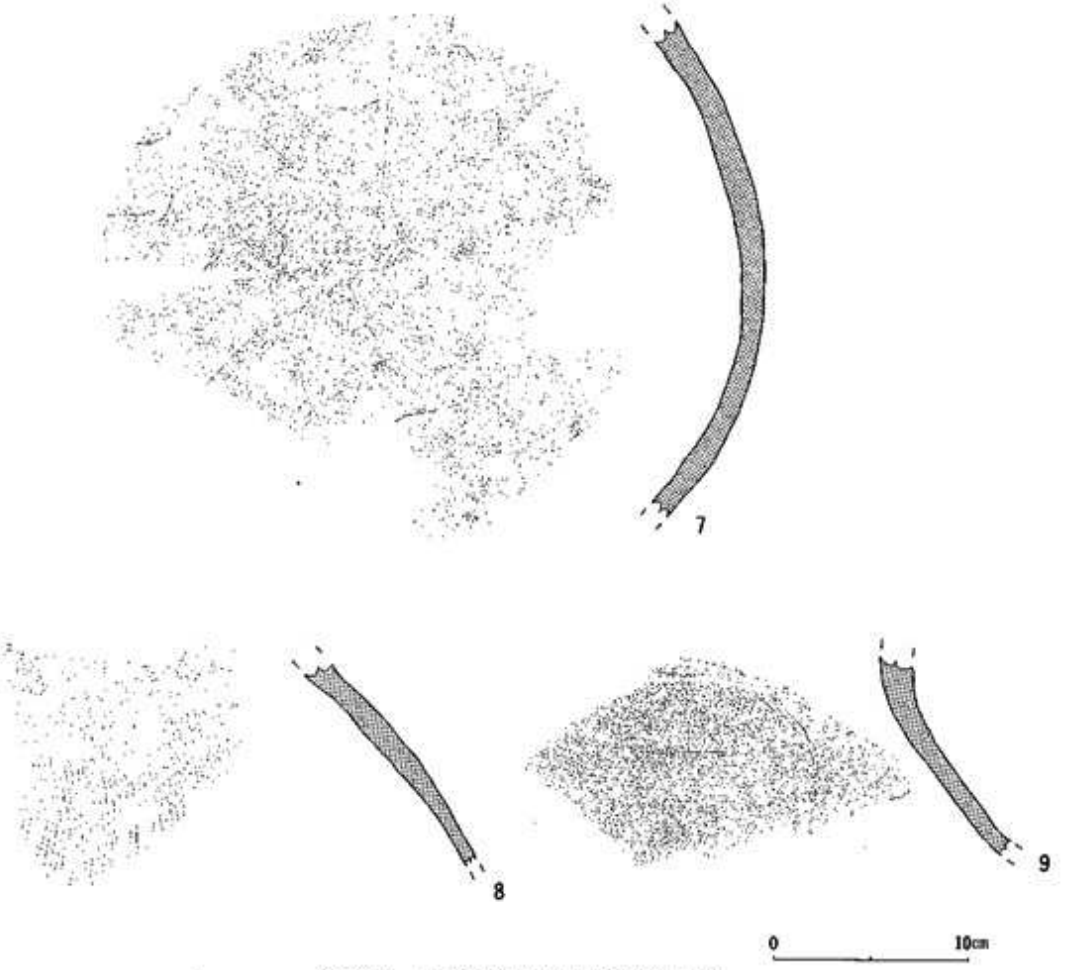


第30図　H-8号住居址実測図（1：80）





第31図　H-8号住居址出土遺物(1：4)



第32図　H-8号住居址出土遺物(1：4)

第12表　H－8号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

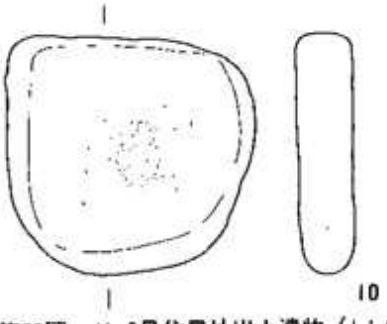
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
32-1	甕(須)	—— 頸部最下径 (52.0) ——	胴部大きく張り出し球形を呈す。	外面　胴上部ロクロヨコナデ、胴部叩き目調整 内面　ヨコナデ	胎土青灰色 破片実測
32-2	甕	〈20.1〉 —— ——	口辺部やや外傾し外湾する。頸部直立ぎみである。器厚薄い。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部横位にヘラケズリ、胴中央部斜方向にヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ	胎土茶褐色 フク土内 回転実測
32-3	甕	—— —— (4.6)	底部～胴下部にかけ外傾し内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位ヘラケズリ 内面　ヘラナデ	胎土茶褐色 回転実測
32-4	坏(須)	〈14.0〉 3.25 (7.6)	底部平底	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
32-5	蓋(須)	15.2 3.6	つまみ部宝珠形を呈す。	外面　天井部ヘラケズリ後つまみ部貼り付ける、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 回転実測

第13表　H－8号住居址一覧表

遺構	平面プラン				主軸方向	カマド	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	深					
H－8	隅丸方形	3.40	—	--	N-6°-W	北壁中央		平安	

第14表　H－8号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
33-10	台石	12.8	12.3	3.0	



第33図　H-8号住居址出土遺物（1：4）

たが、どれが本来的に本住居址に伴うものなのかはとらえられなかった。住居址西壁には周溝が巡っていた。床面は地山を叩いたものと考えられる。

カマドは北壁中央において確認されたが、大半を失なってしまっていた。カマド付近からは、八角錐状に面取りされた軽石の支脚石が出土した。

遺物はすべてカマド付近より出土した。

またカマド付近からは数点の骨片が出土した。本住居址の近辺には2基の火葬墓が存在する為、これらの骨はそうした火葬墓との関連も考えられる。

遺物　第31・32・33図

遺物は、須恵器大甕5個体、須恵器蓋1点、須恵器坏4個体、土師器坏1個体分と、敲石1点台石1点が検出された。特に須恵器大甕5個体分の出土は他の住居址と比べ特異である。

須恵器大甕は外面に格子叩き目のなされるもの（第31・32図1、7、8）とヨコナデのみのもの（第31・32図6、9）。第31図1は、最大径が51cmに達する大甕である。第31図5須恵器蓋はロクロを用いて製作されたものであるが器形はやや歪んでいる。須恵器坏4個体分、土器坏1個体分はいずれも断片である。

第33図10の台石は、その表面片側において敲打痕が顕著である。

本住居址は、その出土遺物の特徴により平安時代の所産と考えられる。

（堤　隆）

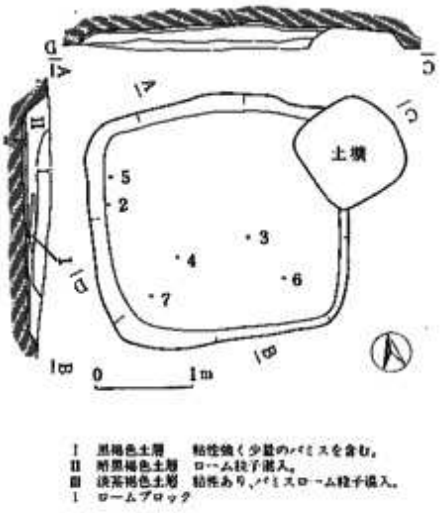
(9) H－9号住居址

遺構　第34図

本住居址は、第Ⅰ区西方に—4グリッドにかけて検出された。その北東コーナーは方形土壙によって破壊されている。本住居址の平面プランは東西2.6cm南北2.5cmを測る隅丸方形を呈し、主軸方向はN—7°—Eをさす。

壁高は24～13cmを測る。隣接する他の住居址と比べると小形なものとしてとらえられる。

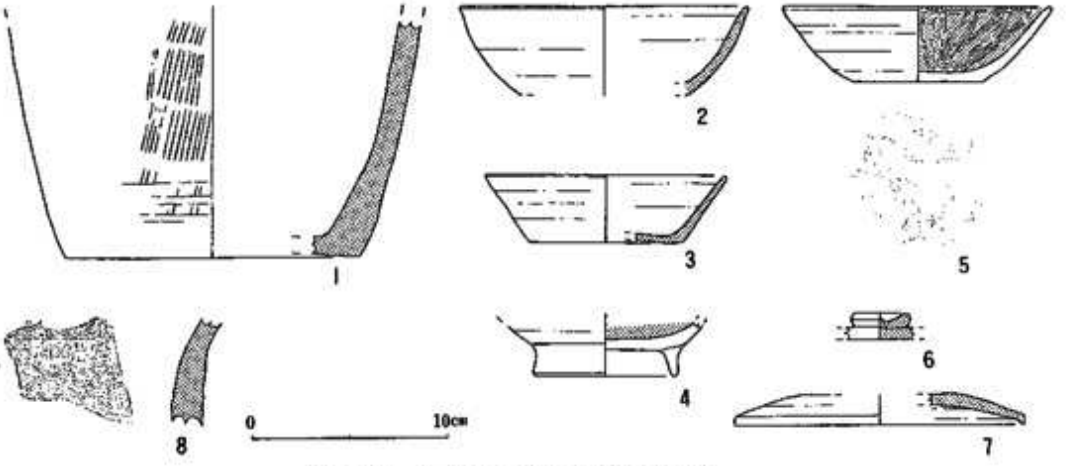
床面は、ローム層と黒褐色土を混じた土層を掘り方に薄く貼って構築されている。



第34図　H-9号住居址実測図（1：80）

本住居に伴うと考えられる柱穴は、家内のみならず壁外においても検出されず、また、本居址はカマドを有さないものである。

遺物は住居址全体に撒布する。



第35図　H-9号住居址出土遺物(1：4)

遺物　第35図

須恵器蓋1個体、須恵器坏18個体分の破片が各1～数点検出された。

須恵器甕は、格子目叩きのなされているもの（第35図1）と、胴部上半から口縁部にかけて波

第15表　H－9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
35-1	甕(須)	—— —— 〈14.9〉	底部平底	外面　底部ヘラケズリ、胴部叩き目調整、後胴下部ヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 回転実測
35-2	坏(須)	14.7 —— ——		外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 完全実測
35-3	坏(須)	〈12.4〉 3.5 (7.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
35-4	坏	—— —— 7.4	付高台	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 完全実測
35-5	坏	13.5 3.8 6.5	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 完全実測
35-6	蓋(須)つまみ部	—— —— ——	つまみ部宝珠形を呈す。 貼り付けつまみ。		胎土青灰色 破片実測
35-7	蓋(須)	—— —— 〈14.7〉		外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測

状文の施されているもの（8）がある。須恵器坏には糸切りと回転ヘラ切りのなされているものがある。

土師器甕には、厚手のものと薄手のもの双方がみられるようである。

第35図4は、高台付の土師器坏で内面黒色である。

第35図5は、内面黒色の土師器坏で底部は糸切りである。

本住居址は、伴出遺物の特徴により平安時代の所産と考えられる。

（堤　　隆）

(10)　H－10号住居址

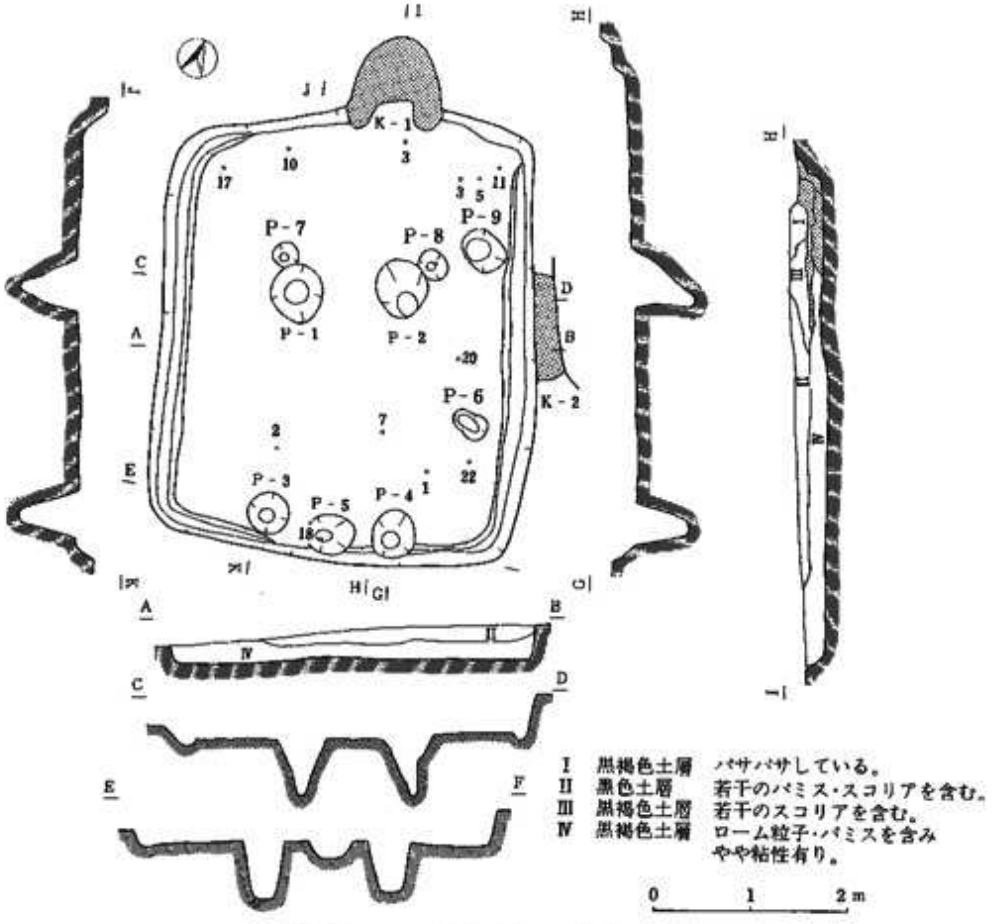
遺構　　第36・37図

本住居址は、発掘区Ⅰ区の北西端寄りの、て・な・と—45グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層黄褐色土層上において検出された。

平面形態は、南北（470cm）、東西（381cm）の隅丸方形を呈し、主軸方向はN－24°—Wを示す。

覆土は2層に分割され、自然の堆積の状態を示す。第Ⅰ層は若干ローム粒子、軽石を含む黒色土、第Ⅱ層はローム粒子、軽石を含み、やや粘性の有る黒褐色土である。

壁高は、確認面から17cm～31.5cmを測り、床面からはやや急傾斜で立ち上がる。壁体は、堅固に構築されている。壁溝は住居址の北壁下を除き三つの壁下に検出された。壁溝中は5～17cm、深さ3～7cmを測り、断面はU字状を呈する。



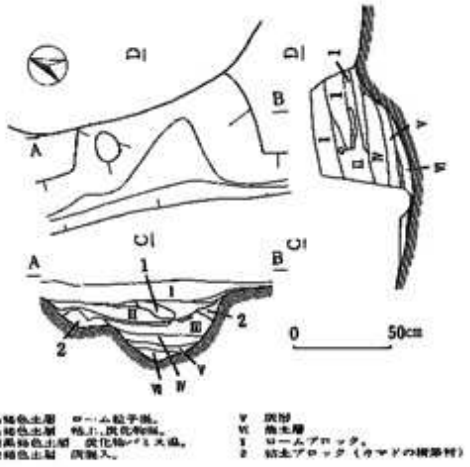
第36図　H-10号住居址実測図(1：80)

床面は2面検出され、住居拡張によるものと考えられる。上位の床面は、全面にやや粘性のある黒褐色土を平坦に叩きしめたものと思われ、北壁東側にあるカマドはその床面上に構築されたものである。下位の床面は、住居址内中央から南壁にかけて検出された。上位の床面と同様に、ローム粒子を含んだやや粘性のある黒褐色土を平坦に叩きしめたものと思われ、東壁中央にあるカマドはその床面上に構築されたものと思われる。

ピットは上位床面上から主柱穴が4個(P_1、P_2、P_3、P_4)、東壁下上部から1個(P_6)、南壁下P_4とP_3の間に1個(P_5)計6個が検出されている。主柱穴は整然と配置され、P_1は54×60cmの円形を呈し、深さ62cmを有する。P_2は52×65cmの円形を呈し、深さ51cmを有する。P_3は42×43cmの円形を呈し、深さ61cmを有する。P_4は45×50cmの円形を呈し、深さ57cmを有する。断面形は、P_1・P_2が傾斜の強いV字状を呈し、P_3・P_4は逆台形を呈する。尚、P_2下部に角礫が配されていた。P_6は45×48cmの楕円形を呈し、深さ15cmを有する。

下位床面上からはP_7、P_8、とP_9の計３個が検出されている。P_7はP_1上部に接し30×31cmの円形を呈し、深さ下位床面上から3.5cmを有する。P_8はP_2上部に接し27×28cmの円形を呈し、深さ下位床面をから８cmを有する。

カマドは上位床面に伴うものとしては北壁や中央にあり、長さ 158 cm、幅93cmの規模を有する。残存状況は極めて悪い。煙道部は壁体を90×52cmの半円状に掘り込んで構築される。火床部は壁下の床面を127×45cmの不整形に浅く掘り込んだものと思われる。天井部は既に崩落し、旧状を留めないが、カマド上部土層の灰と粘土を含む灰黒褐色土層が構材となっているものと思われる。袖部は天井部と同様に灰黒褐色土層が構材となっているものと思われる。



第37図　H－10号住居址旧カマド実測図（1：40）

下位床面に伴うものとしては東壁中央にあり(第37図)、他の土壙と住居拡張により火床部、天井部、袖は破壊をうけている。残存状況は極めて悪い。残存している部分から考えると、煙道部は半円状に掘り込んで構築される。火床部は壁下の床面を掘り込み、天井部は既に崩落し、旧状を留めないが、粘土層（第２層）が構材となっているものと思われる。尚、袖部は粘土層（第２層）が構材となっているものと思われる。

本址下位床面に伴うカマドは、カマド内土層Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層が厚く、火床部下のローム層まで赤変していた。

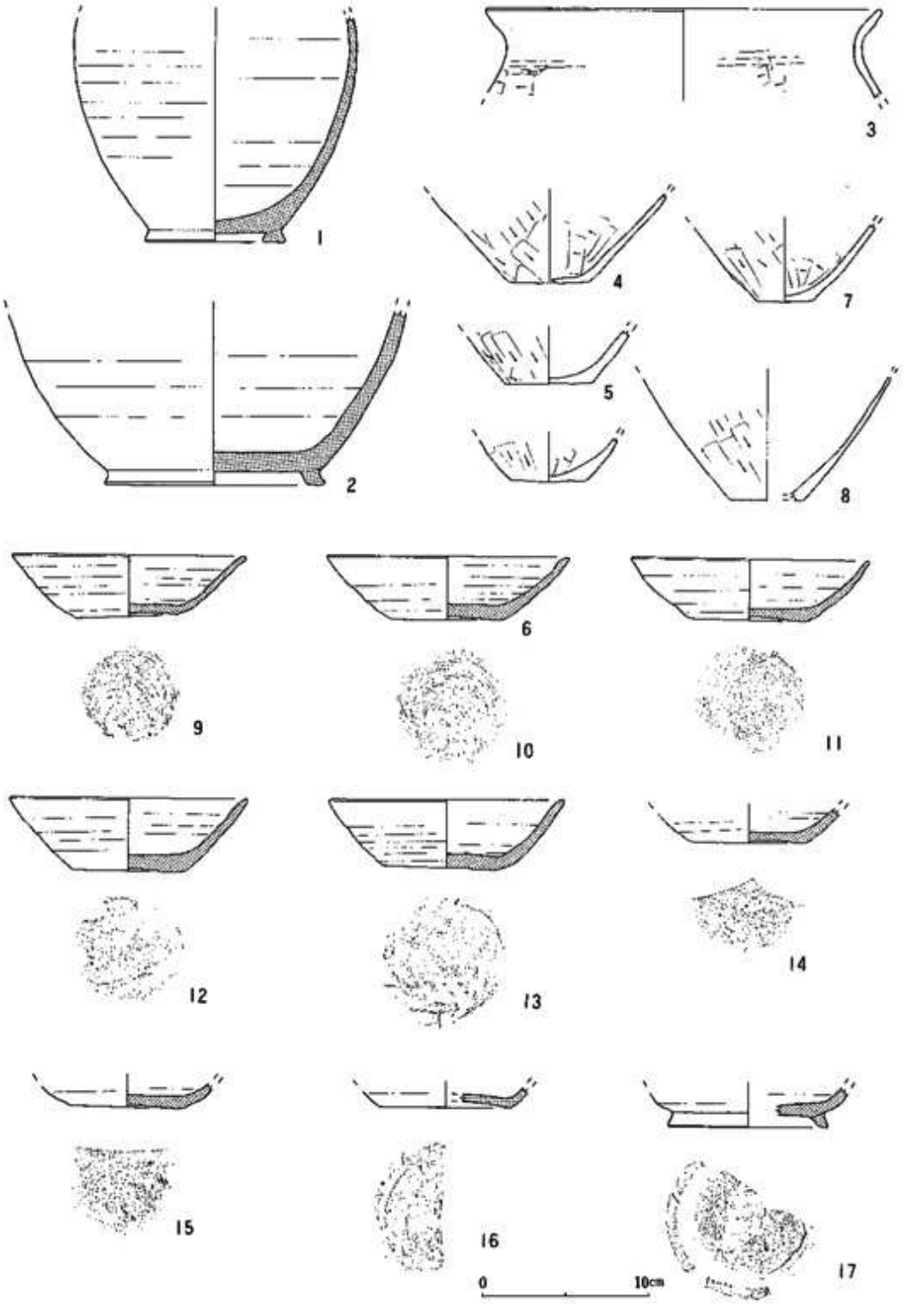
遺物の出土量は多く、特に遺構の完存品の割合が高い。分布状況は住居東半分に散存し、特にカマド内、及びカマド周辺、東壁下に集中する傾向が看取される。図示した第38･39４、８、９、19がカマド内、第38・39図11、21がカマド東側に完存品として出土している。

遺物　第38・39図

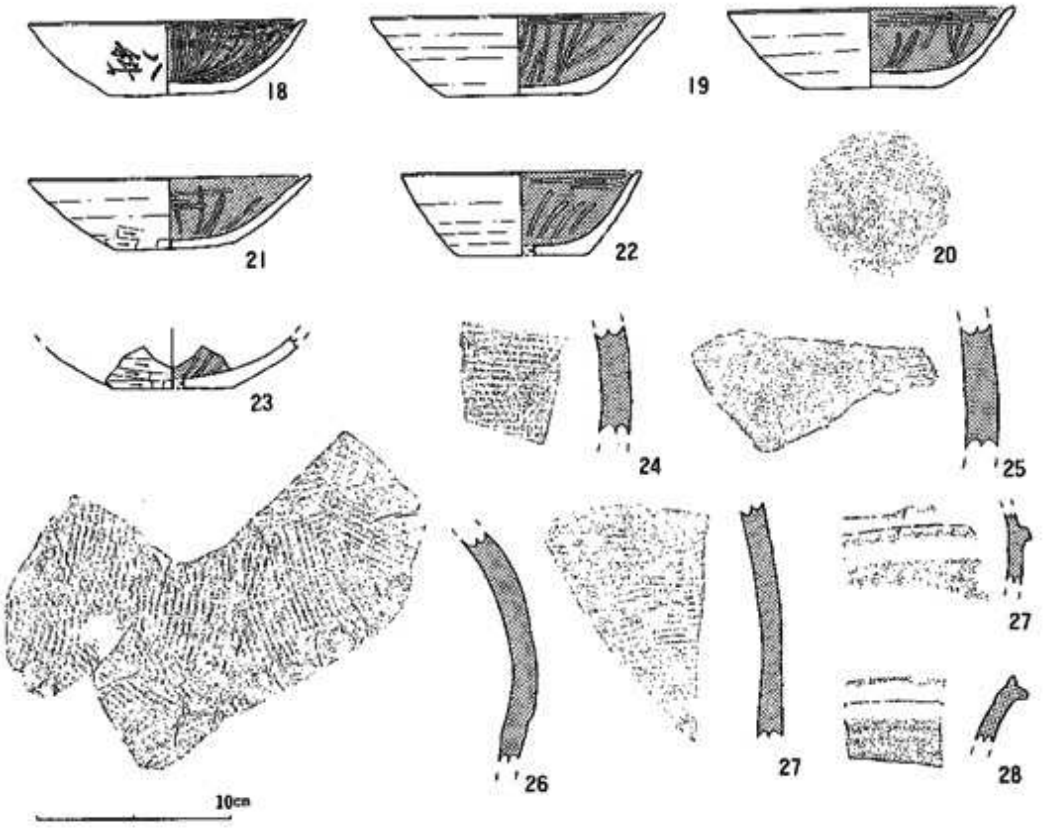
本住居址覆土内から須恵甕破片、原始灰釉長頸瓶破片、土師甕破片、台付甕脚破片、土師坏、須恵坏、敲石等が検出されている。

第38図２は、高台を有する須恵器の長頸瓶である。第39図24～27の須恵器胴部破片には叩き目模様が施こされている。第39図28須恵器口辺部破片は、三角形の突帯を有するものである。後述する仮称「原始灰釉」の長頸瓶第38図１は、胴中央部に釉が見られ、胎土が灰白色で底部糸切り後高台が付けられている。胴部球状を呈すると思われる。

土師甕第38図３は頸部から口辺部にかけ残存しており、くの字状に外反している。内面にCO_2付着しており煮沸の甕と思われる。第38図４・５・６・７・８は底部から胴下部にかけ残存して



第38図　H-10号住居址出土遺物(1：4)



第39図　H-10号住居址出土遺物(1：4)

おり、器厚が薄く底部ヘラ削りの平底である。いずれも底部内面CO_2付着しており煮沸用甕と思われる。

須恵坏第38図9、10、11、13、14は右回転の糸切り底である。第38図12、15は糸切り底であるが回転方向が判明できない。第39図18は、カキ目模様のヘラ削りが加えられている。文字は「八科○」と行書で書かれていて、地名に関係していると考えられる。○の部分は判明できないが、三字以上書いたものと思われ、字数からいっても佐久地名では珍しい。第39図19、20、21、22、23は内面黒色研磨が施こされている内黒土器である。第39図21、23は口辺下部にヘラ削りが施こされている。第39図19、22、23は底部ヘラ削りが施こされている。第39図20は糸切り底である。第39図21は底部糸切りの後ヘラ削りが加えられている。

他に、敲き石は、蟬石安山岩の川原石を利用したものと思われる。

以上本住居址からは多量の甕と坏が検出された。遺物の個々について検討すると第39図21、23の土師坏と、第38図16の須恵坏には奈良時代の様相が見い出されるが、第　図16の須恵坏以外全て

第16表　H－10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
38-1	瓶	—— —— 8.4	長頸瓶と思われる、胴部球状を呈す。	外面　底部糸切りの後付け高台、胴部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰白色 粒子細かい。 完全実測
38-2	甕 (須)	—— —— 12.8		外面　底部糸切りの後付け高台、胴部ロクロヨコナデ 内面ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 完全実測
38-3	甕	〈23.6〉 —— ——	口辺部「く」字状に外反する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部横位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 フク土内 回転実測
38-4	甕	—— —— (4.7)		外面　底部、胴下部ヘラケズリ 内面　底部ヘラケナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 カマド内 回転実測
38-5	甕	—— —— (4.4)		外面　底部、胴下部ヘラケズリ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 回転実測
38-6	甕	—— —— (5.1)		外面　底部、胴下部ヘラケズリ 内面　底部ヘラナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着剥落著しい。 フク土内 回転実測
38-7	甕	—— —— (3.4)	器厚薄い	外面　底部、胴下部ヘラケズリ 内面　底部ヘラナデ	胎土茶褐色 フク土内 回転実測
38-8	甕	—— —— (4.5)	器厚薄い	外面　底部ヘラケズリ、胴下部斜方向にヘラケズリ 内面　ナデ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 カマド内 回転実測
38-9	坏 (須)	14.0 3.9 6.0	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 粒子粗い カマド内 完全実測
38-10	坏 (須)	〈14.4〉 3.8 6.6	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 火熱 回転実測
38-11	坏 (須)	14.1 3.6 6.8	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 内外面火熱 完全実測
38-12	坏 (須)	〈14.1〉 4.4 (6.6)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 焼成あまい。粒子粗い。 フク土田区内 回転実測
38-13	坏 (須)	13.9 4.2 7.0	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 完全実測
38-14	坏 (須)	—— —— (6.3)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土Ⅰ区内 回転実測
38-15	坏 (須)	—— —— (6.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 火熱 回転実測
38-16	坏 (須)	—— —— 〈7.9〉	底部平底	外面　底部回転ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 回転実測
38-17	坏 (須)	—— —— (9.5)	底部高台付	外面　底部糸切りの後、付け高台 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
39-18	坏	14.3 3.7 6.3	底部平底	外面　底部糸切りの後ヘラ調整、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 外面CO_2付着 墨書「入料○」 Ⅰ－7内 完全実測
39-19	坏	15.0 4.1 7.4	底部平底	外面　底部ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 カマド内 完全実測

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調製	備考
39-20	坏	〈14.6〉 4.0 7.1	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 回転実測
30-21	坏	14.1 3.9 6.1	底部平底	外面　底部糸切りの後ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ、体下部周縁ヘラケズリ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 完全実測
39-22	坏	〈12.2〉 4.2 (6.3)	底部平底	外面　底部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土黄褐色 回転実測
39-23	坏	—— —— 〈6.2〉		外面　底部ヘラケズリ、体下部周縁横位のヘラケズリ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 外面CO_2付着 フク土Ⅲ区内 回転実測

が糸切り底であること、墨書土器が検出されたことなどから平安時代の所産と考えられる。

尚、第38図1は後述するようにいわゆる原始灰釉の長頸瓶で、猿投系のものであるという鑑定結果が得られた。時期的には、九世紀前半に位置付けられることが明らかとなった。

（羽毛田伸博）

(11)　H－11号住居址

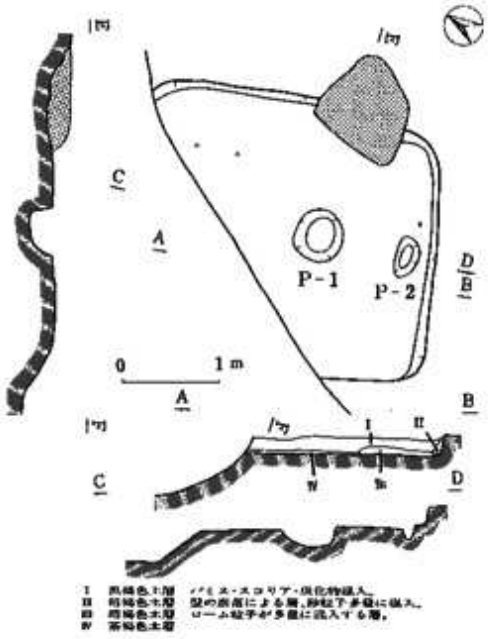
遺構　第40・41図

本住居址は、第1区の北西て―4グリッド内において検出された。遺構の西半部はM－15により切られている。平面形態は東西270cmを測り、隅丸方形と考えられる。主軸方向はN－62°―Eを示している。壁高は14cm～25cmを測り、床面からほぼ垂直に立ち上がる。

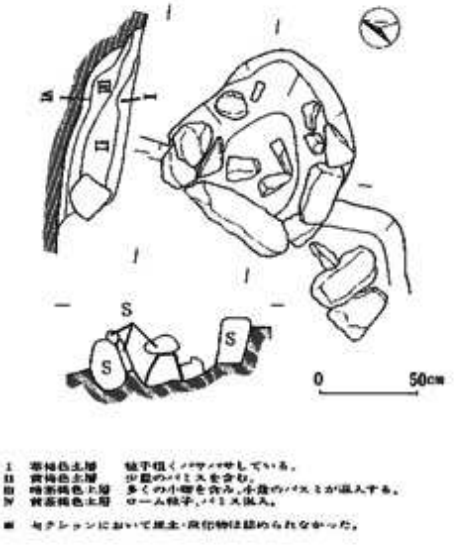
覆土は4層に大別され、プライマリーな堆積状態を示す。床面は砂質黄褐色ロームに茶褐色土・小礫が混入した状態で平坦に叩きしめて施される。カマド周辺は比較的堅固であるが、全体にはやや軟弱である。

ピットは2個で、主柱穴は不明である。P_1は50×54cm円形を呈し、22cmの深さを有する。P_2は22×42cmの楕円形をし、深さは10cmを有する。断面形はP_1はすり鉢状、P_2はU字状を呈す。P_1・P_2共に比較的小規模な住居址の割には大きなものであるが、深さは前述したように浅く、貯蔵用等の機能は考え難い。したがって、住居使用時においていかに機能したかは不明である。

カマドは東壁中央の南寄りにあり、主軸95cm、袖部の幅83cmの規模を有する。煙道は壁体を半楕円状に2段の緩らかな傾斜で掘り込み、袖部並びに奥壁を補強するため、角礫・安山岩を全面に宛って固定している。しかし、白色粘土等を用いてこれらを補強した跡は確認できなかった。袖部は全体に崩落が激しく旧状は把握できないが、壁に接合する右袖の石としては軽石を直方体に面取りして配し、左袖石は安山岩の自然石を配している。双方の袖石の上に渡されたと推察される全長60cmの安山岩の天井石は、陥落した状態にあった。火床は本址E～Fのエレベーショ



第40図　H-11号住居址実測図（1：80）



第41図　H-11号住居址カマド実測図（1：40）

ンから、壁面直下の床面を浅く掘り窪めて設けられたと考えられるが、カマドセクションにおいて焼土・炭化物等が認められず、正確な火床は確認できなかった。他に天井部崩落層等も予想されるが、これらも全く確認できなかった。これらのことから、焼土・灰・炭化物及び天井部、更には支脚を、何らかの意図を持って、本址外に廃棄したものと推考される。

遺物の出土量はあまり多くない。分布状況は、カマド内に集中する他は散布する程度である。図示した第42図４はカマド内出土の台付甕で、第41図で看取できるように転倒した状態で出土した。

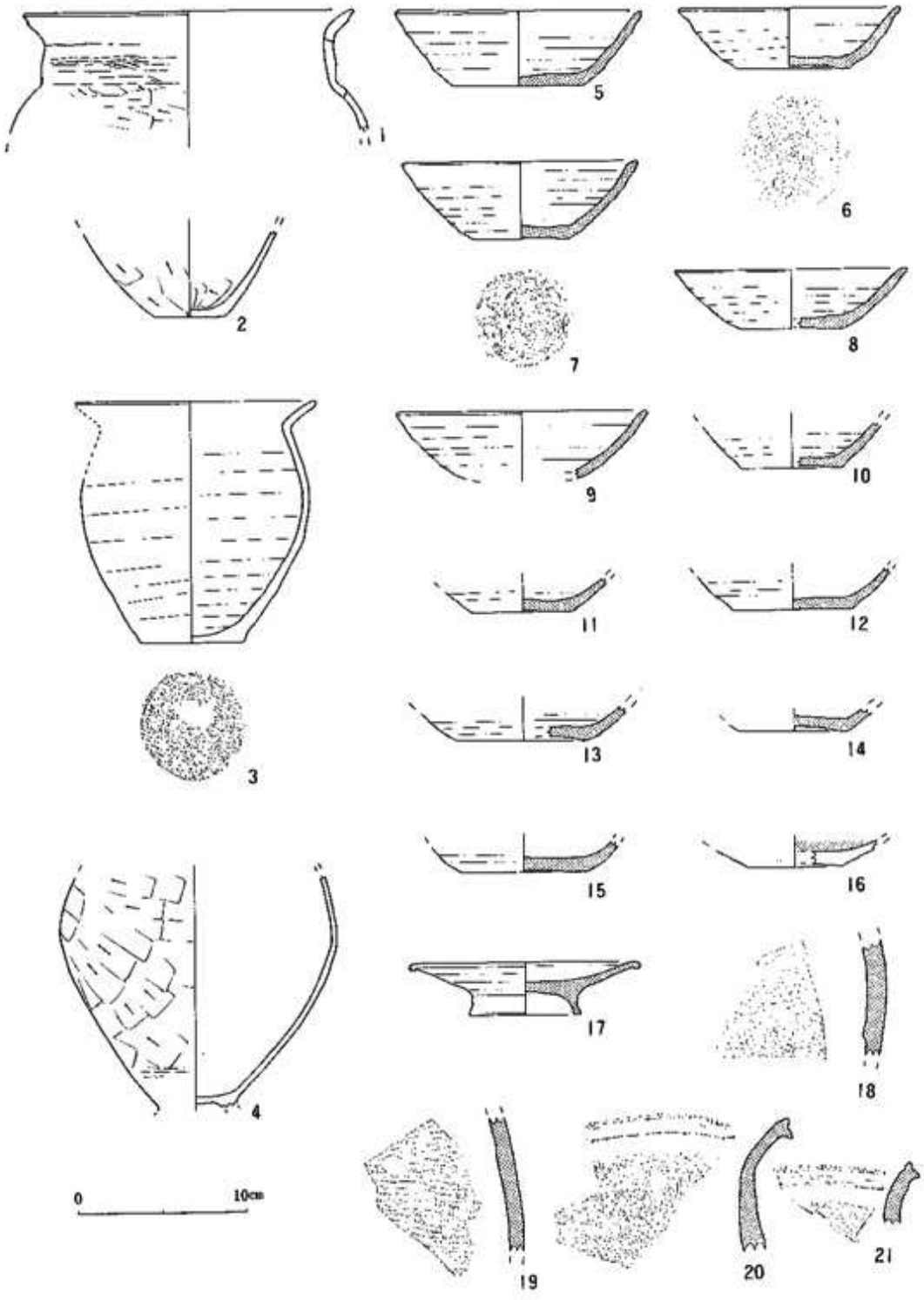
遺物　第42図

本住居址からは土師器、須恵器が出土している。

土師器の器種には台付甕・甕・坏があり、須恵器は坏がある。

第42図４は土師器の台付甕である。台部、口縁部が欠損しており、正確な最大径は測れないが現状からは甕胴部中位に有すると考えられる。胴部器形は緩やかに外傾するが、中央部より緩やかに内湾する。面調整は、ほぼ全面にわたって斜、横位のヘラ削りが施される。内面は斜位の丁寧なナデ、下部はナコナデが施され、外面中央はナデが施された後、ヘラ削りが斜位に加えられる。下部はヨコナデによる調整となっている。胎土は精選されており、器厚は前述した如く胴中位部３㎜と薄い。

第42図３は小形甕で、口辺部は「く」の字状を呈する。内、外面ともにロクロ横ナデにより調



第42図　H-11号住居址出土遺物(1：4)

第17表　H—11号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
42-1	甕	(19.4) —— ——	口辺部「コ」の字状に外反、口縁部に稜がある。	外面　口辺部ヨコナデ、胴土部横位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 外面口縁部CO_2付着 カマド内 回転実測
42-2	甕	—— —— 4.0		外面　胴下部縦位のヘラケズリ 内面　底部ヘラナデ、胴下部ヨコナデ	胎土暗褐色 粒子雲母を含む 完全実測
42-3	小形甕	(14.2) (14.1) 6.2	底部平底、口辺部「く」の字状に大きく外反する。	外面　底部糸切り後ヘラケズリ、胴部、口辺部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 カマド内 回転実測
42-4	台付甕	胴部最大径 16.0 —— ——	器厚薄く、胴部最大径が上部にある。	外面　胴中央部斜方向のヘラケズリ、胴下部ヨコナデ 内面　丁寧なヨコナデ	胎土茶褐色 粒子精選されている。 カマド内 完全実測
42-5	坏(須)	〈14.6〉 4.4 (7.7)	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い フク土IV区内 回転実測
42-6	坏(須)	(13.0) 3.6 6.6	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い カマド内 完全実測
42-7	坏(須)	〈13.9〉 4.5 (5.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い フク土IV区内 回転実測
42-8	坏(須)	〈13.7〉 3.5 (5.9)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰茶褐色 粒子やや粗い 内、外面火襷 フク土I区 IV区内 回転実測
42-9	坏(須)	〈14.9〉 —— ——	底部平底	外面　体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黒褐色 粒子やや粗い、 焼成、あまい。 カマド内 回転実測
42-10	坏(須)	—— —— 〈6.0〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い 回転実測
42-11	坏(須)	—— —— 6.0	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い カマド内 完全実測
42-12	坏(須)	—— —— (7.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い 外面CO_2付着 内、外面火襷 フク土内 回転実測
42-13	坏(須)	—— —— 〈7.1〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 外面火襷 カマド内 回転実測
42-14	坏(須)	—— —— (6.4)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い フク土内 回転実測
42-15	坏(須)	—— —— (7.3)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い 外面火襷 フク土I区内 回転実測
42-16	坏	—— —— (5.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土茶褐色 カマド、フク土 IV区内 回転実測
42-17	鉢(須)	(13.3) (3.1) (6.5)	高台付、口縁部かえりがある。	外面　底部糸切りの後付け高台、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い カマド内 回転実測

整されているのが特色である。底部は回転糸切りをなし、薄手の小形甕である。

第42図１は甕で、口辺部は「コ」の字状を呈し、胴部は横位によるヘラ削りによる調整が施される。

第42図16は坏で、面内は黒色研磨が施される。土師器の坏は１点出土したのみであった。

須恵器の坏第42図５～10は、ロクロヨコナデが施され、外面胴部にはほぼ等間隔に稜を有する。胴部はゆるやかに内湾し、底部は回転糸切りが施され、第42図６の口縁部は他のものに比べ胴部最上位より変換している。

須恵器甕には第42図18～21があり、いずれも器厚が厚く、第42図20の口辺部は緩やかに外反し、口辺部端部で断面三角形の突帯を有する。

以上の遺物を個々に検討すると、第42図１の土師器甕及び須恵器坏に代表される様に、平安時代の特徴を有するものが多い。したがって、本住居址は平安時代の所産と考えられる。

（佐々木　宗昭）

(12)　H－12号住居址

遺構　　第43・44図

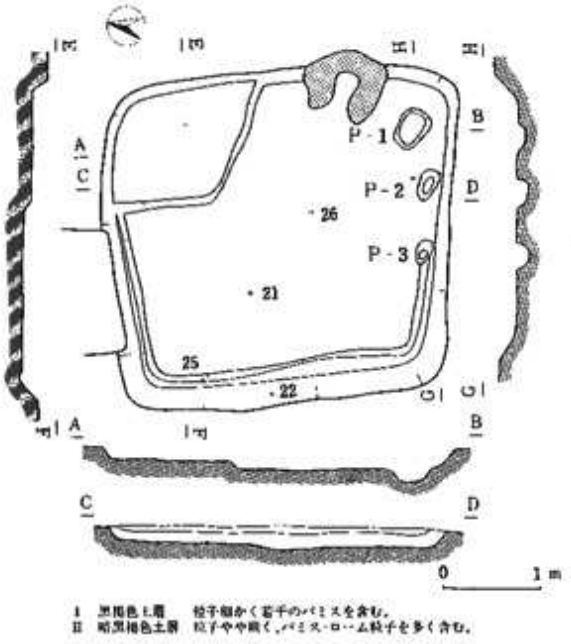
本住居址は、発掘区第Ｉ区の北西つ・て－６グリット内において検出された。北側の壁面一部は土壙８号により破壊されている。平面形態は東西340cm南北360cmを測る、隅丸方形を呈し、主軸方向をＮ－83°－Ｅを示す。尚、本住居址は北東部にベッド状遺構を有する。壁高は、12cm～20cmを測り、床面より緩やかに立ち上がるが、構成土層が砂質な為部分的に傾斜をもつこともある。壁溝は住居址の中央部より東側半分を、ほぼ半周し北側溝はベッド状遺構に接する付近で断絶し、南側溝はP_3に接し断絶する。壁溝幅は６～16cm、深さ４～９cmを測り断面はＵ字状を呈する。

覆土は、２層に大別され、プライマリーな堆積状態を示す。

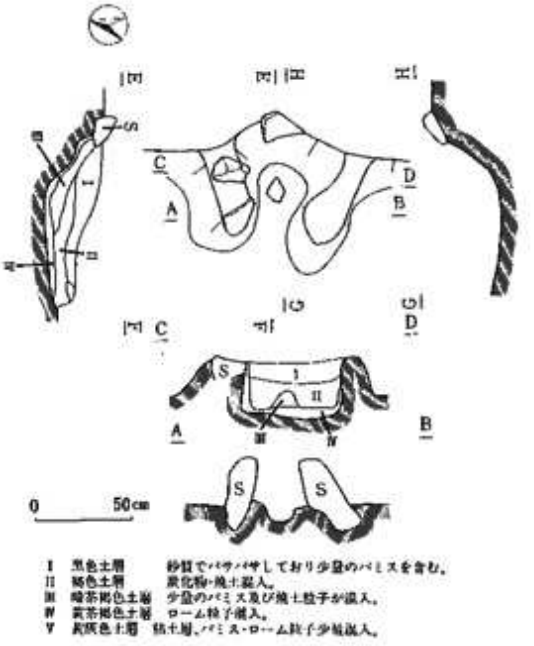
床面は、砂質性の黄褐色ロームに茶褐色土、パミス及び、小礫が含まれて、全般によく踏み固めて固緻に施されている。カマド周辺は、特に堅固であり、全体にほぼ平坦である。また、住居址の北東に一段高い面が設けられ、いわゆる『ベッド状遺構』が検出された。ベッドは南北140cm東西120cmで全体の形状は、ほぼ方形を呈し、床面より８～10cm高くなっている。本遺構の床面は、よく踏み固められ、前述した住居址床面が基調となって継続されるが、黄色ローム粒子が多量に含まれて構築されている。

ピットは３個確認されたが規模もまばらで、主柱穴とはいい難い。P_1はカマド右脇のコーナー近くに存在し、径は28×40cm深さ６cm、P_2は径18×32cm深さ10cmのもので南壁面立ち上り部にある。P_3は周溝に接続し、径12×24cm深さ14cmを測る。

カマドは東壁南寄りにあり、主軸80cm、袖部幅82cmを測る。残存状況は比較的良い。煙道部は、



第43図　H-12号住居址実測図(1：80)



第44図　H-12号住居址カマド実測図(1：40)

東壁南部を緩い山形状に掘り込み、カマド奥壁に添って急傾斜で立ち上る。煙道最端部には、自然石が置かれ、煙道との関連が推測されるが、機能については不明である。火床部は壁直下の床面を浅く掘り窪め、黄茶褐色ロームを平坦に敷きつめて設けられている。袖部は両側に大型の角礫が2個配置されており、左側の袖には2個の角礫が認められ袖の芯をなしていたと思われる。これに、灰色粘土、パミス、及び黄色ローム粒子を混ぜた土で被覆し、袖部を構築していた。カマド低部には、天井石かと思われる自然石が認められた。

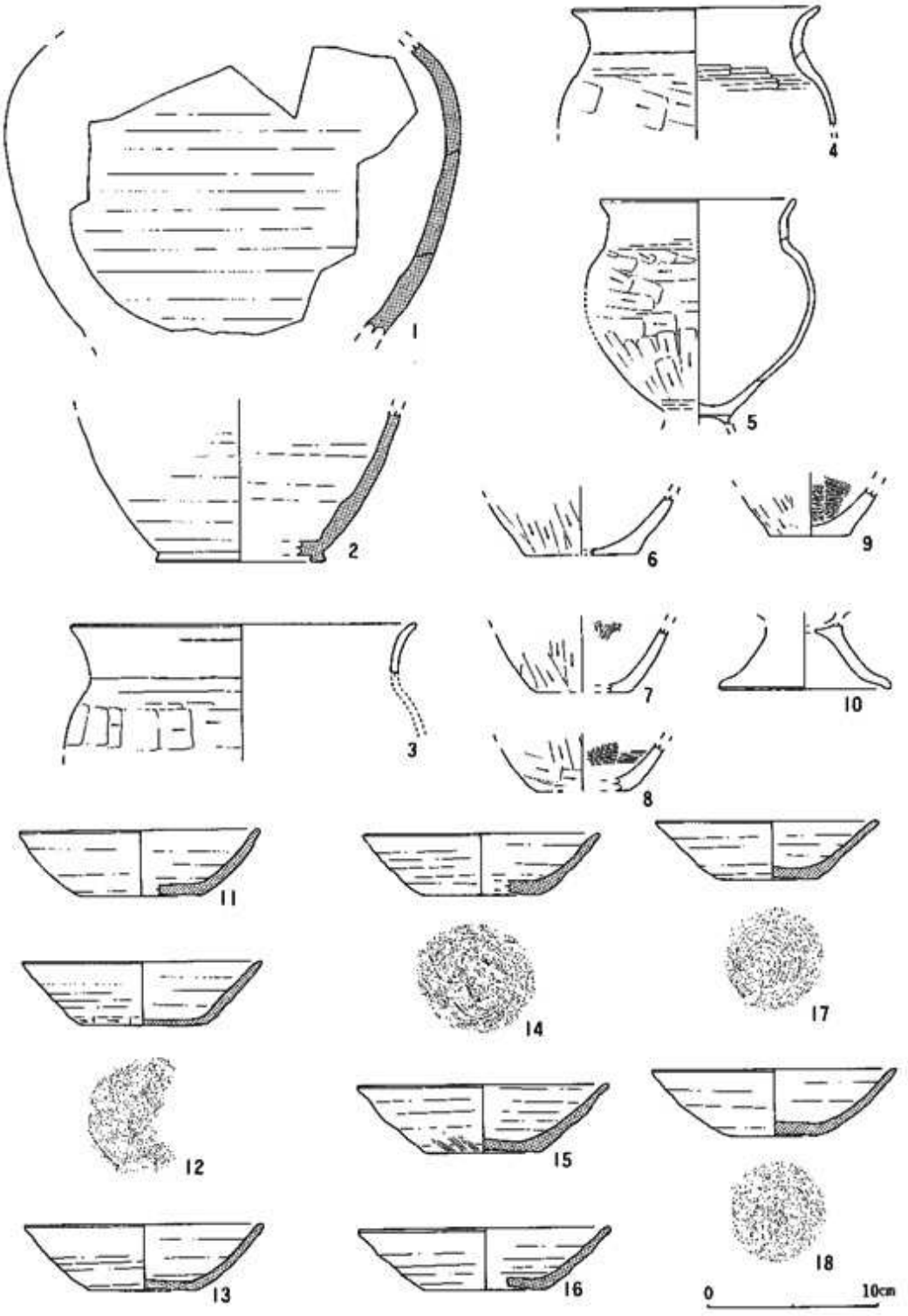
遺物　第45・46図

本住居跡からは、土師器、須恵器が出土している。

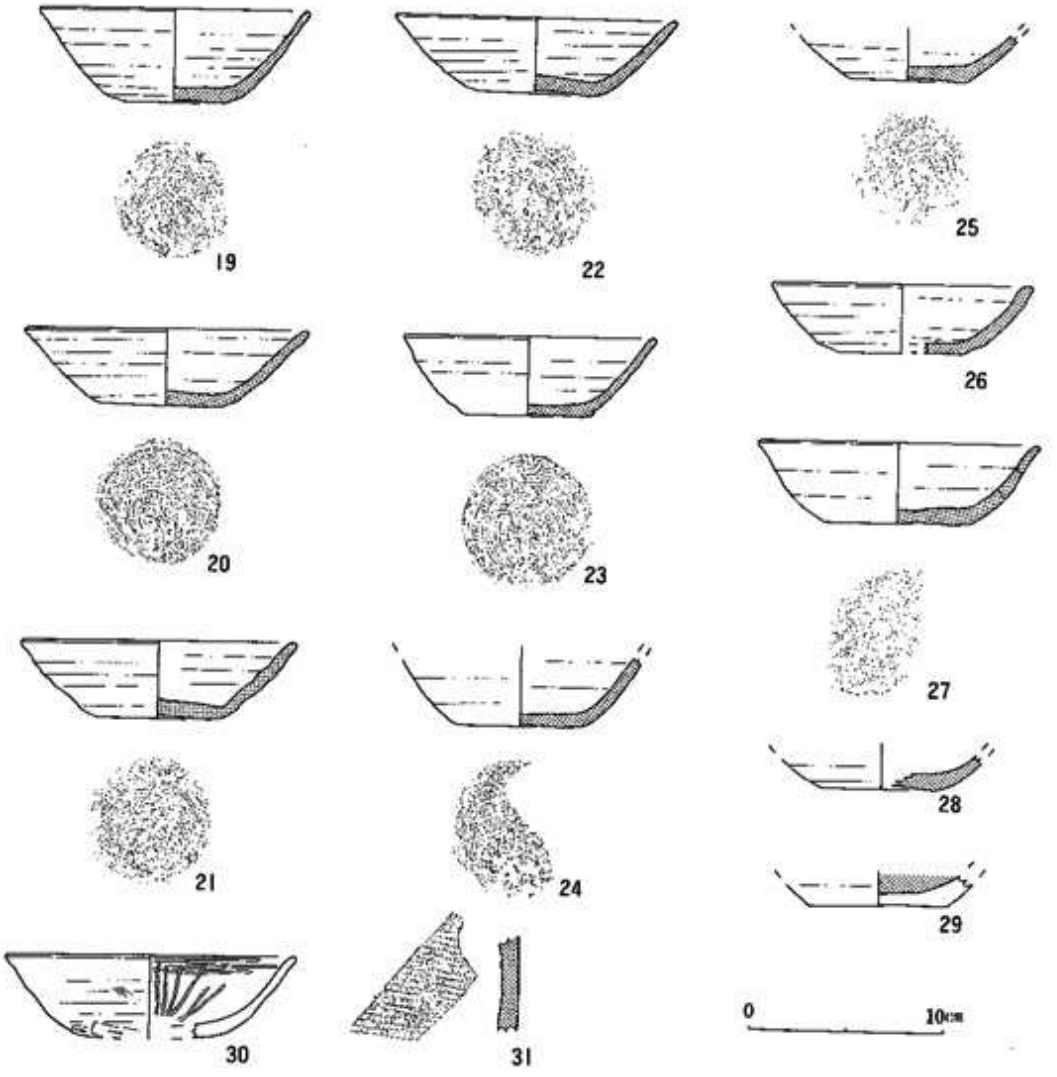
土師器の器種には、甕、台付甕、坏がある。

土師器台付甕第45図5は、胴部～口縁部が存在し台部に欠損している。胴部は球胴を呈し、口辺部は「コ」の字状をなす。尚、口辺部は横ナデによる調整が施される。第45図10は脚部の破片であるが、第45図5の台部としては接合できず、従って台付甕の台部であるのか、高坏の脚部であるのかは判断がしがたい。しかし、第45図5の台付甕が出土していることから、台付甕の台部である可能性が強いと思われる。

土師器甕は、第45図3～8があり、第45図6～8は甕底部である。第45図4の口辺部は3に比べ、やや強く外反しており外面は斜位のヘラ削りによる調整がなされ、内面はヘラ磨きによる調整が



第45図　H-12号住居址出土遺物(1：4)



第46図　H-12号住居址出土遺物(1：4)

施される。

土師坏には第46図29・30があり　第46図29は内面に黒色研磨が施され、第46図30の内面は、横位及び、従位のヘラ磨きが施される。須恵器坏には、第45・46図11～28があり、ほぼ同様な形態をなし、内外面ともにロクロ横ナデにより調整され、底部は回転糸切りによるものである。

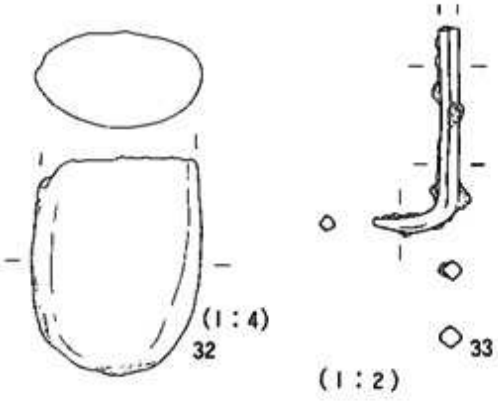
第47図32は敲石、33は釘？かと考えられる。

(佐々木宗昭)

第18表　H－12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
45-1	甕(須)	—— 最大径 〈26.8〉 ——	胴部球状を呈す。	外面　胴部ロクロヨコナデ	胎土暗灰褐色 内、外面自然釉付着 カマド内 破片実測
45-2	甕(須)	—— —— (9.9)	高台付	外面　底部糸切りの後付け高台、胴部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土暗灰褐色 内部自然釉付着 フク土III、 IV区内 回転実測
45-3	甕	20.3 —— ——	口辺部「く」の字状の弱い立ち上がり。	外面　胴上部～頸部にかけ横位のヘラケズリ口辺部ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内側CO_2付着 完全実測
45-4	小形甕	(14.4) —— ——	口辺部「コ」の字状ぎみに立ち上がる	外面　口辺部ヨコナデ、胴部横位のヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ、頸部ヘラナデ	胎土茶褐色 外面CO_2付着 カマド内 回転実測
45-5	台付甕	11.3 甕部総高 12.3 甕部底部 4.2	口辺部「コ」の字状ぎみに立ち上がる	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部横位のヘラケズリ胴下部縦位のヘラケズリ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 カマド内 完全実測
45-6	甕	—— —— (6.5)		外面　底部ヘラケズリ胴下部縦位のヘラケズリ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 カマド内 回転実測
45-7	甕	—— —— 〈5.5〉		外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位のヘラケズリ	胎土茶褐色 内外面剥落しい、 フク土II区内 回転実測
45-8	甕	—— —— 〈5.4〉		外面　胴下部周縁横位のヘラケズリ 内面　底部刷毛目調整	胎土茶褐色 フク土I区内 回転実測
45-9	甕	—— —— 14.6		外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位のヘラケズリ 内面　ヘラナデ	胎土茶褐色 外面CO_2付着 カマド、フク土IV区内 完全実測
45-10	台付甕台脚部高 脚部	—— —— 脚部総高 3.4 脚部底部径 9.9		外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 フク土III、 IV区内 回転実測
45-11	坏(須)	(14.0) 4.0 (7.2)	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 外面剥落が著しい カマド、フク土内 回転実測
45-12	坏(須)	〈14.0〉 3.7 (7.5)	底部平底	外面　底部糸切りの後ヘラケズリ体部ロクロヨコナデ 体下部縁部ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド内 回転実測
45-13	坏(須)	13.8 3.8 6.2	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 内、外面火膨 カマド内 完全実測
45-14	坏(須)	(13.9) 3.6 6.9	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面火膨 カマド内フク土 IV区内 回転実測
45-15	坏(須)	(14.7) (4.0) (6.5)	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド、フク土 IV区内 回転実測
45-16	坏(須)	〈14.8〉 3.6 〈7.1〉		外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 カマド内 回転実測
45-17	坏(須)	13.0 3.4 5.7	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面火膨 カマド内 完全実測
45-18	坏(須)	〈14.1〉 3.9 5.7	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド内フク土 IV区内 回転実測
46-19	坏(須)	〈13.7〉 4.8 (5.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマドIV区内 回転実測

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
46-20	坏(須)	14.2 4.0 6.3	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土Ⅰ、Ⅱ区内 完全実測
46-21	坏(須)	〈14.0〉 4.9 6.1	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
46-22	坏(須)	14.4 3.9 6.1	底部平底	外面 底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 粒子粗い 外面火棒 完全実測
46-23	坏(須)	13.4 4.3 5.8	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子粗い カマド内 完全実測
46-24	坏(須)	— — (6.8)	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 粒子粗い フク土Ⅳ区内 回転実測
46-25	坏(須)	— — (6.0)	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い 回転実測
46-26	坏(須)	〈13.4〉 3.55 〈5.4〉	底部平底、器肉厚い	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
46-27	坏(須)	〈14.4〉 4.15 (7.4)	底部平底	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土Ⅲ区内 回転実測
46-28	坏(須)	— — (6.2)	底部平底	外面 底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い 外面火棒 カマド内 回転実測
46-29	坏	— — (6.9)		外面 底部回転ヘラキリ 内面 黒色研磨	胎土黄褐色 完全実測
46-30	坏	(14.7) — —	底部丸味をおびた平底	外面 底部ヘラケズリ、体下部周縁部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面 ミガキ	胎土赤褐色 カマド内 回転実測



第47図　H-12号住居址出土遺物

第19表　H－12号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
47-32	礫石	(11.0)	8.6	5.0	
47-33	鉄製品	(5.2)	0.5	0.5	釘

(13) H－13号住居址

遺構　第48－49図

本住居址は発掘区Ⅰ区の北西端寄りのち・つ－8・9グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層ローム層上において検出された。

平面形態は、南北310cm、東西295cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はN－80－Eを示す。

覆土は3層に分割され、自然堆積の状態を示す。第Ⅰ層は軽石を若干含むパサパサとしている暗褐色土、第Ⅱ層はローム粒子・軽石を含む茶褐色土、第Ⅲ層は第Ⅰ層、第Ⅱ層に比べてやや粘性のある黒褐色土である。

尚、西壁㋒は壁の崩落層と思われる。㋐層、㋑層はカマド構築土の崩落層と思われる。

壁高は確認面から25～30cmを測り、床面からやや緩く傾斜して立ち上がる。壁体は黄褐色ローム層（全体層序第Ⅲ層）と粘性のある土を利用して平滑で堅固に構築される。壁構は東、西壁下、下半分と南壁下全面に検出された。壁溝幅は10cm～15cm、深さ1～2cmを測り、断面はU字状を呈する。

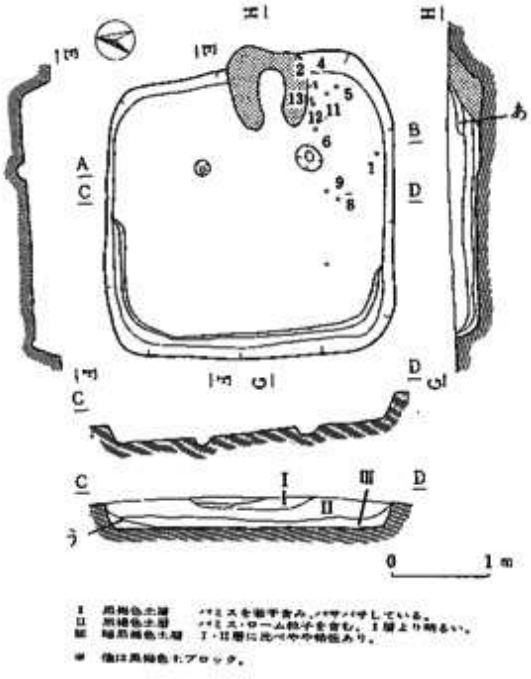
床面は黄褐色ローム層（全体層序第Ⅲ層）上に、ローム粒子を含んだやや粘性のある黒褐色土を平坦に叩きしめて貼床が施される。床面下（掘り方）は南東コーナー部が93×150cmの長方形を呈し、深さ15～20cmの凹を持つが、全体としては床面から15～4cmの深さを持つ平坦面である。る。

ピットは中央北東部から1個、中央北西部から1個の計2個検出された。P_1は25～26cm楕円形を呈し、深さ8cmを有する。P_2は13×14cmの円形を呈し、深さ7cmを有する。P_1、P_2は柱穴かどうか凝問が残る。

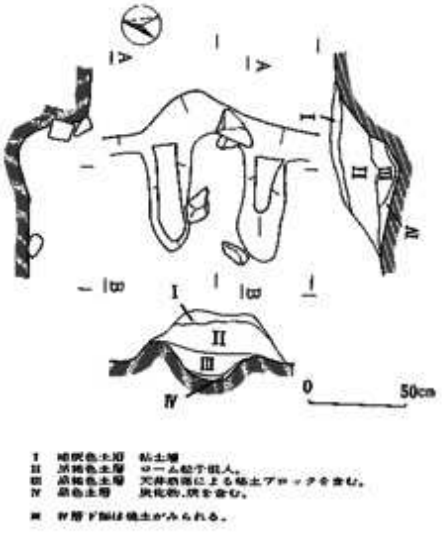
カマドは東壁中央にあり、焚口～煙道部までの長さ156cm、袖部幅140cmを測る。残存状況は良い。

煙道部は東壁体中央を130×52cmの半円状に緩やかな傾斜で掘り込んで構築される。火床部は煙道下の床面を80×115cmの楕円状に掘り込んだものと思われる。天井部は既に崩落し、旧状をとどめないが、カマドの上部土層（第Ⅲ層）粘土ブロックを含む黒褐色土層と集塊岩、軽石が構材となっているものと思われる。袖部は火床部の両側に黄褐色土と粘土を混ぜた土を使用して馬蹄状に構築される。尚、補強材としてカマド内、床中央に散乱している集塊石、軽石を用いたと思われる。支脚石は検出されなかった。

遺物の分布状況は住居址東半分に散在し、特にカマド東側には須恵坏、土師坏、須恵蓋が重ねられ、原位置と考えられる状態で検出された。その出土状態から生活面での機能分割がなされていたように思われる。図示した第51図2・3・4・5・10・11・12・13は完存品として出土して



第48図　H-13号住居址実測図(1：80)



第44図　H-13号住居址カマド実測図(1：40)

いる。又、南壁付近の床面より神功開宝(第50図)が出土している。

遺物　第50・51図

本住居址覆土内からは須恵甕破片、土師甕破片、小形土師甕、須恵坏、土師坏、須恵蓋、神功開宝が検出された。

須恵甕第51図15は胴部破片で叩き目がみられる。

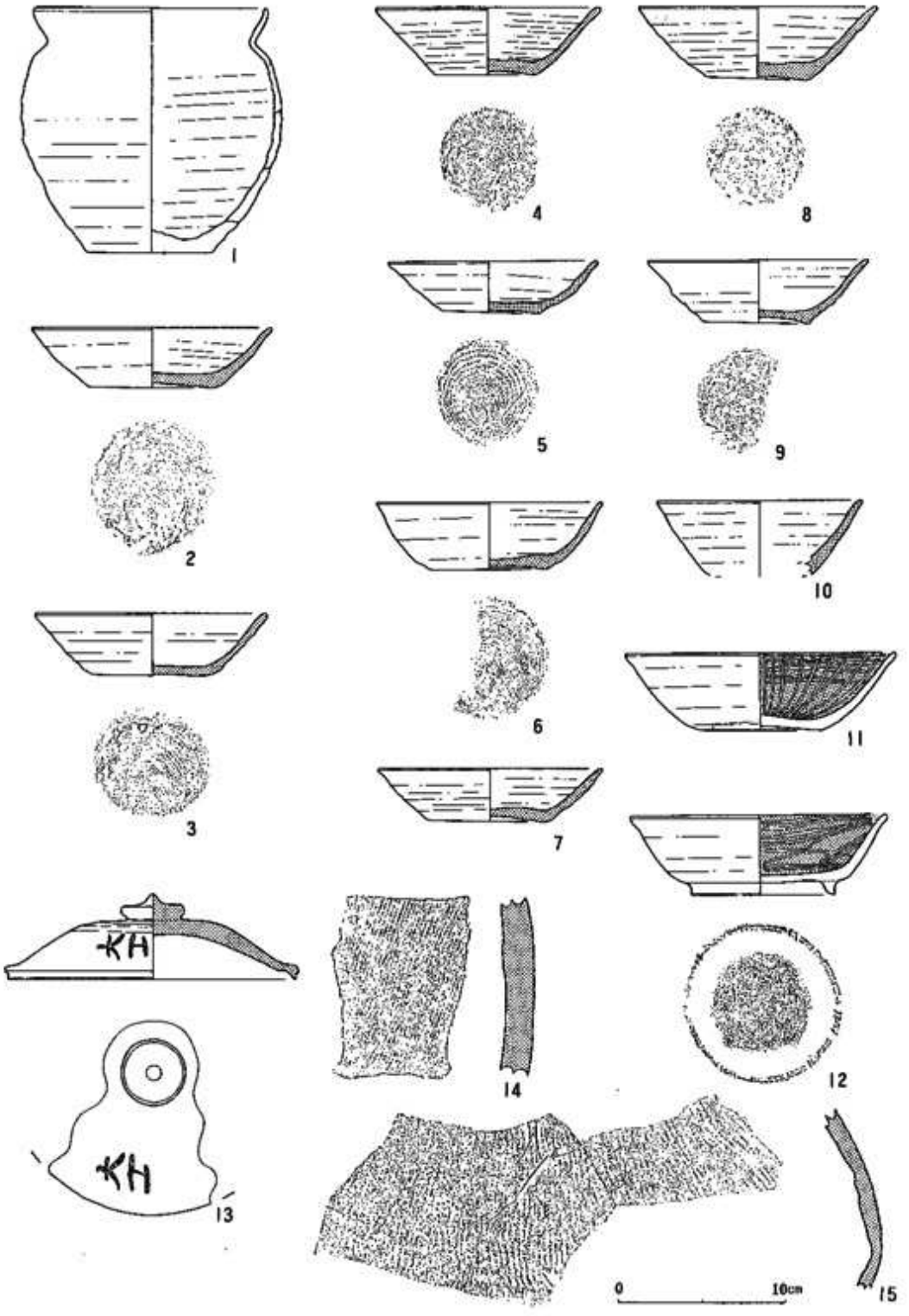
土師甕第51図1は胴部球状を呈し、ロクロ調整で低部平底ヘラ削りである。この土器は表面剝落し著しい火熱をうけたものと思われる。器形から考えて小形甕である。

須恵坏第51図2・3・4・5・6・7・8・9・10は右回転の糸切り底である。第51図2・3・4は火襷がみられる。胎土、器厚、口唇部の違いなどから同一住居址内出土の須恵坏にも生産窯址に違いがあることを暗示している。

土師坏第51図11は内面黒色研磨が施されていて底部回転ヘラ削りである。第　図12は内外面黒色処理が施され、内面には研磨が施されている。底部糸切りの後高台が付されている。

須恵蓋第51図13は墨書土器である。焼成があまく、つまみ部は宝珠形を呈す。文字は「大工」と隷書で書かれている。これは国家令制によると、木工寮または大宰府に属し手工業技能者の上級者をさす言葉

第50図
H-13号住居址出土遺物(1：1)



第51図　H-13号住居址出土遺物(1：4)

第20表　H－13号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
51-1	小形甕	(13.8) 14.5 7.3	胴部球状を呈す、口辺部「く」の字状に立ち上がり外側内湾する。	外面　底部ヘラケズり、胴部ロクロヨコナデ 内面　口辺部丁寧なヨコナデ、胴部ロクロヨコナデ	胎土赤褐色 外面CO₂付着 火熱を受けている。 完全実測
51-2	坏(須)	14.3 3.6 7.2	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 外面火焔 カマド南側 完全実測
51-3	坏(須)	13.9 3.6 6.7	底部丸味をおびた平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子やや粗い 火焔 カマド南側 完全実測
51-4	坏(須)	13.2 4.0 5.8	底部径に対し口縁部径が大きい。 底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 内外面火焔 カマド南側 完全実測
51-5	坏(須)	12.5 3.1 5.8	体部浅い。	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド南側 完全実測
51-6	坏(須)	(13.4) (4.0) (6.9)	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド南側 回転実測
51-7	坏(須)	13.3 3.1 7.1	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 完全実測
51-8	坏(須)	14.1 4.3 6.2	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 内外面自然釉付着 完全実測
51-9	坏(須)	13.0 3.7 6.1	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子やや粗い 完全実測
51-10	坏(須)	〈12.2〉		外面　体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 床下より 回転実測
51-11	坏	(16.0) (4.6) 7.3	底部平底	外面　底部回転ヘラキリ、体下部周縁ヘラケズり後ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土黄褐色 カマド南側 回転実測
51-12	坏	15.3 4.7 8.5	高台付	外面　底部ヘラケズりの後付け高台、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土暗茶褐色 内外面黒色処理 カマド南側 完全実測
51-13	蓋(須)	—— 5.0 17.5	つまみ部宝珠形を呈す。	外面　体部ロクロヨコナデ、天井部ヘラケズりの後つまみ部貼り付ける。 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 墨書土器「大工」 カマド南側 完全実測

であるが、ここではすぐにそれと結びつけることはできない。しかし、一地方の技術者の長を意味するような墨書ではあるまいか、佐久地方では、職業等に関係のある墨書が出土したは、この遺跡が初めてである。

他に皇朝十二銭の一つ神功開宝（第50図）がカマド南側床面より出土。神功開宝の鋳造年代は西暦765年～796年である。

以上、本住居址からは多量の遺物が検出された。遺物の個々について検討してみると、第51図13の須恵蓋の口唇部には奈良時代の様相が見出される。第51図１の土師小形甕ロクロ使用、第51図２～10の須恵坏底部糸切り底、須恵蓋第51図13が墨書土器であること、又、神功開宝（第50図）などから平安時代の所産と考えられる。　（羽毛田伸博）

(14) H－14号住居址

遺構　第52・53図

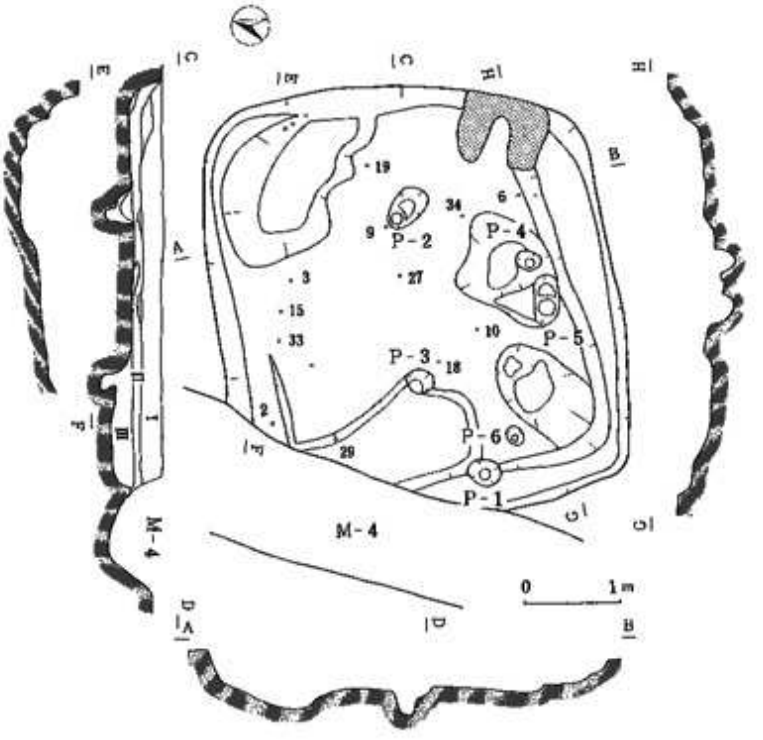
本住居址は発掘区Ⅰ区北端やや内側の、て－8・9と－7・8・9グリッド内に位置し、全体層序Ⅲ層黄褐色ローム層上において、M－4に北西コーナー部が破壊されて検出された。

平面形態は南北420cm東西420cmの隅丸方形を呈し、主軸方向はN－73°－Wを示す。

覆土は2層に分割され、Ⅰ層は若干ローム粒子、軽石を含み、比較的パサパサとした黒褐土層で自然堆積である。Ⅰ層とⅡ層との間に所々灰粘土ブロックが散在しており、しまっている暗黒褐色土層が1～2cm位の厚さで存在する。Ⅱ層は黒色土ブロックを含みⅠ層よりローム層粒子、軽石を多く含む黒褐色土である。

壁高は確認面から27～30cmを測り、床面から緩やかな傾斜で立ち上がる。壁体はやや軟弱である。

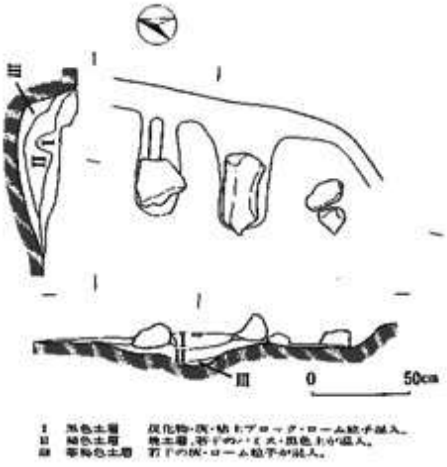
床面は2枚検出され、住居拡張によるものと考えられる。上位の床面は灰粘土を用いて黒褐色



Ⅰ　黒褐色土層　粒子細かくパサパサしている。パミス混入。
Ⅱ　暗黒褐色土層　Ⅰ層に比べてやや粘性を有し、パミスを多く含む。
Ⅲ　黒色土層　パミス粒子混入。

第52図　H-14号住居址掘り方実測図（1：80）

土を平坦に叩きしめたものであり、下位床面上の西壁南壁を拡張したものと思われる。下位の床面は黄褐色ローム層（全体層序第Ⅲ層）上にローム粒子を含んだやや粘性のある黒褐色土を平坦に叩きしめしたものと思われる。



第53図　H－14号住居址カマド実測図

ピットは、上位床面上から柱穴 P_1 1個が検出された。P_1は37×45cmの楕円形を呈し、深さ18.5cmを有する。断面形はU字状を呈す。下位床面上から柱穴が2個P_2・P_3 その他南壁下中央部に2個P_4・P_5の計4個が検出された。P_2は30×47cmの楕円形を呈し、深さ30cmを有する。断面形はテラスを有し、U字状を呈す。P_3は28×30cmの円形を呈し、深さ26.5cmを有する。断面形はU字状を呈す。P_4は20cm×30cmの楕円形を呈し、深さ17cmを有する。P_5は25×52cmの楕円形を呈し、深さ20.5cmを有する。P_4とP_5は下位床面上において入口施設に伴う柱穴と思われる。尚、P_6は18×20cmの円形を呈し、深さ9cmを有する。P_6は新旧どちらに伴うものかは、判明できなかった。

カマドは上位床面に伴うものとしては東壁やや南寄りにあり、長さ75cm、幅70cmの規模を有する。残存状況は悪い。煙道部は残存状態が悪く形態・範囲がつかめなかった。火床部は煙道下の床面を23×55cmの楕円状に掘り込んだものと思われる。天井部は既に崩落し旧状を届めないが、粘土ブロックを含む黒色土層が構材となっているものと思われる。袖部は火床部の両側に粘土と集塊岩及び安山岩軽石を、使用して馬蹄状に構築されたものと思われる。尚、火床中央部より安山岩の角材で支脚石と思われるものが出土した。

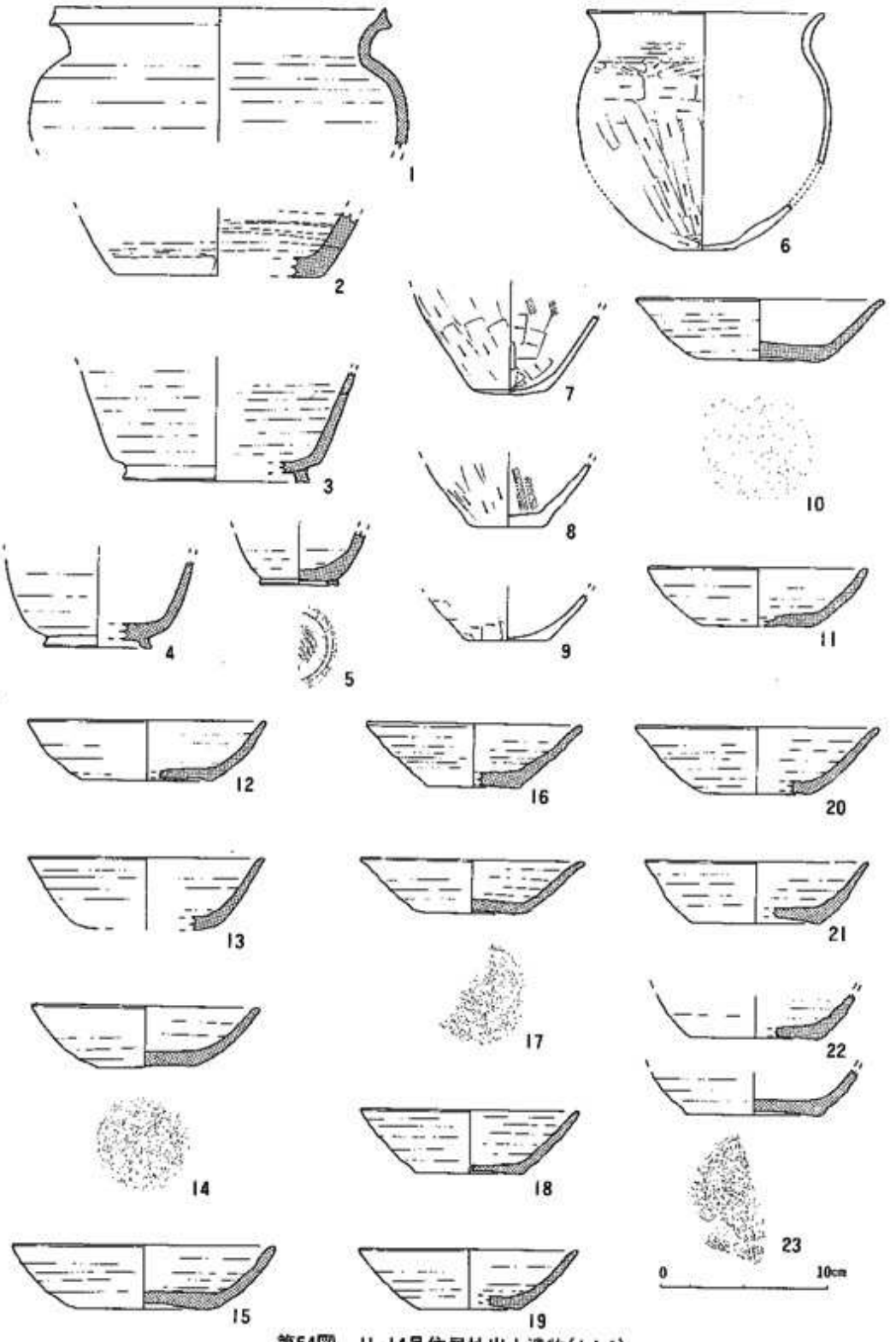
下位床面に伴うカマドは検出されなかったが、上位床面に伴うカマド構築面の下層より焼土灰が、多量に出ていることから、ほぼ同じ場所に構築されていたと思われる。

遺物の出土量は極めて多い、分布状況はカマド内に集中がみられるが、他は遺構全体に散在していて集中する箇所は見られない。図示した第54図6・7・8・10・11・12・13・14がカマド内及びその周辺部より出土した。

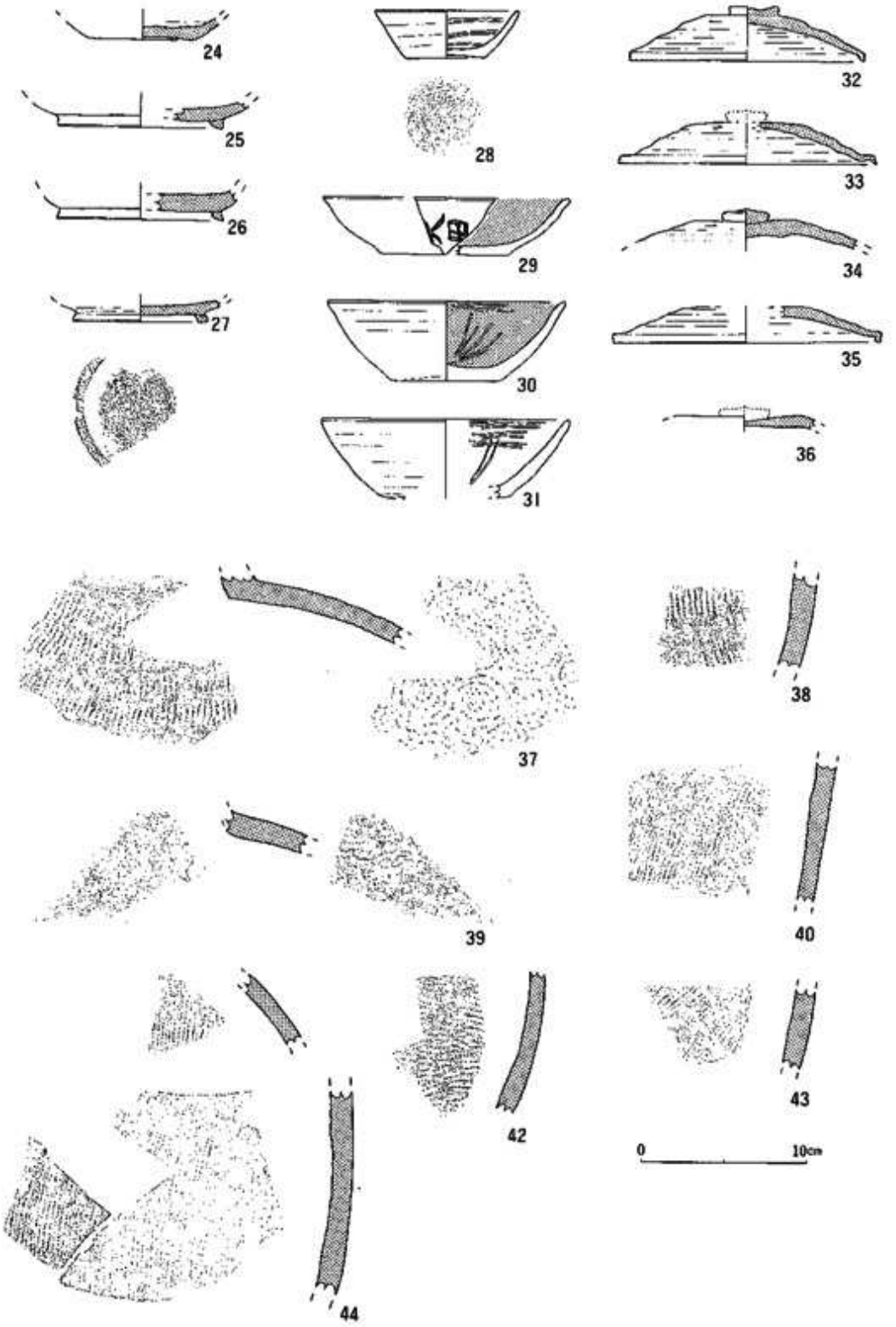
遺物　第54・55・56図

本住居址からは、須恵甕、壺、土師甕、須恵坏、土師坏、須恵蓋が検出された。尚、須恵坏の量が非常に多い。

須恵甕第54図1は、口辺部が大きく外反し端部に逆三角形の突帯を有する。第54図3・4・5は底部のみ残存していて器種がはっきりしないがいずれも高台付である。第54図5は胎土が灰白



第54図　H-14号住居址出土遺物(1：4)



第55図　H-14号住居址出土遺物(1：4)

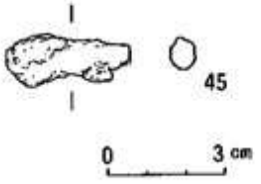
第21表　14－3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
54-1	甕(須)	(19.7) —— ——	口辺部は外反し、端部に断面三角形の突帯を有す。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土茶褐色 フク土Ⅰ区内 回転実測
54-2	甕(須)	—— —— (12.3)	底部平底	外面　底部ヘラケズリ、胴下部周縁ヘラケズリの後ヨコナデ 内面　ヘラナデ	胎土灰褐色 内面自然釉付着 回転実測
54-3	甕(壺)(須)	—— —— (11.1)	高台付	外面　底部糸切りの後付け高台、胴下部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
54-4	壺(甕)(須)	—— —— 〈5.4〉	高台付	外面　底部糸切りの後付け高台、胴下部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土暗灰褐色 自然釉付着 床下より 回転実測
54-5	扁平底瓶(原始)(灰釉)	—— —— (4.6)	高台付	外面　底部糸切りの後付け高台、胴下部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰白色 粒子粗雑されている。 フク土 回転実測
54-6	小形甕	(14.2) (14.15) (3.8)	胴部球状を呈す。口辺部「コ」の字状ぎみに立ち上がる。 器厚薄い。	外面　底部ヘラケズリ、胴部縦位のヘラケズリ胴上部横位のヘラケズリ、口辺部ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土黒褐色 カマド 回転実測
54-7	甕	—— —— 4.6		外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位のヘラケズリ 内面　胴下部～底部ヘラナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 フク土内 完全実測
54-8	甕	—— —— (4.3)		外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位のヘラケズリ 内面　底部刷毛目調整	胎土茶褐色 カマド内 回転実測
54-9	甕	—— —— (4.5)	底部内側すり鉢状になっていて、器厚薄い。	外面　底部ヘラケズリ、胴下部横位のヘラケズリ	胎土茶褐色 回転実測
54-10	坏(須)	14.7 3.7 7.3		外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面火焔 CO_2付着 カマド内 完全実測
54-11	坏(須)	〈13.0〉 3.5 〈6.7〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面火粉 カマド内 回転実測
54-12	坏(須)	〈14.2〉 3.55 〈7.9〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド内 回転実測
54-13	坏(須)	〈14.1〉		外面　体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 カマド、フク土 Ⅳ区内 回転実測
54-14	坏(須)	〈13.6〉 3.8 6.1	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 カマド内 完全実測
54-15	坏(須)	〈15.7〉 3.8 〈8.0〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
54-16	坏(須)	〈12.9〉 3.8 〈5.75〉	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰黄褐色 フク土Ⅰ区、床直 回転実測
54-17	坏(須)	(13.4) 3.2 (6.9)	底部平底	外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土内 回転実測
54-18	坏(須)	(13.0) 3.8 (6.5)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
54-19	坏(須)	〈13.1〉 3.6 〈6.0〉		外面　底部糸切り体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土Ⅳ区内 回転実測

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
54-20	坏(須)	〈14.5〉 4.0 〈6.3〉		外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 フク土Ⅲ区内床直上 回転実測
54-21	坏(須)	〈13.3〉 3.65 (7.7)		外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面火膨 粒子粗い フク土内 回転実測
54-22	坏(須)	—— —— (7.7)		外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 フク土内 回転実測
54-23	坏(須)	—— —— (8.0)		外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 ヘラ記号(1) フク土Ⅳ区内 回転実測
55-24	坏(須)	—— —— (6.5)		外面 底部糸切り 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 火膨 フク土ⅡⅢ区内 回転実測
55-25	坏(須)	—— —— 〈10.0〉	高台付	外面 底部糸切り後付け高台 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土Ⅲ区内 回転実測
55-26	坏(雙)(須)	—— —— 〈10.0〉	高台付	外面 底部糸切り後付け高台 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰茶褐色 フク土Ⅰ区内 回転実測
55-27	坏(須)	—— —— 〈8.15〉	高台付	外面 底部回転ヘラ切りの後付け高台、体下部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子密である。 回転実測
55-28	坏	8.6 2.9 4.8	小形である。	外面 底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデの後ミガキ	胎土茶褐色 内面CO_2付着 フク土内 完全実測
55-29	坏			外面 体部ロクロヨコナデ 内面 黒色研磨	墨書土器「大田」と書かれている。 フク土Ⅰ区内 破片実測
55-30	坏	(14.3) (4.8) (6.5)		外面 底部ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ黒色処理を施す。 内面 黒色研磨	胎土茶褐色 回転実測
55-31	坏	〈12.6〉 (4.7)		外面 底部ヘラキリ、体下部周縁ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面 ミガキ	胎土赤褐色 粒子密 回転実測
55-32	蓋(須)	—— 3.2 14.0	つまみ部宝珠形を呈す。	外面 天井部ヘラケズリの後つまみ部付ける。体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 カマド内及び周辺 完全実測
55-33	蓋(須)	—— —— (15.4)		外面 天井部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
55-34	蓋(須)	—— —— ——	つまみ部宝珠形を呈す。	外面 天井部ヘラケズリの後つまみ部付ける。体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土青灰色 フク土Ⅲ区内 回転実測
55-35	蓋(須)	—— —— (16.0)		外面 天井部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰茶褐色 フク土内 回転実測
55-36	蓋(須)	—— —— ——		外面 天井部ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 粒子粗い 外面火膨 破片実測

色で粒子が細かく、後述するように猿投系の小形長頸瓶と考えられる。

小形土師瓶第54図6は、底部径が小さい平底で、器厚が薄く胴部球状を呈し口辺部やや直立ぎ



第56図　H-14号住居址出土遺物（1：2）

第22表　H－14号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
56-45	鉄製品	3.2	0.8	0.65	

みに外反する。

土師甕第54図7・8・9はいずれも底部のみである。調整は従来のものと同じであるが、第54図9の胴下部周縁部は横位のヘラ削りが施されている。

須恵壙は体部が内湾ぎみと、直線ぎみに立ち上がる二通りに分けられる。尚、いずれも底部が糸切り底である。体部内湾ぎみに立ち上がるものは、第54図11・12・13・14・15・20で体下部周縁は丸味をおび底部より立ち上がる。体部直線ぎみに立ち上がるものは第54図10・16・17・18・19・21で体下部周縁は角ばって底部より立ち上がり又底部径より口縁部径が大きい傾向がみられる。

第54図23の須恵器坏には、底部「｜」のヘラ記号が施されている。

第55図25・26・27は須恵器の高台付坏である。第55図26は厚肉が厚く他器種とも思われる。第55図27は底部回転ヘラ切りの後、高台を付したものと思われる。

土師坏第55図28は小形で底部は糸切りである。口縁部内面四方に炭化物付着がみられ、他の坏と用途が違うと思われる。尚、第55図29の坏は墨書土器で「大田」の2文字が体部に施されている。第55図29・30の坏は底部ヘラ削りで内面黒色研磨が施されている。第55図30の坏は外面にも黒色研磨が施されている。第55図30の坏は外面にも黒色処理されている。第55図31の坏は焼成が赤褐色で内面ミガキが施されている。

須恵蓋において残存しているつまみ部第55図32・34は宝珠形を呈している。尚、拓影図においては、第55図37須恵瓶破片は胴上部と思われ、内面に叩き当て具を用い同心円状の文様が施されている。第55図39須恵甕破片は胴上部と思われ、内面に叩き当て具を用いた形跡が窺われ、外面ロクロヨコナデが施される。第55図38・40・41・42・43は須恵甕破片と思われ、外面平行文様の叩き目調整が施されている。

以上・本住居跡内からは多量の完存品に近い遺物が検出された。遺物の個々を検討すると、須恵坏底部は全部糸切りであること、「原始灰釉」ともいえる小形長頸瓶が、後述する鑑定結果より19世紀前半の所産であることより、本住居跡は平安時代のわけても前半に位置付けられる。

（羽毛田伸博）

(15) H－15号住居址

遺構　第57・58図

本住居址は、第Ⅰ区西方８－７グリッドにかけて検出された。

平面プランは、東西2.6m、南北2.55mを測る隅丸方形を呈するが、その中央はM－４によって破壊されている。住居址の主軸方向はN－88°－Eをさし、壁高は10cm前後を測る。床面はフラットな叩き床である。本住居址に付随すると考えられるピットはその内外において認められなかった。

カマドは東壁の南コーナー寄りに検出された。その袖は黒褐色土を用いて構築され左右に扁平な安山岩が１個ずつ配されている。煙道部は壁を半楕円状に掘り込んだもので焚口から煙道部までの長さ1.7m、袖部幅1.5mを測る。

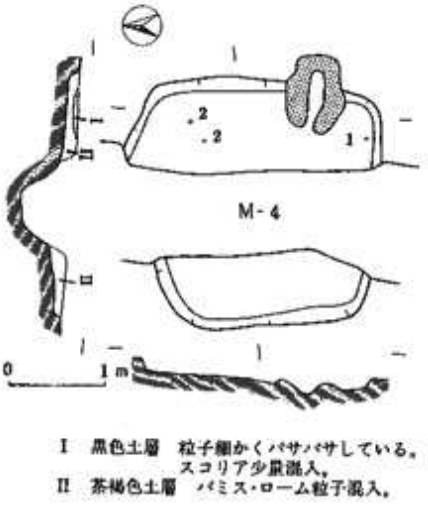
遺物はカマド付近から検出された。

遺物　第59図

遺物は、土師器甕１個体分の破片（第59図１）土師器坏（内面黒色）１個体、須恵器坏７個体分の破片各１点、須恵器蓋１点、須恵器甕１個体分の破片２点が検出された。

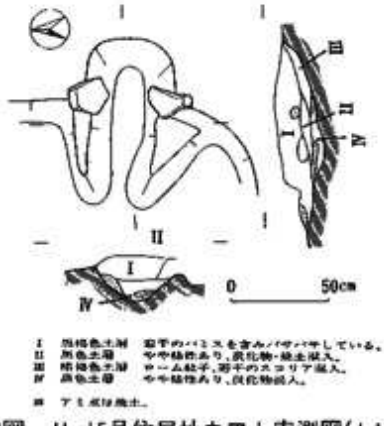
本住居址は、伴出遺物の特徴により平安時代のものと考えられる。

（堤　　隆）

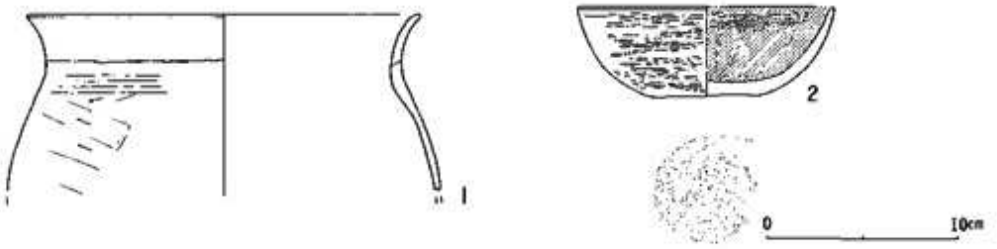


Ⅰ　黒色土層　粒子細かくパサパサしている。スコリア少量混入。
Ⅱ　茶褐色土層　パミス・ローム粒子混入。

第57図　H－15号住居址実測図（1：80）



第58図　H－15号住居址カマド実測図（1：40）



第59図　H-15号住居址出土遺物（1：4）

第23表　H－15号住居址出土遺物一覧表

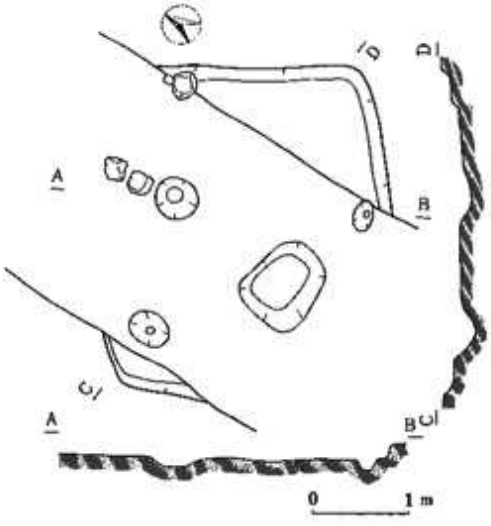
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
59-1	甕	(20.2) ― ―	口辺部やや直立ぎみに外反する。	外面　胴上部斜め方向のヘラケズリ口辺部ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 フク土Ⅲ・Ⅳ区内 回転実測
59-2	坏	(3.1) 4.6 5.5	体部外側内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部回転ヘラキリ、体下部周縁ヘラケズリ、体部ミガキ、黒色処理を施こす。 内面　黒色研磨	胎児暗茶褐色 回転実測

(16)　H－16号住居址

遺構　第60図

本住居址は第Ⅰ区の－9グリッドにかけて検出された。その上部は、水田整備のために削平されており、また、大半はM－21により破壊されている。その平面形は隅丸方形を呈するものと考えられ、現状で東西3.4m、南北3m前後を測り、主軸方向はN－55°－Eとなっている。ピットは4個検出されているが、本住居址に付随するものかどうか不明である。

本住居址北東コーナーからは、石材が3点ほど検出されておりカマドはこの位置に存在したものと推察される。

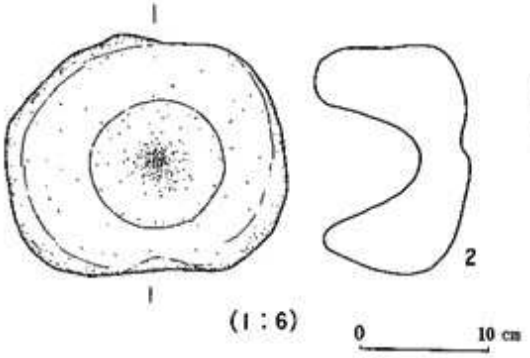


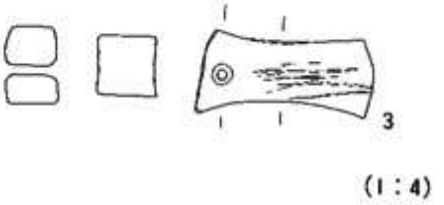
第60図　H-16号住居実測図(1：80)

遺物　第61・62図

遺物は僅かに検出されたにすぎない。土師器甕破片、1個体分、須恵器甕破片2点、須恵器

第61図　H-16号住居址出土遺物（1：4）





第62図　H-16号　住居址出土遺物

第24表　H-16〈石器〉　第24表

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
62-2	石鉢	21.5	18.7	12.1	
62-3	砥石	9.1	4.3	3.0	

長頸壺破片１点、須恵器坏破片１点が検出された。また、住居址西南コーナー側より石鉢が据置かれた状態で出土した。

（堤　　隆）

(17)　H－17・18号住居址

遺構　　第63図・第25表

H－17・18号住居址は、の－35・36グリッドにかけて検出された。その切り合い関係は微妙なところであるが、一応H－18がH－17に後行するものとしてとらえた。

両者が非常に薄いのは、その構築面と確認面との開きが大きかった為とも考えられるが、いずれにしても浅い掘り込みの構造物であったといえる。

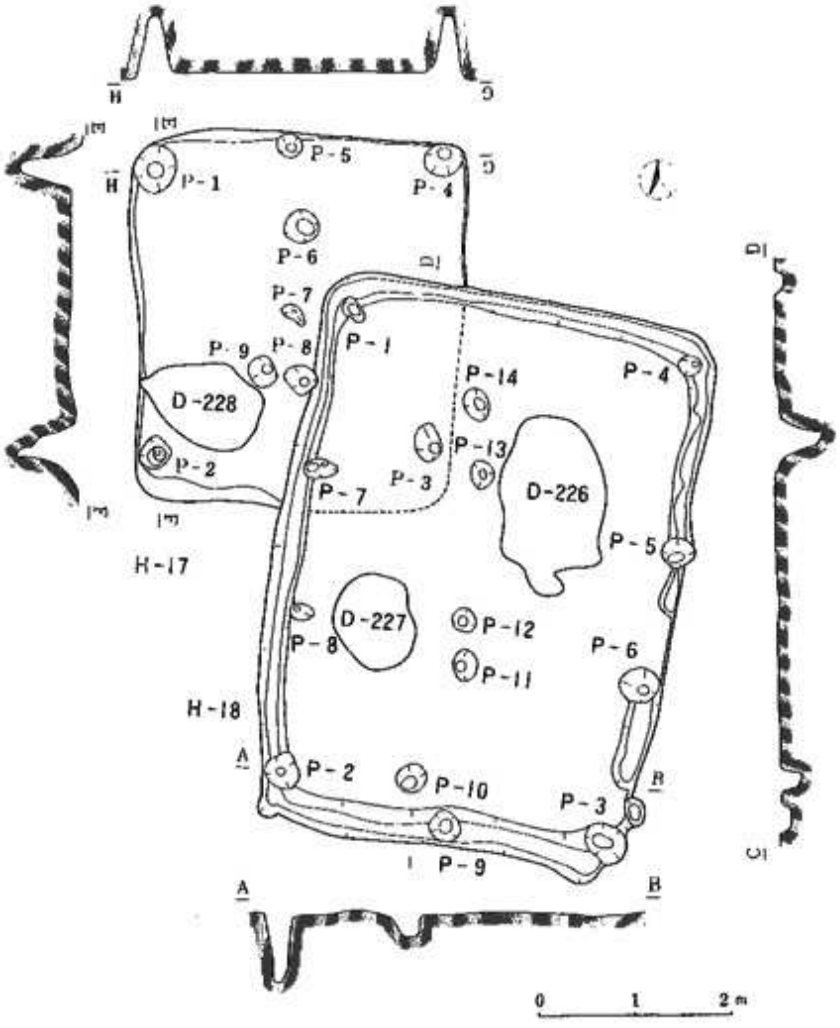
H－17号住居址は、平面プランが隅丸方形を呈するもので、東西3.5m、南北3.8mを測り、主軸方向はN－3°－Eとなっている。本住居址に伴うピットは、４ケ所のコーナーに50～60cmの深さを測るものが各１個づつ（Ｐ１～Ｐ４）北壁の中央部に各１個（Ｐ５）中心軸上に４個（Ｐ６～Ｐ９）存在する。尚本住居址においてのカマドは確認されなかった。

H－18号住居址は、隅丸長方形の平面プランを呈するもので、東西5.7m、南北4.2mを測り主軸方向N－11°－Eとなっている。

本住居址には、４ケ所のコーナーに各１個（P_1～P_4）、東壁、西壁に各２個（P_5・P_6・P_7・P_8）、南壁に１個（P_9）、中心軸上に６個（P_{10}～P_{14}）のピットが認められる。なお、本住居址においてもカマドを確認することはできなかった。

H－17、H－18号住居址はその構築において時間的前後関係こそあれ、構造上は非常に類似したものと言えよう。

遺物



第63図　H-18号・17号住居址実測図(1：80)

第25表　H－17－18号住居址一覧表

遺構	平面プラン				主軸方向	カマド	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	深					
H－17	隅丸方形	3.50	3.80	－	N-9°-E	なし	壁中　6個	不明	
H－18	隅丸方形	4.20	5.70	－	N-3°-E	なし	壁中　9個	〃	

H－17、H－18両住居址では遺物がまったく認められなかった為、所属期は判断し難い。

（堤　隆）

2　T－1号特殊竪穴状遺構及び埋葬馬土壙墓群

T－1号特殊竪穴状遺構と埋葬馬土壙墓群は、ほぼその軌を一にして検出された。両者は時間的な連続性をもつとともに、その関連性も深いと考えられたため、ここでは一緒にふれることとした。

(1)　T－1号特殊竪穴状遺構

遺構　(第64図)

T－1号特殊竪穴状遺構は第Ⅰ区は・ひ・ふ・へ・ほ－9・10・11・12・13・にかけて検出された。T－1はその一部をM－1・M－2号溝状遺構、D－16～D－20号土壙墓に切られている。

T－1はそのプランもあまり整わず、南北14m、東西15mを測る。断面形は中央部のやや高い皿状を呈している。なお、今回図示でき得なかったが、T－1に伴う土壙と考えられるものが、D－20の下位より検出された。これは井戸址とも考えられるもので、全体層序ではⅦ層の地下水が浸透してくる層まで掘り込まれ、中には粘板岩の大石が放り込まれていた。

T－1のセクションを観察すると、黒色土である第5層と第3層の間に全体層序では第Ⅲ層にあたるローム層である黄色土層が介在する（第4層）(図版二十五－2)。こうした土層堆積のあり方は自然堆積ではありえず、本址が一度掘り込まれた後、埋め戻されたことが理解できるのである。T－1においては、埋葬馬の土壙墓の掘り込み面でもある3層までが人為的な埋土で、1層・2層が自然堆積土と考えられる。このようなセクションの状況から察して、T－1の掘り込みとD－16～D－20における馬の埋葬との時間的間隙はほとんどないものと思われる。

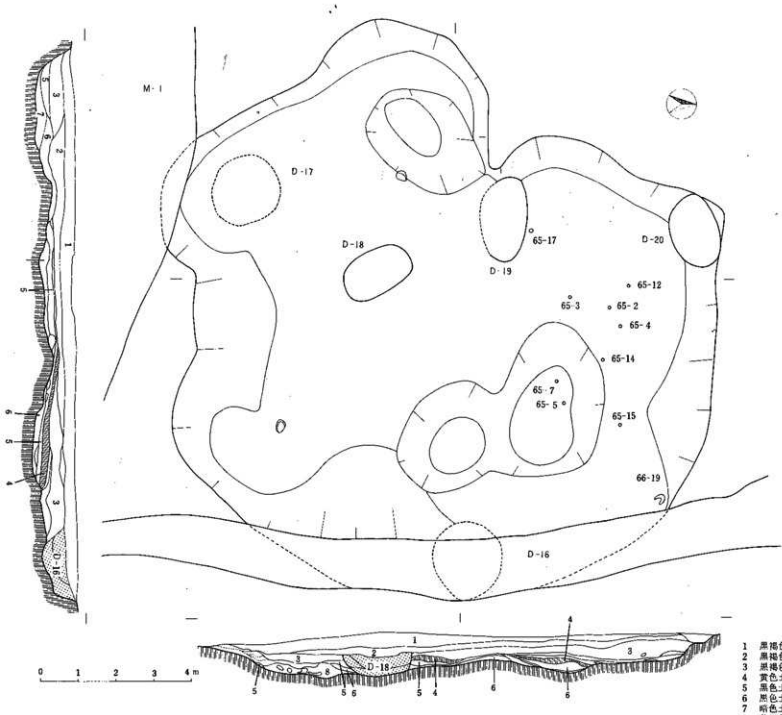
また、埋葬馬の土壙墓D－16～D－20の分布のエリアは、T－1のプランの範囲内に納まるものであり、両者がきわめて密接な関係にあることを示している。

いずれにせよT－1は、きわめて大規模な掘り込みであり、その掘り込みや埋立てに際しては多大な時間を要したことであろう。そうした構築にかかわる作業量の面からしても、本址設定の目的が大きな意味をもつのであったことが想定できる。

さて、T－1において検出された遺物であるが、北側の第3層上面からは平安時代の坏17点が検出された。これは馬の埋葬に伴って供献されたと考えられるもので、本遺構と埋葬馬土壙墓の時期を決定する重要な資料である。なお、その3層上面は、あたかも住居址における床面のように堅く締まった状態であった。また、T－1北東区コーナーの掘り方面からは酸化した鉄製の鋤が検出された。これは本址を掘り込んだ際に残置されたものと考えられる。

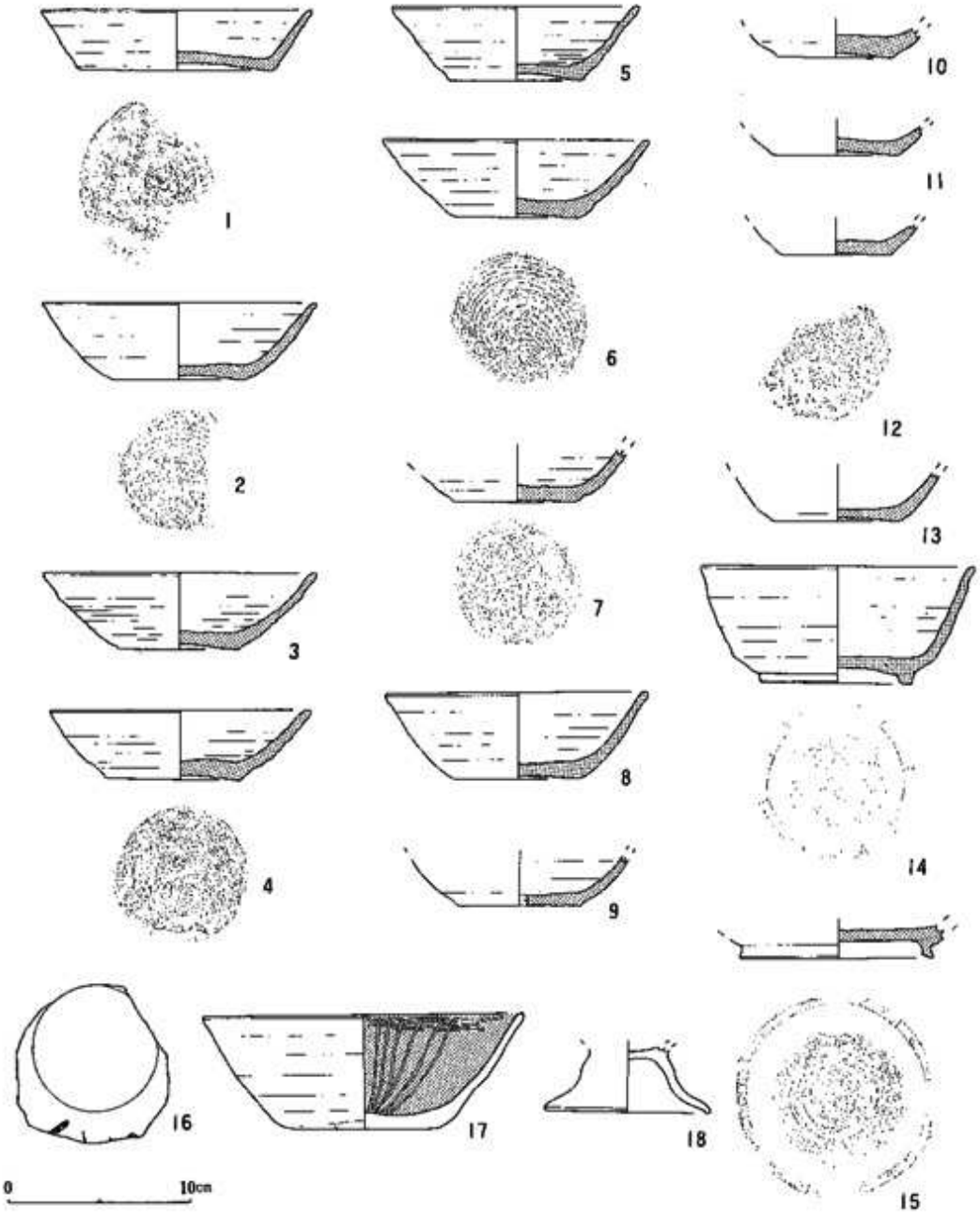
遺物　第65・66図

T－1より検出された遺物は土師器甕・台付甕脚部（高坏脚部？）・坏、須恵器甕・長頸壺・坏である。いずれも覆土・1層・2層中の出土で、埋土である3層以下の出土遺物は、T－1の底



1　黒褐色土層　若干のパミスを含みパサパサする。
2　黒褐色土層　若干のパミスを含みパサパサする。
3　黒褐色土層　粒子細かく粘性あり。
4　黄色土層　ローム層
5　黒色土層　ローム粒子・パミス混入。
6　黒色土層　粒子細かく粘性あり。
7　暗色土層　粒子細かく粘性あり。
8　黄褐色土層　多量のローム粒子・若干の黒色土粒子を含む。

第64図　T－1号特殊竪穴状遺構実測図(1：100)



第65図　T-1号特殊竪穴状遺構出土遺物（1：4）

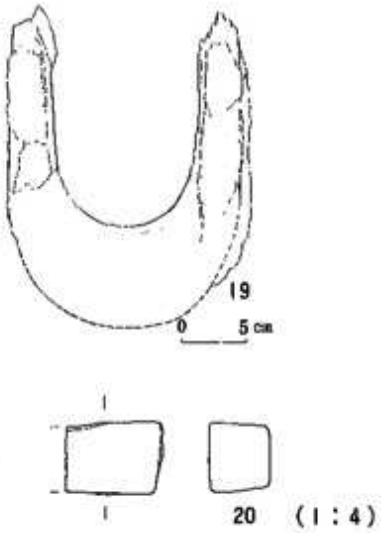
面より検出された鋤のみである。この出土遺物の中でも坏が多量なことは特に注意されよう。その器形の完存品の個体は十数個体である。また、破片も含めてその個体数を推察すると、20個体以上に存在が想定される。その中でも、須恵器坏の点類が多いようである。それらは、ロクロ整形がなされ、底部はいずれも回転糸切りによる一般的な坏である。高台付坏も3点ほどみられる。

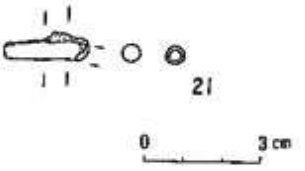
第26表　T－1号特殊竪穴状遺構出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
65-1	坏(須)	〈14.8〉 3.3 (10.4)	底部平底、体部浅く直線的に外傾する。	外面　底部回転ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子密 外面青磁釉付着 東北区内 回転実測
65-2	坏(須)	〈15.0〉 4.2 (7.3)	底部平底、体部外傾内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 内外面火襷 東北区内 回転実測
65-3	坏(須)	〈14.9〉 4.2 6.6	底部平底、体部外傾内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 内外面火襷 回転実測
65-4	坏(須)	(14.2) 3.8 7.3	底部平底、体部外傾直線ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 内外面火襷 完全実測
65-5	坏(須)	〈13.5〉 4.1 7.3	底部平底、体部外傾直線ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
65-6	坏(須)	(14.5) 4.2 (6.9)	底部平底、体部外傾内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土暗青灰色 内面火襷 西北区内 回転実測
65-7	坏(須)	—— —— (6.8)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 完全実測
65-8	坏(須)	〈14.4〉 4.7 6.9	底部平底、体部外傾内湾ぎみに立ち上がる。	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 東北区内 回転実測
65-9	坏(須)	—— —— (6.7)	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 粒子密 西北区 回転実測
65-10	坏(須)	—— —— (6.4)	底部平底	外面　底部糸切り 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
65-11	坏(須)	—— —— (0.7)	底部平底	外面　底部糸切り 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰色 回転実測
65-12	坏(須)	—— —— (6.9)	底部平底	外面　底部糸切り 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰茶褐色 粒子粗 回転実測
65-13	坏(須)	—— —— 6.0	底部平底	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 回転実測
65-14	坏(須)	〈15.0〉 6.4 8.3	高台付、体下部に稜有り。	外面　底部糸切りの後付け高台 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 完全実測
65-15	坏(須)	—— —— 10.5	高台付	外面　底部回転ヘラキリの後付け高台	胎土青灰色 完全実測
65-16	坏	—— —— 6.9	底部平底	外面　底部糸切り 内面　ミガキ	胎土茶褐色 墨書土器字判明せず 南西区内 完全実測
65-17	坏	17.6 6.2 8.3		外面　底部糸切り脚下部周縁部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土黄褐色 外面CO_2付着 完全実測
65-18	台付甕(須)	台脚部 —— —— (9.0)		外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色褐色 北西区内 回転実測

坏の形態は後述する一般的なものがほとんどあるが、底部から体部への立ち上がりの急なものも1点みられる(台付甕65図1)。また第65図17はやや大形な器形といえる。なお、土師器には内面黒色のものとそうでないものがあり、判読できないが墨書土器の底部もある(第65図16)。

T－1遺構実測図中にドットで示したのが原位置を遊離していないと考えられる坏類で、そのレベルもⅢ層上面に安定して配されたままの状態であると考えられる。これらはD－19とD－20の間の東方に分布する。





第27表　T－1号特殊竪穴状遺構出土物

挿図番号	器　種	長　さ	幅	厚　さ	備　考
66-19	鋤	(23.7)	17	—	
66-20	砥　石	(5.0)	3.7	3.2	
66-21	鉄製品	(2.1)	0.5	0.4	

第66図　T-1号特殊竪穴状遺構出土遺物

第65図18は土師器の台付甕あるいは高坏の脚部と考えられる。

遺物はこの他、須恵器甕、長頸壺、土師器甕が出土しているが、いずれも復元不可能な断片であり、覆土内への混入品と考えられる。

第66図19は鉄製の鋤（鍬？）と考えられる。現在長は先端部までで23.7cm、最大幅17.0cmを測る。酸化が進んでいるため断面図は作成し得なかった。

T－1及び埋葬馬の土壙墓はその伴出遺物である坏より平安時代前期に属し、本址北方に存在する平安の住居址群と時間的にはほぼ同程度のものとみてよいであろう。

(2)　埋葬馬を伴う土壙墓群

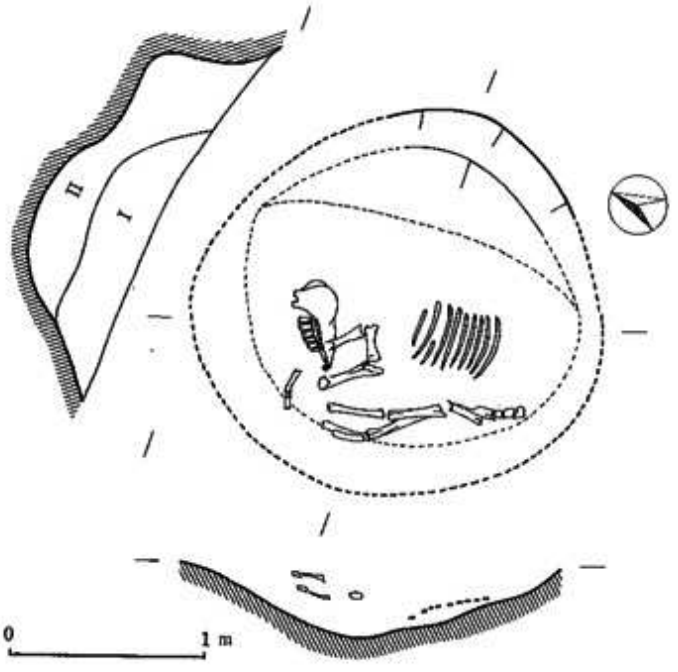
埋葬馬を伴う土壙墓は、T－1のエリア内において5基発見された。D－16・D－17・D－18・D－19・D－20の各土壙がそれである。これらは、前述したようにT－1の埋土の最上面でありIII層上面より掘り込まれたものである。これらの土壙墓が構築される時点でT－1の上場プランは当然残っていたと考えられる。なお、これらの土壙は伴出した坏より平安前期の所産と考えられる。

D－16号土壙墓（4号馬）　第67図

D－16はT－1の東端に位置し、その上部をM－2によって破壊されている。その平面プランはほぼ円形を呈するものと考えられるが、旧状は判然としない。

馬骨は、下顎骨、助骨、左橈骨、左中手骨、右上腕骨、右橈骨、左大腿骨、左脛骨、左中足骨、右大腿骨、右脛骨、右中足骨、下顎・上顎の臼歯・門歯が検出された。下顎骨を除いた各骨は腐蝕が烈しく良好な状態での取り上げは不可能であった。

4号馬は死後前足が折り曲げられ、後足は前方にまっすぐに伸ばした状態で土壙内に埋葬されたものと考えられる。頭部はほぼ北方を、背は東方を向いていた。4号馬に伴う副葬品等は認められなかった。



I　黒褐色土層　パミス・ローム粒子を多く含む。
II　褐色土層　パミス・ローム粒子を多く含む、粘性あり。

第67図　D-16号土壙墓(4号馬)実測図(1：40)

D－17号土壙墓（5点馬）

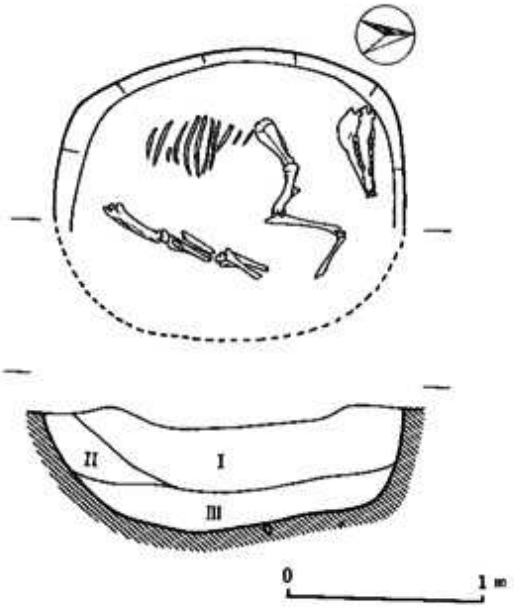
D－17号土壙墓はT－1の西南コーナーに位置するがそのプランは明確にとらえられず、馬骨も僅かに臼歯4点が検出されたのみであった。

D－18号土壙墓(3号馬)　第68図

D－18はT－1ではほぼ中央部、D－17とD19との間に位置する。長軸1.8m前後を測る隅丸方形のプランを呈する土壙に、馬が埋葬されたものである。

馬骨は、下顎骨、右肩甲骨、右上腕骨、右橈骨、右中手骨、助骨、右大腿骨、右脛骨、右中足骨、左脛骨、左中足骨及び上・下顎の門歯・臼歯が検出された。なお、頭蓋はすでに存在し得なかった。

3号馬は、背を西に頭を北に向けて埋葬され、後足は前方へまっすぐに延ばしたままの状態、前足は軽く折りまげた状態で、4号馬(D－16)とほぼ同様な埋葬形態をとっている。本埋葬馬に伴う副葬品等は認められなかった。

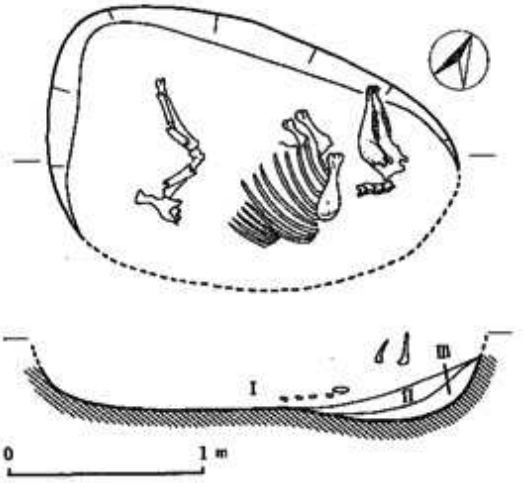


I　黒褐色土層　ローム粒子・パミスを含む。
II　暗褐色土層　多量のローム粒子・パミスを含む。
III　暗褐色土層　ローム粒子・パミスを若干含む。

第68図　D-18号土壙墓(3号馬)実測図(1：40)

D－19号土壙墓（２号馬）　第69図

D－19はD－18とD－20の中間に位置する。長軸がほぼ東西を指す不整楕円形の土壙墓である。D－19から検出された馬骨は、下顎骨、頸椎、助骨、左肩甲骨、左上腕骨、右肩甲骨？、右上腕骨、坐骨、左大腿骨、左脛骨、右大腿骨、右脛骨と上・下顎臼歯及び門歯で、頭蓋は残存していなかった。２号馬は、背を南に頭を東に向けて埋葬されたものと考えられ、首は土壙の壁に接しやや立ち上がっていた。遺物は助骨の部分から土師器坏破片１点が出土した。



I　暗褐色土層　パミス・スコリアが多く混入しパサパサしている。
II　暗色土層　粒子細かく若干のパミスを含む。
III　黄褐色土層　多量のローム粒子・若干のパミス混入。

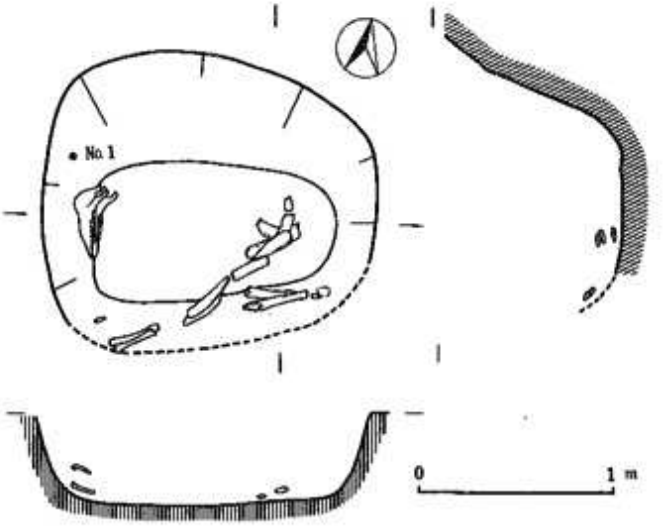
第69図　D-19号土壙墓(2号馬)実測図（1：40）

D－20号土壙墓（１号馬）　第70図

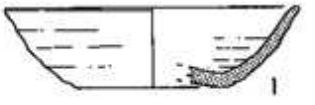
D－20はT－１の西北コーナーに位置する。平面は楕円形、断面は偏平なカマボコ形を呈する土壙墓で、その長軸はほぼ東西を指している。馬骨は、下顎骨と左右大腿骨及び脛骨、中足骨、下顎臼歯・門歯、上顎臼歯の一部が検出された。

１号馬は、背を北に頭を西に向けて埋葬されたものと考えられる。なお、１号馬に伴って、須恵器坏１点（第71図１）が検出された。

（堤　　隆）



第70図　D-20号土壙墓(1号馬)実測図（1：40）



第71図　D-20号土壙墓出土遺物(1：4)

第28表　D－20号土壙墓出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
71-1	坏(須)	〈14.9〉 4.1 〈7.8〉	底部平底	外面　底部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 自然釉付着 D－20内 回転実測

3　土壙

土壙は、第Ⅰ区、第Ⅱ区、第Ⅲ区においてD－1からD－231の計231基が検出された。その内訳は、馬の埋葬を伴う土壙墓が6基、土葬の人骨を伴う土壙墓が1基、火葬骨を伴う土壙墓が2基、大量の灰を伴う土壙が1基、石組を伴う土壙が3基、集石を伴う土壙が20基と性格の決定できないものが199基となっている。このうち平安時代と考えられる馬の埋葬を伴う土壙5基についてはT－1特殊竪穴状遺構とも深く関っているため、前項で詳述した。ここでは、その他の土壙について順を追って説明を加えていこう。

(1)　土壙　　第72図～第78図

その性格を特に決定付けることのできない土壙は199基ある。それらの個々については、第29表を参照いただきたい。それらの土壙にみられる大まかな傾向として、まず、その平面プランとしては、円形あるいは楕円形を基本としたものがほとんどである。また、隅丸方形を呈する土壙も存在する。断面形は、偏平な台形状あるいはD字状を呈しており、浅いものと深いものとがある。また、中には1個～3個のピットを伴う土壙がいくつか存在する。

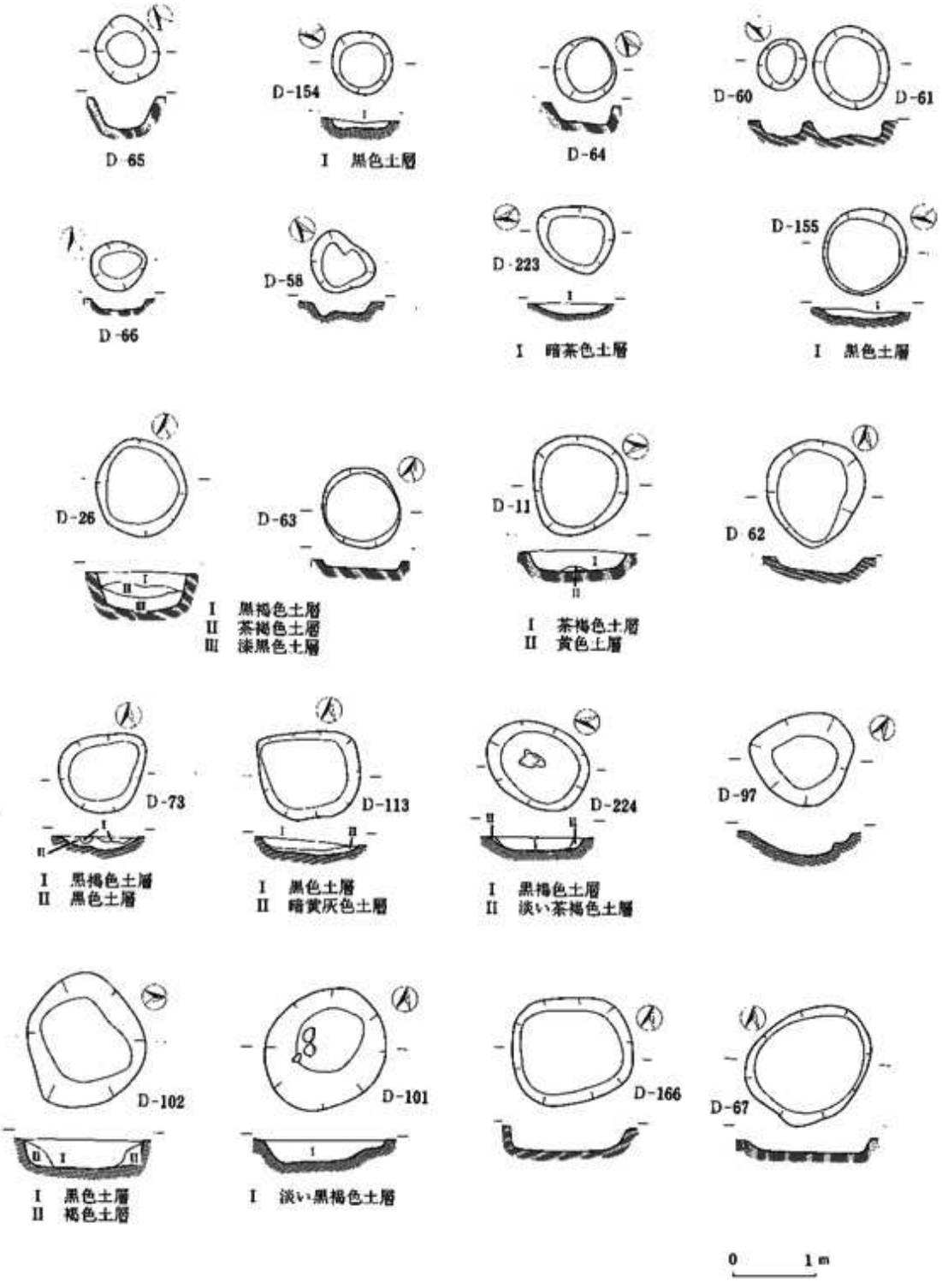
土壙内より出土した遺物としては、土師器、須恵器、土堝、青磁、敲石、砥石、古銭等があり、これは第85～91図に示してある。

所産期は、大部分の土壙が奈良、平安の住居址群より後出するものと考えられる。その一部は出土遺物より時期が推定される。(第29表)。

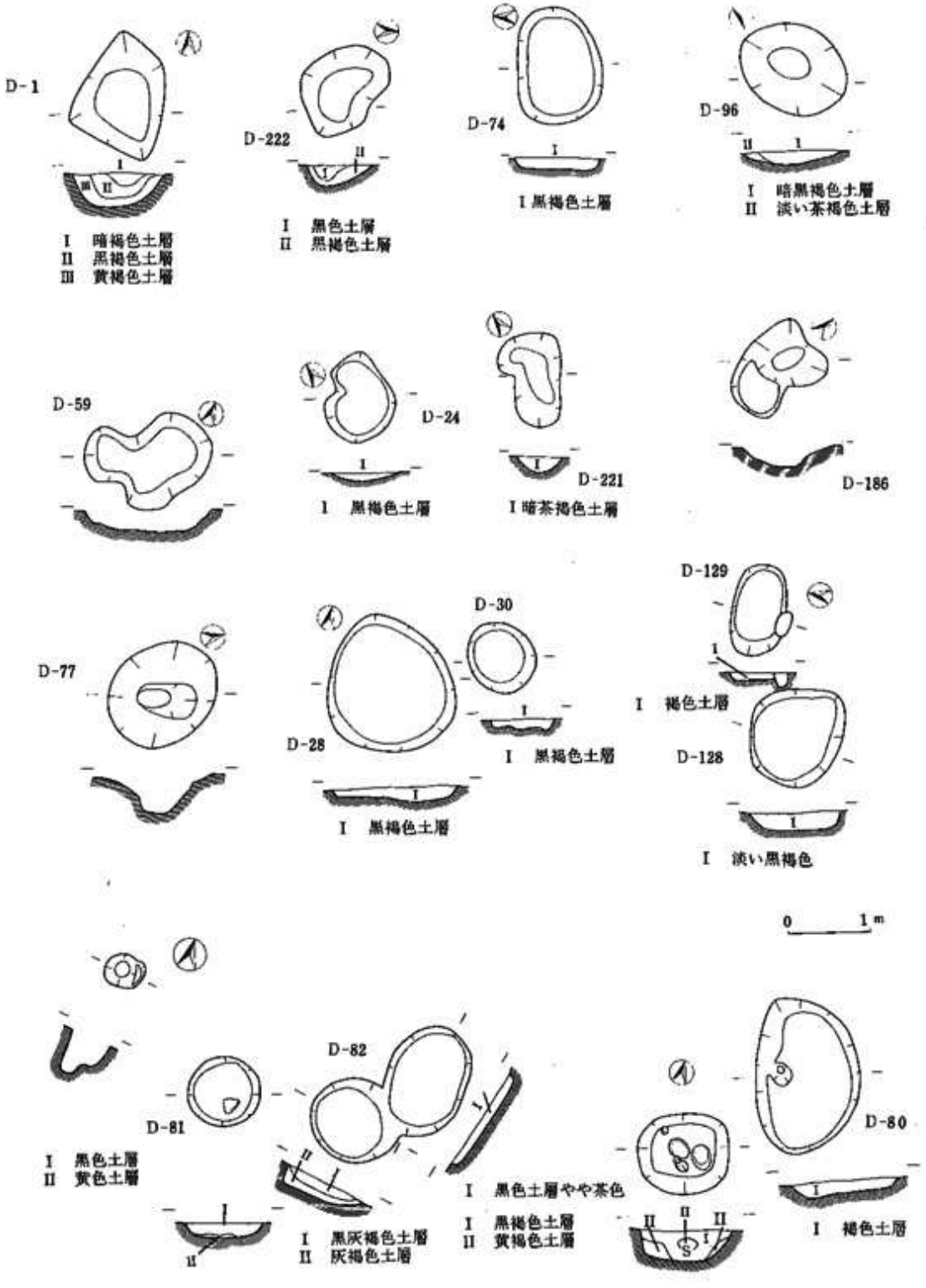
(2)　集石を伴う土壙　　第79図・80図

集石を伴う土壙は、D－32からD－51の20基が検出された。これらはその規模、内容、配列性等から、一連のものと推察される。さらにそれらの配列性から、いくつかのグループに分けることができる。D－31・32・33のグループ、D－35～D－47のグループ、D－48～D－51のグループと単独のD－37である。

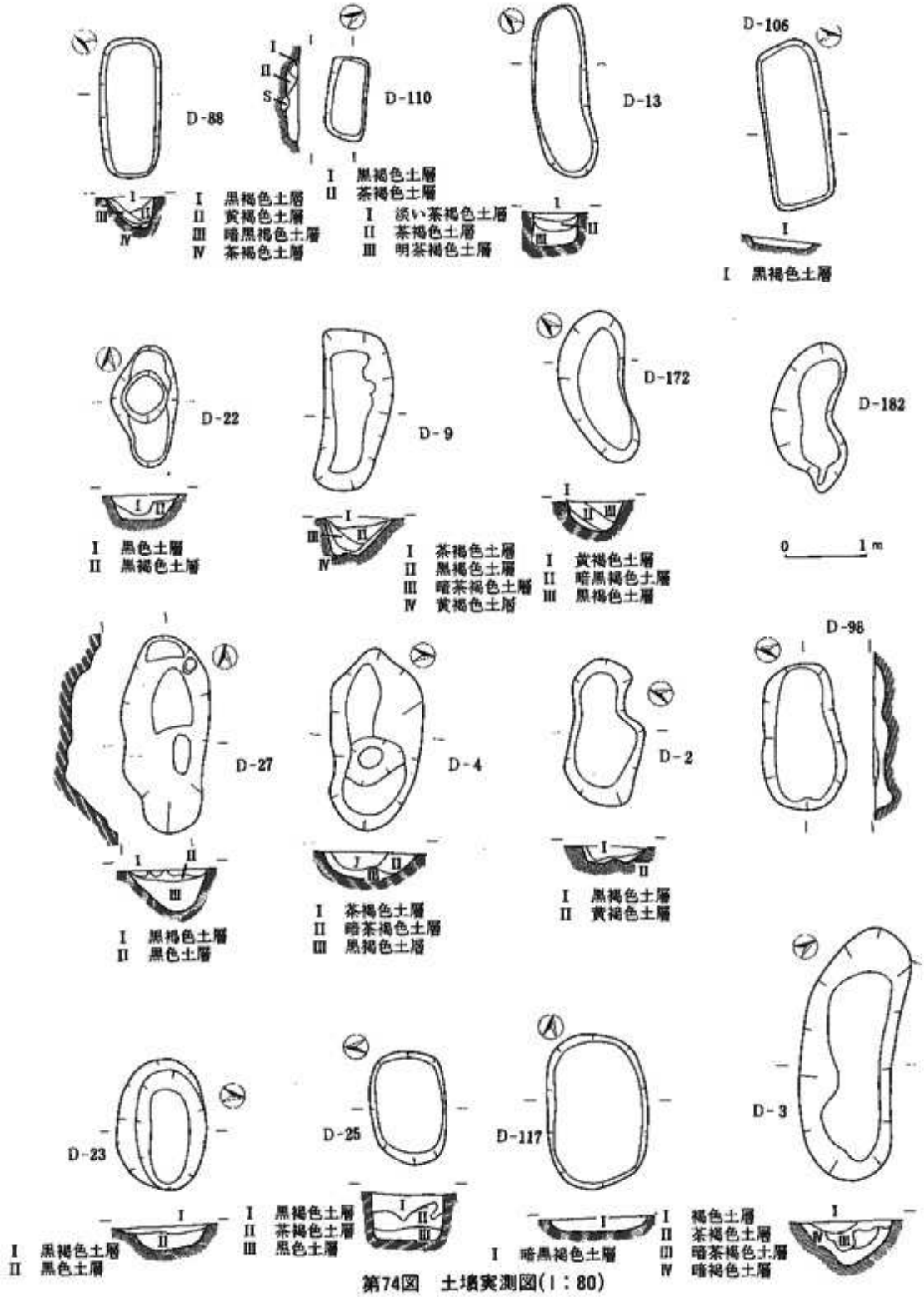
これらの集石の内容であるが、いずれも浅い擂鉢状の断面を呈する円形の掘り込みに、搬入石材である安山岩か、集塊岩礫、遺物では石臼、石皿、凹石、砥石、敲石、土堝破片等が集積され



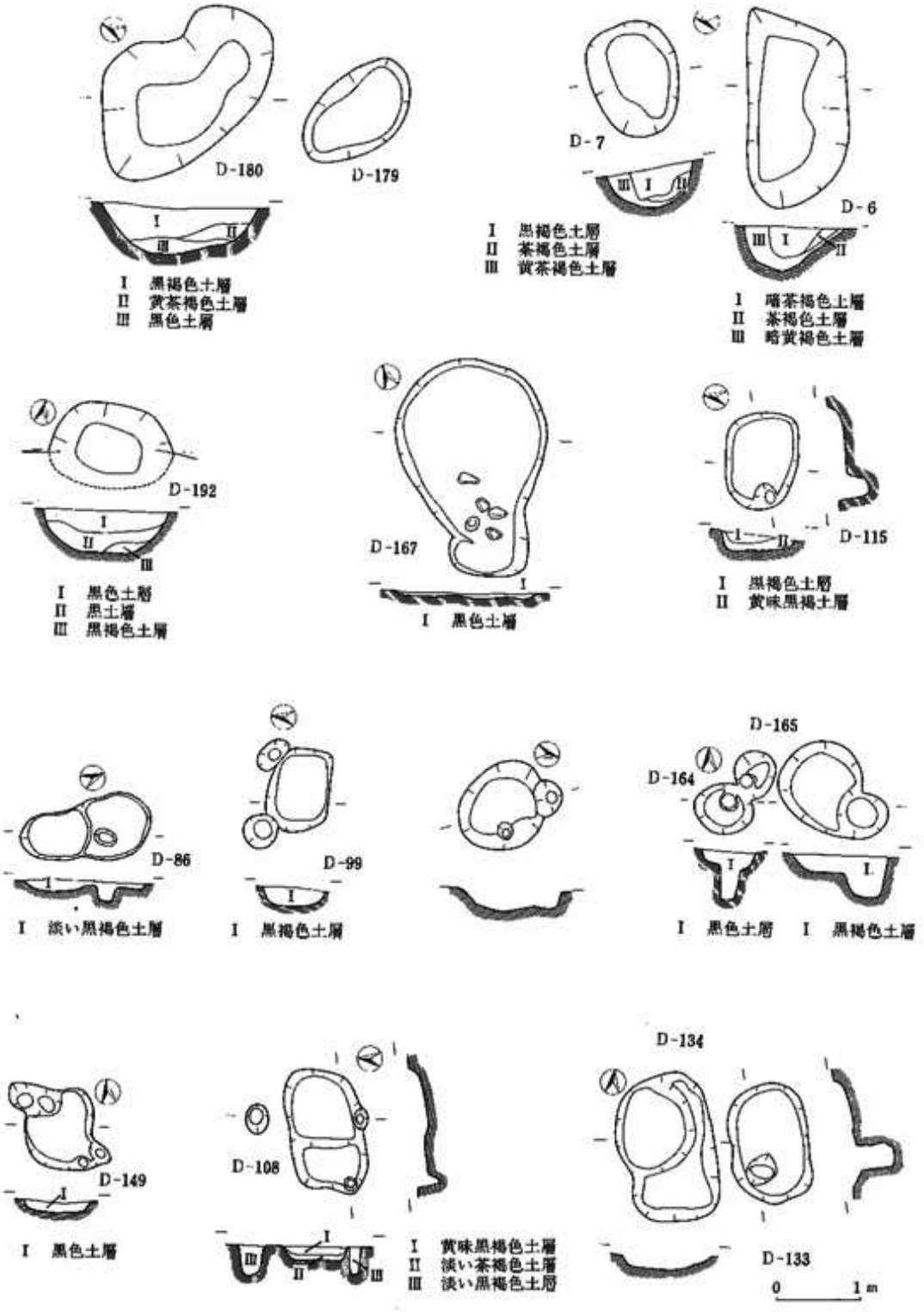
第72図　土壙実測図(1：80)



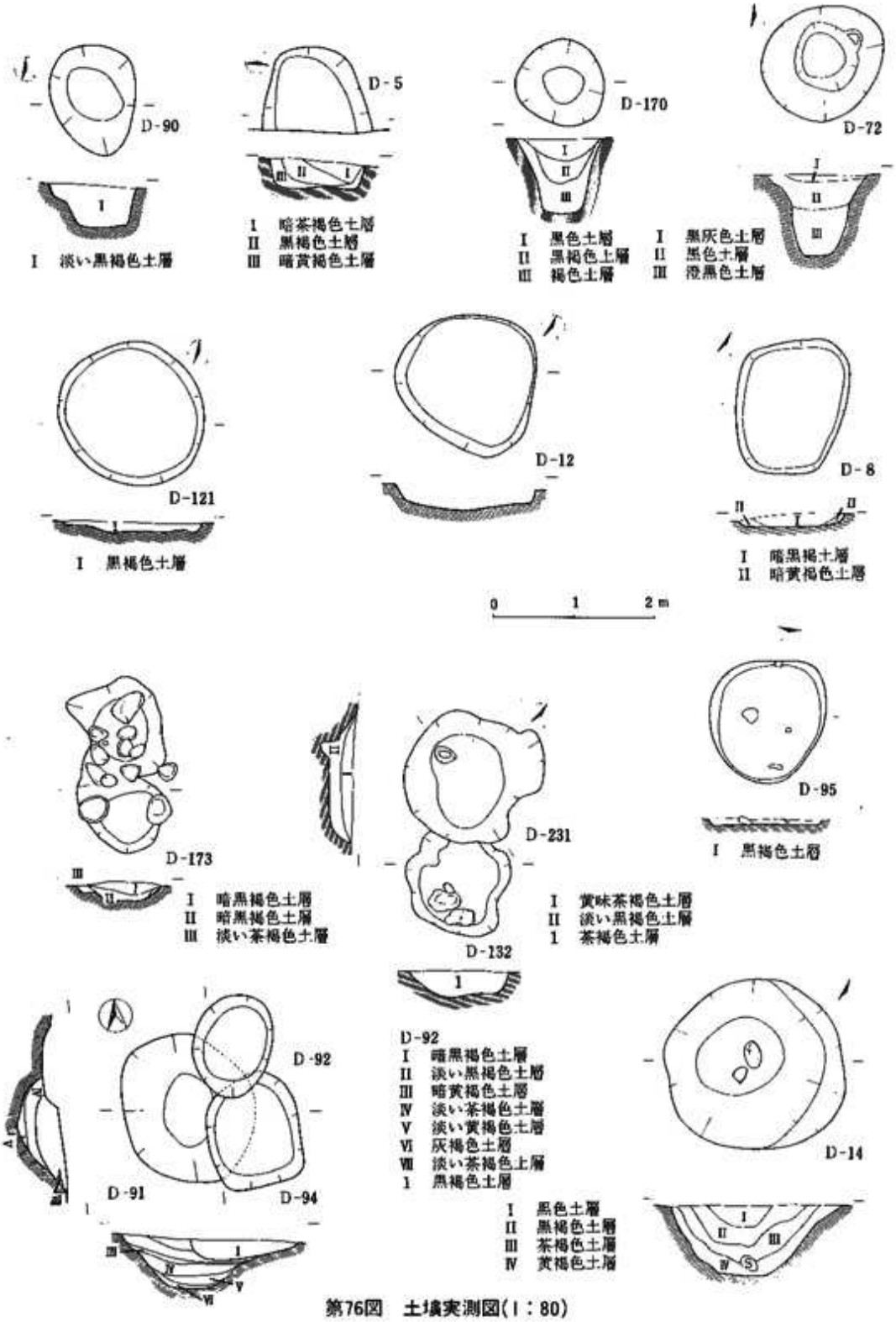
第73図　土壙実測図(1：80)



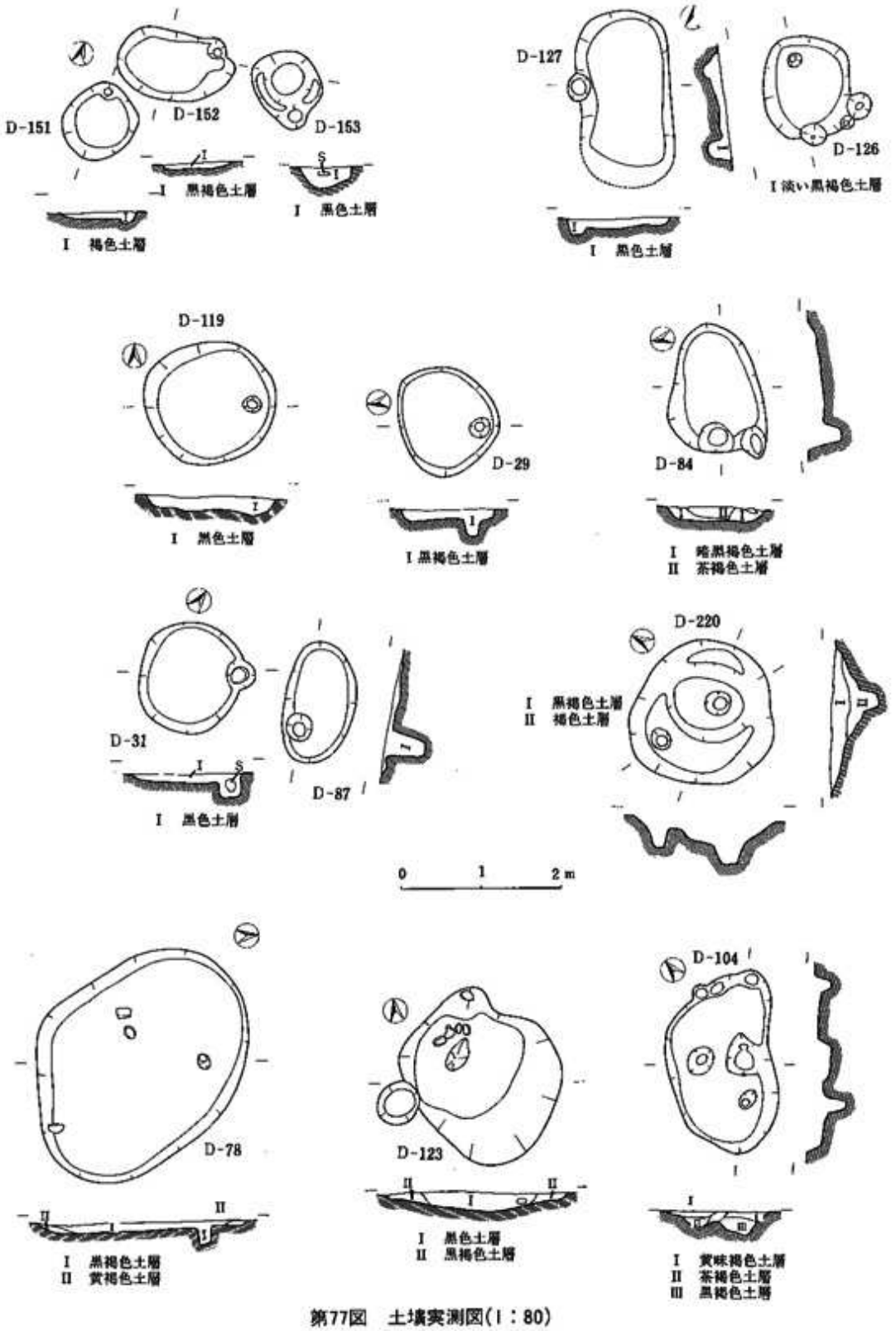
第74図　土壙実測図(1：80)



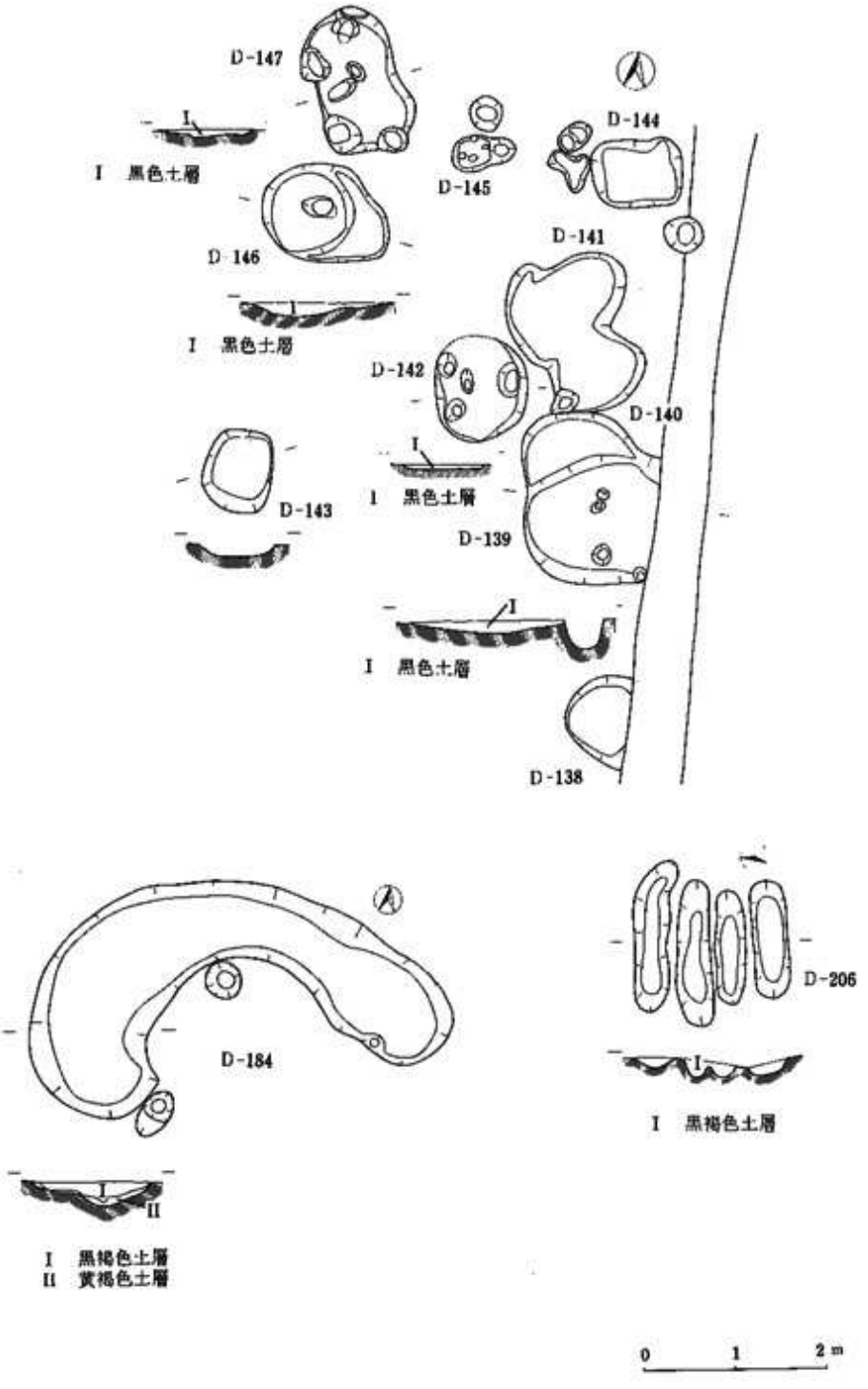
第75図　土壙実測図(1：80)



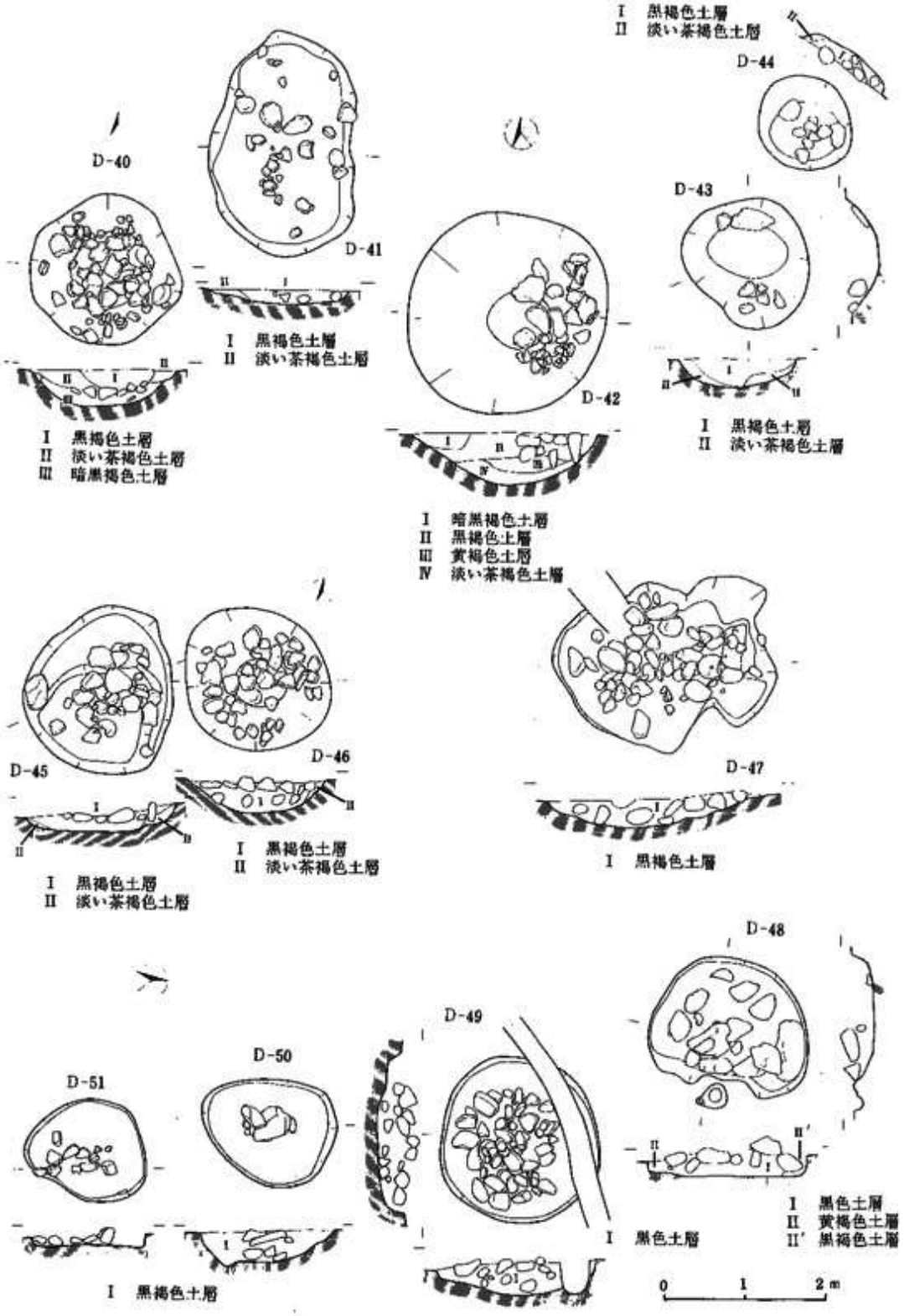
第76図　土壙実測図(1：80)



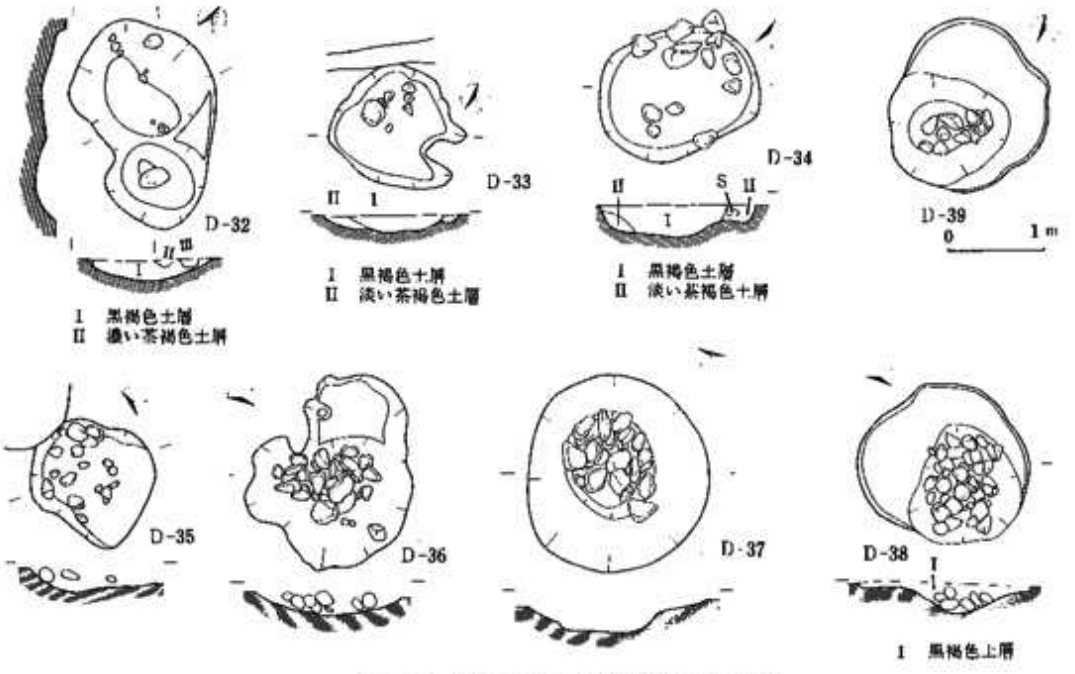
第77図　土壙実測図(1：80)


D-147
I 黒色土層
D-145
D-144
D-146
D-141
I 黒色土層
D-142
D-140
I 黒色土層
D-143
D-139
I 黒色土層
D-138
D-184
I 黒褐色土層
II 黄褐色土層
D-206
I 黒褐色土層
0 1 2 m

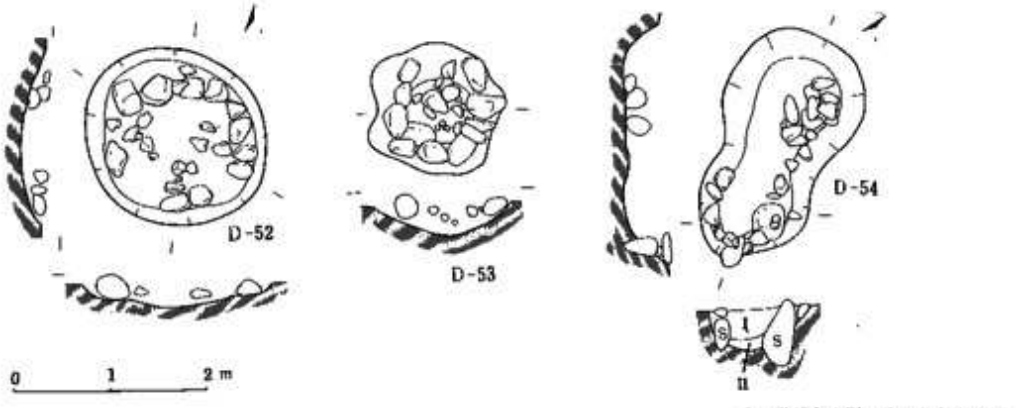
第78図　土壙実測図



第79図　集石を伴う土壙実測図(1：80)



第80図　集石を伴う土壙実測図（1：80）



第81図　石組みを伴う土壙実測図（1：80）

たものである。礫のみならず、生活用具の混入するその状況は、これらが廃棄の場であったことを示すものである。当然これらの廃棄に伴う生活の場が付近にあったものと考えられる。集石の一部であるD－48は竪穴状遺構S－17を切って、D－50・51は竪穴状遺構S－15を切って設けられている。また、D－49はM－13に、D－47はM－14に切られている。本集石群の所産期は、この切り合い関係をふまえたうえで、その遺物等より中世とみて大過なかろう。

(3) 石組を伴う土壙　第81図

石組を伴う土壙は、D－52・53・54の３基である。

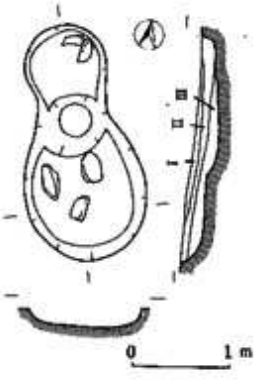
D－52は、径２m前後の円形の浅い掘り込みに環状に礫が配されたもので、その石列の南側の一部は崩れている。あるいは、本石組のようなあり方がD－32からD－51の集石の原形であったのかもしれない。

D－53も、D－52同様1.5m前後の径を有する不整円形の浅い掘り込みに、環状に礫が配されたものである。本址よりは土堝の破片等が検出された。

D－54は、瓢箪形の平面プランを呈する土壙の前円部の半分を石囲いしたものである。その覆土の土層には多くの焼土が伴い、囲われた石の表面は被熱して赤変していた。本址は、そのような状況により、石囲い炉的な機能をもつものと考えられよう。尚、本石組内より、永楽通宝が一点出土した。したがってその所産期は中世と考えられよう。

(4) 灰を伴う土壙　第82図

D－100は、多量の灰（Ⅲ層）を伴う土壙である。瓢箪形の平面プランのほぼ全体に灰層がみられた。しかし、覆土内に焼土や炭化物は全くみられなかった。また、土壙内には安山岩の割り石がみられ、内耳を有する土堝も検出された。本址の機能は、灰を廃棄するためのものであり、所産期は土堝より中世と考えられる。



Ⅰ　黒色土層　ローム粒子を若干含みやや粘性あり
Ⅱ　黒褐色土層　ロームを多く含み　〃
Ⅲ　灰色土層　灰層。

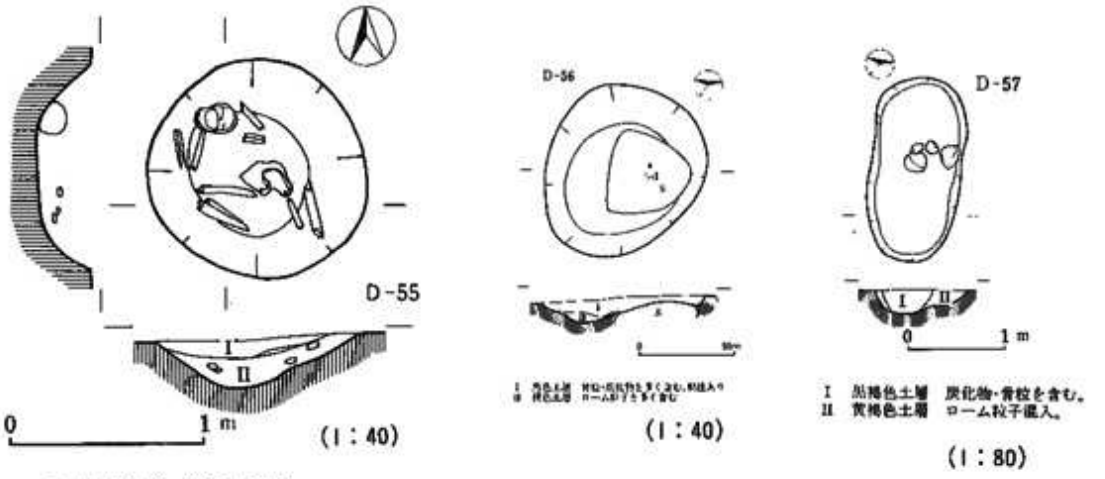
第82図　D-100号土壙実測図（1：30）

(5) 土壙墓　第83図

土壙墓は、人骨の土葬を伴うD－55と火葬骨を伴うD－56・57が検出された。三者ともに第Ⅱ区東端に位置する。

D－55は、径1.1m程の整円形で擂鉢状の断面を呈する土壙に火葬されることのない人骨が、埋葬されたものである。人骨は頭骨、左右上腕骨及び、中手骨の一部、寛骨、左右大腿骨及び、中足骨の一部が検出された。人体はおそらく俯せに埋葬されたものと考えられ、頭はほぼ北に位置していた。埋葬に伴う副葬品等は認められず、きわめて質素な埋葬であることが察せられた。なお、本土壙の所産期は不明である。

D－56は、径90cm前後のやや歪んだ円形を呈する土壙に、炭化物を伴う大量の火葬骨（すでに粒子の状態）が埋葬されたものである。（Ⅰ層）。その断面が極めて浅いのは、掘り込みの際、地山の火山礫にあたってしまったため、それ以上掘り込めなかったのであろう。なお、埋葬に伴う副葬品として、永楽通宝一枚が検出された。これは俗にいう三途の川の渡し銭として副葬されたもの



第83図　土壙墓実測図

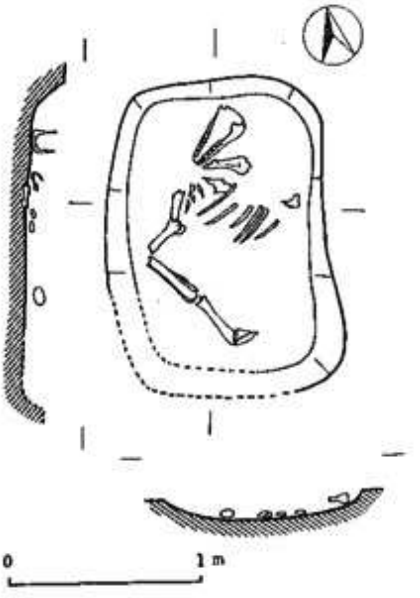
であろう。本址は所産期は、中世と場えられる。

D－57は、長軸1.9m、短軸0.9mを測る楕円形の土壙墓で、覆土土層に炭化物を伴う多量の火葬骨粒子が検出された。また、本址に伴い石臼(第90図30)も出土している。D－57は、D－56の東に隣接し、その内容からD—56とD—57とは一連の土壙墓と考えられる。所産期もまた、D－56から類推して中世とみてよいであろう。

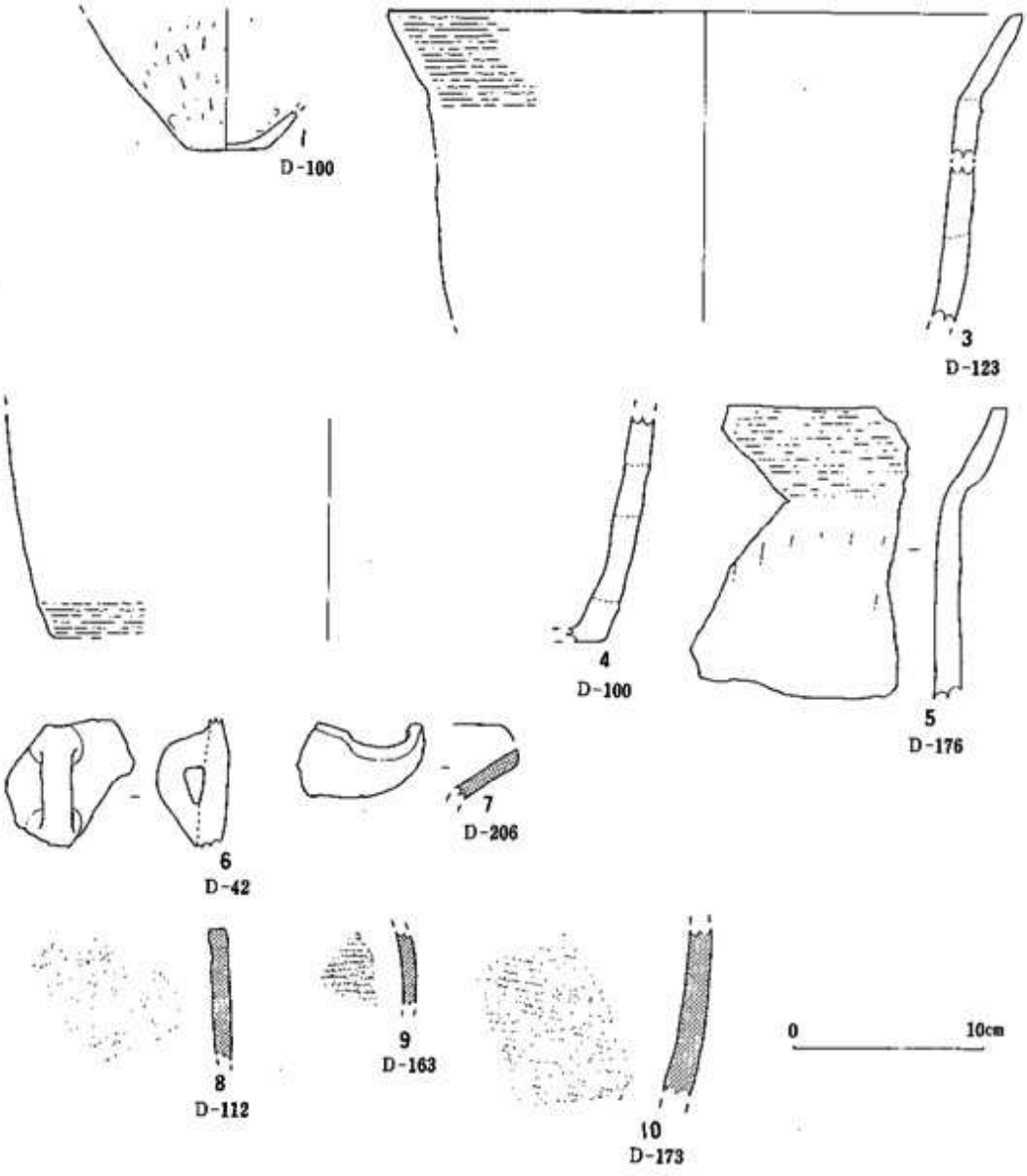
(6) 埋葬馬を伴う土壙墓　第84図

埋葬馬を伴うD－21号土壙墓は、同様に埋葬馬を伴うD－16～D－20の5基の土壙墓とは、その所産を明確に異している。すなわち、D－16がM－6溝状遺構に切られているのに対し、D－21はM－6の続きであるM－1号溝状遺構の一部を切って構築されている。したがって、D－21はR－1溝状遺構より後出するものとしてとらえよう。D－21より検出された馬骨は、下顎骨、助骨、左肩甲骨、左上腕骨、左中手骨、右橈骨、坐骨、右大腿骨、右脛骨である。尚、本埋葬馬に副葬品等は認められなかった。

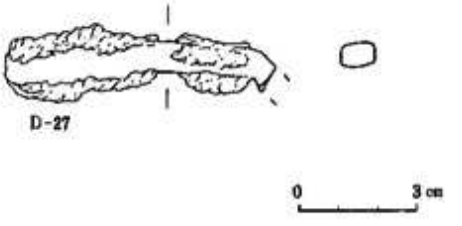
(堤　　隆)



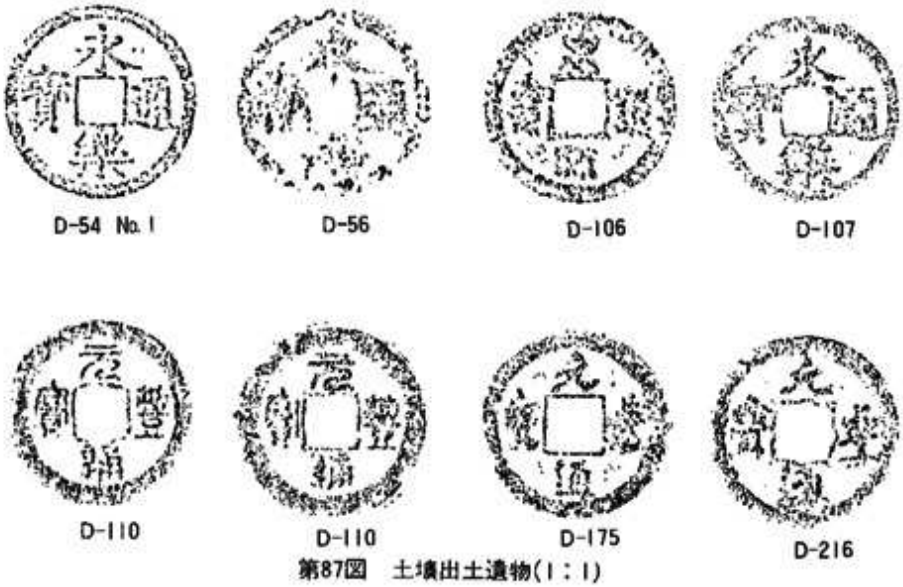
第84図　D-21号土壙墓実測図（1：40）



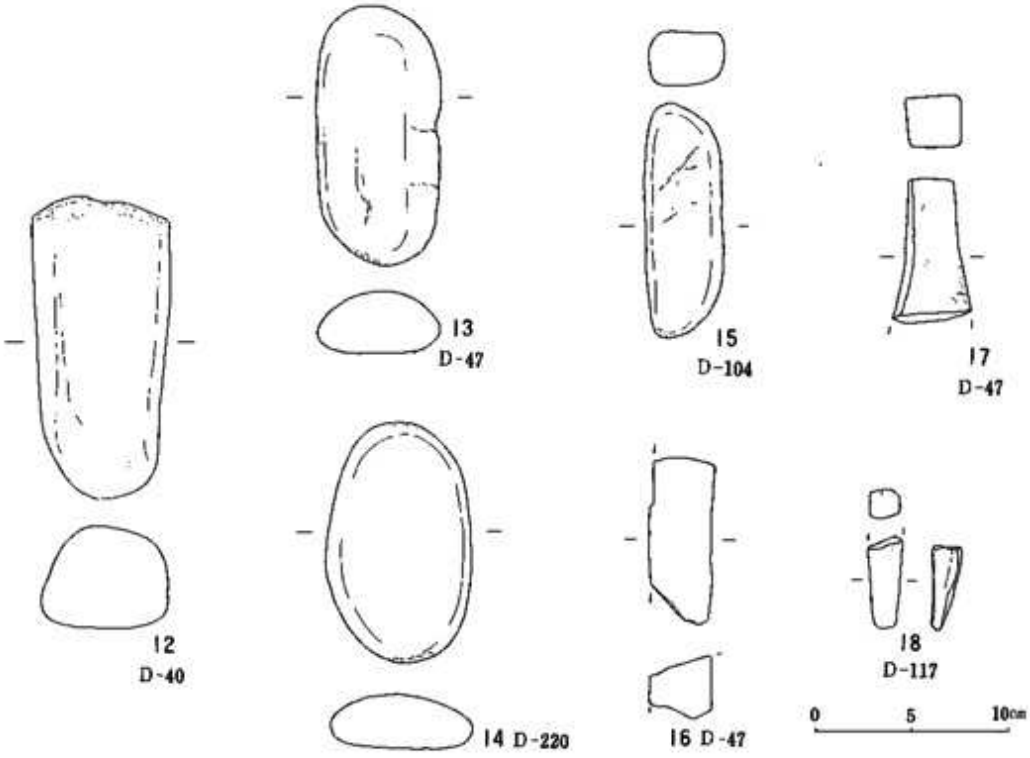
第85図　土壙出土遺物(1：4)



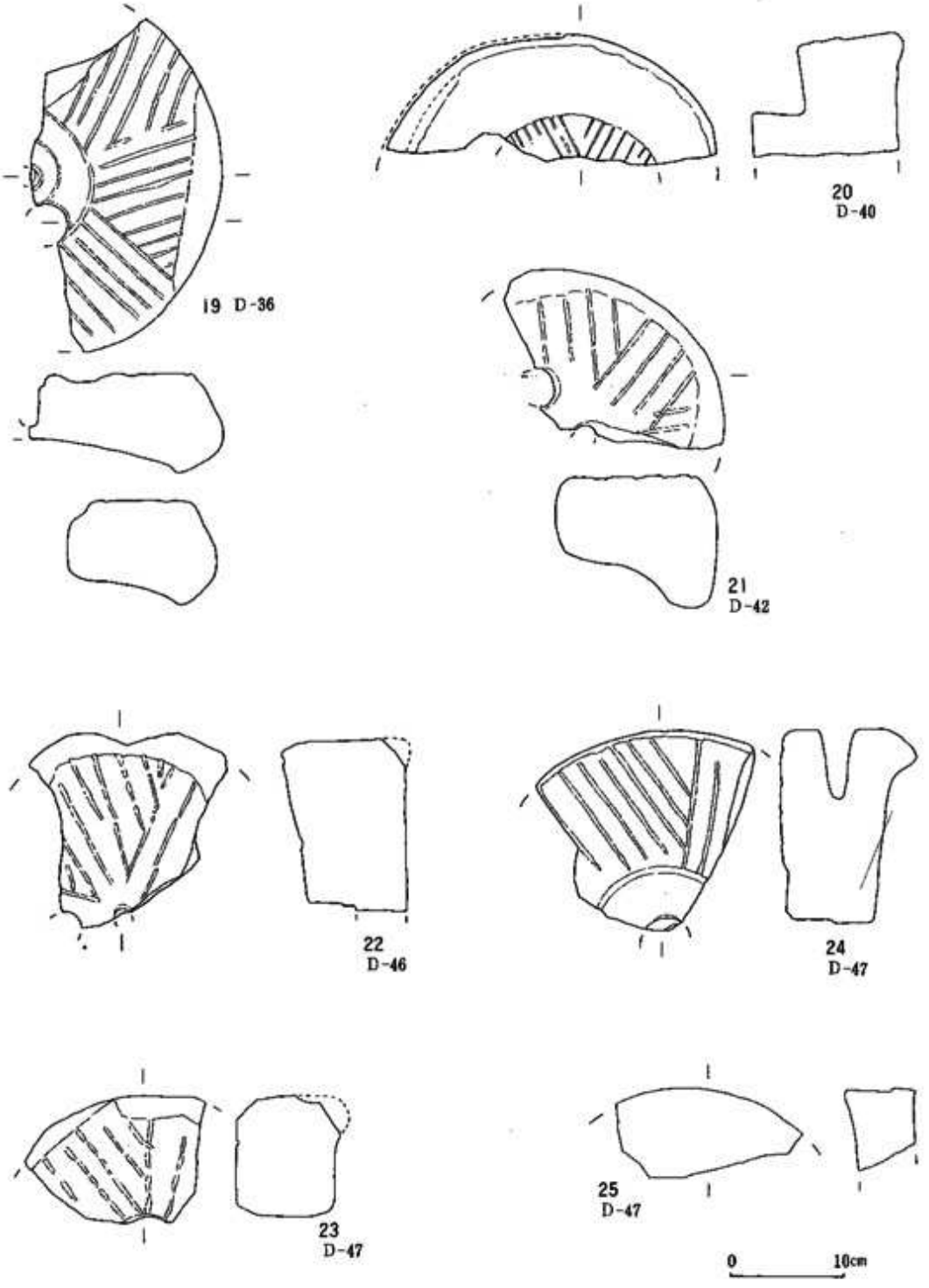
第86図　土壙出土遺物（1：2）



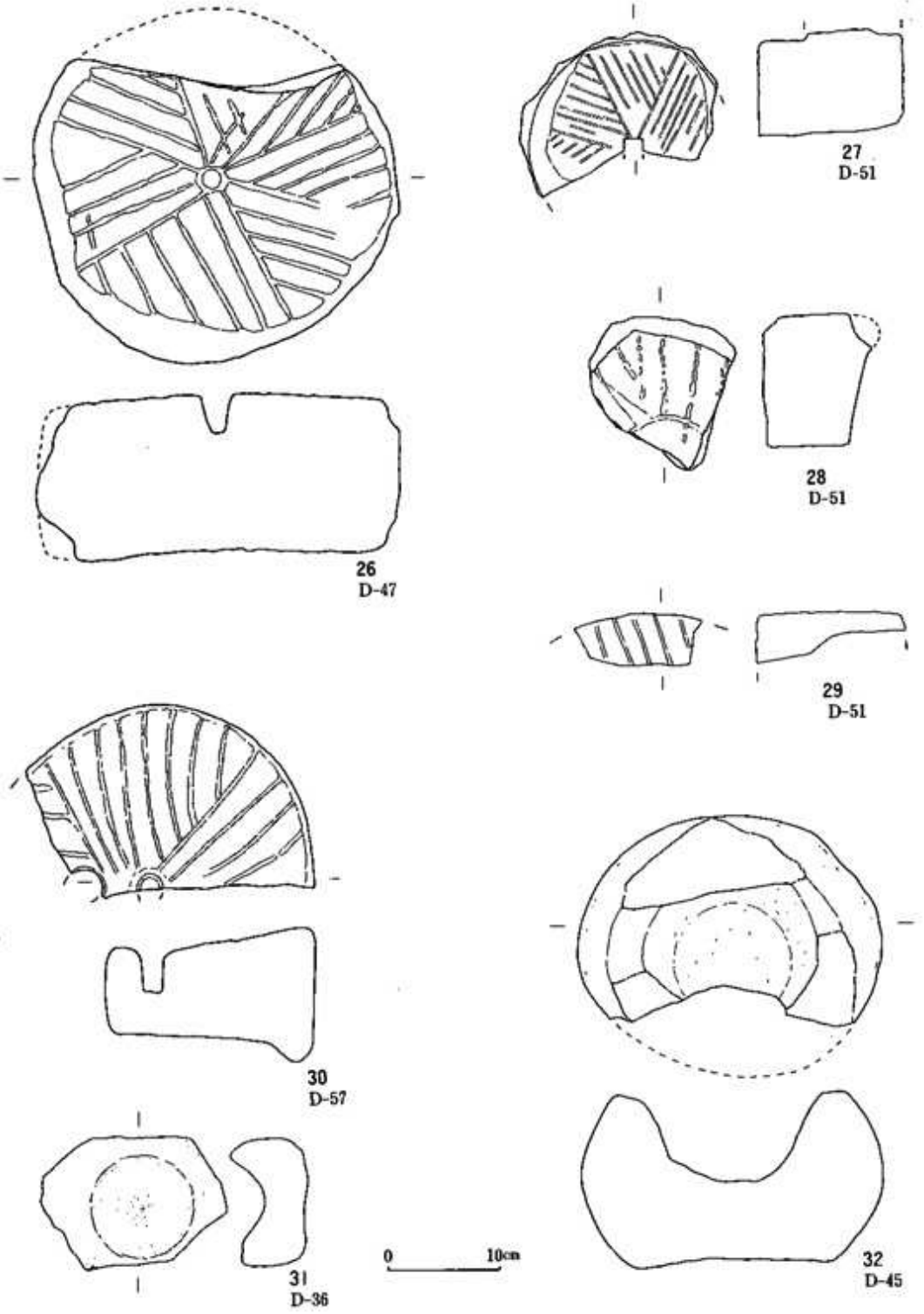
第87図　土壙出土遺物(1：1)



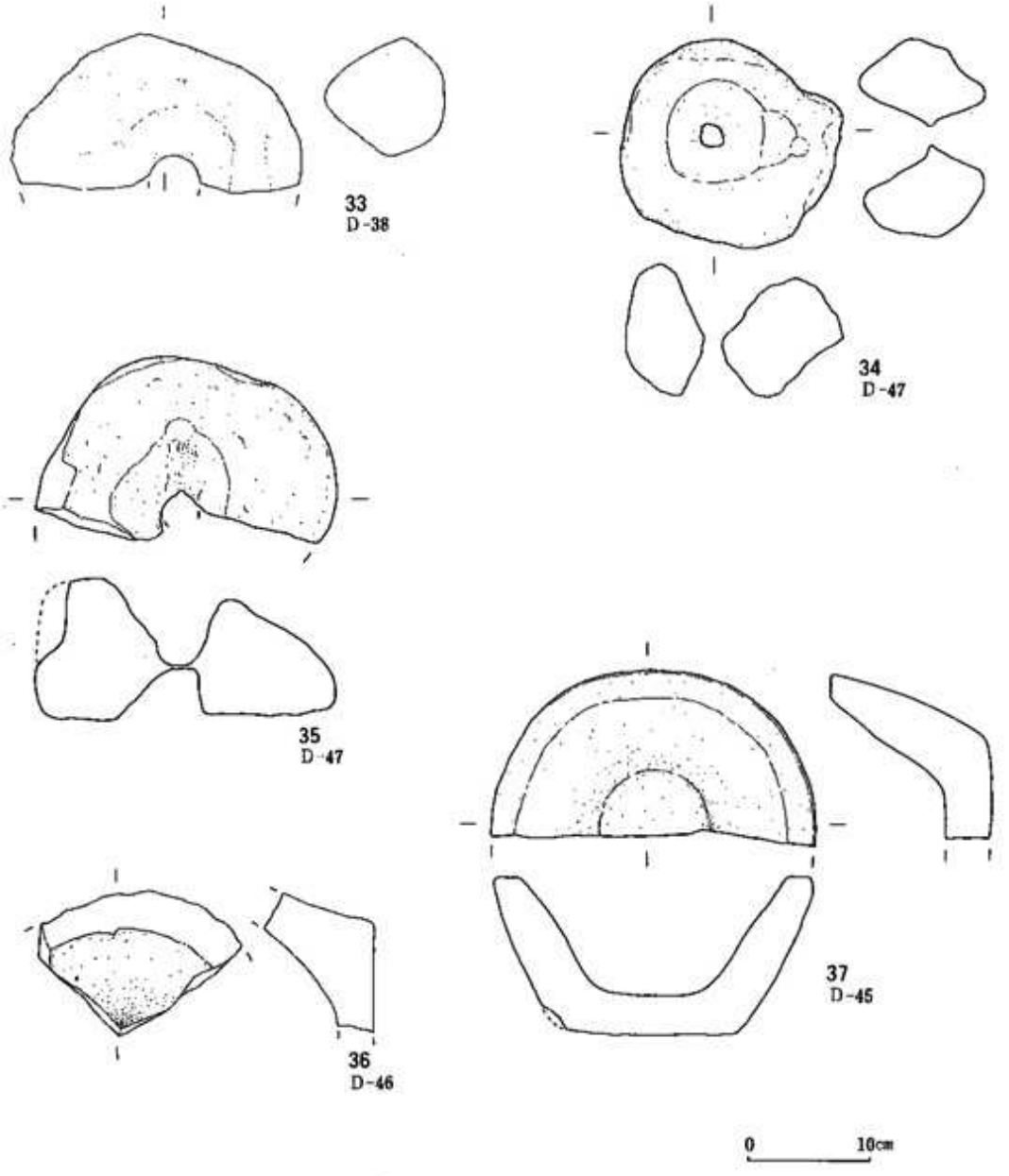
第88図　土壙出土遺物(1：4)



第89図　土壙出土遺物（1：6）



第90図　土壙出土遺物(1：6)



第91図　土壙出土遺物（1：6）

第29表　土壙一覧表

土壙名	形態	主軸方向	プラン 長	プラン 幅	プラン 深	備考
D-1	方形	N-21°-E	1.3	1.06	0.48	
D-2	不整楕円形	N-71°-E	1.79	0.92	0.25	
D-3	楕円形	N-49°-W	3.15	1.15	0.54	
D-4	楕円形	N-88°-W	2.24	1.10	0.45	
D-5	楕円形	N-87°-W	——	1.32	0.35	
D-6	楕円形	N-60°-E	1.38	1.08	0.45	
D-7	不整楕円形	N-73°-E	2.31	0.82	0.53	
D-8	長方形	N-20°-W	1.6	1.35	0.15	
D-9	不整長方形	N-60°-E	1.97	0.85	0.47	
D-10	——					
D-11	円形	N-90°	1.17	1.13	0.22	
D-12	円形	N-85°-W	1.7	1.6	0.26	
D-13	楕円形	N-40°	2.12	0.68	0.4	
D-14	円形	N-77°-E	2.18	2.06	0.82	平安時代
D-15	——					
D-16	楕円形	N-20°-E	1.57	0.81	0.15	埋葬馬土墓
D-17	不明					〃
D-18	楕円形	N-0°	1.77	(1.5)	0.55	〃
D-19	楕円形？	N-87°-E	(2.10)	(1.35)		〃
D-20	楕円形	N-80°-E	1.73	(1.54)	(0.66)	〃
D-21	長方形	N-0°	1.65	1.00	0.17	〃
D-22	不整楕円形	N-9°-W	1.48	0.82	0.31	
D-23	楕円形	N-81°-E	1.6	1.09	0.29	
D-24	不整楕円形	N-33°	1.1	0.87	0.1	
D-25	楕円形	N-90°	1.38	0.94	0.55	
D-26	円形	N-32°-W	1.18	1.06	0.45	
D-27	不整楕円形	N-5°-W	2.42	1.11	0.5	
D-28	円形	N-84°-W	1.59	1.56	0.16	
D-29	円形	N-90°	1.35	1.2	0.15	
D-30	円形	N-57°-W	0.9	0.79	0.07	
D-31	円形	N-37°-W	1.38	1.24	0.12	
D-32	不整楕円形	N-32°-W	2.05	1.52	0.25	集石
D-33	長方形	N-57°-E	1.71	0.72	0.11	〃
D-34	不整円形	N-29°-E	1.16	1.09	0.27	〃
D-35	不定形	N-0°	——	1.15	0.17	〃
D-36	不定形	N-79°-W	2.05	1.65	0.22	〃
D-37	円形	N-90°	2.04	1.85	0.3	〃
D-38	不整円形	N-0°	1.78	1.63	0.31	

土壙名	形態	主軸方向	プラン 長	プラン 幅	プラン 深	備考
D-39	不整円形	N-0°	1.78	1.62	0.32	集石
D-40	円形	N-0°	1.83	1.82	0.37	〃
D-41	楕円形	N-0°	2.45	2.4	0.59	〃
D-42	円形	N-0°	2.45	2.4	0.59	〃
D-43	不整円形	N-0°	1.6	1.55	0.34	〃
D-44	円形	N-0°	1.15	1.12	0.23	〃
D-45	不整円形	N-0°	2.05	1.83	0.25	〃
D-46	円形	N-40°-W	1.89	1.72	0.45	〃
D-47	不定形	N-73°-W	2.63	2.21	0.37	〃
D-48	楕円形	N-12°-E	1.97	1.63	0.29	〃
D-49	円形	N-90°	2.02	1.95	0.38	〃
D-50	楕円形	N-3°-E	1.6	1.36	0.49	〃
D-51	不整円形	N-11°-E	1.53	1.2	0.13	〃
D-52	円形	N-49°-W	1.98	1.83	0.27	石組み
D-53	不整円形	N-90°	1.33	1.3	0.24	〃
D-54	不整楕円形	N-19°-W	2.56	1.44	0.44	〃
D-55	円形	N-0°	1.10	1.10	0.27	土葬墓
D-56	不整円形		1.85	1.60	0.22	火葬墓
D-57	楕円形	N-70°-W	1.90	0.95	0.25	火葬墓
D-58	不整円形	N-38°-W	0.87	0.68	0.15	
D-59	不定形	N-63°-E	1.6	1.05	0.27	
D-60	円形	N-67°-E	0.62	0.56	0.17	
D-61	円形	N-38°-E	1.0	0.89	0.2	
D-62	楕円形	N-0°	1.26	1.16	0.2	
D-63	円形	N-60°-W	0.1	0.91	0.09	
D-64	円形	N-0°	0.75	0.73	0.21	
D-65	不整円形	N-19°-W	0.78	0.7	0.38	
D-66	楕円形	N-89°-E	0.67	0.59	0.13	
D-67	楕円形	N-60°-E	0.67	0.59	0.13	
D-68	——					
D-69	——					
D-70	——					
D-71	楕円形	N-45°-W	3.1	2.4		
D-72	円形	N-69°-E	1.55	1.35	0.98	
D-73	楕円形	N-53°-E	1.11	0.97	0.14	
D-74	楕円形	N-85°-E	1.43	1.02	0.14	
D-75	——					
D-76	——					

土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考
			長	幅	深	
D-77	楕円形	N-25°-W	1.14	1.12	0.45	
D-78	楕円形	N-16°-W	1.75	1.1		
D-79	楕円形	N-71°-E	1.1	0.98	0.37	
D-80	楕円形	N-19°-W	1.9	1.26	0.19	
D-81	円形	N-70°-E	0.87	0.82	0.16	
D-82	円形	N-80°-W	1.12	1.02	0.2	
D-83	楕円形	N-0°	1.4	0.97	0.1	
D-84	楕円形	N-83°-W	1.6	1.2	0.2	
D-85	——					
D-86	楕円形	N-17°-E	1.59	0.78	0.14	
D-87	楕円形	N-27°-W	1.5	0.87	0.09	
D-88	長方形	N-61°-E	1.71	0.75	0.37	
D-89	——					
D-90	楕円形	N-0°	1.35	1.05	0.5	
D-91	円形	N-0°	1.8	——	0.59	
D-92	楕円形	N-15°-E	1.26	0.95	——	
D-93	長方形	N-39°-E	——	——	0.15	
D-94	方形	N-0°	——	1.13	0.23	
D-95	円形	N-85°-W	1.48	1.42	0.05	
D-96	楕円形	N-19°-W	1.13	0.95	0.14	
D-97	楕円形	N-28°-E	1.45	1.21	0.13	
D-98	楕円形	N-81°-E	1.8	1.02	0.16	
D-99	長方形	N-79°-E	0.97	0.78	0.28	
D-100	不整楕円形	N-20°-W	2.4	1.21	0.19	
D-101	楕円形	N-46°-E	1.52	1.33	0.27	
D-102	不整楕円形	N-90°	1.6	1.41	0.33	
D-103	円形	N-0°	1.23	——	0.16	
D-104	楕円形	N-25°-E	1.5	1.03	0.31	
D-105	楕円形	N-87°-E	1.6	0.91	0.06	
D-106	長方形	N-80°E	2.02	0.79	0.09	
D-107	方形	N-34°-W	0.73	0.61	0.22	
D-108	長方形	N-88°-W	1.46	0.84	0.25	
D-109	方形	N-26-E	——	0.85	0.05	
D-110	長方形	N-53°-W	1.01	0.48	0.15	
D-111	——					
D-112	楕円形	N-0°	1.55	1.4	0.16	
D-113	方形	N-83°-E	1.2	1.03	0.14	
D-114	——					

土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考
			長	幅	深	
D-115	楕円形	N-89°-W	1.2	0.86		
D-116	——					
D-117	楕円形	N-13°-W	1.9	1.22	0.16	
D-118	——					
D-119	楕円形	N-90°	1.62	1.45	0.16	
D-120	円形	N-20°-W	0.45	0.26	0.13	
D-121	円形	N-58°-W	1.84	1.7	0.14	
D-122	楕円形	N-82°-W	1.41	1.21	0.15	
D-023	不整方形	N-33°-W	2.03	1.8	0.23	
D-124	楕円形	N-88°-E	0.83	0.74	0.27	
D-125	楕円形	N-75°-W	——	0.45	0.33	
D-126	方形	N-0°	1.27	1.07	0.13	
D-127	楕円形	N-12°W	——	1.15	0.12	
D-128	円形	N-39°-W	1.3	1.15		
D-129	楕円形	N-76°-W	1.5	0.72		
D-130	円形	N-55°-W	0.77	0.68		
D-131	不定形	N-3°-E	1.21	0.65		
D-132	不定形	N-25°-W	——	1.3	0.31	
D-133	楕円形	N-18°-W	1.4	0.93	0.14	
D-134	長方形	N-11°-W	1.76	1.15	0.17	
D-135	——					
D-136	——					
D-137	——					
D-138	円形	N-83°-W	0.9		0.5	
D-139	楕円形	N-81°-E	——	1.4	0.13	
D-140	不明	N-24°-W	——	1.08	0.05	
D-141	不定形	N-42°-W	1.8	1.4	0.08	
D-142	円形	N-10°-W	1.13	0.98	0.13	
D-143	円形	N-14°-W	0.87	0.76	0.18	
D-144	方形	N-81°-E	0.95	0.75	0.08	
D-145	不整楕円形	N-80°-E	0.67	0.4	0.13	
D-146	不整楕円形	N-86°-W	1.4	1.05	0.36	
D-147	楕円形	N-35°-W	1.6	1.02	0.1	
D-148	——					
D-149	不定形	N-10°-E	0.93	0.79	0.12	
D-150	楕円形	N-10°-W	1.6	1.14		
D-151	円形	N-0°	0.99	0.88	0.08	
D-152	楕円形	N-73°-E	1.45	0.85	0.08	

土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考	土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考
			長	幅	深					長	幅	深	
D-153	楕円形	N-38°-W	0.98	0.78	0.24		D-191	—					
D-154	円形	N-38°-E	0.76	0.72	0.1		D-192	楕円形	N-75°-E	1.5	1.02	0.49	
D-155	円形	N-82°-W	1.04	0.99	0.1		D-193	楕円形	N-70°-W	0.89	0.63	0.11	
D-153	円形	N-70°-E	0.75	0.68	0.34		D-194	円形	N-50°-E	0.45	0.44	0.29	
D-157	円形	N-12°-E	0.7	0.65	0.49		D-195	円形	N-0°	0.48	0.42		
D-158	—						D-196	楕円形	N-0°	0.58	0.45	0.05	
D-159	円形	N-54°-E	0.66	0.65	0.57		D-197	楕円形	N-74°-E	1.09	0.825	0.16	
D-160	円形	N-13°-W	0.99	0.9	0.21		D-198	長方形	N-44°	1.02	0.5	0.13	
D-161	楕円形	N-9°-E	1.26	0.89	0.18		D-199	楕円形	N-75°-W	0.98	0.55	0.16	
D-162	円形	N-50°-W	1.02	0.95	0.38		D-200	楕円形	N-85°-W	0.7	0.55	0.17	
D-163	円形	N-79°-E	0.84	0.7	0.4		D-201	円形	N-0°	0.5	0.47	0.15	
D-164	円形	N-80°-W	0.72	0.61	0.24		D-202	楕円形	N-60°-W	0.78	0.63	0.22	
D-165	楕円形	N-63°-W	1.39	0.65	0.13		D-203	楕円形	N-64°-W	0.7	0.57	0.12	
D-166	楕円形	N-70°-E	1.45	1.25	0.39		D-204	楕円形	N-15°-W	1.19	0.51	0.13	
D-167	不整楕円形	N-14°-E	3.6	1.79	0.07		D-205	楕円形	N-75°-W	0.55	0.45	0.29	
D-168	—						D-206	—	—	—	—	—	
D-169	—						D-207	円形	N-90°	0.4	0.35	0.2	
D-170	円形	?	1.1	1.03	0.9		D-208	円形	N-0°	0.54	0.5	0.21	
D-171	—						D-209	円形	N-46°-E	0.4	0.37	0.23	
D-172	不整楕円形	N-42°-E	1.81	0.82	0.35		D-210	円形	N-90°	0.5	0.45	0.17	
D-173	不定形	?	2.15	1.12	0.2		D-211	円形	N-90°	0.52	0.52	0.23	
D-174	不定形	N-71°-E	1.3		0.29		D-212	不整方形	N-70°-W	1.06	0.96	0.24	
D-175	不定形	N-30°-W	2.05	1.74	0.23	青磁出土	D-213	楕円形	N-90°	1.3	0.87	0.36	
D-176	—						D-214	楕円形	N-12°-E	1.33	1.07	0.54	
D-177	—						D-215	不整方形	N-90°	0.88	0.62	0.16	
D-178	—						D-216	楕円形	N-54°-E	0.66	0.61	0.11	
D-179	楕円形	N-62°-W	1.48	0.93	0.16		D-217	—					
D-180	不整楕円形	N-70°-W	2.48	1.57	0.54		D-218	—					
D-181	—						D-219	—					
D-182	不整楕円形	N-4°-W	1.82	0.88	0.37		D-220	不整円形	N-80°-E	1.79	1.75	0.19	
D-183	円形	N-22°-E	1.19	1.15	0.2		D-221	不整楕円形	N-35°-E	1.15	0.77	0.19	
D-184	不定形	N-75°-E	4.58	1.31	0.27		D-222	不定形	N-64°-W	1.22	0.9	0.25	
D-185	円形	N-73°-W	0.85	0.77	0.25		D-223	楕円形	N-34°-E	0.94	0.79	0.13	
D-186	不定形	N-6°-E	1.11	0.85	0.26		D-224	楕円形	N-17°-E	1.27	0.97	0.15	
D-186	不定形	N-6°-E	1.11	0.85	0.26		D-224	楕円形	N-17°-E	1.27	0.97	0.15	
D-187	円形	N-35°-W	1.29	1.02	0.25		D-225	—					
D-188	楕円形	N-53°-E	0.75	0.48	0.14		D-226	—					
D-189	楕円形	N-23°-W	0.83	0.7	0.28		D-227	—					
D-190	円形	N-10°-E	0.75	0.72	0.16		D-228	—					

土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考	土壙名	形態	主軸方向	プラン			備考
			長	幅	深					長	幅	深	
D-229	——						D-231	不定形	N-60°-E	1.72	1.61	0.28	
D-230	方形	N-86°-E	——	1.33	0.09								

第30表　土壙墓出土遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
91-1	甕	—— —— 4.2	底部平底	外面　底部ヘラケズリ、胴下部縦位のヘラケズリ 内面　底部ヘラケズリ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 D－100内 回転実測
91-3	土壙	〈33.0〉 —— ——	胴部直立ぎみに立ち上がり、口辺部外傾する。	外面　口辺部ヨコナデ	胎土黄褐色 内外面CO_2付着 D－123 回転実測
91-4	土壙	—— —— 〈28.6〉	胴部直立ぎみに立ち上がる。	外面　胴下部ヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 D－100内 回転実測
91-5	土壙	—— —— ——	口辺部、外傾内湾する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴部縦位のヘラケズリ	胎土黄褐色 外面CO_2付着 D－176内 破片実測
91-6	土壙 (内耳)	—— —— ——		外面　ヨコナデ	胎土黄褐色 D－42内 破片実測
91-7	注口土器 (須)				胎土灰褐色 D-206内 破片実測

第31表　土壙出土遺物一覧表〈鉄・石器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考	挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
86-11	鉄製品	(6.8)	0.8	0.85	D-27出土	89-24	〃	(17.4)	—	11.9	半径計測・D47出土
88-12	敲石	15.4	7.1	5.2	D40出土	89-25	〃	—	—	6.2	D47出土
88-13	〃	13.3	6.4	3.1	D47出土	90-26	〃	32.2	-	13.8	D47出土
88-14	〃	12.3	7.5	2.8	D220出土	90-27	〃	(18.5)	—	12.9	D51出土
88-15	〃	12.0	4.0	2.8	D104出土	90-28	〃	—	—	(9.7)	D51出土
88-16	砥石	(8.5)	(3.2)	3.2	D47出土	90-29	〃	—	—	13.2	D51出土
88-17	〃	(7.4)	4.0	2.6	D47出土	90-30	〃	(16.3)	—	12.0	半径計測・D57出土
88-18	〃	(4.8)	1.8	1.5	D117出土	90-31	凹石	16.5	11.7	6.9	D36出土
89-19	石臼	(17.1)	—	9.1	半径計測・D36出土	90-32	石鉢	27.0	—	15.5	D45出土
89-20	〃	—	—	13.4	D40出土	91-33	凹石	23.5	—	9.8	D38出土
89-21	〃	(14.0)	—	(11.7)	D42出土	91-34	〃	18.2	17.0	10.7	D47出土
89-22	〃	(15.7)	—	(11.1)	D46出土	91-35	〃	24.6	—	11.6	D47出土
89-23	〃	(10.6)	—	(9.1)	D47出土	91-36	石鉢	—	—	(9.0)	D46出土

4　竪穴状遺構　　第92図～第103図

本遺跡からは、長軸２ｍ内外の方形、あるいは長方形を呈する遺構が64基検出された。これらの遺構の確認面は黄褐色ローム層（全体層序第Ⅲ層）で、底面は平坦であるが、堅固な面をもたず、火処も全く認められない、従来の竪穴住居址とは異なるものであった。ここではこれらの規模・形態を有する遺構をとりあえず「竪穴状遺構」と称して以下に表記する。

尚、本遺構を規模・形態から便宜上５つに分類した。

I_A類……長軸が２ｍ以上で長方形を呈するもの

I_B類……両軸が２ｍ以上で方形を呈するもの

I_C類……両軸が２ｍ以上で、形態又は機能が異なるもの

II_A類……長軸が２ｍ以下で長方形を呈するもの

II_B類……両軸が２ｍ以下で方形を呈するもの

竪穴状遺構は、Ｓ１～４を除き、形態・規模の大小にかかわらず、遺跡の南東部ひ～れ――32～50グリッド内から集中的に検出されている。この中には、Ｓ31～34やＳ52～57のように著しく重複するものもある。またＲ－１号溝状遺構群とも有機的に関連する可能性が強く、竪穴状遺構が溝状遺構と重複する例は皆無である。むしろ、溝の区画内に竪穴状遺構が密集する様相を呈していると言えよう。この中で特に注目されるのが、Ｉｃ類としたＳ62・63である。Ｓ62・63は他の竪穴状遺構との重複関係はなく、不定形ではあるが規模も大きい。遺物も硯や青磁・骨片など比較的豊富であり、この２つの遺構は、竪穴状遺構群の中で中核的な意味をもったものであったのかもしれない。

ピットについては、確実に遺構に伴うか否か、理解が難しいため、一応、参考までにそのあり方を記しておきたい。

両壁の中央に各１個ずつ存するもの……Ｓ13

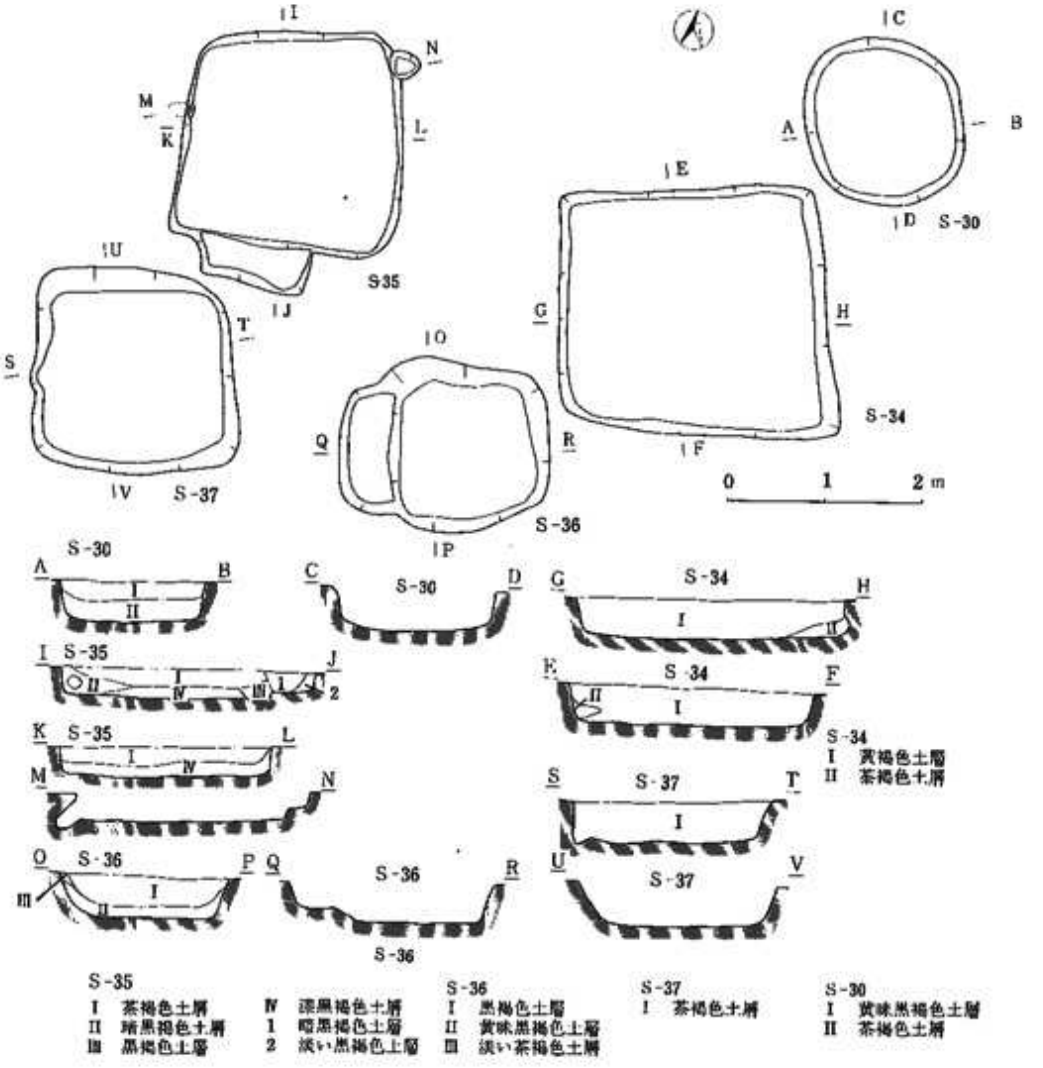
遺構壁外の四隅に整然と存するもの……Ｓ38・56

四壁の中央部の壁際あるいは壁外に各１個存するもの……Ｓ23・50・55

壁内外に不規則に多数存するもの……Ｓ15・18・19・20・21・22・24・26・28・39・41

このうち、両壁の中央に各１個存するものや、四隅中央に各１個存する例は一応本遺構に伴うものと考えて大過ないと思われる。このようなあり方は、類似する遺構が検出された佐久市大井城址や他県の類列にみられる壁直下に小規模なピットが整然と配置されるものとは異なりをみせており、本遺跡特有の傾向と言えるのかもしれない。

出土遺物は非常に少ない。遺構の年代決定の根拠となる遺物は、内耳の土鍋の小片・中国青磁

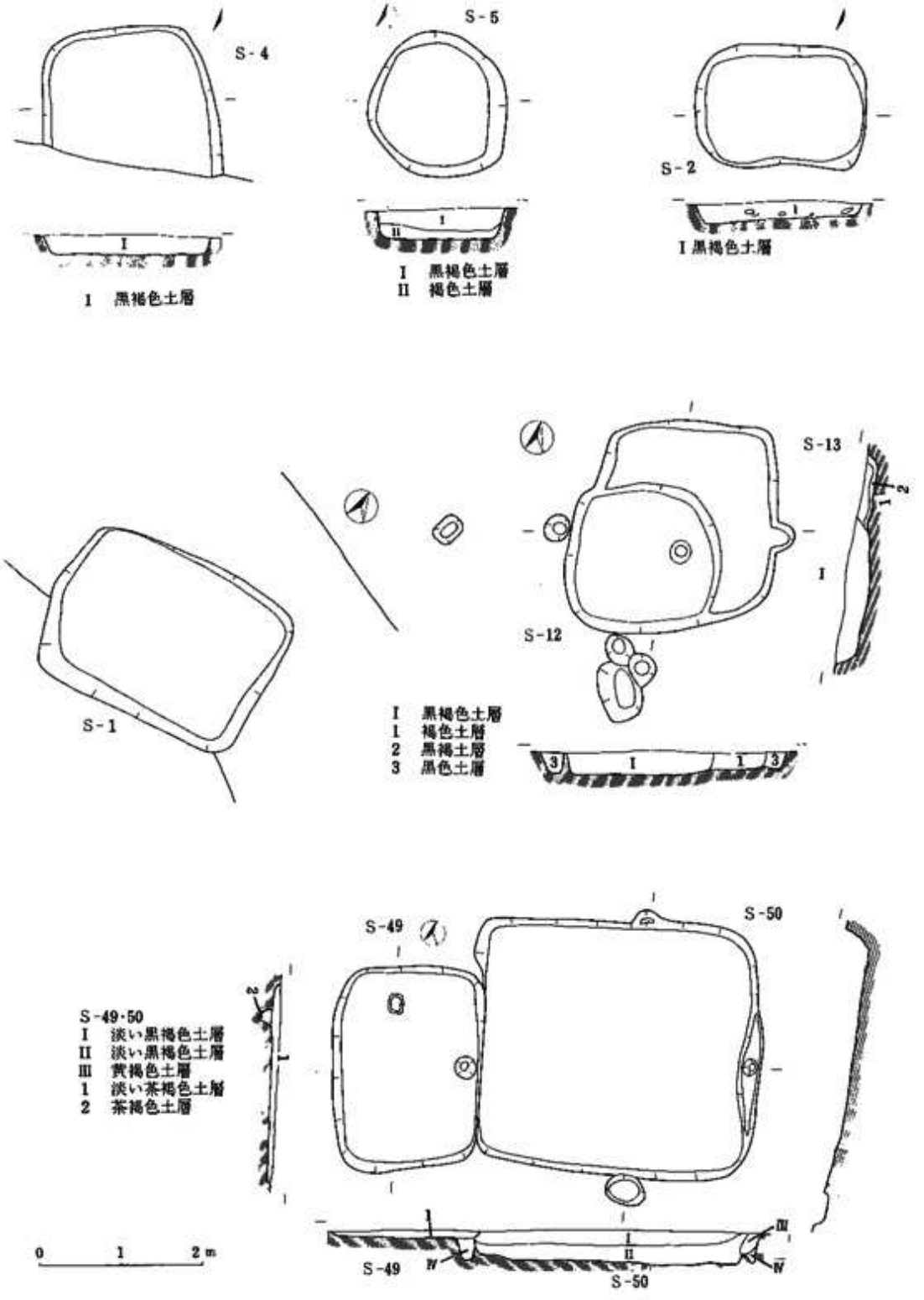


第92図　竪穴状遺構実測図(1：80)

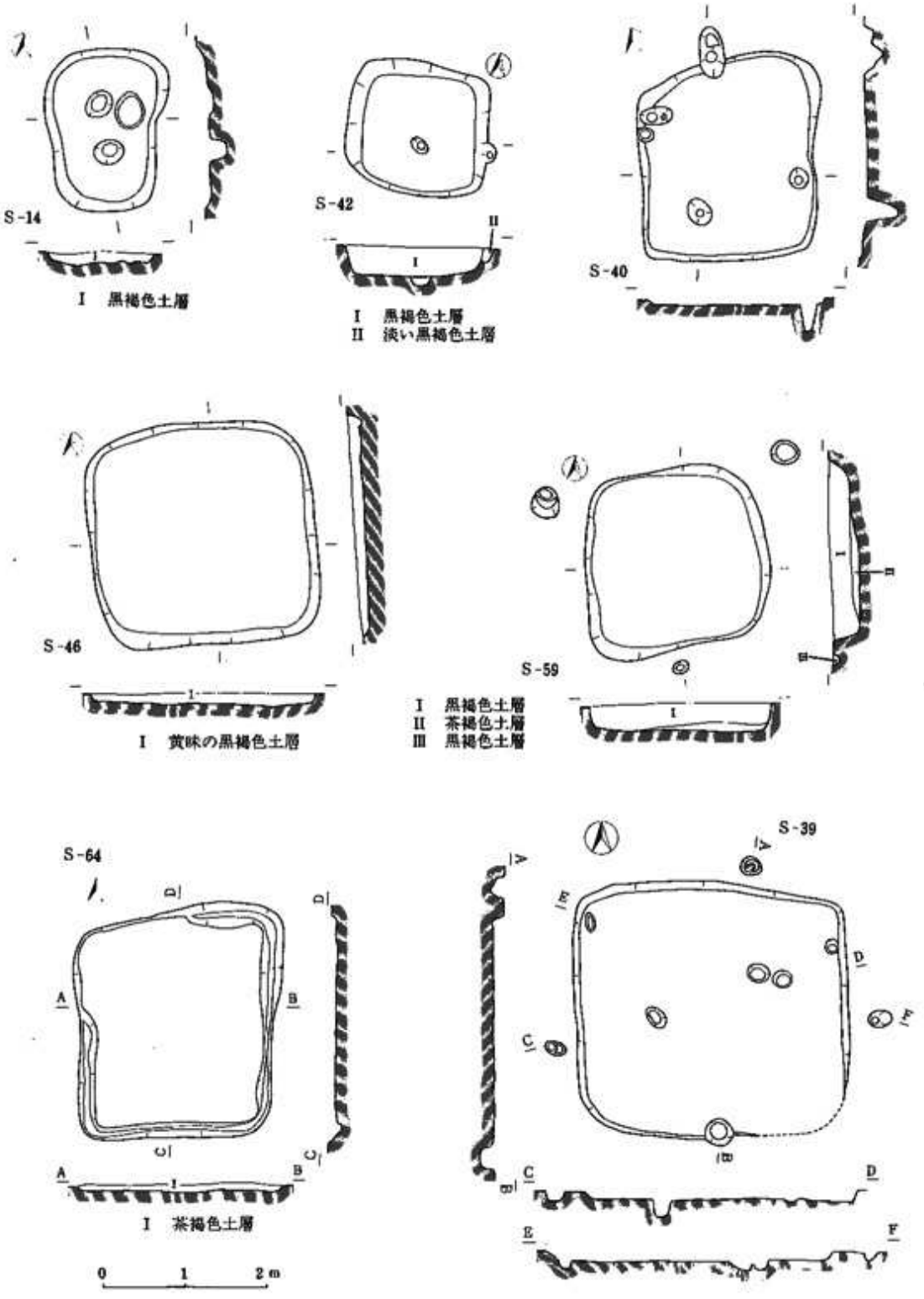
片・渡来銭（紹聖元宝・聖宋元宝・永楽通宝・元宝通宝・至和元宝）が検出されている。渡来銭は平安末期から中世にかけて日本で流通し、中国青・白磁は13～14世紀の搬入品である。

以上のことから、竪穴状遺構の性格を考えたい。類似する遺構について先学は、地下倉的要素をもつ倉庫址（國平　1976・1979)、工房址的性格をもつ南北朝庶民の家（林　1973)など様々に考えられている。確かに竪穴状遺構の性格は、上浜田遺跡の報告で國平氏が指摘された如く、「遺跡内で占地する位置や構造の相違によって見極めねばならない」問題であるが、本遺跡の場合、あまりに出土遺物が少ないため、明確な規定はできない。但し、底面があまり踏み固められていない状況が認められたことは、少なくとも人間が頻繁に出入りする施設（住居）ではないと言い得ようし、柱穴を伴う例からみると簡略な建物であったと考えておくのが妥当であろう。

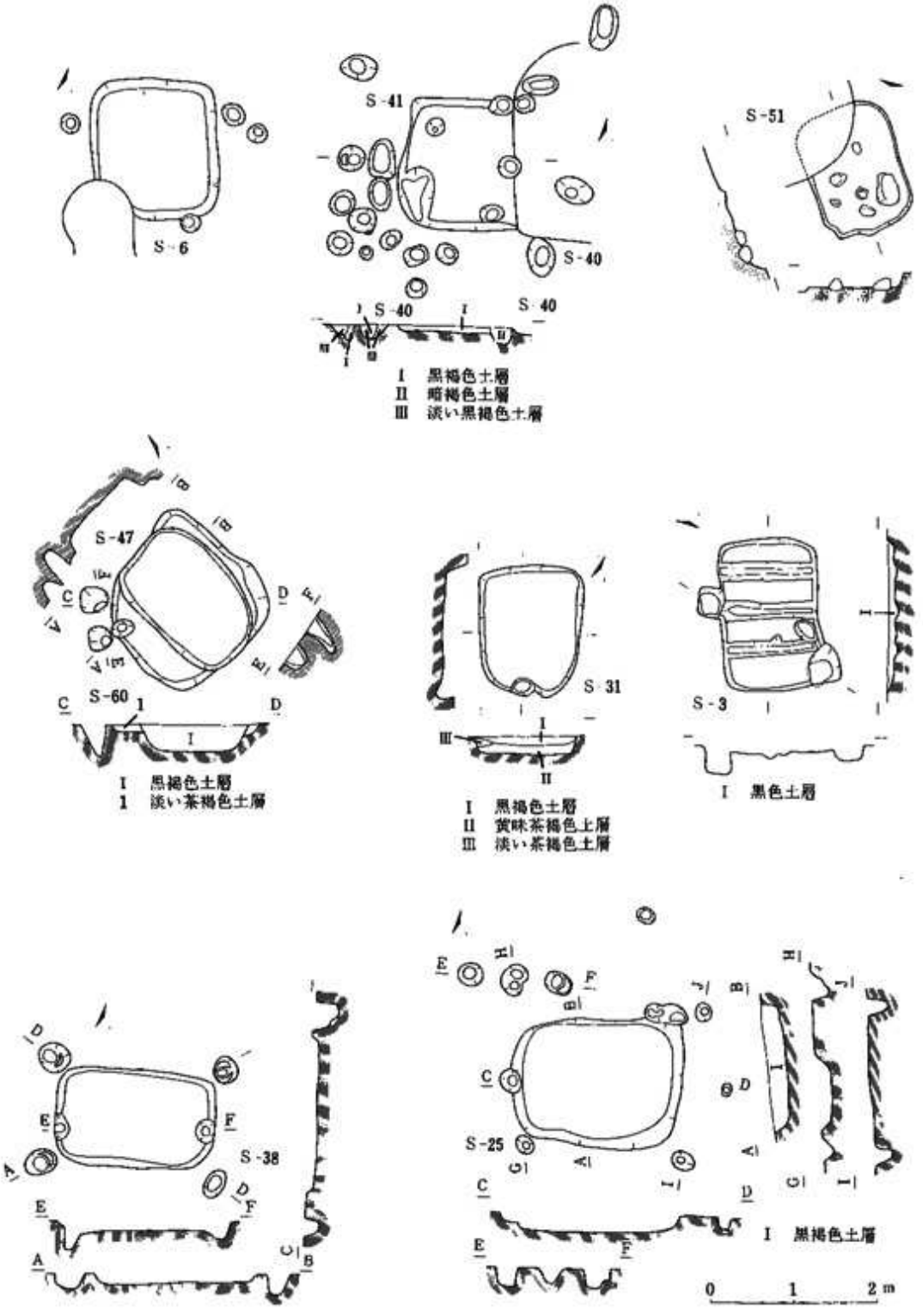
（小山岳夫）



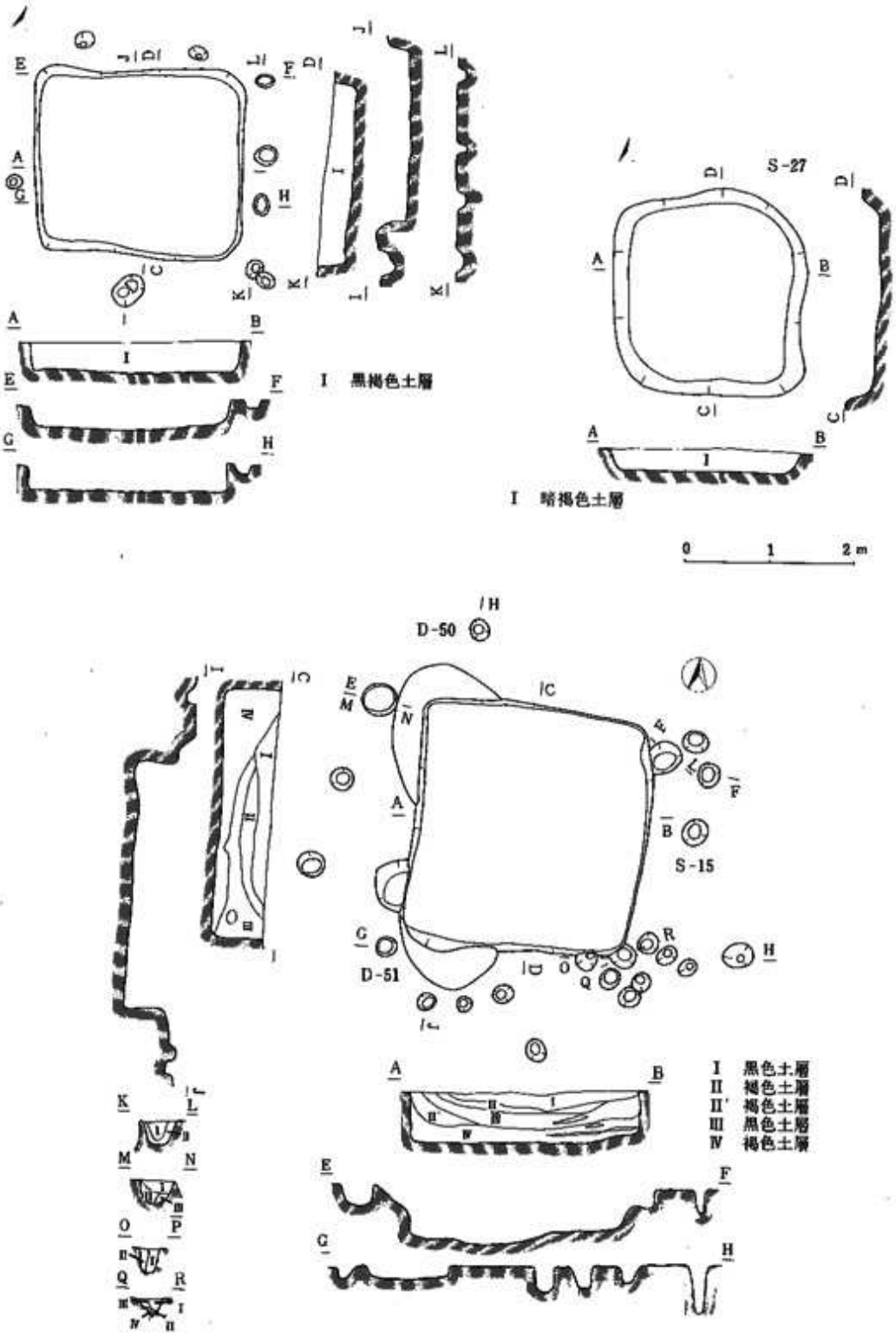
第93図　竪穴状遺構実測図(1：80)



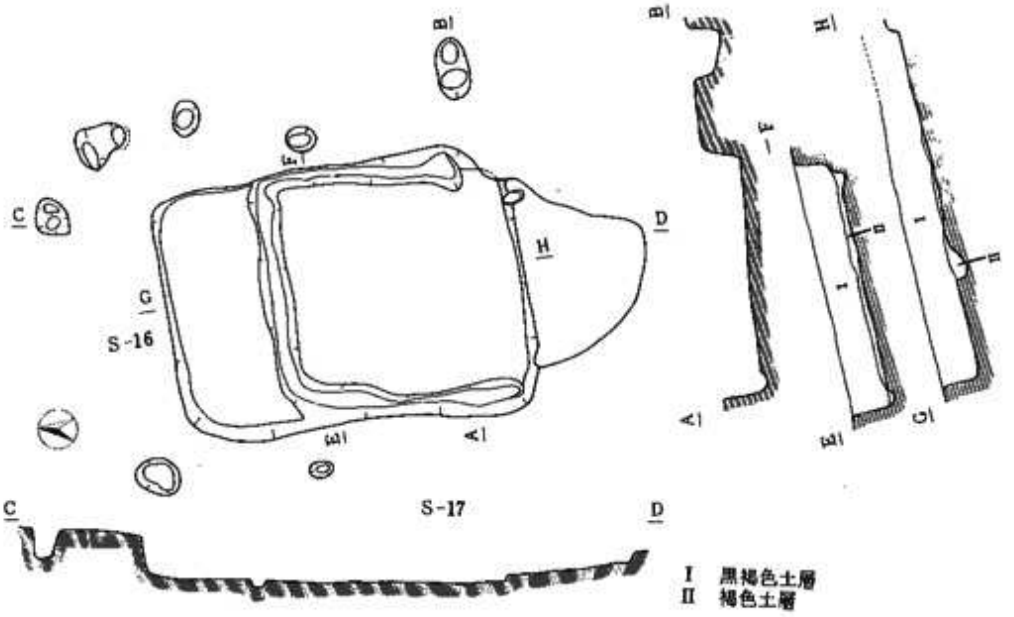
第94図　竪穴状遺構実測図(1：80)

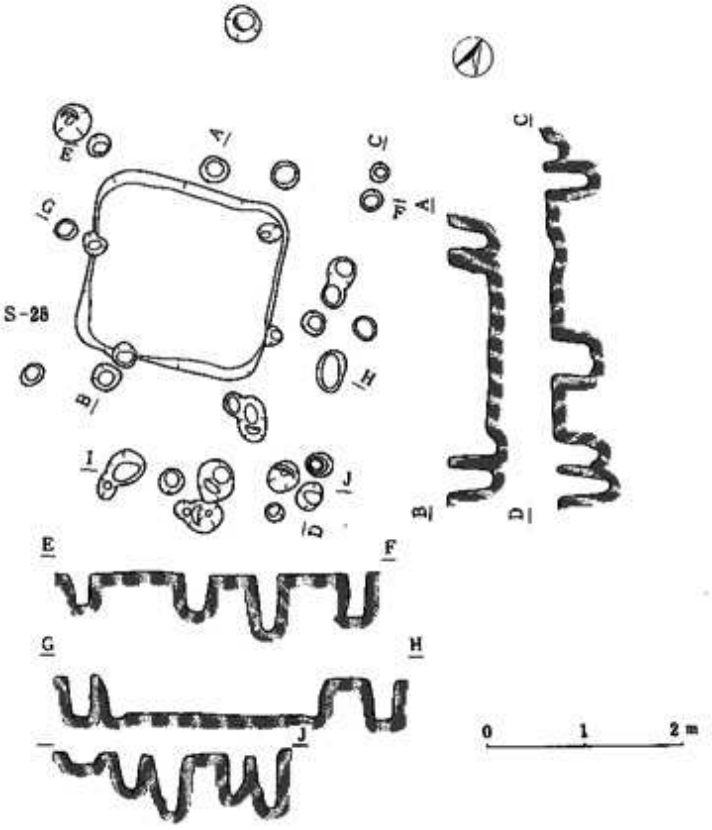


第95図　竪穴状遺構実測図(1：80)

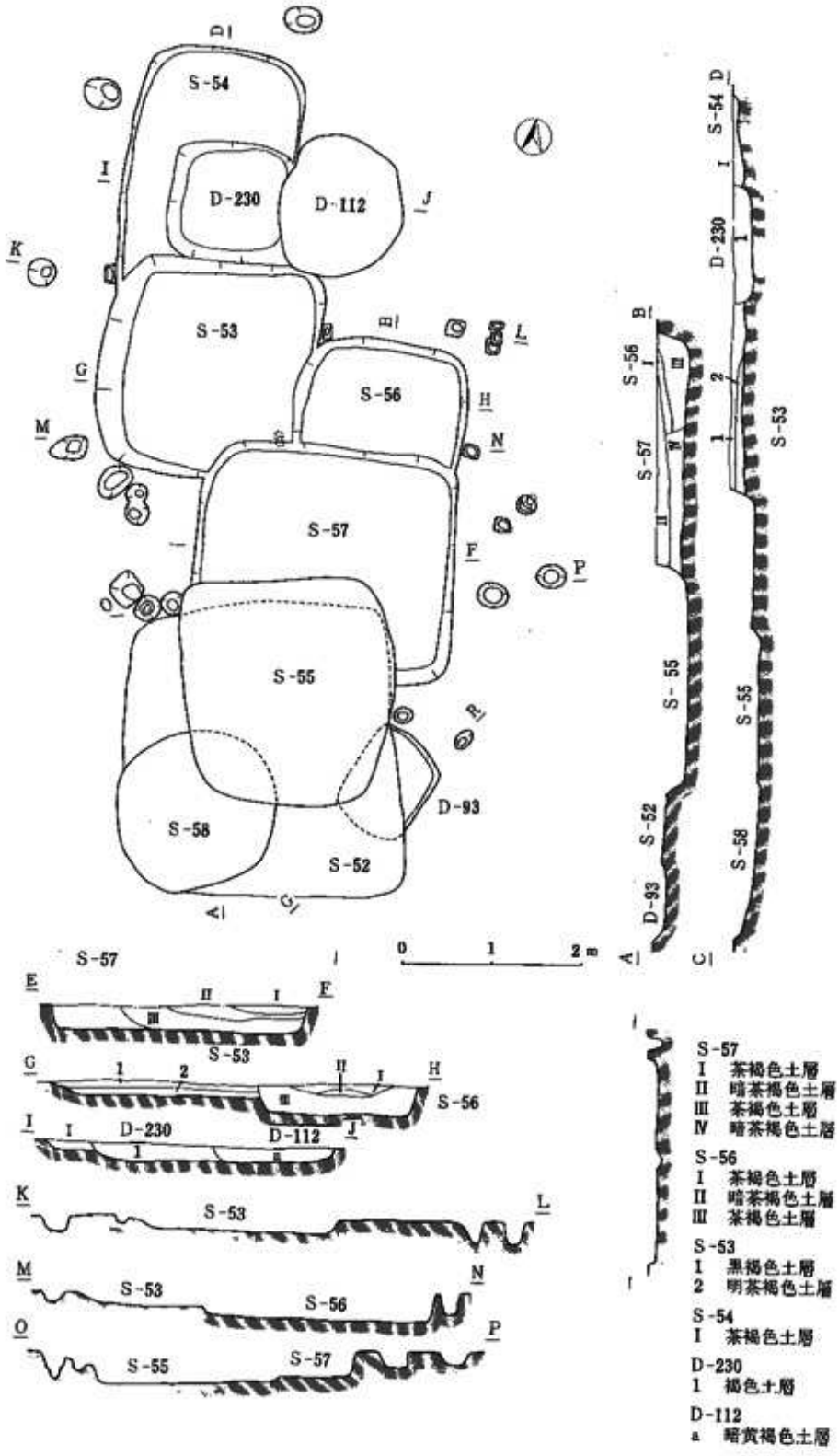


第96図　竪穴状遺構実測図(1：80)

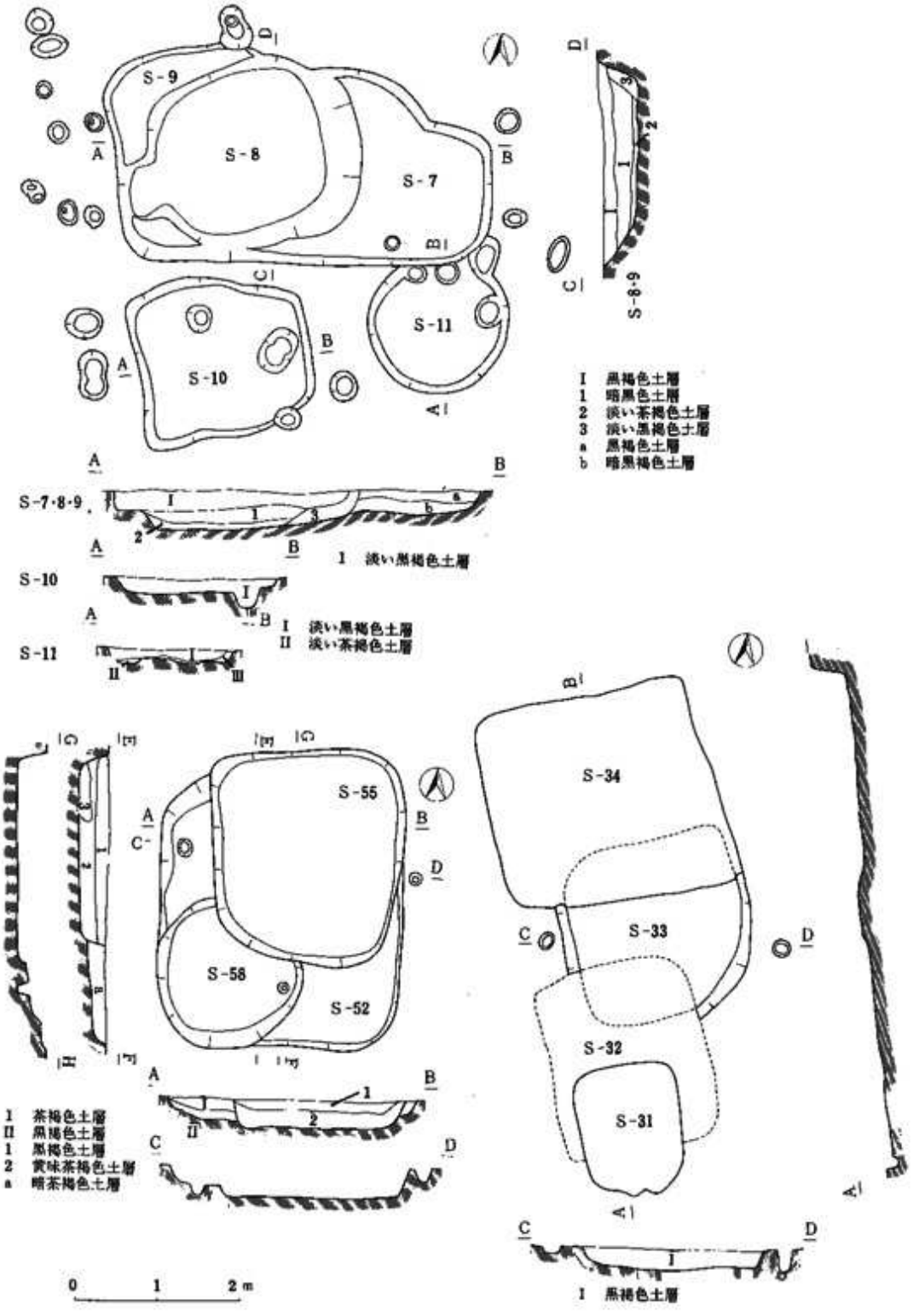




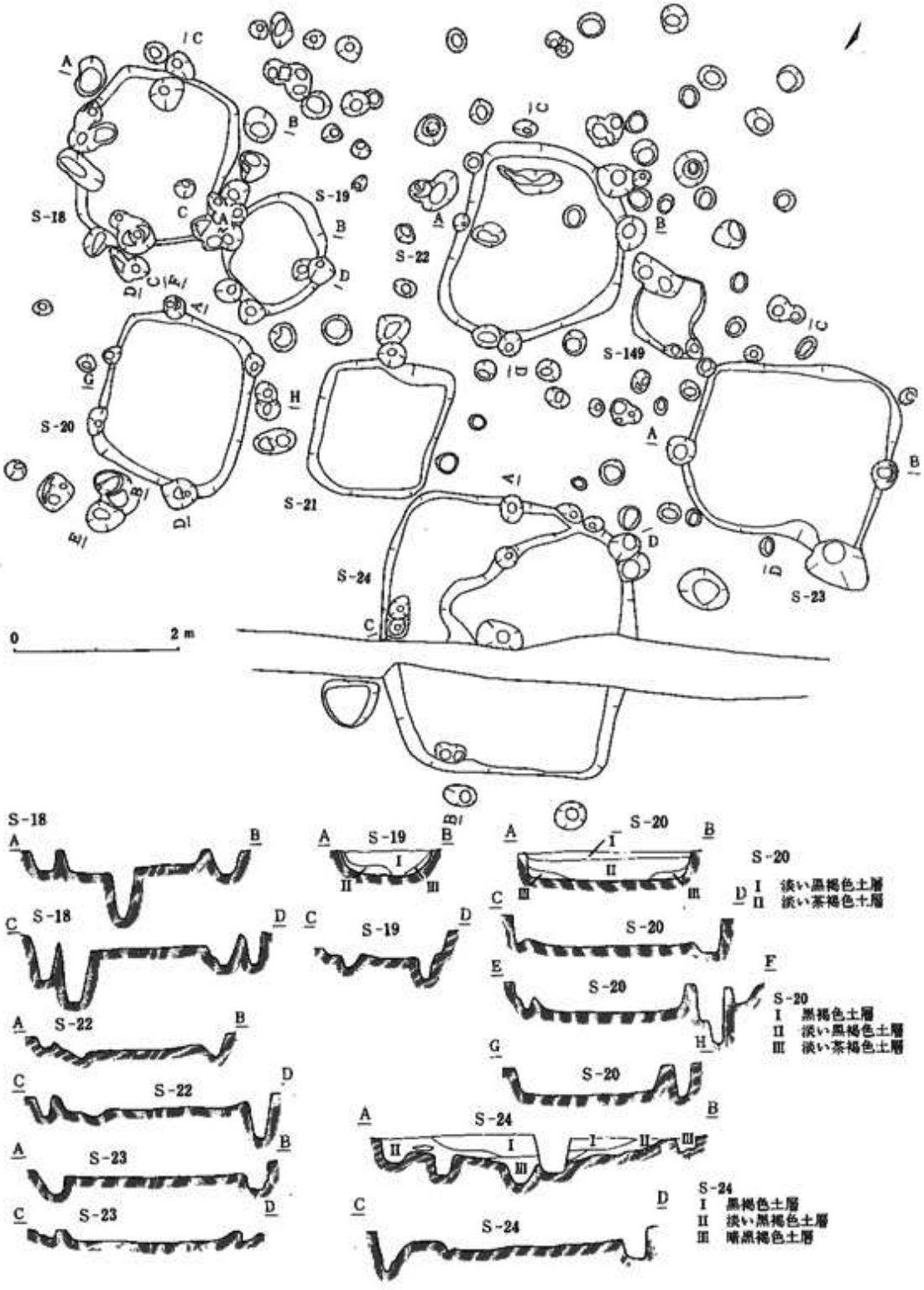
第97図　竪穴遺構実測図(1：80)



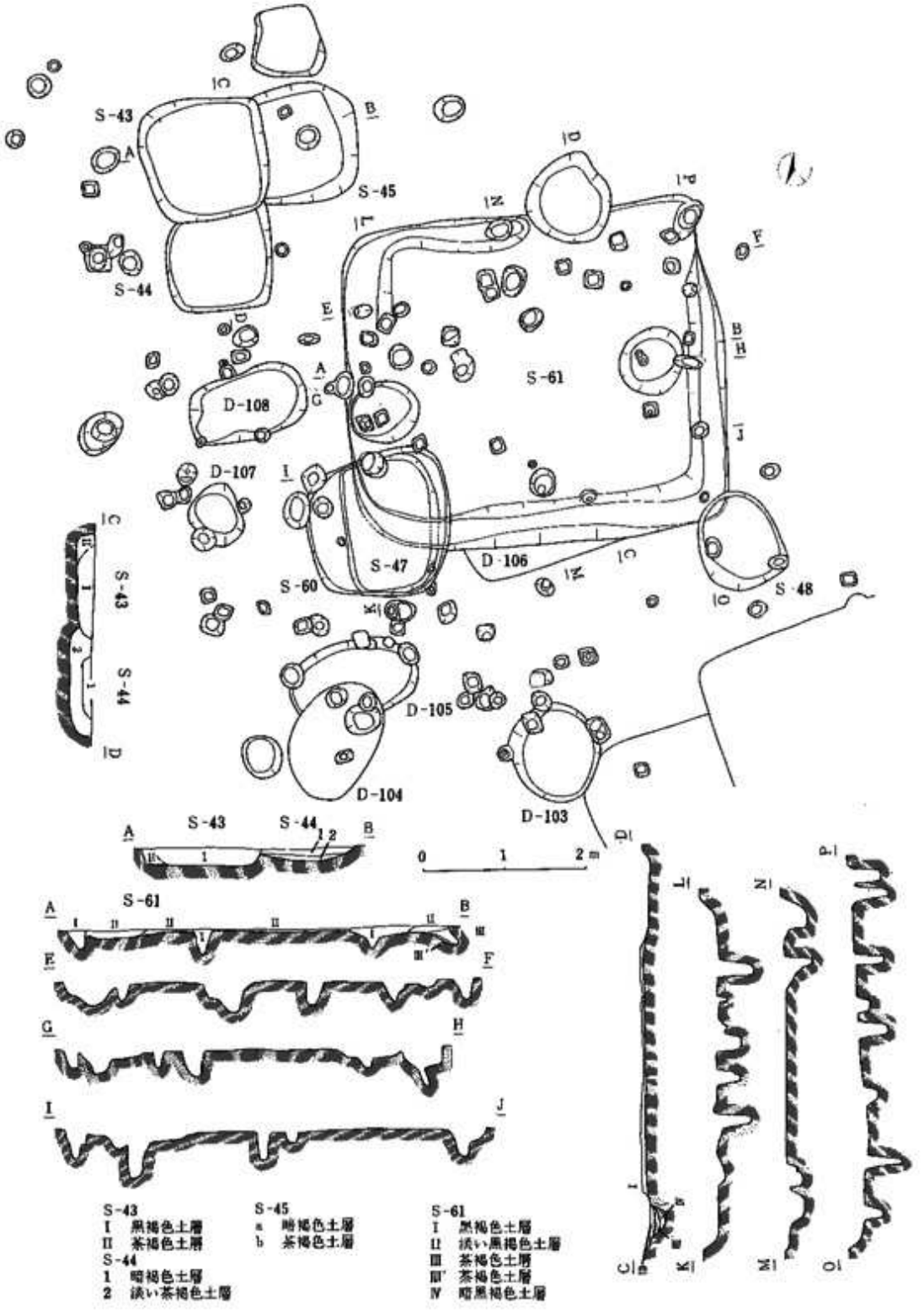
第98図　竪穴状遺構実測図　(1：80)



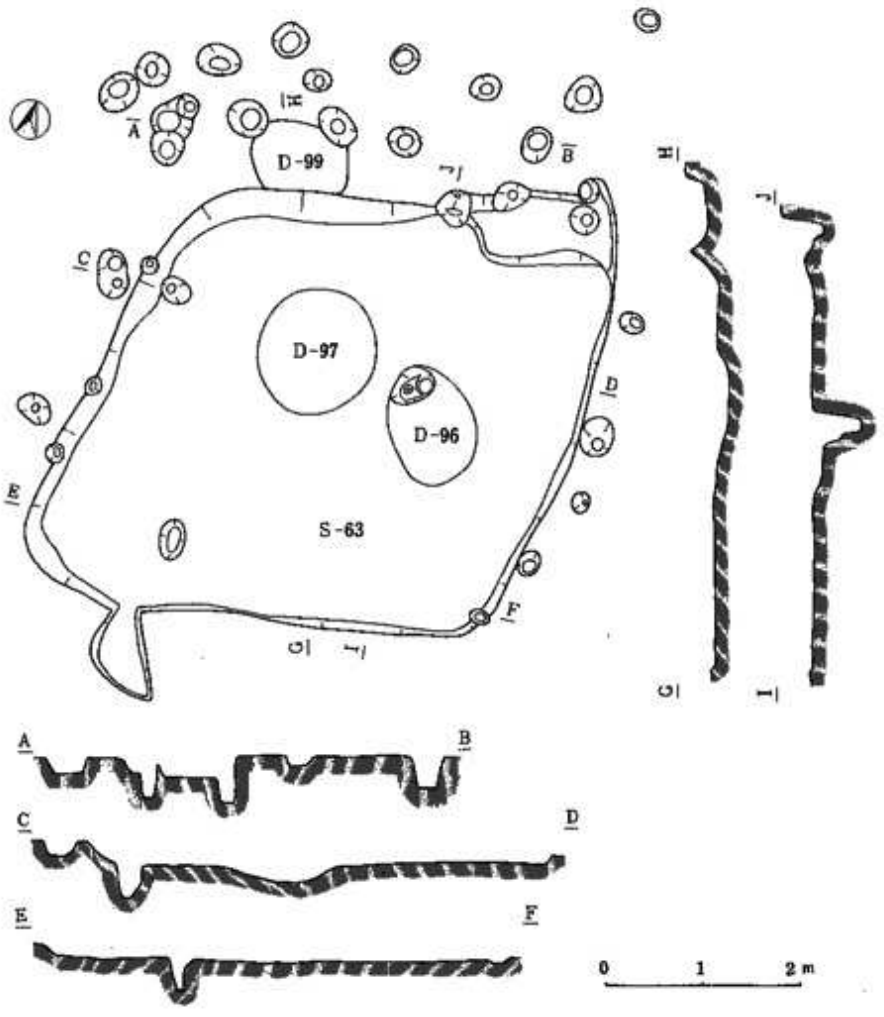
第99図　竪穴状遺構実測図(1：80)



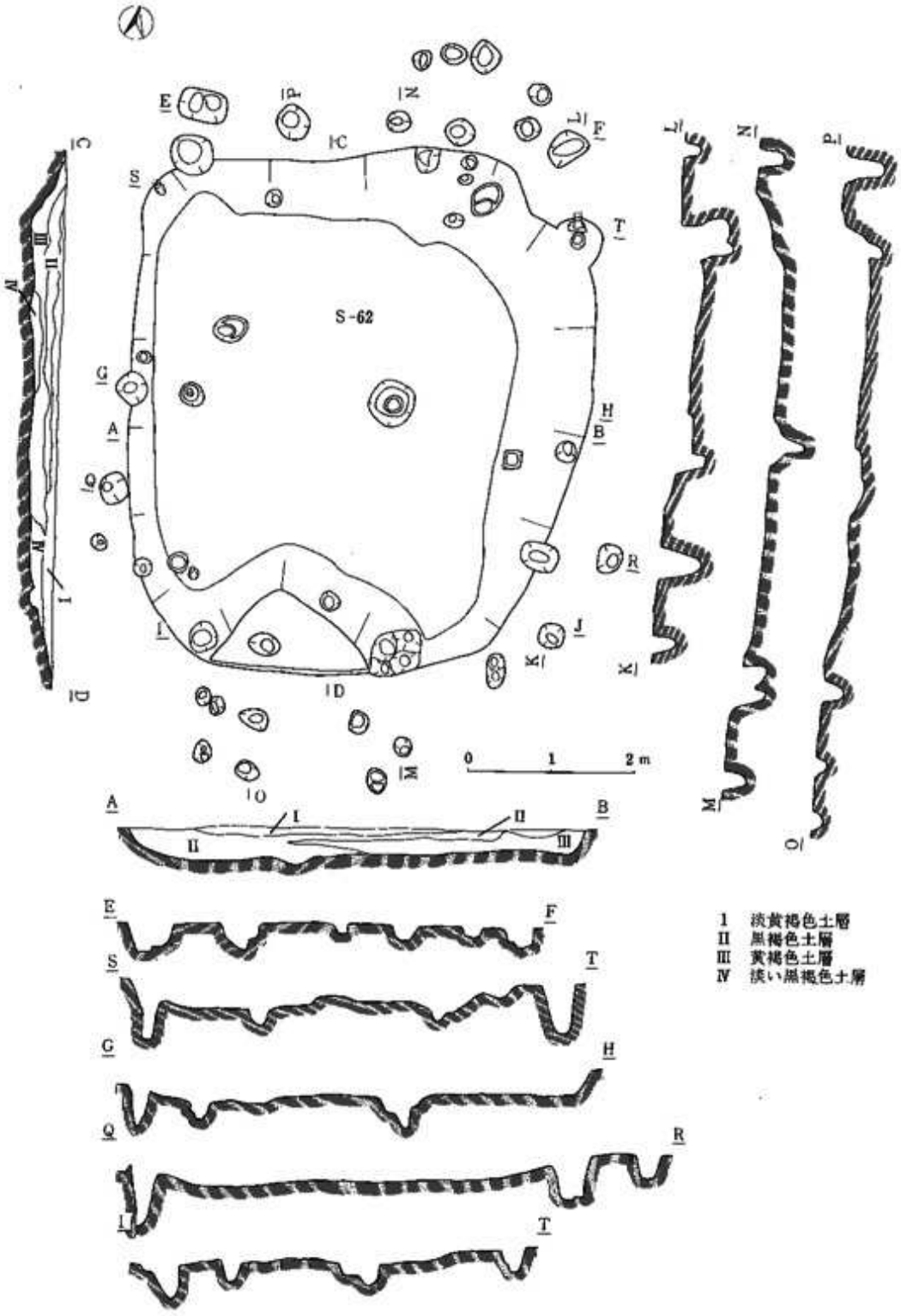
第100図　竪穴遺構実測図(1：80)



第101図　竪穴状遺構実測図(1：80)



第102図　竪穴状遺構実測図(1：80)



第103図　竪穴状遺構実測図(1：80)

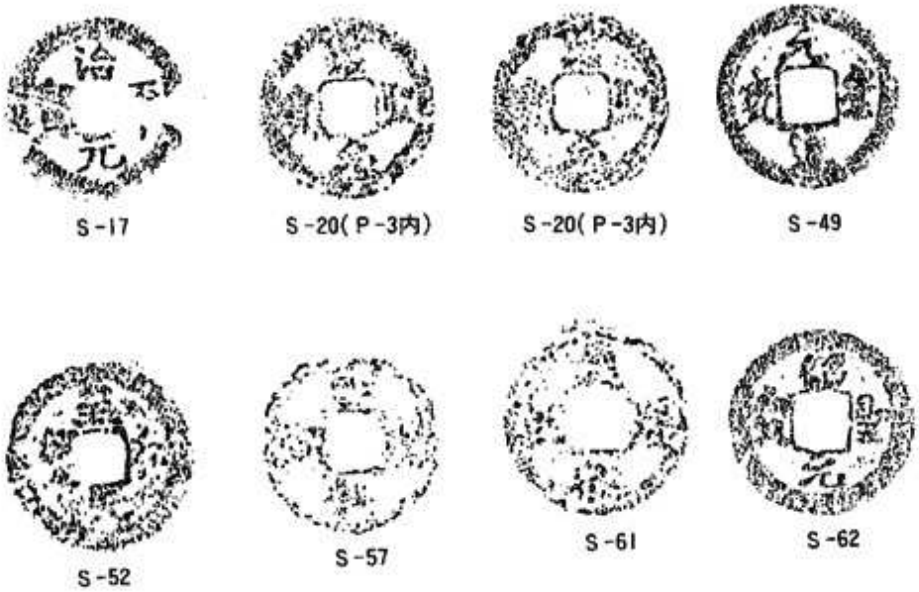
第32表　竪穴状遺構一覧表

遺構	発掘区 グリッド位置	単位・重複	平面プラン 形態	長(m)	短(m)	深(m)	主軸方向	覆土状態	遺物出土状況	備考	分類
S－1	Ⅰ区南東隅 ま－12 み－12、13 グリッド内	M－1を破壊している。	長方形	2.85	2.09		N－90°	底面平坦			ⅠA
S－2	Ⅱ区南西隅 り－22、23 グリッド内		長方形	2.09	1.5	0.18	N－84°E	1層(ロームブロック、炭化物散在)第93図参照 人為的埋土、底面平坦			ⅠA
S－3	Ⅱ区南西隅 る－23、24 グリッド内	ピットによって二カ所破壊をうけている。	長方形	1.89	1.2	0.06	N－78°E	1層(ローム粒子、パミス、炭)第95図参照 底面凹凸			ⅡA
S－4	Ⅱ区南西隅 れ－22、23 み－22、23 グリッド内	工事により、すでに南端部破壊をうけている。	長方形？		2.11	0.14	N－11°W	1層(ローム粒子、小石炭)第93図参照 底面平坦、凹凸			ⅠA
S－5			隅丸方形	1.75	1.68	0.35	N－10°W	2層 第93図参照 底面平坦			ⅡB
S－6	Ⅱ区南端中央部 ら－32、33 り－32、33 グリッド内	D－1面に南西隅破壊をうけている。	方　形	1.68	1.5		N－14°W		須恵器小片(フク土) 須恵坏小片(フク土) 陶器壺小片(フク土)		ⅡB
S－7	Ⅱ区南端中央部 り－35グリッド内	S－8、9に西破壊をうけている。 S－11を破壊している。	不整長方形		2.34	0.27	N－90°	2層 第99図参照 底面平坦	須恵壺？唇部小片 (フク土)		ⅠC
S－8	Ⅱ区南端中央部 ら－34、35 り－34、35 グリッド内	S－9に上面約十破壊をうけている	方　形	2.04	2.21	0.48	N－72°E	2層 第99図参照 底面平坦			ⅠB
S－9	Ⅱ区南端中央部 ら－34 り－34、35 グリッド内	S－7、8を破壊する。	長方形？		2.54	0.23	N－90°	1層(ローム粒子、小石炭、炭化物、ロームブロック散在)第99図参照 人為埋土 底面平坦			ⅠA
S－10	Ⅱ区南端中央部 り－34 る－34、35 グリッド内		不整方形	2.06	1.95	0.09	N－77°E	1層(ローム粒子、小石炭) 第99図参照 底面若干凹凸			ⅠC
S－12	Ⅱ区南端中央部 れ－34グリッド内	S－13を破壊している。	方　形	1.89	1.84	0.3	N－86°E	1層(炭化物、小石若干炭) 第93図参照 底面平坦	土師甕底部小片(フク土) 須恵器小片(フク土) 須恵(蓋)底部小片 (フク上)		ⅡB
S－13	Ⅱ区南端中央部 る－34 れ－34グリッド内	S－12に破壊をうけている。	方　形	2.41	2.2	0.2	N－4°W	1層(ローム粒子多量炭、炭化物若干炭) 第93図参照 底面平坦		東・西周壁中央外側にあるピットはS－13に伴うと考えられる。	ⅠB
S－14	Ⅱ区南端中央部	底面中央、3つのピットに破壊をうけている。	不整長方形	1.97	1.47	0.14	N－5°W	1層 第94図参照 底面やや凹凸			ⅡA
S－15	Ⅱ区中央やや南側 め－38、39 も－38、39 グリッド内	北西隅、南西隅、D－50、D－51に破壊をうけている。	方　形	2.95	2.78	0.63	N－0°	4層(ロームブロック、黒色土ブロック散在) 第96図参照、人為埋土 底面ゆるやかな凹凸	土師小片(フク土) 青磁(蓋)破片(ピット内) 須恵小片(フク土)	周囲より多数ピット検出	ⅠB
S－16	Ⅱ区中央 ま－37、38 み－37、38 グリッド内	S－17との重複関係不明	方　形？		3.58	0.42	N－10°W	底面平坦		比較的ピットが竪穴と隣接に配置されている。	ⅠB
S－17	Ⅱ区中央 み－37、38 む－37グリッド内	S－16との重複関係不明	方　形	3.77	3.62	0.47	N－10°W	第97図参照 底面平坦	土師小片(フク土) 渡来銭治平元宝(表) (フク土)	比較的ピットが竪穴と隣接に配置されている。	ⅠB
S－18	Ⅱ区中央 は－39、40 ま－39、40 グリッド内		方　形	2.08	1.64	0.24	N－3°W	底面平坦	須恵坏小片(フク土) 土師小片(フク土)	周囲及び遺構内よりピット多数検出。	ⅠB
S－19	Ⅱ区中央 ま－40グリッド内		方　形	1.32	1.28	0.27	N－45°W	2層(壁崩落流れこみ) 第100図参照 底面平坦		周囲及び遺構内よりピットが多数検出。	ⅡB

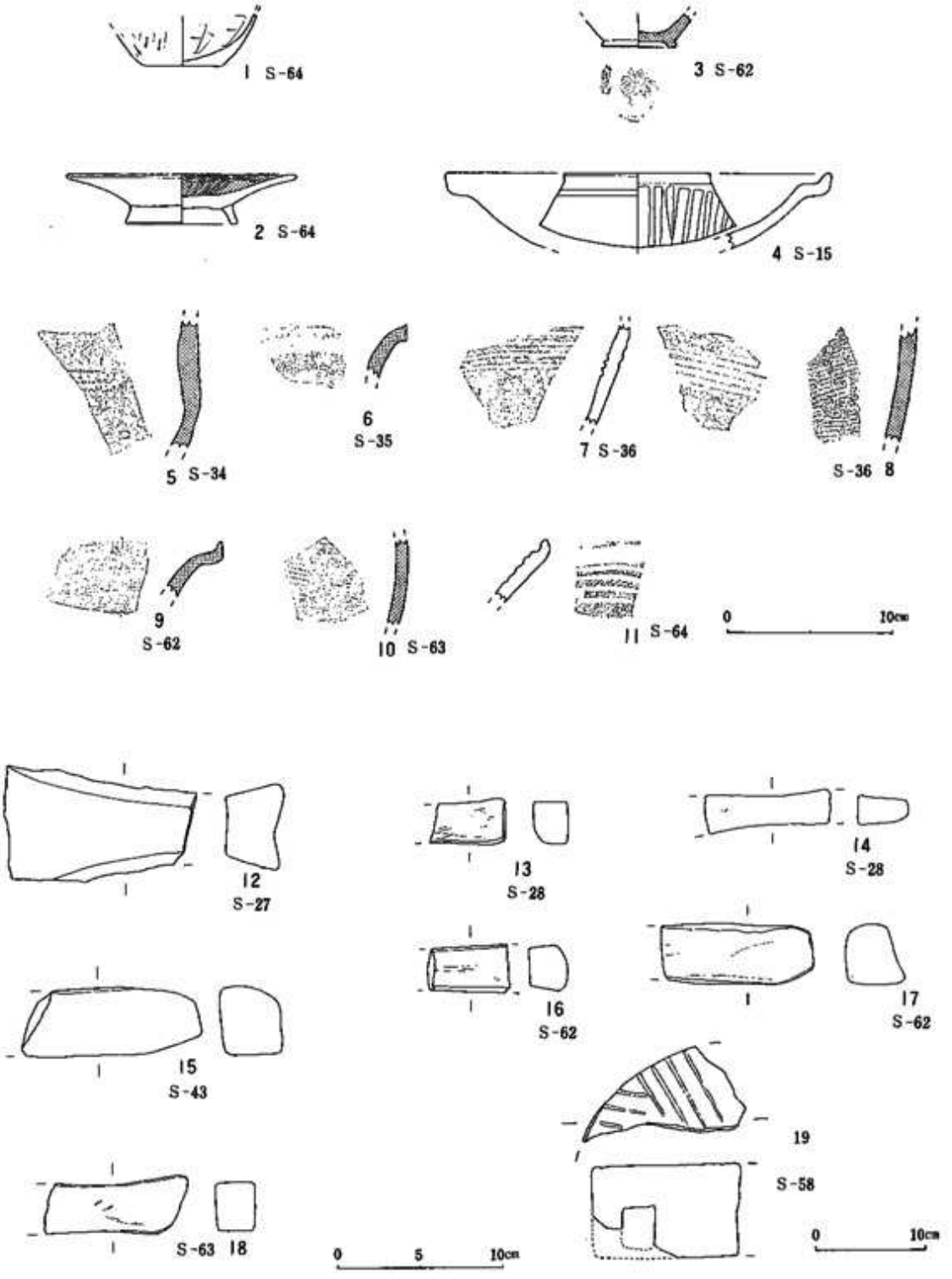
遺構	発掘区グリッド位置	平面・重複	平面プラン 形態	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)	主軸方向	覆土状態	遺物出土状況	備考	分類
S-20	II区中央 ま—40 み—40グリッド内		方形	2.02	1.79	0.37	N-0°	3層（壁崩落流れこん）第100図参照 自然堆積 底面平坦	青磁(碗)破片(フク土) 須恵器1点（S—20に関係すると思われるピット内より） 須恵器小片3(フク土)	周囲及び壁内よりピットが多数検出	IB
S-21	II区中央 ま—41 み—41グリッド内		方形	1.65	1.53	0.29	N-0°	底面平坦		周囲よりピットが多数検出	IIB
S-22	II区中央 ほ—41 ま—41グリッド内		不整方形	2.29	2.14	0.21	N-16°W	1層(ローム粒子、炭化物混) 底面平坦	青磁（S—22に関すると思われるピット内より）	周囲及び壁内よりピットが多数検出	IC
S-23	II区中央 ま—42、43 み—42、43 グリッド内		方形	2.43	2.06	0.2	N-86°E	底面平坦		東西南北壁、中央部壁際、壁外にあるピットは本遺構に伴う物と考えられる。その他周囲にも多数のピットが検出	IB
S-24	II区中央 み—41、42 む—41、42 グリッド内	M—13に破壊されている。	方形	3.3	2.96	0.2	N-7°W	3層(炭化物混、ロームブロック散在) 第100図参照 人為堆積、底面平坦	須恵器小片2(フク土) 土師器小片1(フク土) 陶土師器小片3(フク土)	周囲及び壁内よりピットが多数検出	IB
S-25	II区中央やや東側 ま—44、45 グリッド内		長方形	2.07	1.55	0.26	N-83°W	1層（ロームブロック散在）第95図参照 人為堆積 底面平坦	瀬戸(碗子)破片(フク土)	北板的ピットが整然と配置されている。	IA
S-26	II区中央やや東側 ひ—44、45 ふ—44、45 グリッド内		方形	2.4	2.23	0.36	N-75°W	1層 第96図参照 底面平坦	土鍋小片2(フク土) 須恵器小片2(フク土)	周囲よりピットが検出、東壁外底様上にピットが多数検出	IB
S-27	II区東端部中央 ほ—49グリッド内	H—8住居東部破壊	方形	2.62	2.3	0.27	N-0°	1層（ロームブロック散在）第96図参照 人為堆積 底面平坦	砥石(砂岩質、北西壁隅上部より) 常滑(大甕)破片(フク土) 須恵器小片1(フク土) 土師小片1(フク土)		IB
S-28	II区東端部中央 み—50グリッド内		方形	1.94	1.83	0.37	N-76°E	底面平坦	砥石2(フク土) 土師器小片4(フク土) 土師器底部破片1（S—28に関係あると思われるピット内より）	周囲及び壁内よりピットが多数検出	IB
S-29	II区東端部中央やや内側 む—47グリッド内		方形			0.3		底面平坦	須恵器小片1(フク土)		
S-30	II区東端部中央やや内側 む—47、48 め—47、48 グリッド内		隅丸方形	1.7	1.5	0.46	N-9°W	2層 第92図参照 底面平坦		突出部あり	IIB
S-31	II区東端部中央やや内側 む—47 や—47グリッド内	S—32南側を破壊	方形	1.49	1.25	0.95	N-19°W	2層 第95図参照 自然堆積 底面平坦	須恵器小片1(フク土) 土師器小片1(フク土)		IIB
S-32	II区東端部中央やや内側 む—47 や—47グリッド内	S31に南側を破壊され、S—33南西側を破壊。	長方形？	(2.43)	(1.96)		N-18°W				IA
S-33	II区東端部中央やや内側 む—47、48 グリッド内	S—32に南西側をS—34に北側を破壊されている。	方形		2.27	0.32	N-12°W	1層 第96図参照 底面平坦	土鍋小片1(フク土)		IB
S-34	II区東端部中央やや内側 む—47グリッド内	S—33北側を破壊	方形	3.59	2.85	0.45	N-10°E	1層（ロームブロック散在）第92図参照 人為的堆積 底面平坦	常滑(壺)破片(フク土) 須恵器(碗)破片(フク土) 須恵器底片散点(フク土) 須恵器小片2(フク土) 土師器小片2(フク土)		IB
S-35	II区東端部中央やや内側 め—46、46 グリッド内	上城に破壊されている。	方形	2.34	2.28	0.29	N-82°E	3層（ロームブロック散在）第92図参照 人為的堆積 底面平坦	常滑(壺)破片(フク土) 須恵小片1(フク土) 土師器小片2(フク土)		IB
S-36	II区東端部中央やや内側 む—46グリッド内		不整方形	1.77	1.64	0.42	N-19°W	2層 第92図参照 底面平坦	縄文浅鉢1片(フク土)	西壁にテラスあり	IIB
S-37	II区東端部中央やや内側 む—45グリッド内		方形	2.14	2.1	0.47	N-81°E	1層 第92図参照 底面平坦			IB

遺構	発掘区 グリッド位置	単独・重複	平面プラン 形態	長(m)	幅(m)	深(m)	主軸方向	覆土状態	遺物出土状況	備考	分類
S－38	Ⅱ区中央 み－42、43 む－42、43 グリッド内		長方形	1.87	1.17	0.11	N－81°－E	底面平坦		4壁隅外に4つのピット 北西隅壁中央部にピット 壁際と配置されている。	ⅡA
S－39	Ⅱ区中央やや南側 も－42、43 や－42、43 グリッド内	D－120を破壊	方形	3.29	3.15	0.14	N－90°	底面平坦		周囲及び遺構内にピット検出	ⅠB
S－40	Ⅱ区中央やや南側 め－40、41 グリッド内	S－41東壁破壊	長方形	3.5	2.2	0.04	N－3°－E	底面平坦		遺構内よりピット検出	ⅠA
S－41	Ⅱ区中央やや南側 め－40グリッド内	S－40に東壁破壊されている。	方形		1.67	0.07	N－85°－E	1層（炭化物混） 第95図参照 底面平坦	流布銭？ 永楽通宝（S－41に関係あると思われるピット内）	周囲及び遺構内にピット多数検出	ⅡB
S－42	Ⅱ区中央やや南側 や－40、41 グリッド内	D－125破壊	方形	1.7	1.63	0.36	N－87°－W	1層 第94図参照 底面平坦		ピット2個検出	ⅡB
S－43	Ⅱ区南東端部 よ－44 ら－44グリッド内	S－44の北壁、S－45の西壁破壊	方形	1.65	1.41	0.23	N－90°	2層 第101図参照 底面平坦	礫石（フク土）	東壁、西壁外側にピット検出	ⅡB
S－44	Ⅱ区南東端部 ら－44グリッド内	S－43に北壁破壊されている。	方形		1.32	0.51	N－0°	2層 第101図参照 底面平坦	土師器小片1（フク土）	東壁、西壁、南壁外側中央部にピット検出	ⅡB
S－45	Ⅱ区南東端部 ら－44、45 グリッド内	S－43に西壁破壊されている。	方形		1.46	0.27	N－90°	2層 第101図参照 底面平坦	須恵小片1（フク土）		ⅡB
S－46	Ⅱ区南東端部 よ－45 ら－45グリッド内		方形	2.71	2.61	0.28	N－15°－W	1層（ロームブロック散在）　第94図参照 人為堆積 底面平坦			ⅠB
S－47	Ⅱ区南東端部 り－44、45 グリッド内	S－65中央部破壊	長方形	1.63	1.17	0.07	N－0°	1層（ロームブロック散在） 人為堆積 底面平坦			ⅡA
S－48	Ⅱ区南東端部 り－46 る－46グリッド内	S－61南東隅破壊	隅丸長方形	1.2	1.02	0.31	N－32°－W	底面平坦			ⅡA
S－49	Ⅱ区南東端部 る－45、46 れ－45、46 グリッド内	S－50西壁破壊	長方形	2.49	1.7	0.11	N－16°－W	1層 第93図参照 底面平坦	洪武銭、元豊通宝（真）		ⅠA
S－50	Ⅱ区南東端部 る－46、47 れ－46グリッド内	S－49に西壁破壊されている。 S－51南西隅破壊	方形	3.44	3.1	0.35	N－75°－W	2層 第93図参照	土師小片（フク土） 灰釉陶器小片（フク土） 須恵器小片4（フク土） 土師器小片3（フク土）	東、西、南、北壁中央外側は壁中にピット検出	ⅠB
S－51	Ⅱ区南東端部 り－47 る－47グリッド内	S－50に南西隅破壊されている。	長方形		1.1	0.25	N67°－E	底面平坦	土師皿小片数個（フク土） 須恵坏底部破片（フク土） 須恵小片数個（フク土）	底面、数個の石散在	ⅡA
S－52	Ⅱ区南東端部 ら－46、47 り－46、47 グリッド内	S－55、S－56、D－93に破壊されている。	方形	3.07	3.0	0.11	N－12°－W	2層 第99図参照 底面平坦	洪武銭、聖和元宝（真） 骨粗小片1（フク土） 土師小片2（フク土） 須恵小片2（フク土） 土師皿小片（フク土）		ⅠB
S－53	Ⅱ区南東端部 よ－46、47 ら－46、47 グリッド内	S－56、S－57、D－112に破壊されている。	方形	2.4	2.29	0.15	N－2°－W	2層 第98図参照 底面平坦	須恵坏小片3（フク土） 須恵壺つまみ部（フク土）		ⅠB
S－54	Ⅱ区南東端部 ゆ－46、47 よ－46グリッド内	D－112、D－230に破壊されている	長方形		1.81	0.2	N－0°	1層 第98図参照 底面平坦			ⅠA
S－55	Ⅱ区南東端部 ら－47 り－47グリッド内	S－52、S－57、S－58、D－95を破壊	方形	2.5	2.33	0.37	N－13°－W	2層（炭化物混） 第99図参照 底面平坦		東、西、南、北壁中央外側にピット検出	ⅠB

遺構	発掘区 グリッド位置	平面・断面	平面プラン 形態	長(m)	幅(m)	深(m)	主軸方向	埋土状態	遺物出土状況	所考	分類
S—56	II区南東端部 よ—47 ら—47グリッド内	S—53、57を破壊 S—58、D—93を破壊	長方形		1.93	0.41	N-8°-W	2層 第98図参照 底面平坦	須恵小片1(フク土)	各コーナー外側に四角に張りこんだピット検出	II A
S—57	II区南東端部 ら—46、47 グリッド内	S—53を破壊、S—55、S—56に破壊されている。	方形	2.89	2.55	0.3	N-85°-E	2層 第98図参照 底面平坦	滑車鉄、鞍金元宝(真)	東、西壁外側にピット検出	I B
S—58	II区南東端部 り—47、48 る—47、48 グリッド内	S—52を破壊、S—55に破壊されている。	隅丸方形		1.73	0.33	N-31°-W	1層 第99図参照 底面平坦	石臼破片 須恵坏小片2(フク土)		II B
S—59	II区南東端部 ゆ—47、48 よ—48グリッド内		方形	2.33	2.22	0.33	N-66°-W	2層(炭化物混) 第94図参照 底面平坦	土師小片2(フク上) 須恵小片2(フク土)		I B
S—60	II区南東端部 り—44、45 グリッド内	S—47に中央部破壊されている。	方形	1.8	1.57	0.12	N-0°	1層 第95図参照 底面平坦		北、南壁中央部外側、壁中にピット検出	II B
S—61	II区南東端部 ら—45、46 り—45、46 グリッド内	北壁中央を土壁に南壁中央D—106に西南隅S—47、S—60に、東南隅S—48に破壊。	方形	4.6	3.99	0.04	N-90°	1層(炭化物微少) 第101図参照 底面平坦	滑車鉄(フク土) 灰釉小片1(フク土) 土師焼小片5(フク上) 須恵坏小片6(フク上)	東西南壁下、北壁西側下に粗雑焼土 遺構内に多数方形を呈したピット検出	
S—62	II区南東端部内側 よ—40、41、42 ら—40、41、42 り—40、41、42 グリッド内		不整方形	5.9	5.08	0.2	N-12°-W	4層(ローム・ブロック散在) 第103図参照 底面ゆるやかな凹凸	煙管雁、紙深帯金具(フク土)、刀子(フク上)、方形図(フク土)、内面(図外)須恵坏(フク上)、土師小片2(フク上)、須恵小片1(フク上)、土師小片2(フク上)	東西南北壁端部及び壁中にベッド状部と周囲されてピットが検出。 底面やや凹凸。 東壁中央部やゆるやかな傾斜をもって底面に落ちこむ。	
S—63	II区南東端部内側 ら—39、40 り—38、39、40 グリッド内	中央をD—96、D—97に破壊され、D—99を破壊	不整方形	5.25	4.46	0.33	N-62°-W	底面平坦 第102図参照	砥石1(フク上) 土鍋1(フク土) 須恵坏小片1(フク土)	北東隅にベッド状部分あり 東、西壁中にピットが数個検出	
S—64	II区最南東端部 れ—49、50 ろ—49、50	南壁中央M—22、M—23に破壊されている。	方形	1.8	1.57	0.12	N-0°	底面平坦	釜(底面直上) 土師器底部(底面直上)	遺物の出土状況より平安時代と考えられる。	



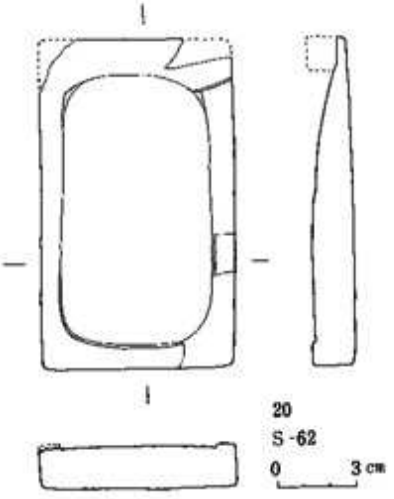
第104図　竪穴状遺構出土遺物(1：1)



第105図　竪穴状遺構出土遺物(19のみ1：6、他は1：4)

第33表　竪穴状遺構出土物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
105-1	甕	—— —— 4.6		外面　底部ヘラケズリ、胴下部経位のヘラケズリ 内面　底部ヘラナデ	胎土茶褐色 S－64内 完全実測
105-2	盤	〈13.9〉 2.8 6.5	高台付、体部浅く大きく外反する。	外面　体部ヨコナデ、付け高台 内面　黒色研磨	胎土黄褐色 S－64内 回転実測
105-4	青磁	〈24.9〉 —— ——			S－15内 破片実測



第106図　竪穴状遺構遺物(1：3)

第34表　竪穴状遺構出土遺物一覧表

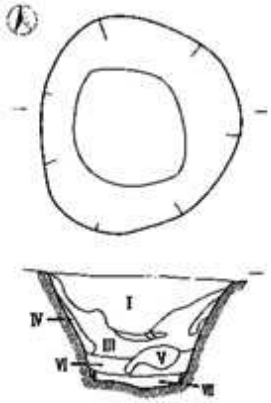
挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
105-12	砥石	(11.6)	7.1	3.2	S27
105-13	〃	(4.6)	2.8	2.1	S28出土
105-14	〃	(7.5)	2.3	3.1	S28出土
105-15	〃	(10.8)	4.0	3.7	S43出土
105-16	〃	(4.9)	2.9	2.3	S62出土
105-17	〃	(9.2)	3.7	3.6	S62出土
105-18	〃	(8.6)	3.5	2.4	S63出土
105-19	石臼	—	—	8.4	S58出土
106-20	方形硯	12.6	7.5	1.7	S62出土

5　井戸址

(1)　I－1号井戸址　　第107図

本井戸址は、北側に掘立柱建物址1が、南側にはD－27～D－30号土壙が隣接する、ほ・ま－32・33グリッド内より検出された。

掘方上面は、南北220cm、東西205cmを測る楕円形を呈し、底面から　cm上がった部分は、一辺　cmを測る方形を呈している。また、断面図に図示されているように、東西の両コーナーには僅かではあるが腐植した木片が残存していた。これにより方形を呈した掘方の部分から上面にかけて木を組んだ、方形横桟支



第107図　I-1号井戸址実測図（1：80）

柱型井戸であると想定される。井側は縦板を東西南北四辺に据えたものと考えられるが、横桟に関しては、深さ115cmの井戸に据えた縦板を補強するために数段用いる必要性が多分に生じたであろうと推される

覆土は、黒色土を基調とする7層によって形成されている。そのうちⅠ・Ⅲ層は、ローム粒子・パミス5mm～2cm大の小石を混入する乾燥した土層でⅠ層は1cm大の炭化粒子を含んでいた。Ⅱ・Ⅳ～Ⅶ層は、粒子緻密で粘性のある湿性を帯びたベトベトの土層であった。

出土遺物は、確認面より5cm掘り下げた部分より、有茎石鏃が出土した。その他、中世土器細片が3点覆土上部より出土している。石鏃は、縄文後・晩期によくみられる形状を呈しており、流れ込みであると考えられる。

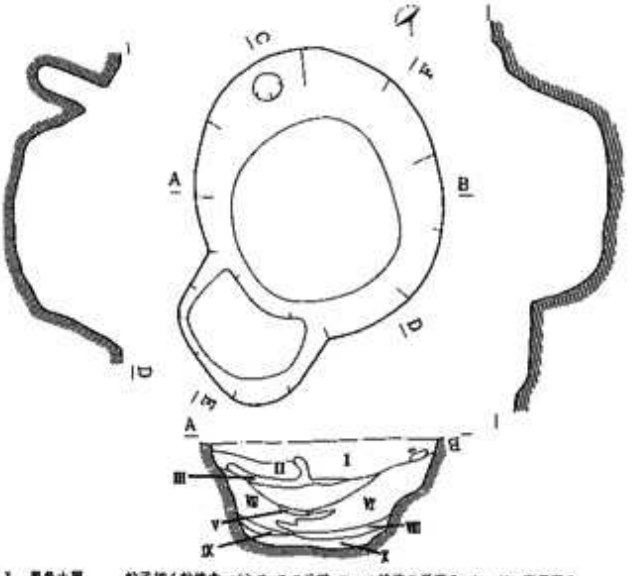
（島田恵子）

(2) Ⅰ－2号井戸址　第108図

本井戸址はM－1とM－27に接した、も・や－30・31グリッド内より検出された。また、井戸址3号は本址より12m離れた地点に位置している。

掘方は、南北3m、東西255cm、深さ120cmを測り楕円形を呈するが、南側に155×8cm、深さ10～12cmを測る井戸の付随施設が存在しており、M－27に通じている。形状及びM－27に通じる事から、木などで組んだ流し台を置いた洗い場であったとも考えられる。底面は円形を呈しておりⅠ－1号と異なる。この掘方から推して木組の多角形樽型井戸が想定される。

埋土は10層に区分され、左右両側から埋土された様相を示している。Ⅱ・Ⅲ・Ⅶ・Ⅸ層は西側から、Ⅵ・Ⅷ層は東側からの流れこみが



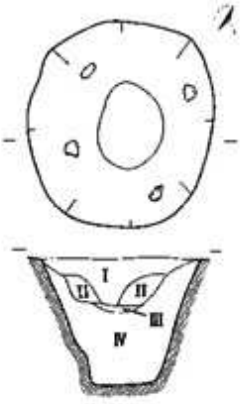
Ⅰ　黒色土層　粒子細く粘性中、パミス・スコリア・ローム粒子少量混入。カーボン微量混入。
Ⅱ　褐色土層　粒子細く砂質気味のローム層。
Ⅲ　灰色土層　粒子緻密・粘性強、きめの細いやわらかい層水分を含む。
Ⅳ　灰褐色土層　粒子粗く砂質気味のローム層。
Ⅴ　灰色土層　Ⅲとほぼ同様であるが、若干のロームを含む。
Ⅵ　暗黒色土層　粒子細密、粘性強、やわらかい層で若干のスコリアを含む。
Ⅶ　黄色土層　粒子粗く砂質性、スコリア多量混入。
Ⅷ　淡灰褐色土層　粒子微密、粘性強、砂多量混入。
Ⅺ　暗灰褐色土層　〃　〃　〃
Ⅹ　黄灰色土層　粒子粗く砂質、スコリア多量混入。

第108図　Ⅰ-2号井戸址実測図(1：80)

認められる。さらに、II・IV・VII～X層には砂が含まれており、流れこみによる埋土であることを証明しているといえよう。また、湿性を帯びている層は、III・V・VI・VIII・IX層である。

遺物の出土は皆無であった。

（島田恵子）



I　黒色土層　若干のローム粒子・パミスを含み粘性あり。
II　黒褐色土層　ロームの小ブロックを多く含む，粘性あり。
III　茶色土層　鉄分を含む酸化した層粘性あり。
IV　黒色土層　若干のローム粒子・パミスを含む。

第109図　I-3号井戸址実測図（1：80）

(3)　I－3号井戸址　第109図

I－3号井戸址は、ら－27グリッドより検出されたもので、そのプランはやや方形に近い円形を呈し、東西1.9m、南北2.1mを測る。掘り方は1.3mを測る逆台形状を呈する。

本址のコーナーには四本の木製支柱が残存していた。支柱間は1～1.1m前後を測る。おそらく本址は、支柱の四方に桟板をめぐらせた方形横桟支柱型井戸であり、その井戸枠は1m前後のものであろうと推測される。I－1号井戸址と同様な構造をもつものである。所属期は明確でない。

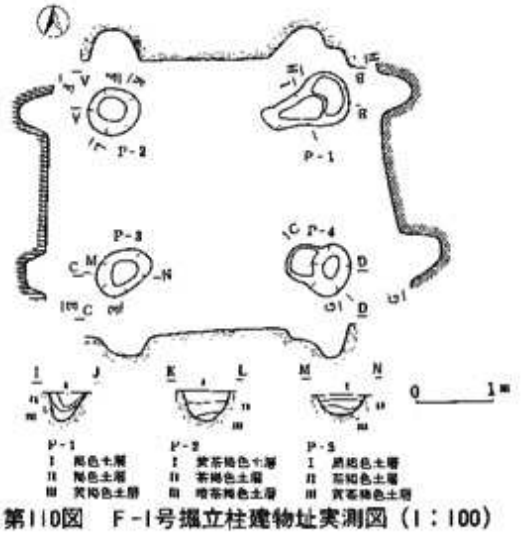
（堤　隆）

6　掘立柱建物址

掘立柱建物址は、F－1～F－8の合計8連が検出された。

(1)　F－1号掘立柱建物址　第110図

F－1号掘立柱建物址は、第I区に－10グリットにかけて検出された。4個の柱穴によって構成され、それはら40cm前後の深さを有し、そのうち東側の2個の柱穴はテラスをもっている。東西2.6m、南北2.1mの規模を呈するもので、長軸である東西軸はN°－80°－Eとなっている。



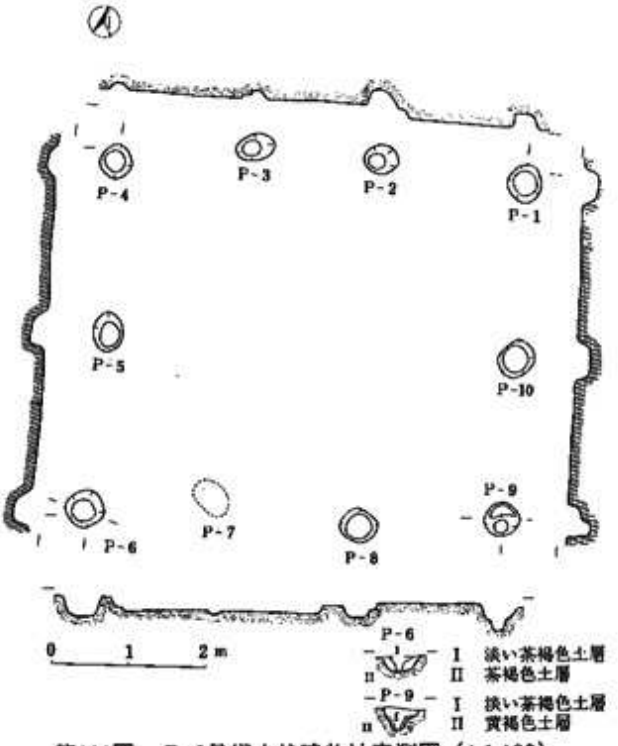
第110図　F-1号掘立柱建物址実測図（1：100）

(2)　F－2号掘立建物址　第111図

F－2は、第I区ね－9グリッドにかけ

て検出され、H－16を切りM－21に切られている。本建物址は径40～60cmの柱穴が4×3個配されたもので、それらは確認面より6～32cm程度の深さを有している。その規模は、東西5.3m、南北4.5mを測り、長軸である東西軸の方向は、N－80°－Eでf－1と同様である。F－1・F－2は近接する一連の構造物なのかもしれない。

F－2においては時期決定をするための遺物がみられないので、判然としないが、平安期の住居址H－15を切るためさしずめ平安期以降の所産と考えられよう。

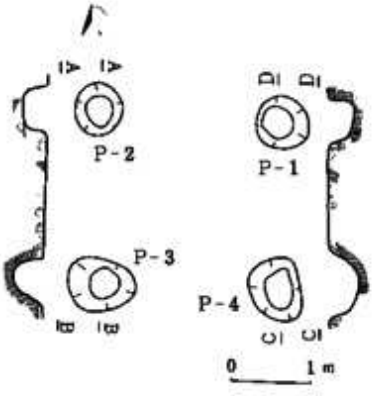


第111図　F-2号掘立柱建物址実測図（1：100）

(3)　F－3号掘立柱建物址　　第112図

F－3号掘立柱建物址は、第II区ち－34グリットにかけて検出された。本建物址は径60～80cm前後、深さ30～40cm前後の柱穴4個が配されたもので、東西2.2m、南北2.2mの規模を有しており、南北軸はほぼ真北をさしている。

出土遺物もなく、所属期は判断し難い。

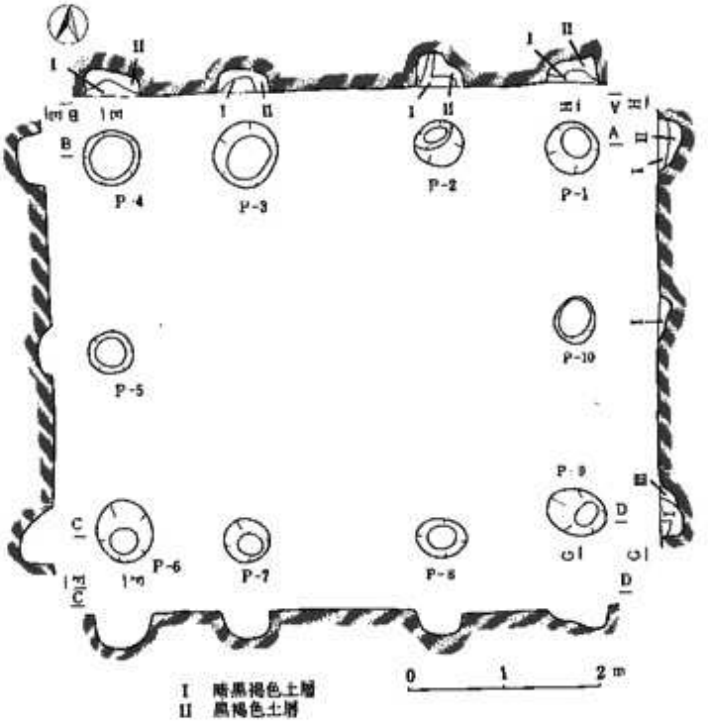


第112図　F-3号掘立柱建物址実測図(1：100)

(4)　F－4号掘立柱建物址　　第113図

F－4号掘立柱建物址は、第II区へ－32グリッドにかけて検出されたもので、径40～60cmの柱穴が3×4個配されている。柱穴は確認面より20～40cmを測る。東西4.8m、南北4mの規模を有し、東西軸はN－83°－Eをさしている

遺物は須恵器が1点検出されているが、本址に共伴するものかどうか明らかではない。



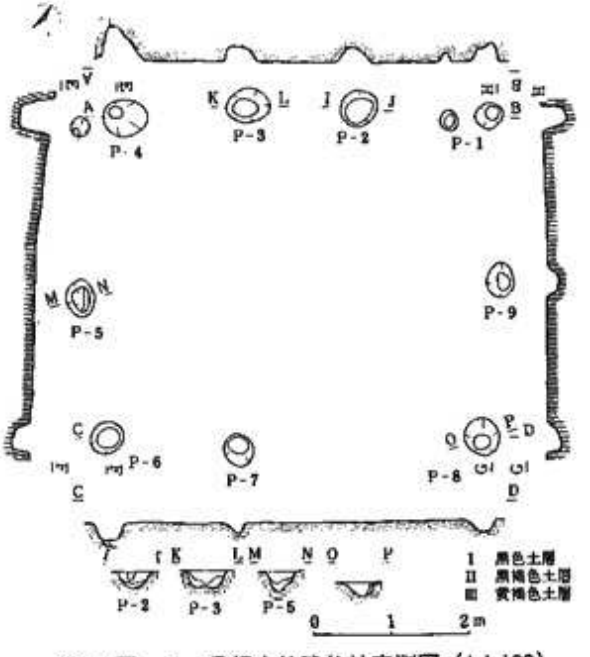
第113図　F-4号掘立柱建物址実測図（1：100）

(5)　F－5号掘立柱建物址

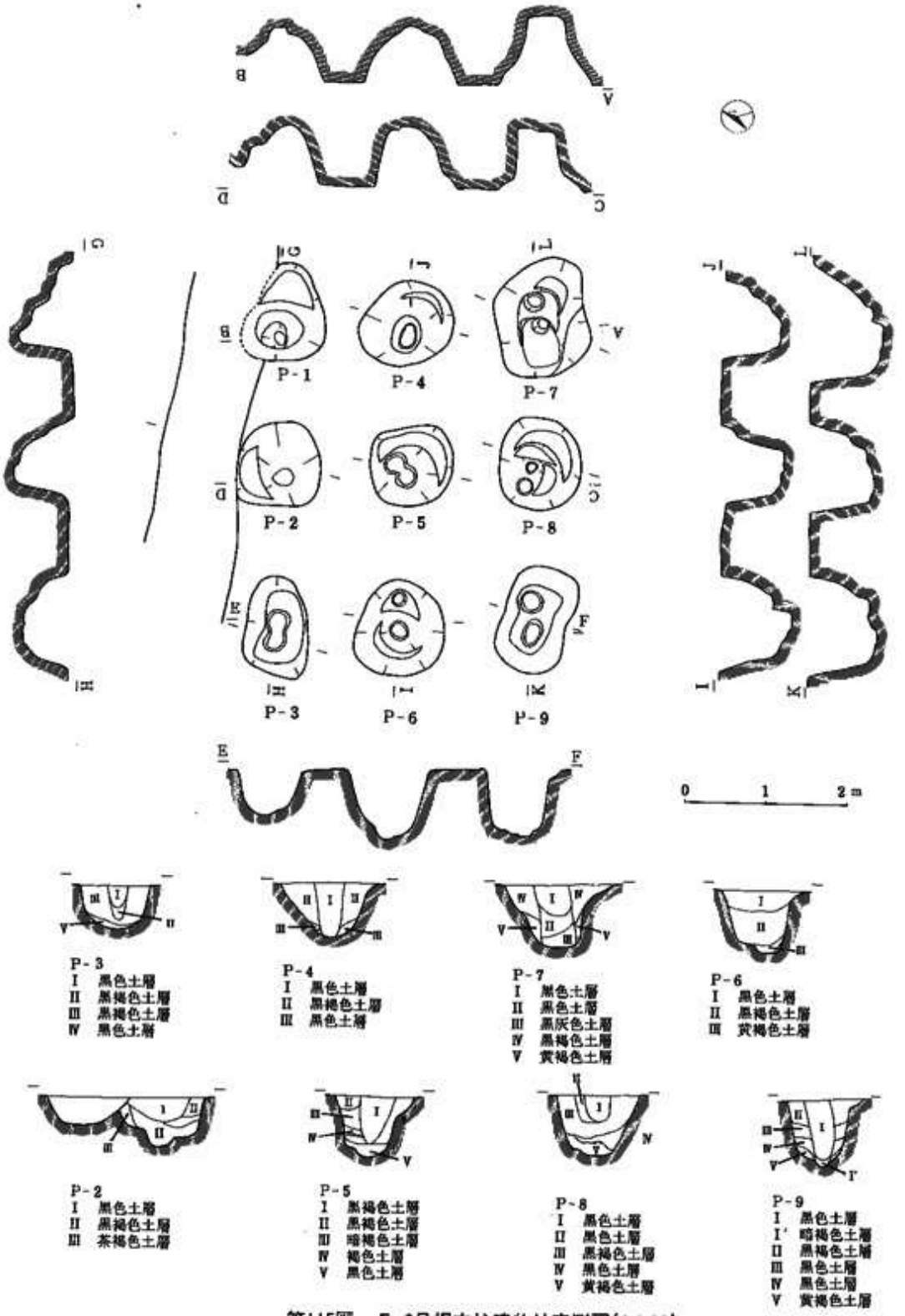
第114図

F－5号掘立柱建物址は、第II区ゆ－29グリッドにかけて検出された。本建物址は計11個の柱穴がやや不規則に配列されたもので、主な柱穴の径は40cm前後、深さ20～40cmを測る。東西4.8m、南北4.2mの規模で、東西軸はN－66°－Eをさしている。

伴出遺物もなく、所産期は不明である。



第114図　F-5号掘立柱建物址実測図（1：100）



第115図　F-6号掘立柱建物址実測図(1：80)

(6) F－6号掘立柱建物址　第115図

F－6号掘立柱建物址は、第Ⅲ区い－49グリッドにかけて検出された。

柱穴は、3×3個配され、東西掘立柱建物址3.8m、南北4mを測り、南北軸はN－20°－Wをさしている。各柱穴は1.2～1.5mの径を有する楕円形あるいは円形を呈している。柱穴のセクションにおいては、柱痕を認めることのできるものが多く（P_3・P_4・P_5・P_7・P_8・P_9）、これらの柱痕の径は20～40cmを測る。また柱痕が1つのピット内において2つ認められる場合もあり（P_3・P_5・P_6・P_7・P_8・P_9）、主柱を支える補助柱が存在していたと思われる。

遺物は、須恵器が5点検出されているが、本址に共伴するものかどうかは判然としない。

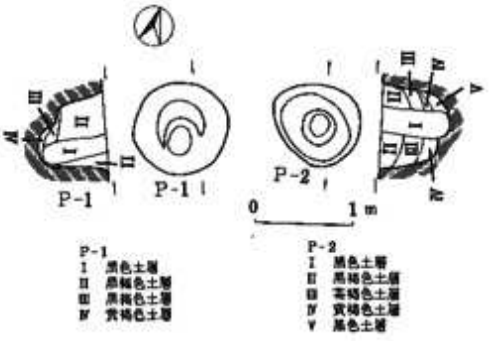
本址は、柱穴より判断してかなり充実した構造物であったことが察せられる。また、その構造と配列性からF－7・F－8と併存していたものと考えられる。

(7) F－7号掘立柱建物址　第116図

F－7号掘立柱建物址は、第Ⅲ区い－51グリッドにかけて検出された。柱穴は2個のみの検出にとどまったが、さらに未調査区側へと続くものと考えられる。

柱穴は径1～1.2m、深さ70cmを測るもので、双方とも柱痕がよく残っている。柱痕から類推すると柱の太さは20cm前後のものとみられる。

本建物址は、その構造と配列性からF－6と共存していたものと考えられる。



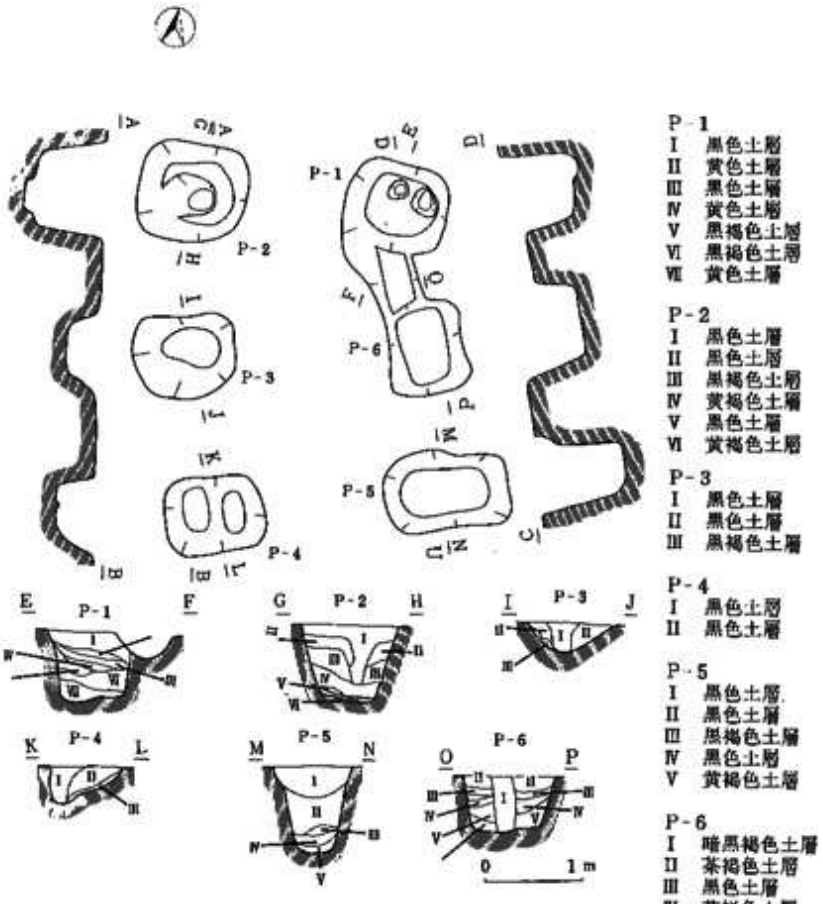
第161図　F-1号掘立柱建物址実測図（1：80）

(8) F－8号掘立柱建物址　第117図

F－8号掘立柱建物址は、第Ⅲ区お－50グリッドにかけて検出された。1m前後の方形の柱穴が3×2個配されたもので、その深さは30～90cmを測る。このうちP_1・P_2・P_5には柱痕がよく残っている。東西2.2m、南北3.3mの規模を有し、主軸方向はN－14°－Wをさしている。

なお、F－6・F－7・F－8は、その配列性と構造から一連の建物であったことが推察できる。

（堤　隆）



第117図　F-8号掘立柱建物址実測図(1：80)

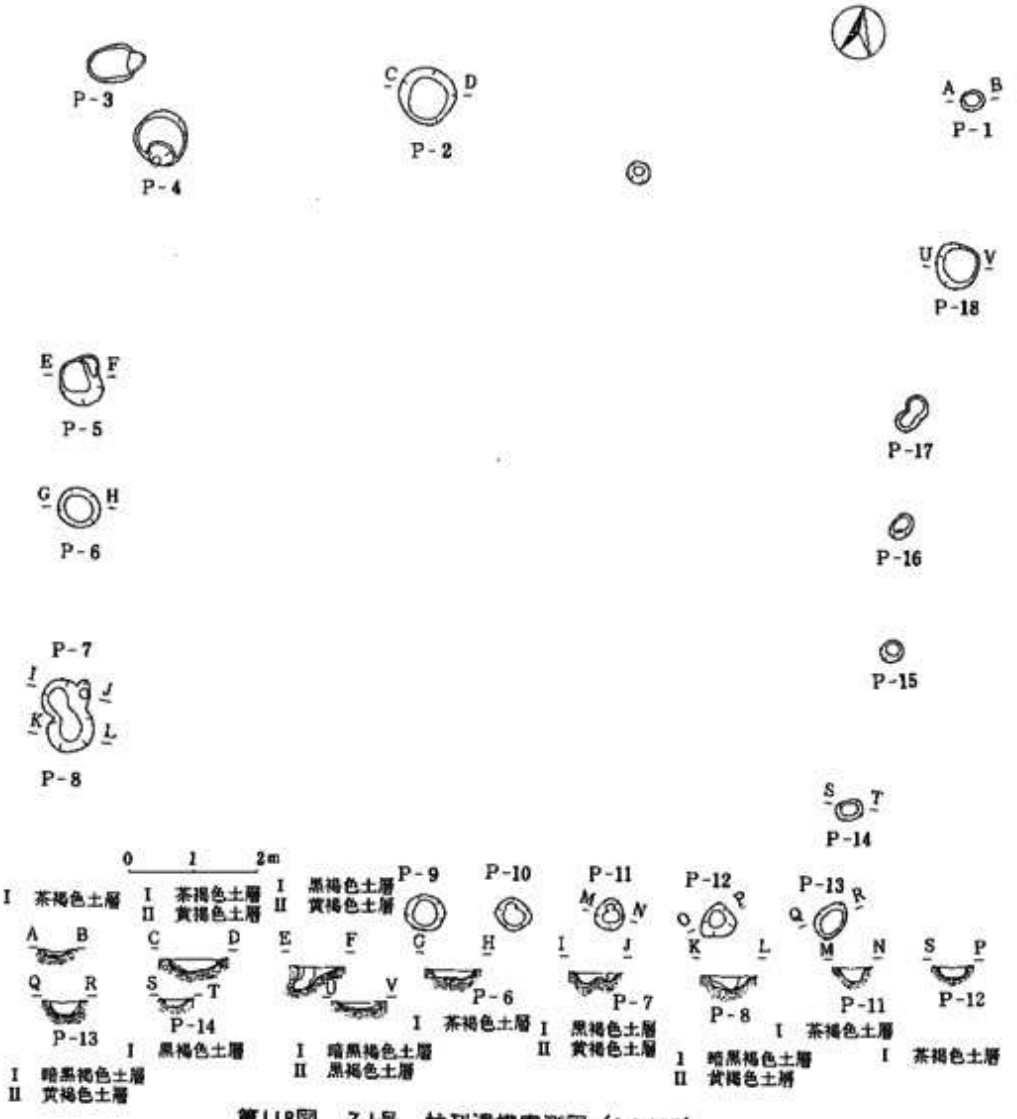
7　柱列

(1)　Z－1号柱列遺構　　第118図

Z－1は、第II区南西において検出されたもので、柱穴が方形に配されており南西コーナーの一部を失う。本址におけるピットは径30cm～50cmの円形を呈し、確認面からの深さ10cm～30cmを測る。その規模は東西12m南北12.8mを測り、南北軸はほぼ真北を指している。Z－1は、その構造・規模と配列性から、建物址よりは柵状の柱列としてとらえたほうが妥当であろう。

所産期は明確でない。

（堤　　隆）



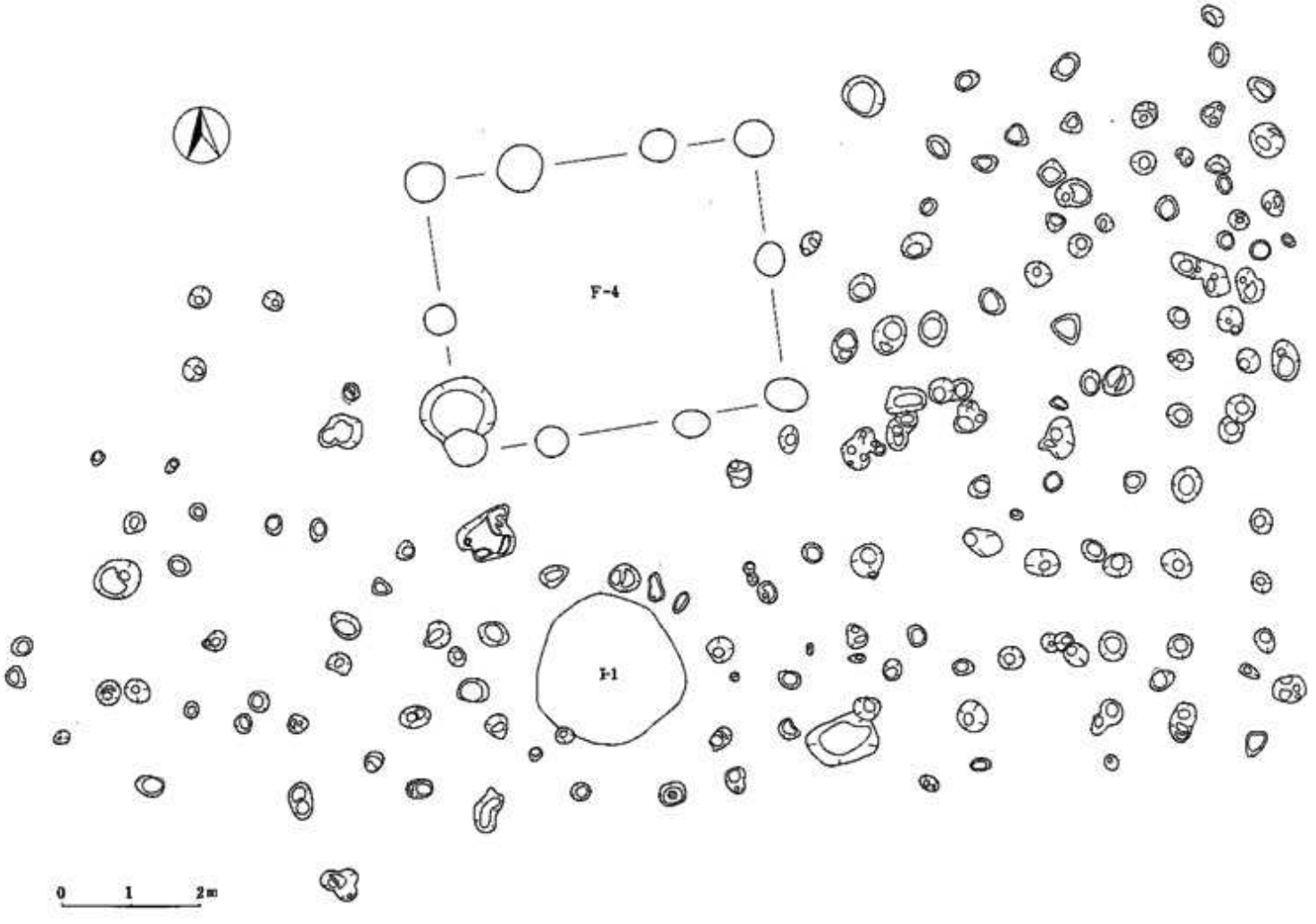
第118図　Z1号　柱列遺構実測図（1：120）

8　ピット群

(1)　P－1号ピット群　　第119図

P－1は、第II区ふ～ま――28～35グリッドにかけて展開するピット群で、176個のピットより構成される。ピットの分布内には、F－4号掘立柱建物址やI－1号井戸址が存在しており、これらの遺構との関連性も考えられる。

伴出遺物はなく、その所産期は不明である。

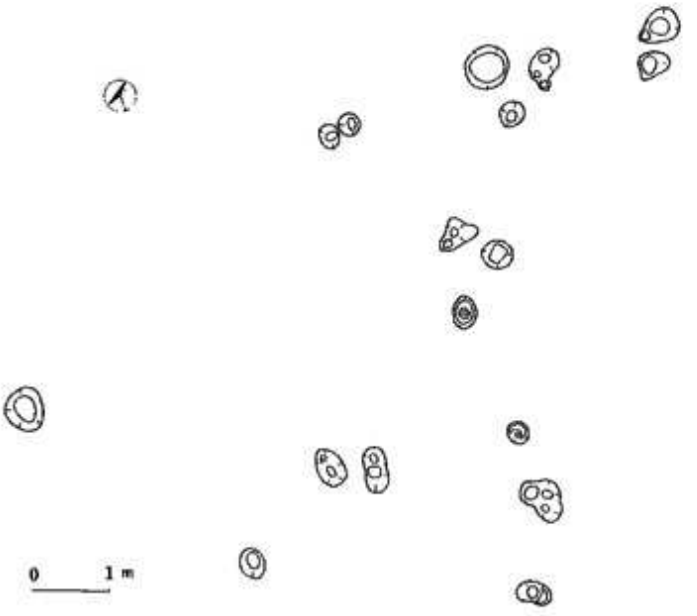


第119図　P-1号ピット群実測図（1：100）

(2) P－2号ピット群

第120図

P－2は、第II区も～に――33・34グリッドにかけて検出された。20個弱のピットが南北にならぶものである。P－2の主軸方向は、西側に隣接するF－5号掘立柱建物址の南北軸とほぼ一致し、両者の関連性も考えられる。所産期は不明。

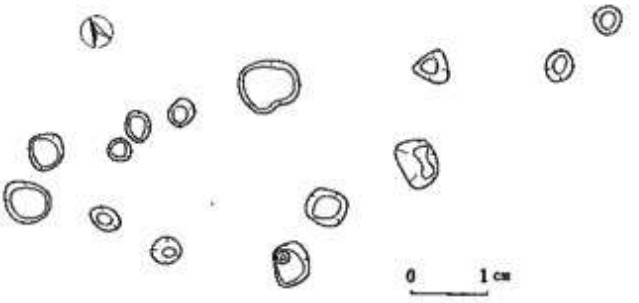


第120図　P－2号ピット群実測図（1：100）

(3) P－3号ピット群

第121図

P－3は、第II区れ～ろ―24～27グリッドにおいて検出されたピット群で、10数個のピットが東西に並ぶものである。所産期は不明。

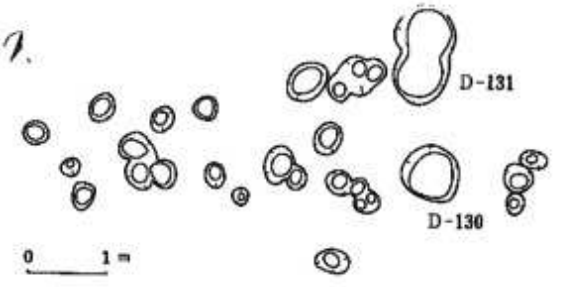


第121図　P-3号ピット群実測図（1：100）

(4) P－4号ピット群

第122図

P－4は、第II区む・め―39・40にかけて検出された。20数個のピットがコンパクトにまとまったものである。所産期は不明。



第122図　P-4号ピット群実測図(1：100)

(5) P－5号ピット群

P－5は、第II区み―44グリッドにかけて検出されたもので、8個のピットにより構成される。所産期不明。

(6) P－6号ピット群

P－6は、第II区ほ～み－40～43グリッドにかけて検出されたもので、50個程度のピットより構成される。P－6の分布内には、S－18～24の竪穴状遺構も存在しており、これとの関連性も考えられる。所産期不明。

第123図　P-1号ピット群出土遺物(1：1)

以上各ピット群を構成するピットは相互に関連性を持つものと考えられるが、その組み合わせや性格については不明と言わざるを得ない。　（堤　隆）

9　溝状遺構

溝状遺構はM－1～M－32まで32基検出された。それらの溝は、所属時期等は明確にし得ないものが多いが、その中には切り合い関係や配列性から一連の溝としてとらえられ得るものも存在した。以下、溝状遺構のいくつかについて説明しよう。

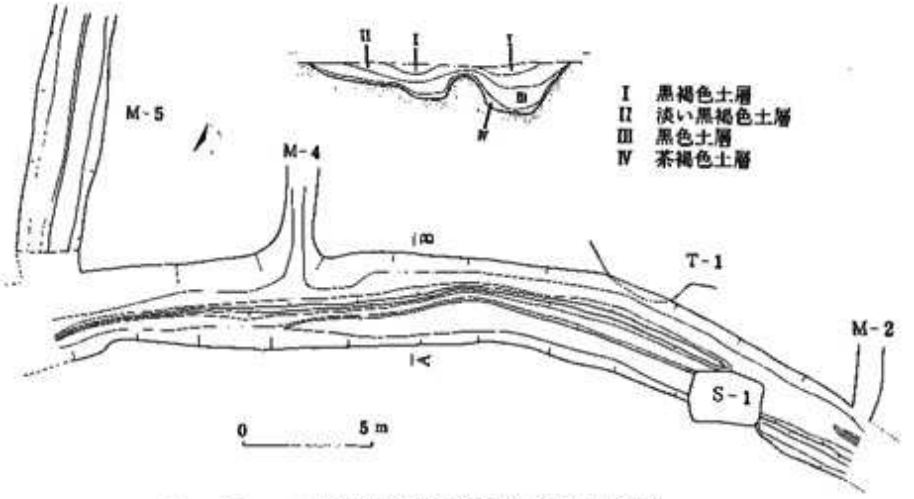
(1) R－1号溝状遺構群（M－1～M－12）

M－1号溝状遺構からM－12号溝状遺構はその連続性や配列性から一連の溝としてとらえられ、これをR－1号溝状遺構群として呼称した。

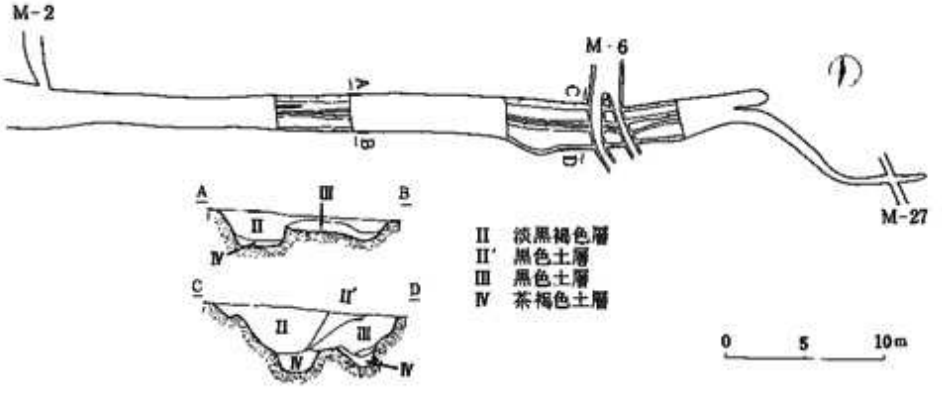
R－1を構成する、M－1号溝状遺構（第124・125図）は、ま～も列にかけて東西に延びるものである。M－1は、I－2号井戸址の前方ゆ－32グリッドより細長く始まり、M－6との合流点付近からその幅と深さを増し、断面は「W」形となる。その幅はおおよそ2.5～3m程度である。M－1は調査区のさらに西へ延々と続いている。

M－2号溝状遺構（第126図）は、第I区、10～14列にかけて南北に走る溝である。M－2は、そ－10グリッドに始まり、南へと続いてM－1と合流するもので、幅は平均して1.2m前後、深さは平均して40cm前後を測り、その断面は偏平なU字形あるいは逆台形状を呈する。M－2号内からは第133図21の軽石の皿状製品が検出された。これは軽石を偏平な楕円形に整形し、凹を持たせたもので、その側面には溝が刻まれている。凹の内面は焼けただれており、本製品の機能を暗示している。

M－4（第127図）はM－2号に10～20mの距離を隔てて隣接する南北に走る溝状遺構で、半ばより二又に分かれ、一方はM－3となるが、再び接合してM－1と合流する。その北端は未調査区へと延びる。M－4は、幅1m～1.5m前後、深さ50～60cmを測り、断面形は「◡」あるいは



第124図　M-1号溝状遺構実測図(西方)(1：300)



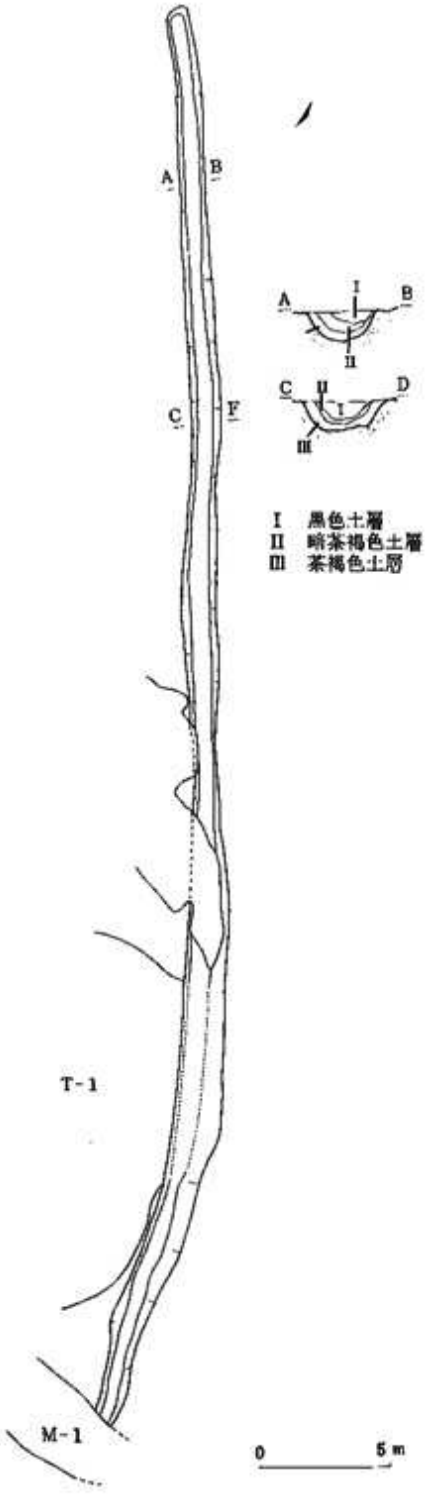
第125図　M-1号溝状遺構実測図(1：500)

「U」状となっている。一方、M－3は、幅1.3m、深さ50cm前後を測り、その断面は偏平な「U」字状、あるいは逆台形状を呈する。M－4とM－1の合流点付近からは馬骨片数点が検出された。なお、M－4は平安時代前期に位置付けられる住居址H－14・H－15を切っており、一連の溝であるR－1の所産期が平安時代前期以降であることを示唆している。

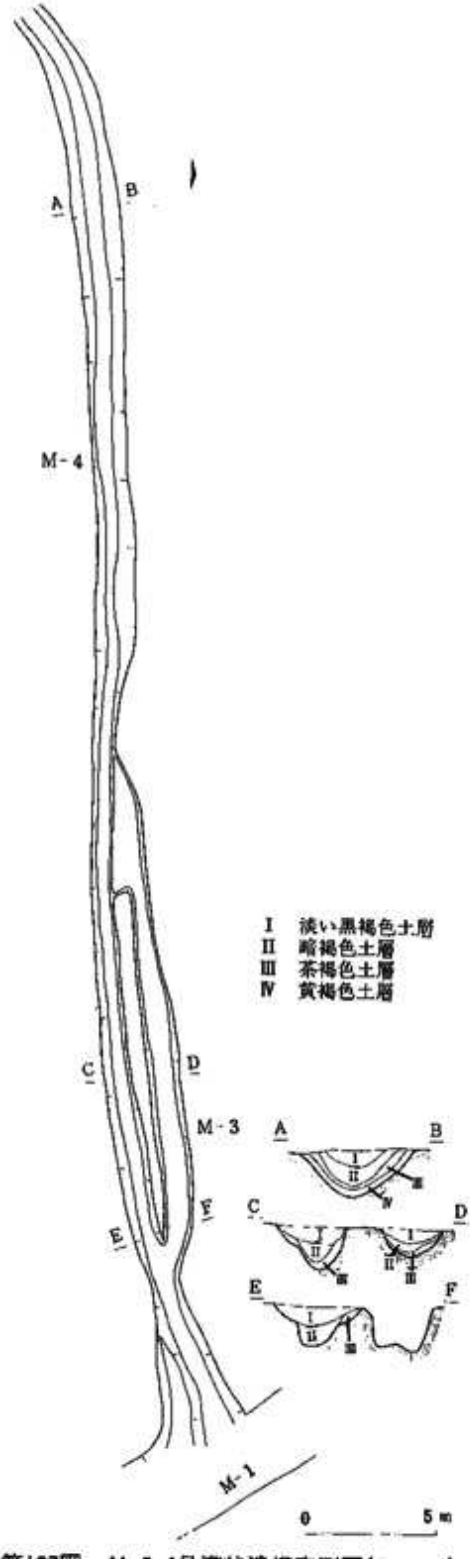
M－5は、M－4に隣接して検出された溝状遺構で、南北に延び、M－1と合流するものである。

以上、第I区におけるR－1号溝状遺構群では、東西に延びるM－1に北方より延びてきたM－2・M－4・M－5が合流するというあり方が看取できる。

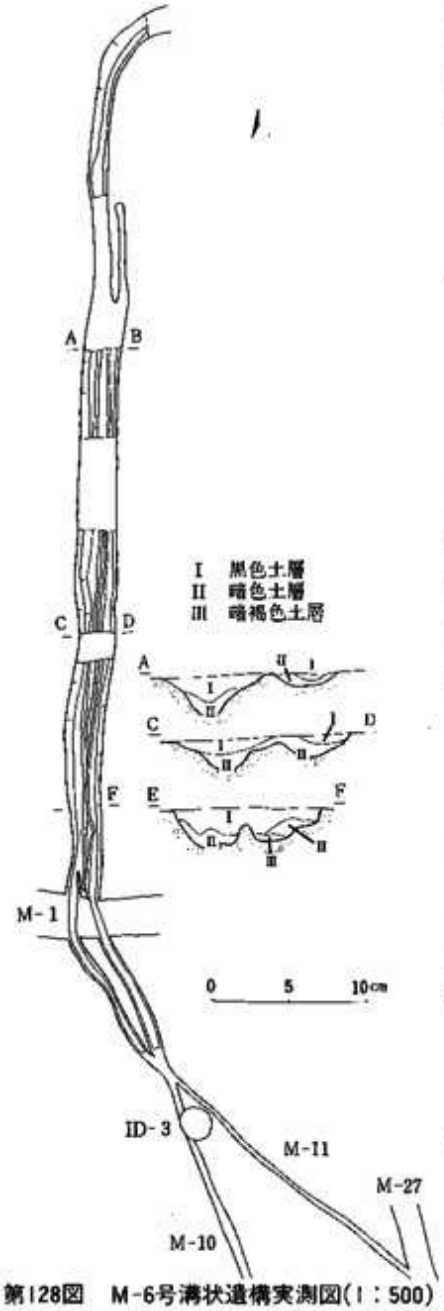
さて、M－1は第II区においてM－6と合流する。M－6（第128図）は、25～26列にかけて南北に延びる溝で、北方では大きく迂回してM－7となり、南方ではM－1と合流しM－10・M－



第126図　M-2号溝状遺構実測図(1：300)



第127図　M-3·4号溝状遺構実測図(1：300)



第128図　M-6号溝状遺構実測図(1：500)

11に分岐する。その幅は2.5m前後を測り、溝の断面形態はM－1と同様、中央部に山をもつ偏平なW形を呈する。

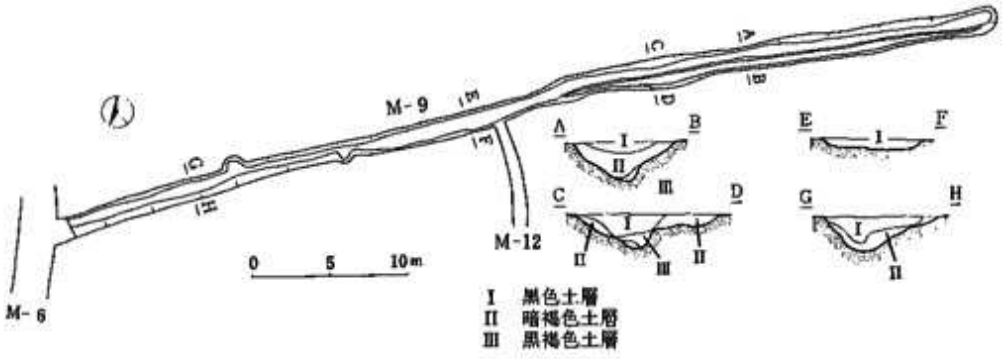
M－6が第II区北方において大きく迂回するとM－7となる（第129図）。M－7は東西に延びる溝で、東側でM－8とほぼ直角に合流する。その幅は1.2m前後を測り、断面は皿状を呈している。

M－7と合流するM－8は、45列にかけて南北にまっすぐに延びる溝で、その幅は1.2m前後を測り、断面は薄い皿状を呈している。M－8はその南端においてM－9と合流して終結する。また、M－7との合流点の北で巨石によってその行路の一部がふさがれているが、さらに北へと延びている。なお、M－8はその南端においてM—29と連結した可能性も考えられ得る。

M－8はその南端においてほぼ直角に折れ、M－9（第130図）となる。M－9は、は～へ列にかけて南北に延びる溝で、西端においてM－6と合流して終結する。その幅は1.2～2mを測り、断面は「⌣」状を呈する。M－9の中央部よりはM—12が始まり、南北に延びてM—17の手前で終結する。

以上、第II区におけるR－1号溝状遺構群を構成するM－6～M—12は、ほぼ平行あるいは直交する位置関係にあり、これらの溝によって画される部分は当然ながらほぼ方形を呈してくる。ちなみにM－6・M－7・M－8・M－9で画される部分の面積は、約34m×57mで1938m²となる。

第129図　M-7号溝状遺構実測図（1：500）



第130図　M-9号溝状遺構実測図(1：500)

第13図　M-12号溝状遺構実測図(1：500)

さて、本R－1溝状遺構群の性格であるが、農業用水路と考えるのが最も妥当であろう。ただし、その区画内において水田遺構等は確認でき得なかった。なおその引水の経路は、濁川より入水し前田をへて野火付に注ぐもので、野火付より幹流M－1に合流し、さらに西方へと下流したものと思われる。

R－1は現状の水田（圃場整備前）に伴う水路のプランとは異なるため、その時期については古文献にみられる近世（寛文年間・17世紀中葉）に開かれた新田の水路の成立より古く、また、九世紀前半の集落よりも後出するものとしてとらえられる。

(2)　R－2号溝状遺構群

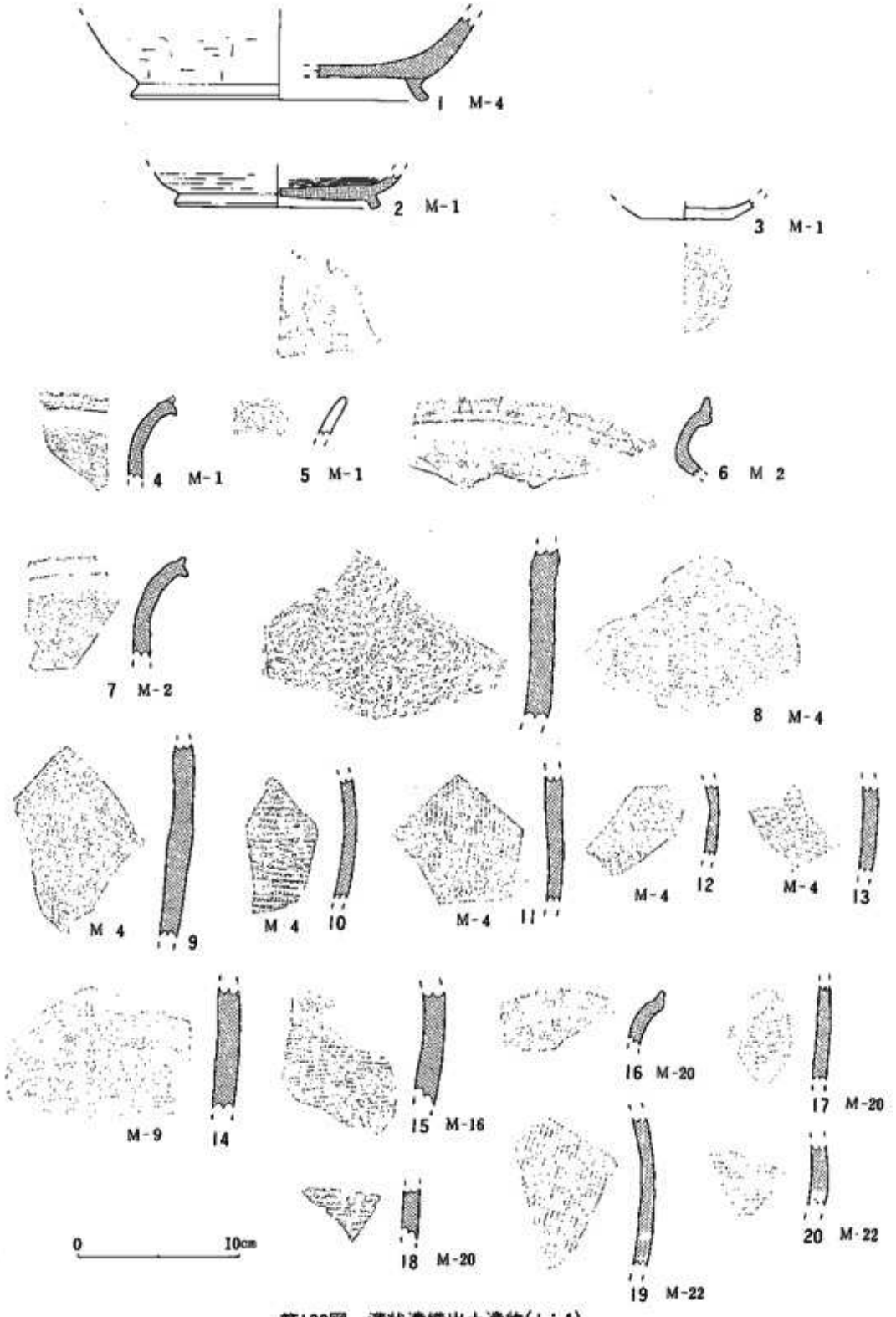
R－2号溝状遺構群はM—13・M—14・M—15・M—16・M—17によって構成され、現水田に関連する。

M—13号溝状遺構は第II区の中央部を東西に走り、その西端において直角に折れて南へと延びM—17と合流する。その東西の部分においては唐松の割り板が配され、南北においては土管が配されている。そうした状況から、M—13は、現水田の暗渠配水のための溝と判断される。

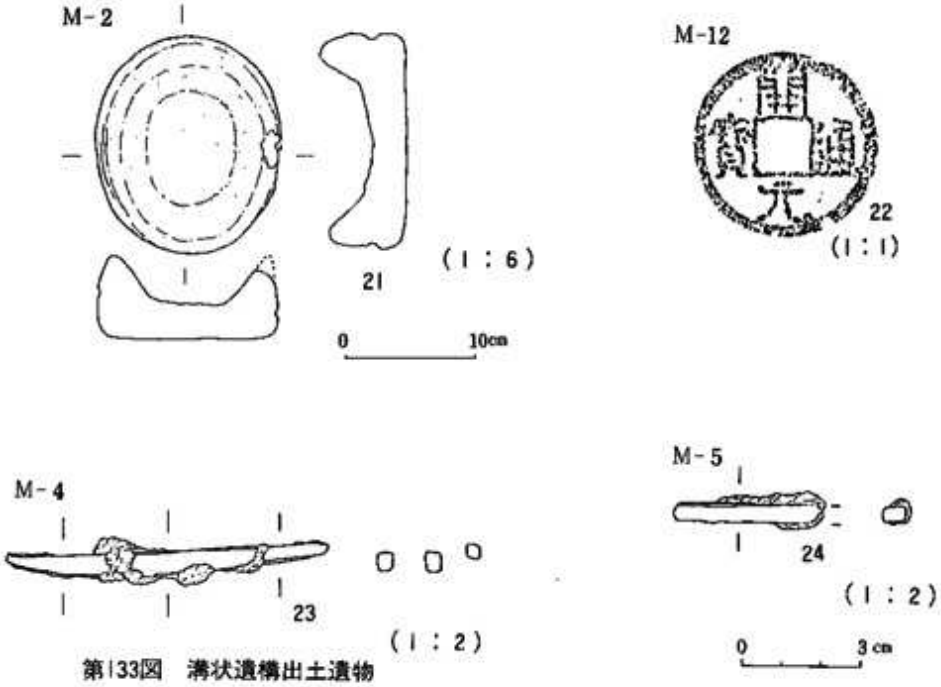
M—14・M—15・M—16・M—17は現在の水田の畦畔に付随する溝状遺構である。

(3)　M—27号溝状遺構

M—27はＩＤ－２号井戸址へと接続する溝状遺構で、ＩＤ－２号井戸址より水を汲み上げた際の排水路とも考えられよう。　（堤　　隆）



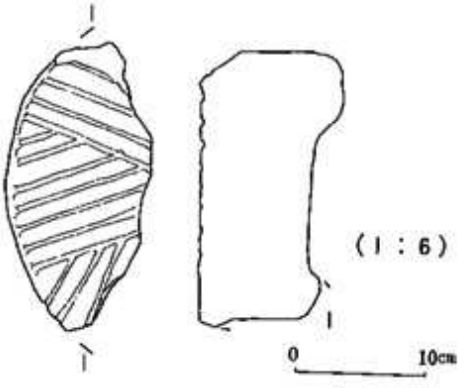
第132図　溝状遺構出土遺物(1：4)



第133図　溝状遺構出土遺物

第35表　溝状遺構出土物一覧表〈土器〉

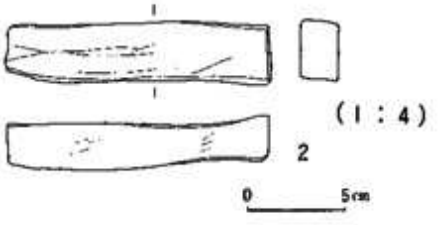
挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
132-1	甕(須)	—— —— 〈18.2〉	高台付	外面　底部ヘラケズリの後付け高台、胴下部周縁横位ヘラケズリ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰白色 外面底部自然釉付着 M－4内 回転実測
133-2	坏(須)	—— —— 〈12.6〉	高台付	内面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ、刷毛目調整	胎土青灰色 外面自然釉付着 M－1内 回転実測

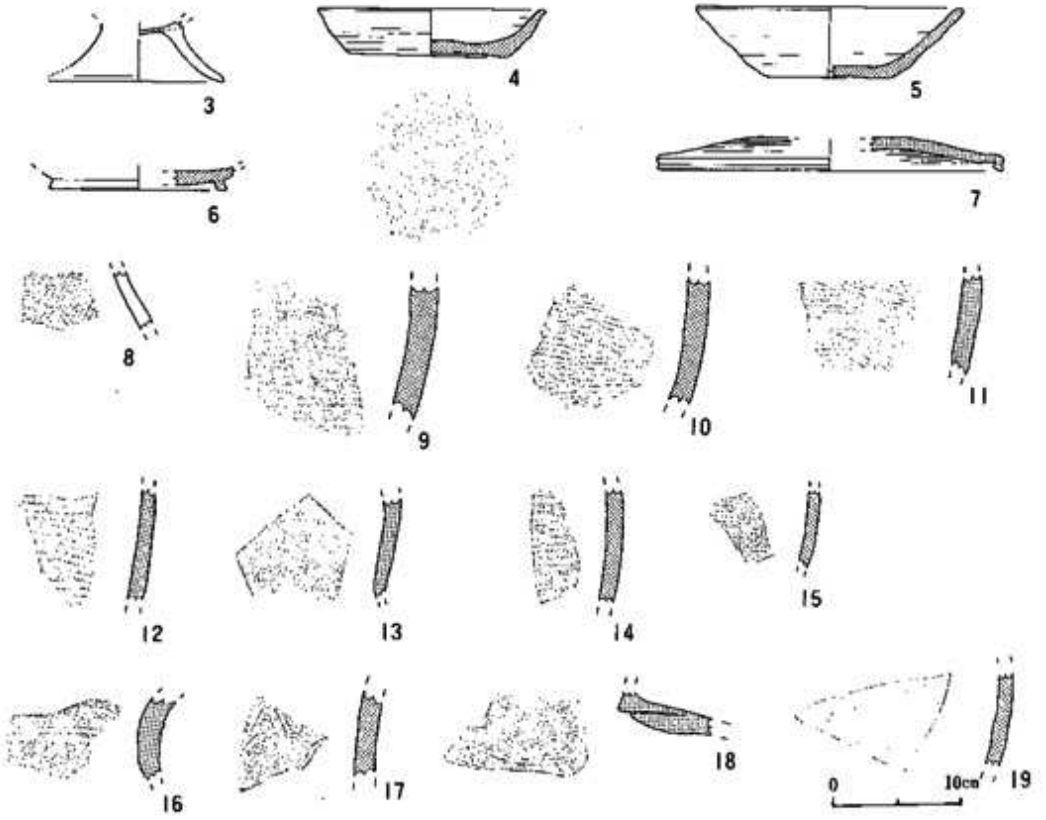


第134図　表採遺物

第36表　表採遺物一覧表〈石器〉

挿図番号	器種	長さ	幅	厚さ	備考
134-1	石臼	—	—	10.9	
134-2	砥石	13.5	3.0	2.0	





第135図　表採遺物(1：4)

第37表　表採遺物一覧表〈土器〉

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
135-3	台付壺 台脚部	—— —— (8.9)		外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 外面CO_2付着 完全実測
135-4	坏 (須)	(11.7 2.4) 8.0	体部浅い	外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 完全実測
135-5	坏 (須)	〈13.7〉 3.6 〈6.2〉		外面　底部糸切り、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土黄褐色 回転実測
135-6	坏 (須)	—— —— (9.15)	高台付	外面　底部糸切りの後高台付、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰茶褐色 粒子密 回転実測
135-7	蓋 (須)	—— —— 〈17.9〉		外面　天井部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土暗灰褐色 粒子密 回転実測

第38表　H－6号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量	器形の特徴	調整	備考
24-6	甕	(18.2) —— ——	胴張り甕、胴部最大径(28.4cm)より著しくくびれ頸部～口辺にかけ直立ぎみに外反する。	外面　全体に縦位のヘラケズリを施した後胴上部横位のヘラケズリ 内面　口辺部ヨコナデ、頸部～胴部刷毛目調整	胎土黄褐色 粒子粗い 回転実測
24-7	小甕	〈11.0〉 —— ——		内面　ヨコナデ	胎土暗茶褐色 火熱をうけ外面剥落著しい 内外面CO_2付着 フク上内 回転実測
24-8	甑？	〈13.6〉 —— ——	胴部～口辺部にかけ外傾やや内湾ぎみに立ち上がる。	外面　ヘラケズリ後ミガキ 内面　刷毛目調整	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 カマド内 回転実測
24-9	甑？	〈22.7〉 —— ——	最大径口縁部にある。口辺部大きく外傾外湾する。	外面　口辺部ヨコナデ、頸部～胴部ミガキ 内面　口辺部ヨコナデ、胴部刷毛目調整	胎土茶褐色 破片実測
24-10	甑？	〈15.9〉 —— ——	胴部やや直立し、口辺部外傾外湾する。	外面　口辺部ヨコナデ、胴上部ミガキ 内面　口辺部ヨコナデ、胴上部刷毛目調整	胎土茶褐色 回転実測
25-11	坏(須)	13.4 4.5 ——	底部丸味をおびた平底で器肉厚い。口辺部外傾やや外湾する。	外面　底部回転ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 底部「＋」のヘラ記号 完全実測
25-12	坏(須)	—— —— 7.2	底部丸味をおびた平底	外面　底部回転ヘラキリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 底部「｜」のヘラ記号 完全実測
25-13	坏(須)	〈14.7〉 —— ——	器体下部周縁部稜ある。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 フク土 回転実測
25-14	坏(須)	〈15.0〉 —— ——	器体下部周縁部稜ある。	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 回転実測
25-15	坏(須)	〈14.4〉 3.8 〈9.0〉		外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土青灰色 外面剥落著しい
25-16	坏(須)	(13.3) 3.3 (9.0)	底部丸みをおびた平底	外面　底部ヘラケズリ、体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土灰褐色 外面自然釉付着 回転実測
25-17	手捏	(7.2) (2.5) ——		外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	胎土茶褐色 内外面CO_2付着 フク土Ⅰ区内 回転実測

※27頁　第9表よりつづく

V 総 括

野火付遺跡において検出された遺構は、奈良時代の住居址７軒、平安時代の住居址９軒、時期不明の住居址２軒、平安時代と考えられる埋葬馬の土壙墓５基、中世の土壙230基・小竪穴状遺構64基・溝状遺構28基・掘立柱建物址８連・井戸址３基柱列１基・ピット群６で、遺物は前章で詳述した通りである。最後に、これらの重要な部分のいくつかについてふれ、総括としたい。

1 遺構

(1) 奈良時代の集落　第136図・第39表

奈良時代と考えられる住居址は、第II区において検出されたH－１～H－７号住居址までの７軒である。これらの住居址は、重複もみられず、また、その主軸方向やカマドの位置なども一致した。したがって、これらは共時的に存在した住居址と考えられ、その遺物より奈良時代のわけても前葉の小集落として把握することが可能である。

それでは、各住居址の構造についてふれてみよう。

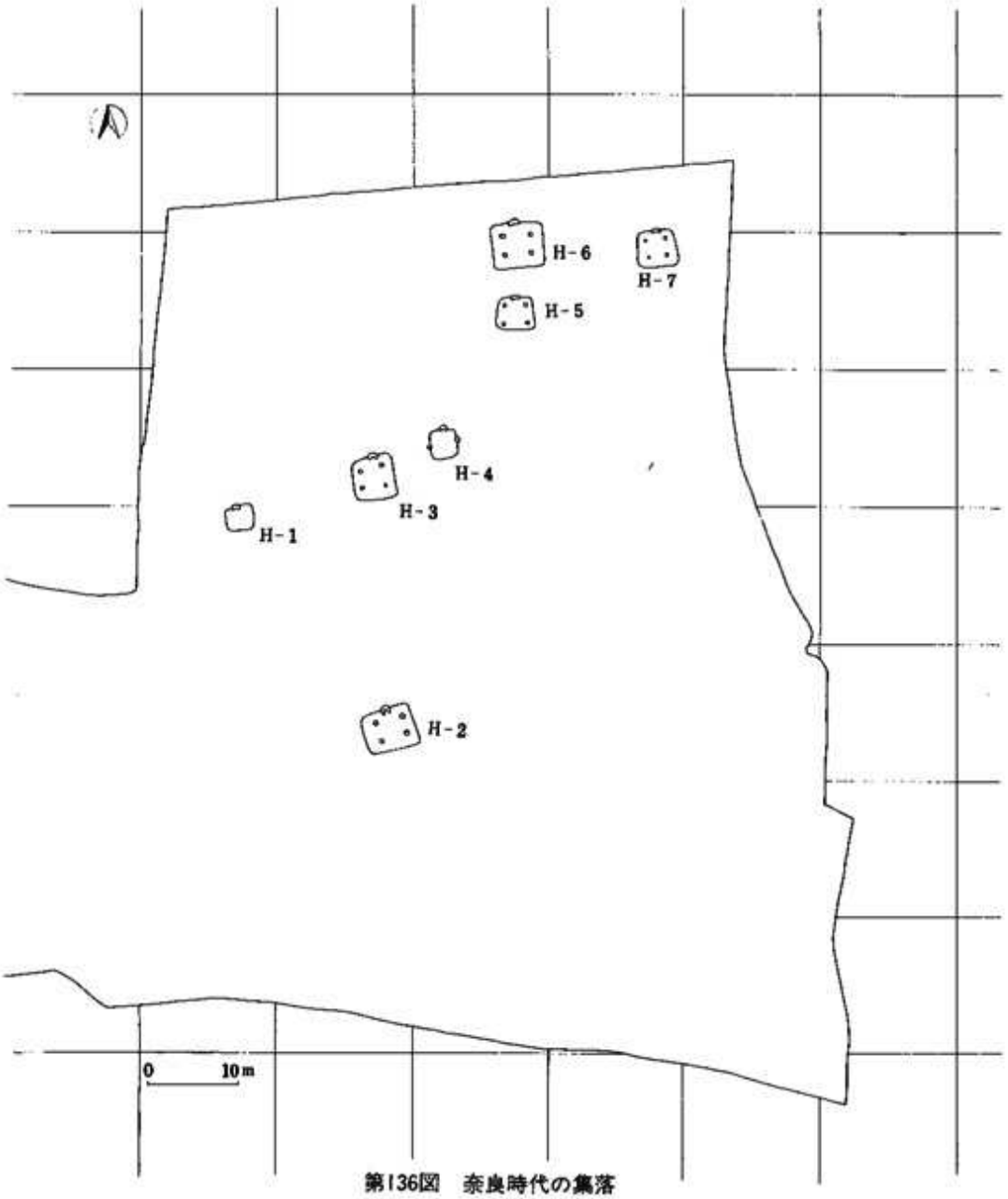
まず住居址の規模であるが、その面積において大形・中形・小形の三者が認められる。

大形住居址：面積が20m²を越えるもの……H－２・H－３・H－６

中形住居址：面積が15m²程度のもの……H－５・H－７

第39表　奈良時代住居址一覧表　　単位・m

遺構	平面プラン				主軸方向	カマド	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	深					
H－1	隅丸方形	2.80	2.7	0.25	N-12°-W	北壁中央（西寄り）	柱穴 3個 屋外ピット 2個	奈良時代前葉	入口部施設有り 灰溜施設あり
H－2	隅丸方形	5.55	4.80	0.18	N-17°-W	北壁中央	主柱穴 4個 壁中 3個	〃	周溝あり
H－3	隅丸方形	4.60	4.50	0.2	N-13°-W	北壁中央（東寄り）	主柱穴 4個 他3個屋外ピット 2個	〃	
H－4	隅丸方形	3.16	2.95	0.15	N-11°-W	北壁中央	壁中ピット 2個 他 3個	〃	
H－5	隅丸方形	4.16	3.59	0.45	N-4°-W	北壁中央	主柱穴 4個	〃	
H－6	隅丸方形	5.6	5.25	0.37	N-2°-W	北壁中央	主柱穴 5個	〃	
H－7	隅丸長方形	4.3	3.5	0.29	N-7°-W	北壁中央	主柱穴 4個 他 1個	〃	



第136図　奈良時代の集落

小形住居址：面積が10m²以下のもの……H－1・H－4

これらの三形態の住居址において、大形・中形では屋内に4本の主柱が伴い、小形では東西の壁外（H－1）あるいは壁中（H－4）にいわゆる棟持柱が一対伴なっている。カマドは、いずれの住居址も北壁中央部に設けられており、粘土のみで袖部を構築するもの（H－1、H－2、H－5）と割り石を芯として粘土を貼り袖部を構築するもの（H－3、H－4、H－6、H－7）

との二者がみられる。

住居址の配置としては、H－1・H－3・H－4がほぼ近接し、また、H－5・H－6・H－7もほぼ接している。H－2はこれらの両群とはやや離れている。本集落は後述する平安時代の集落と比較すると、各軒が相互に距離を隔てているといえる。

さて、最後に本集落の構成員の人数を想定しておこう。住居の面積は、構成員の人数に比例するものと考えられる。したがって、住居の構成員の人数はその面積から割り出すことが有効である。縄文時代では、関野氏の住居人数推定方法によれば（関野　1934）3㎡あたりにつき1人、姥山貝塚では2.4㎡につき1人の住居という目安が立てられている。また、奈良・平安時代の集落が検出された千葉県山田水呑遺跡では、前二者の中間をとって2.7㎡あたりにつき1人の居住を想定している（松村　1977）。さしあたり山田水呑のデータを借用し、本集落の中でも最大の面積（29.4㎡）を有するH－6の住居人数を算定すると、約11人という居住人数が割り出される。当時の生活条件や家族構成を考えてみても、11人という居住人数は多すぎ、また、実際問題として、29.4㎡という面積ではそれだけの人間の機能空間としては狭すぎるように思える。このような公式的な居住人数の算定方法では、あまり有効なデータは得られないようである。

そこで、祖父母――父母――子という家族の基本的な構成をふまえ、前述の形態分類に、大形住居では親子三代（夫婦2組と子供2人）にあたる6人、中形住居では親子二代（夫婦1組と子供2人）にあたる4人、小形住居では夫婦1組にあたる2人の家族構成を考えて、算定してみよう。そうした方法に基づけば、本集落の構成人数は30人となる。

さて、算定された30人という集落の構成員数は、郷里制下の1郷戸に相当するものと考えられる。さらに言及すれば、前述した住居址の分布の偏りから（H－1・H－3・H－4）、（H－5・H－6・H－7）、（H－2）の3群が本郷戸を構成する房戸と想定できようか。また、住居址の規模から、H－2あるいはH－6が郷戸主宅であったとも考えられる。

以上、奈良時代前葉に野火付遺跡において、一郷戸に相当する構成員30名程度の村落が展開していたことが理解できよう。

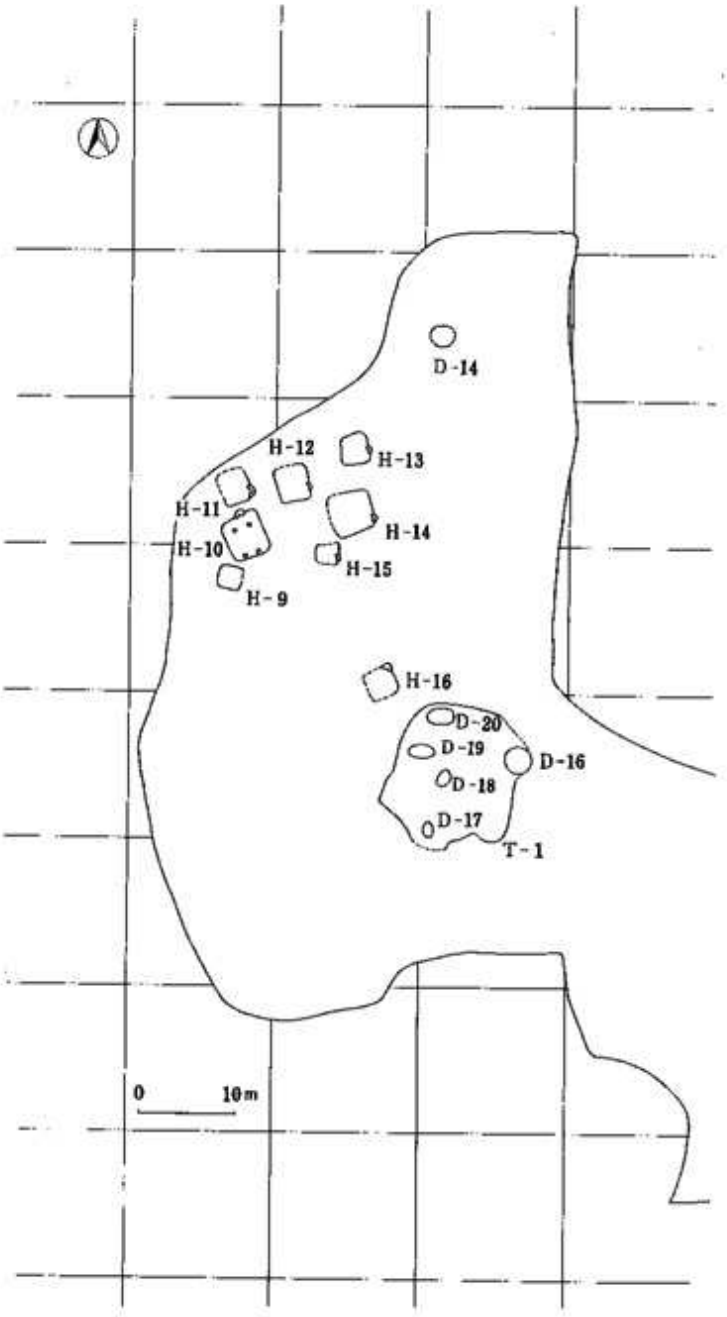
（堤　　隆）

(2)　平安時代の集落　　第137図・第40表

第Ⅰ区において検出された平安時代の住居址8軒は、重複関係がみられずその構造、配列性等から併存したものと考えられる。さらに後述する出土遺物の特徴により9世紀前半の集落であることがとらえられた。なおこの住居址群の北側は未拡張区であり、住居址群が、そちらへと延びる可能性も考えられたが、試掘トレンチ設定の結果地形的にもやや低地となり、住居址が存在しないことが確認されている。

この集落を構成する住居址の規模としては、その一部を破壊されているものもあり具体的な面積としては明示でき得ないが、どうやら大形・中形・小形の三者が認められそうである。大形にはH—10とH—14が、中形にはH—11・H—12・H—13・H—16が、小形にはH—9とH—15がそれぞれ該当しよう。

住居址の構造としては、H—10を除いたすべての住居址に、東壁にカマドを有する特徴が看取できる。ただし、H—10も当初には、東壁側にカマドが設けられていたようである。カマドは石組みを伴うものが多い。柱穴は、H—10において主柱穴4個が認められる他は、柱穴が伴わないか（H—9・11・12・13・15・16)、伴っても不明確である（H—14)。なお、H—9はカマドも柱穴も伴わないため日常的な居住の場というより住居址に付随する施設であったことも考えられる。H—12からはいわゆるベッド状遺構が検出された。通例ベッド状遺構は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて検出されるもので、その性格としては寝所（吉田・田村 1961)、祭壇（沢田　1967、河野　1979)、作業場（桐原・御子柴　1969)、物置場（石野　1975)が想定されている。しかし、その性格は、時代背景やおのおのの構造によって異なり、一律に決定できるものではないように思われる。いずれにしても野火付H—12のベッド状遺構は、平安時



第137図　平安時代の集落

第40表　平安時代住居址一覧表

遺構	平面プラン				主軸方向	カマド	ピット	時期	備考
	形態	東西	南北	深					
H－9	隅丸方形	2.60	2.50	0.27	N-7°-E	なし		9C前半	
H－10	隅丸長方形	3.8	4.67	0.25	N-24°-W	新北壁中央 旧東壁中央	主柱穴　4個 他　5個	〃	住居址拡張 掘込ありカマド転移
H－11	隅丸方形	2.69	－	0.16	N-62°-E	東壁 （南寄り）		〃	
H－12	隅丸方形	3.40	3.57	0.18	N-83°-E	東壁 （南寄り）	主柱穴不明 他　3個	〃	東北コーナーにベッド状遺構あり
H－13	隅丸方形	3.05	2.95	0.3	N-80°-E	東壁中央 （南寄り）	主柱穴　2個	〃	
H－14	隅丸方形	4.20	4.20	0.3	N-73°-E	東壁 （南寄り）	主柱穴新住1個 〃　旧住2個 他　3個	〃	住居址拡張
H－15	隅丸方形	2.6	2.55	0.13	N-88°-E	東壁 （南寄り）		〃	
H－16	隅丸方形	3.04	－	0.1	N-55°-E	不明	主柱穴　1個	〃	

（単位 m）

代の例としては僅少と考えられる。ちなみにベッド状遺構は、佐久市下小平遺跡弥生後期の住居址Y－2に類例がみられる（佐久市教育委員会　1981）。

住居址の配置としては、前述した奈良時代の集落と比較すると、やや距離を隔てるH－16を除くと各住居址が密接する傾向が看取できる。

さて、前述した方法に従って本集落の構成員数を算定すると、約30名程度の人員が存在していたことが想定できる。すなわち、平安時代においても奈良時代と同様に構成員数30名程度の一郷戸の村落が展開していたものと思われる。ところで、本集落と埋葬馬群とは密接な関係をもっていることが双方の出土遺物の同時性から証明できた。集落の南方に設定された馬の墓域には、五頭の馬が埋葬されていた。後に詳述するが、当地方と馬とのかかわり合いは深く、御代田・軽井沢地区においては塩野牧・長倉牧・長倉駅家といった牧や駅家が存在したものと考えられている。そうした本地域の歴史的環境や本集団が少なくとも五頭もの馬を保持していたという事実を考え合わせると、本集落を構成する集団は、牧馬や駅馬の維持・管理にあたっていた集団であったものとも思われる。H－13号住居址からは、「大工」という技能者をさすかと考えられる墨書土器が検出されているが、さしずめ馬の管理技能者等の存在を意味するのであろうか。

和名妙では佐久郡下には8郷が存在していた記載がみられるが、御代田地区はそのうちの青沼かあるいは小沼郷に属していたものと考えられている。[(1)] H－10からは集落名か地名を表すものと思われる「八科○」という墨書土器が出土している。「八」は住居址の軒数とも一致する。

以上、本遺跡において平安時代前葉（9世紀前半）に青沼あるいは小沼郷下に属する一郷戸「八科○」が展開していたものと考えられる。村落の構成員は30名程度で、馬の維持・管理にあたっ

ていたものと考えられよう。

（堤　　隆）

(3)　平安時代の埋葬馬

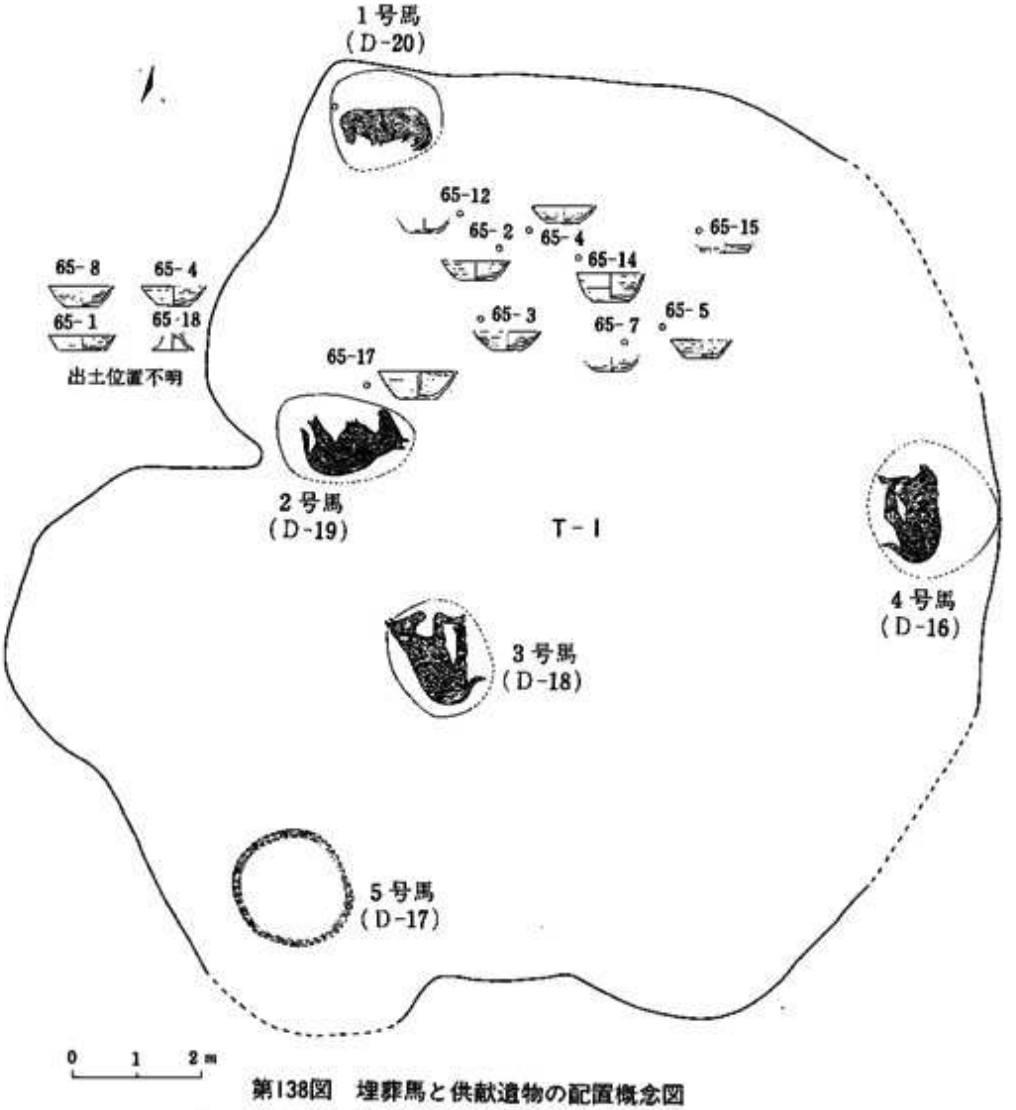
平安時代前葉に位置付けられる集落の南方に設定された墓域には、５基の土壙墓に伴なって５頭の埋葬馬が検出された。また、埋葬馬の土壙墓と軌を一にして特殊竪穴状遺構Ｔ－１が検出された。

前述したように、特殊竪穴状遺構と埋葬馬土壙墓とは、時間的連続性を持つとともに、その関連性が考えられた。すなわち、特殊竪穴状遺構はその機能が放棄された後埋め戻され、そこには埋葬馬の土壙墓が新たに設けられているのである。埋葬馬の土壙墓が、特殊竪穴状遺構のエリア内に設定されていることは、この特殊竪穴状遺構が生前の馬にとって馴染み深い施設であったであろうことを想起させる。「馴染み深い施設」とは、具体的には馬の飼育等に関連する施設となろうか。竪穴状遺構の北西コーナーには、透水層であるⅦ層を繰り抜いて、井戸とも考えられる土壙が掘られていた。そうなるとこの特殊竪穴状遺構は、馬の餌付けや飲水のための施設であった可能性も残る。これらの馬を飼育するための畜舎も本遺跡からそう遠くない場所に存在していたのであろうか。

さて、検出された各馬について、付編の生物学的なデータを参考にしてみよう。まず、年齢としては、１号馬が10～12歳、２号馬は４～５歳、３号馬は20～30歳、４号馬は10歳、５号馬は５歳程度のものと考えられそうである。いずれも成馬といえるが、２号馬・５号馬が比較的若く、１号馬・４号馬はやや歳を経たもので、３号馬は非常な老齢馬といえよう。体格はいずれも小型～中型の部類に属するものであるようだ。その系統については在来馬であるかとうかが問題となってこよう。

各馬の埋葬のあり方については第138図に復原してみた。それによると馬の埋葬方向には統一性は認められない。各馬は、病死等の理由によって一時に埋葬されたものなのか、あるいは、一頭ごとに継続して埋葬されたものなのかは不明である。これらの馬の埋葬に伴って、須恵器を中心とする坏10数点が供献されている。

さて、当該期には、本遺跡北方、浅間山南麓には塩野牧が、東方の八風山麓には長倉牧がそれぞれ展開していたものと考えられる。双方とも左馬寮に属する御牧である。また、律令制の下に整備された「延喜の官道」とも言われる東山道が、本遺跡付近を通過したとも考えられており、長倉駅家の存在も予想される。野火付遺跡にみられる馬はこのような環境の中で育まれたものと考えられる。



第138図　埋葬馬と供献遺物の配置概念図

土屋氏は、野火付の位置する御代田町小田井付近を牧司の居住地域と推定している。(土屋1970) また、菊池氏は東山道長倉駅家が小田井付近に存在したという説を主張している[(2)] (菊池1980)。東山道は、小諸市大里諸地籍に位置する清水の駅を過ぎると、長倉の駅を経て碓氷を越え、上野国の坂本駅に向かった。通常駅家には10疋の馬が当てられたが、碓氷を控えた要所である長倉駅家には15疋が当てられたという。

『延喜式』巻48左右馬寮の項には、御牧馬は4歳となると成馬と認められ、国司・牧監・別当らによって臨検・記帳される。その内優良馬が選定され一年間調教されて貢進され、この選定に漏れたものは官道における駅馬・伝馬として充当されたり、売却されて国庫の収入に入れられた

という記載がみられる。仮に野火付の馬が牧馬であるとすれば、このうちの3頭は4歳の記帳の年を経て久しいもので、貢馬としての資格をすでに失なってしまっているといえる。それらを考え合わせると、野火付の埋葬馬は、塩野牧や長倉牧等より長倉駅馬として払い下げられたものとしてとらえることがより妥当ではあるまいか。したがって、これらの埋葬馬と併存した集落もまた、駅馬の維持管理にあたった駅子らによって構成される「駅戸」と考えられようか。

ちなみに『延喜式』巻26主税上では、信濃国では牧馬の皮は牧田の地子として左右馬寮に収められたという記載がみられる。また、不用となったり死んだりした駅馬の皮は貢納されたようである。いずれにしても馬は死後もその皮が重宝がられたようである。野火付の埋葬馬においては、死後切断された傾向は認められなかったが、その皮は剝離され、貢納されたのかもしれない。

以上、野火付遺跡の埋葬馬検出により、東山道沿いに展開した塩野牧や長倉牧、あるいは長倉駅家の具体像の一端が明らかになってきた。

（堤　　隆）

(4)　中世にかかわる遺構

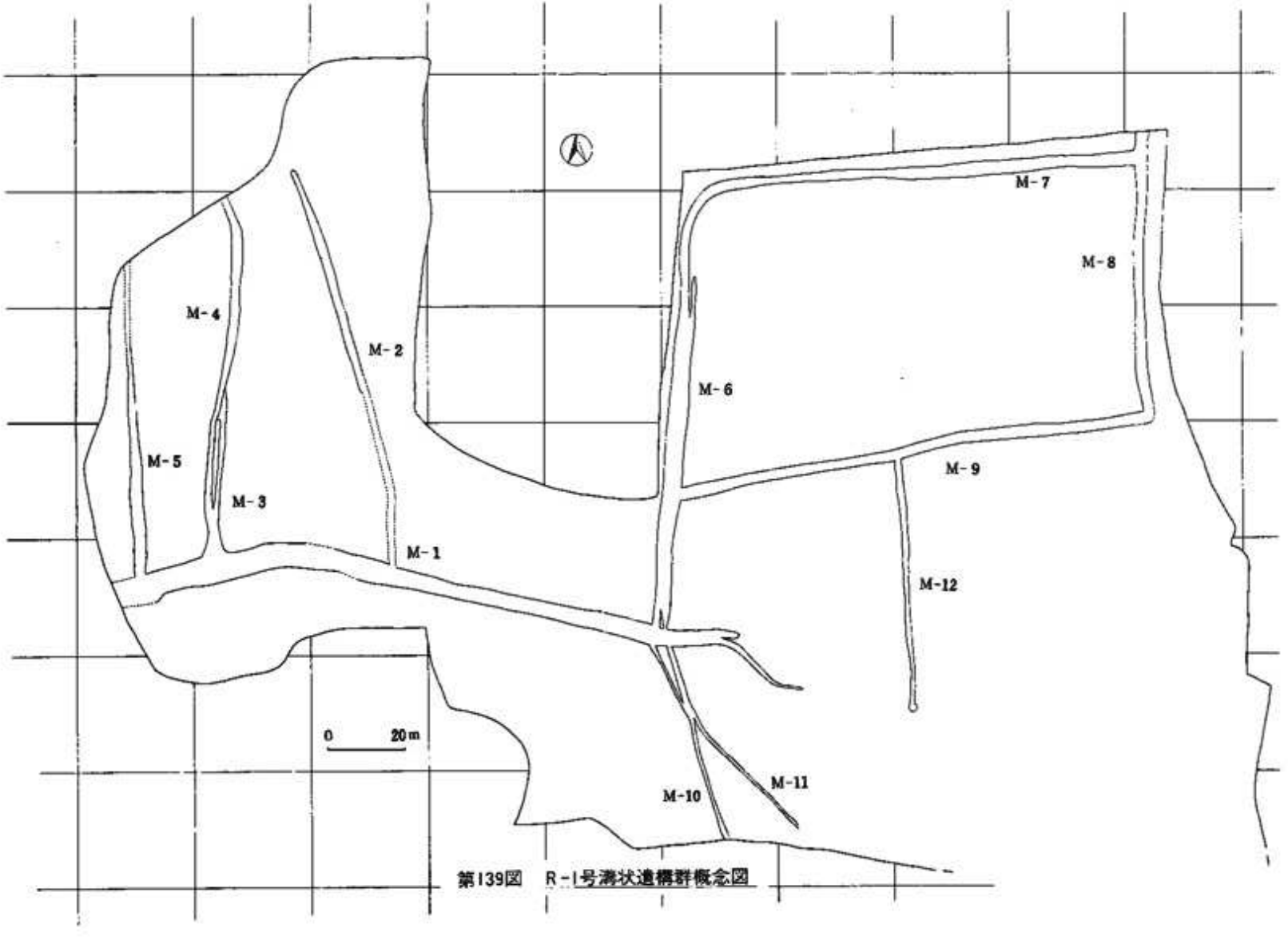
1　竪穴状遺構

竪穴状遺構は第II区南東において64基検出された。その性格については限定でき得なかったが、日常の居住を伴わない簡略な建物址であることが想定された。これらの一部は、重複関係をみせるものの、一時にいくつかの竪穴状遺構が連立していたものととらえられた。また、その多くは、後述する伴出遺物（青磁・白磁）の搬入年代査定によって13～14世紀の所産と考えられそうである。

竪穴状遺構に伴出した遺物は、概して少ないが、その内訳は古銭・土鍋・砥石・磁器（青磁・白磁）・硯等であった。古銭は元豊通宝・治平元宝・至和元宝・紹聖元宝が出土している。これらは平安末期より中世にかけて大量に輸入されてきた中国銭である。後述するが磁器は中国産で、13～14世紀にかけて日本に輸入されてきたものである。

ちなみに佐久市岩村田に所在する大井城跡においても中世と考えられる竪穴状遺構が検出されている。こちらは野火付の事例と比較するとややしっかりとした構造物であり、一部には火処も存在したようで、中世城郭に不随する施設の存在が想定できそうである。その出土遺物は土鍋・青磁・石臼等で、野火付の出土遺物の内容に近似する点が注意される。

さて、野火付の竪穴状遺構群は13～14世紀（鎌倉時代）にかけて残されたものである。中世においては、野火付の隣接地である佃は、八条院領大井荘の直営田であり、これらの竪穴条遺構は佃に伴うなんらかの施設であった可能性も残る。また、中国産磁器や硯等の保有は、一般庶民の



第139図　R-1号溝状遺構群概念図

生活の中では考え難く、むしろそうした荘園領主や在地領主等の支配を仄めかすものかもしれない。

（堤　　隆）

2　R－1号溝状遺構群

R－1号溝状遺構群は本流が調査区外（遺跡北方及び南方）より続き、調査区内においては12の溝に分岐するものである。その一部は9世紀前半の住居址を切り、また、現状の水田に伴う溝のプランとは一致しないため、その所産期は、9世紀後半から現在の水田の原形が形成されるまでの17世紀中葉と幅をもった捉え方をしておいたが、さしずめ中世とみて大過なかろう。ちなみに「野火付」の地名は寛文十年（1670年）の検地帳に新田として登場してくるのである。なおR－1の性格については、農業用水路として捉え、濁川より引水し前田を経て野火付へときた流路を考えたが、肝心な水田遺構は検出できなかった。

近年、中世郷成立の過程において、中世在地領主は自らの居館地を開発拠点とし、中小河川をその敷地内に包括しつつ周囲の不安定耕地を良田化し、郷や村の支配を成し遂げたと考えられている(小山 1965・他)。中世的郷や村の成立にあたって農業水利がいかに重要な位置を占めていたかが理解される。中世小田井郷の構造についてふれる中で井原氏は、「佃地区と西屋敷地区を含む一帯は、八条院領の荘園領主と西屋敷付近の在地領主双方の開発と勧農が行きとどいた」地区であるとも指摘している(井原　1983)。今回野火付で検出されたR－1号溝状遺構群は、まさにそのような歴史的環境の中で把握できるものであり、前述した竪穴状遺構との関連性をも含めて今後の検索が必要となろう。

（堤　　隆）

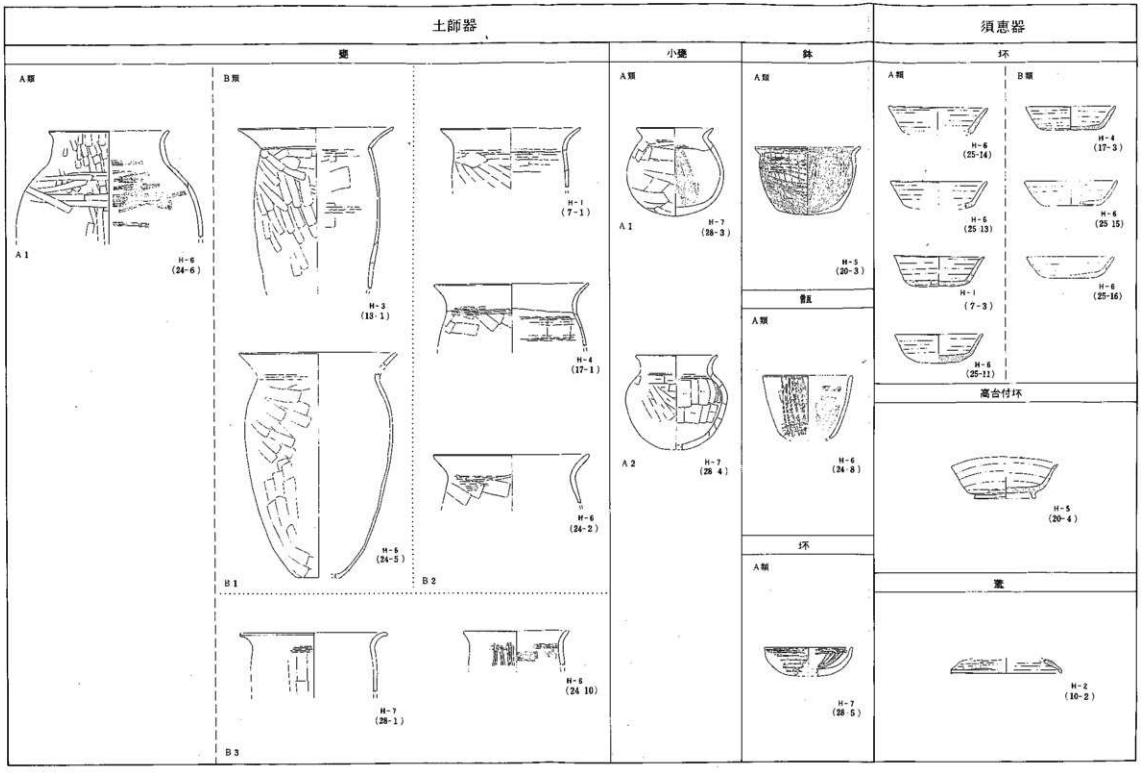
2　遺　　物

(1)　奈良時代と考えられる土器群について

本遺跡のH－1～H－7号住居址からは、奈良時代に比定されると考えられる土器が出土した。ここでは近年、増加の傾向にある該期及びその前後の資料（曽根城・若宮等）と本遺跡の出土資料を比較・検討し、その位置づけを試みたい。まず前提作業として最も遺物の内容が豊富なH－6号住居址を中心として器形・調整に重点をおいた形態分類を行うことにする。甕はA・B類に大別し、B類を更に細分した（第140図）。

土師器

甕　A類　球胴を呈するもの



第140図　奈良時代比定土器群分類図

口辺部はほぼ直立し、端部で外反する。外面調整は口辺部で縦位、胴部で縦位ののち横位のヘラケズリが施される（24—6）。

B類　長胴を呈するもの

B_1類　口辺部が「く」の字状に外反し、最大径を口辺部に有する。外面調整は、口辺部をヨコナデしたのち、胴部上位～下位にかけてヘラケズリが施される。上位は斜・横方向、中～下位は縦方向に近い。器厚は薄い（13—1、24—5）。

B_2類　口辺部がB_1類のように鋭角的に外反せず、緩やかである。その他はB_1類と同様である（7—1、17—1、24—2）。

B_3類　口辺部は、短く強く外反し、最大径を口辺部に有する。外面調整は胴部に縦位のヘラケズリが施され、ヘラミガキが加えられるものもある。器厚さは厚い。所謂「鬼高式土器」の延長線上に位置する土器と考えられる（28—1、24—10）。

小形甕

A類　いずれも球胴で丸底を呈し、最大径を胴部に有する。

A_1類　口辺部は短く強く外反し、外面調整は横位のヘラケズリが施される（28—3）。

A_2類　口辺部は緩く外反し、外面調整は横・斜位のヘラケズリが施される（28—4）。

鉢　A類

口辺部は短く外反し、胴部は逆台形状を呈する。外面調整は、胴部に縦位のヘラケズリが施された後、横位のヘラミガキが加えられる（20—3）。

甑　A類　素口辺の甑

口辺～底部まで若干内湾気味ではあるが、ほぼ直線的である。外面調整は口辺～底部まで縦位のヘラケズリののちヘラミガキが施される（24—8）。

坏　A類

口辺部はほぼ直立し、偏平な丸底を呈する。外面調整は底部にヘラケズリを施した後、ヘラミガキが加えられる（28—5）。

須恵器

蓋　A類

天井部は偏平であるが丸味をもち、口辺部は緩く短く折れて直立する。外面調整は、ロクロヨコナデののち天井部に回転ヘラケズリが施される（10—2）。

坏　A類

口辺部が僅かに内湾する。底部は回転ヘラ切りののち、ヘラケズリが施される（25—14、25—13、7—3、25—11）。「十」字のヘラ記号がみられるものもある。

B類

口辺部が直線的か、僅かに内湾する。底部は全面にヘラケズリが施される（17—3、25—15、25—16）。

高台付坏

著しく歪んでいるが器高が高く口辺部は内湾気味に急角度で立ち上がる。高台部は矩形を呈する（20—4）。

以上の形態分類から本遺跡の奈良時代と考えられる土器を検討する。

まず、土師器甕A類は曽根城、若宮遺跡ではみられなかった形態である。若宮A形態の場合球胴の胴部にヘラミガキが加えられているものが多かった点に差異がみられる。土師器甕B_1類は曽根城A_{12}類と同様のものであるがB_2類は他の遺跡ではあまりみられない。土師器甕B_3類・鉢A類・甑A類などは、所謂「鬼高式土器」の系譜に連なる土器と理解される。須恵器坏A・B類は、曽根城I・若宮両資料でも認められ、奈良時代土器と判断する根拠となった形態である。

以上、本遺跡の分類資料は、曽根城・若宮資料それぞれと共通要素を示しながらも、土師器甕A類におけるヘラミガキの消失、「鬼高式土器」の消長の度合いなどから、曽根城I期の資料により併行する資料と考えたい。また、実年代については、曽根城資料に先行する若宮資料において奈良時代初頭の根拠ととらえた須恵器（特に坏）の大方が、I—17～I—41号窯式（7C中～後半）にまで遡ることが確実になったため、現状では、曽根城I期や、本遺跡の資料をもって奈良時代の前半と考えておくのが妥当と言えよう。但し、若宮資料において、古墳時代の土師器（鬼高系土器）の解体が顕著になり、時代の変革期に移っていることは明らかであり、短絡的に外来系の土器のみで在地の土器の年代を決定して良いものかどうか未だに疑問が残る。

今後、在地において絶対年代を肯定する資料（木簡・古銭等）の検出が期待されるところである。

（小山　岳夫）

(2)　平安時代の土器について

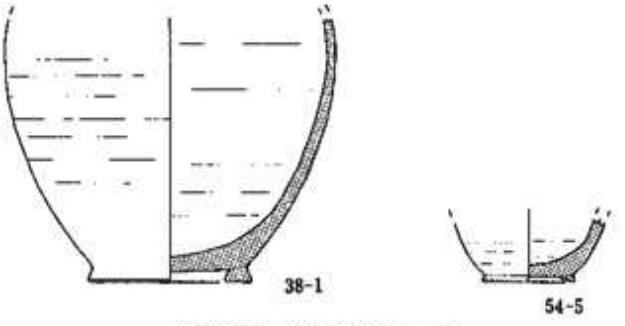
1　平安時代の土器について（鑑定結果をふまえて）

平安時代の土器研究は佐久平において莫大な資料が蓄積されてきたにもかかわらず詳細な分析は全くなされず、未開拓の分野であった。現在までにおおよそ明らかになっていることは、平安時代の前半期において須恵器の坏が器種構成において大きな比重を占めていたのが中～後期に至ると消失し、代って灰釉陶器が多くなる傾向であった。このことから本遺跡のH—9～16号住居址の平安時代土器は前半期に位置づけられることが、あらかじめ予想されていたが、愛知県陶磁資料館、赤羽一郎氏による須恵器等の鑑定の結果、ある程度年代が明らかになってきた。

第41表　鑑定遺物一覧表（平安）

挿図番号	出土遺構	器種	種別	系統	年代	備考
38-1	H－10	長頸瓶	原始灰釉	猿投系	0－10号窯期後半比定（九世紀前半）	三段構成のつなぎ
54-5	H－14	小形長頸瓶	原始灰釉	猿投系	IG－78号窯期前半比定（九世紀前半）	

鑑定資料は第41表のとおりである。H－10の長頸瓶、H－14の小型長頸瓶はいずれも猿投系の0－10、IG－78号窯期9世期前半代に位置づけられる製品であり、灰釉の原初形態（原始灰釉ともよばれる）と考えられている。（但し、原始灰釉の概念については今後更に検討を要する。）



第141図　鑑定遺物（1：4）

次にこれらの鑑定資料と共伴した土器群の特徴を簡単にふれておきたい。

土師器の器種には、甕・台付甕・小形甕・坏・高台付坏などがある。甕には、口辺部は短く弓状に外反し、最大径を胴部に有するものと、口辺部が「コ」の字状を呈するものがある。外面調整はいずれも口辺部ヨコナデののち、胴部上位に横方向、下位に斜、縦方向のヘラケズリが施される。台付甕は口辺部が「コ」の字状を呈し、胴部上位に横方向、下位に縦方向のヘラケズリが施される。小形甕はロクロヨコナデ調整される。坏は、口辺部が内湾気味に大きくひらき、端部で外反するものが多い。底面は回転糸切りのまま未調整のものとヘラケズリを施されるものがある。高台付坏は口辺部が内湾気味に開き端部で外反するものがある。

須恵器には甕・長頸瓶・蓋・坏・高台付坏などがある。このうち、蓋は偏平だが丸味を有する天井部から口辺部は短く折れて直立し、つまみは擬宝珠様を呈するものが多い。坏は土師器坏と同形態のものと外反気味に開くものがある。底部はすべて回転糸切りのまま未調整である。

以上が野火付遺跡の平安時代土器の概略であるが、この器種構成及び個々の遺物の形態は、IG－78・9C中頃比定の環状耳付長頸瓶を伴出した若宮遺跡H6号住居址出土の土器群と酷似している。従って、今後佐久平の9世紀前半の土器は、本遺跡のH－9～16号住居址及び若宮遺跡H6号住居址出土の土器群をメルクマールとして考えても大過ないものと思われる。

（小山岳夫）

2　平安時代の墨書土器について

第142図　墨書一覧

野火付の平安時代前葉（9世紀前半）の住居址からは、「大田」(H—14)・「大工」(H—13)・「八科○」(H—10) と書された3点の墨書土器が検出された。いずれもひとつの名詞として理解することができ興味深い。県下出土の墨書土器については岡田氏の労作があり（岡田　1973・1978)、佐久地方の墨書土器については花岡氏が概観している（花岡　1980)。

双方の論巧を参照しつつ、野火付の墨書土器を瞥見してみよう。

まず、「大田」であるが、これは直に大きな田と解釈してよいであろう。ただしそれが、大きな田を所有していたことを意味するのか、あるいは、大きな田の所有を願望して書かれたものかはわからない[3]。人々の生活の根幹は稲作であり、そうした意味においても田に関する墨書は各地で数多くみられる。ちなみに、「大田」は山形県鶴岡市下清水遺跡、茨城県大宮町一騎山遺跡等に出土事例がみられる[4]。

「大工」は、現在では建築関係の職人を示す言葉であるが、今日的な意味での大工は当時は番匠と称せられていたようである[4]。当時の「工」は、技能者をさすものと解釈するのが妥当であり、そこに「大」という上級を意味する形容詞が冠せられたものと考えられる。墨書土器「大工」を保有した集団は、駅馬の維持・管理にあたっていたという考えを先に述べたが、ここでは「大工」がすぐれた馬の管理技能者をさしていたとするのは誇大解釈であろうか。ちなみに「大工」の墨書は山梨県東山梨郡八幡村大工の八幡遺跡の土器にみられるそうである[4]。どうやらこちらは地名を意味するようである。

「八科○」は、三文字で構成される墨書であるが、残念ながら○の部分は判読できない。この「八科○」は地名か集団名であるかと解釈される。八という数字は当該集落の住居址の軒数とも一致している。ただし、八という数字は吉祥的な意味合いをもつものでもあり、出土事例が多いことは注意される（岡田　前掲)。

さて、信濃の墨書土器の盛行期は10世紀から11世紀中葉とされ、盛行の理由としては荘園の増加と受領層の進出に伴う地方知識層の増大が考えられている。墨書の文字数では、一字のものが圧倒的に多く、2字の熟語となっては少なく、3文字に至っては僅少となるようである(岡田　前掲)。また、時代が下るにしたがって一文字のみの墨書に限られてくるという傾向も看取できるという[5]。野火付の墨書土器は、墨書の盛行期以前の産物であり、そうしたなかにおいては文字数の多さも納得できようし、文字の意を解することのできる資料として貴重である。特に、当該集落の具体像の復原を試みるうえで、これらの墨書の意味する内容は重要となってこよう。

第42表　鑑定物一覧表（中世）

挿図番号	出土遺構	器種	種別	産地	年代	備考
105-4	S－15	盤	青磁	中国	13～14世紀の搬入品	
——	S－20	椀	〃	〃	〃	鎬連弁文が付される。
三六-4	S－62	四耳壺	白磁	〃	〃	
——	D－54	深鉢	陶器	瀬戸	14世紀	
——	D－175	椀	青磁	中国	13～14世紀の搬入品	素文

（堤　隆）

(3)　中世陶・磁器について

野火付遺跡の竪穴状遺構及び土壙より検出された陶・磁器について、愛知県陶磁資料館赤羽一郎氏による同定の結果（第42表）、以下の成果が得られた。

まず、当該遺構出土の磁器が中国産で、13世紀を中心に14世紀にかけて日本に輸入されてきたものであることが判明した（D－54出土の瀬戸系陶器を除く）。このことにより、野火付遺跡における竪穴状遺構の展開した時期が、おおよそ13世紀から14世紀代（鎌倉時代）であるという目安が立てられた。

磁器の種別としては青磁と白磁の二者がみられ、器種的には盤・椀・四耳壺に属するものであった。

貴重品ともいえる中国産磁器の保有は、多数の竪穴状遺構の存在と相まって背後に中世支配者層（在地領主・荘園領主等）の存在を考えさせた。

佐久地方において、考古学的な視点からの中世文化研究は、野火付や佐久市岩村田の大井城跡の調査等でようやくその端緒についたといえ、そうした意味において今回の中世陶・磁器の同定の成果は大なるものといえよう。

（堤　隆・高村博文）

3　〝野火付〟の地名について

野火付遺跡は、北佐久郡御代田町の中にあり、小字名を〝野火付〟という。今回の調査で古代の住居址と埋葬馬で注目されたこの遺跡は、〝野火付〟という例の少ない地名についても留意に価するものがある。

私は、始めてこの〝野火付〟の地名に接した時、既に遠い過去に私達が体験してきた村落における野火付行事を思い出し、同時に〝野火付〟という地名の存在が非常に重要な意味をもつのではないかと考え、この地名が心から離れなくなった。そこで、手近な長野県の地名や百科大辞典・民俗に関する書物等を調べてみたが、私の読書力では、それらに類するものが見出せなかった。さらに、友人達の助言を得て、大日本地名大辞典や著名な民俗学全集・古事類苑などを調べてみたが、記載例を探し出すことはできなかった。しかし、たまたま『和名類聚鈔』の中の燈火部第十九、燈火類百五十六に野火の一項が有ることを堤　隆氏に教えられ、ほんとうに救われたと思った。ところが、その喜びも一瞬で、佐久市文化財保護審議会委員友野一氏に解読してもらったところ、私の期待したものとは違かった。それで、もしかしたら、民俗学において非常に重要だと思っていた野火とか野火付の行事が、歴史上、特に民俗学方面からの研究が省みられなかったのではないかと考えるようになり、私は、私の経験からそれらの行事の意義の大きさや重要性を記憶をたどりながら書き記すことにした。とはいっても始めから学問的知識を以って研究する力を持っているわけではないので、私の土臭い体験、貧しい記憶を主としなければならないことは物足りないと感じている。

1．野火付について

辞書による野火は、「焼き灰が肥料になる。」という一語につきるが、野火付は農耕文化と切り離して考えられない重要な意義をもっているものと思われる。その効要の一義は病虫害の駆除であり、このことはさらに広い大きな意味で取り上げなければならず、一言で書き尽くせないものである。農耕文化における病虫害は、既に古代史の記述の中にも現われており、神々は心を痛め、その除去に力を合わせている。古来より、この害に対する防止策は、野火による外はなんの手立ても無く、野火付は農耕文化の発生とともに病虫害駆除の方法として、農民達によって体得され受け継がれてきたものであろう。焼畑も、今日、春先きの田園風物詩になった畦焼きも、すべてこの風習を継承してきたものである。こうした意味から農耕文化は、野火付によって護られ育てられ発展してきたといえるし、牧畜とまたこの恩恵で栄えることができたとも考えられる。この風習は古来から農民の最も重要な歳時であり、その事例は村落の区別なしに残っている。しかし、近時農業が機械化し薬剤の発達により、今後、あるいは農民からも忘れられる運命にあるのかも

しれない。

野火付は農耕に先だつ早春に行なわれた。その日は、名主とか区長とかから触れが廻され、いい繋ぎといって、村はずれの家から始まって次ぎ次ぎに隣へいいつなぐのである。当日は村中の男衆は総出で、都合で女衆の出る家もあった。そして、野火付の場所へ集まって野火付が始まる。枯れ草の束に火を付けて引き廻して行くと火はたちまち燃え拡がってゆく。道路とか小川とか一定の線で手前の方を防ぐと、あとはどこまで焼けようと平気でいられるが、たまたま火の手が早く、手前の方が防ぎきれなくなって真剣に大声をあげることもあった。野火付には、また、どこの村にも共通の風習があった。それはどこでも何百ヘクタールという広大な山野を焼くのであるが、一旦つけた火は、手前だけ防ぐと山の方へ延びるのは全然意に介さなかった。山が丸焼けに焼けて、尾根を越えた火が他村にはいっても、その時は、必要があったら、その村で消火すればよいという習慣である。

川端下村（現川上村大字川端下区）には変った野火付の行事が伝えられていた。野火付の時期が近づくと、昔は名主、今は区長が村中から代参人を選んで、三峯山に参詣させ、山犬様を借りて来る。この山犬様とは、三峯山の御神体である伊弉諾・伊弉冉尊の眷属であり、焼きものでお姿が造られていた。

代参人は十文字峠を越える難路で、もちろん三峯山で一泊する。次の日の帰り道、幾度かの小川の飛び石を渡る時、石の上に水で濡れた跡を見ることがある。それを見ると、既に、山犬様が先に立って渡った証拠であると勇躍して帰って報告し、山犬様は山の神様にまつられる。野火付の当日、区長は山犬様を伴って野火焼をする山野を一巡する。それは、山犬様が一緒について廻ると、山犬様の足に着いた水滴が一巡した線に残るので野火はこの線以外に拡がらないという強い信仰からである。川端下の野火付は、この行事が終った後で始められる。そしてここの野火付は一定の予定線で必ず消し止めなければならない工夫と準備がされて、野火付が終われば、再び山犬様は三峯山に送り帰された。川端下の野火付に変った行事が行なわれた理由については、有名な霊山である金峯山の麓の村ということで、周辺には修験場があり、霊場や社寺が存在する山中にあって、絶対に野火の延焼が許されない土地だったからではないかと考える。そして、この野火付行事は、厳粛で印象深いものだったと思う。

2．野火消しと野火止について

野火付があると、当然、野火消しのことを忘れることができない。野火には計画的な野火付もあるが、時に失火もあり、過失の延焼や放火ということもある。野火消しの道具は、古来から唯一、松の木の枝だけであった。野火消しといえば、手頃に伐った松の木の枝を一人残らず担いで行き、うちわの様なこの枝で野火を叩いて消し止めるのである。一人や二人で消せない猛火も、

大勢の力が揃うと消し止めることができた。野火付も野火消しも勇壮な仕事だった。野火消しに使う松の木は、どこでも間に合うようでなければならない。そのため、昔の人達は松の木を非常に大切にし、山野や道端の至る所に育てておいた。今の人達は、植林の地拵といって、松の木でも一本残らず伐り払ってしまっている。もし、こうした原野で、間違って野火を起したら、どうして消し止められるだろうかと考えさせられることがある。

野火、野火付を調べていると、野火止用水が眼にとまった（"野火止"という地名は残っているらしい）。野火止用水は、『日本百科大辞典』（1964　小学館）に載っていた。これは、非常に大切なことだから引用させてもらう。「埼玉県南東部、北足立郡新座町の一地区、なだらかな地を防風林に囲まれた農家があり、純粋な武蔵野の面影を残している。江戸時代1653年（承応三年）川越藩主松平信綱が草刈場や薪伐場となっている台地上の草野の開発を企て、55戸の農家を移住させたが水が無かったので困難を極めた。たまたま玉川上水が完成しその功により当時老中であった信綱は、上水の水、三割分水の許可を受け、約24km水路を開いて、野火止に導きこのため附近一帯が開発された。それが野火止用水であり近くに古寺の臨済宗平林寺がある」以上は、20余年前の文章であり、今では行政区画が変っていることと思う。また、この飲料及び灌漑水として利用されていた用水は、東京都が玉川上水からの分水を止めたため、ここ10余年干上がっていた。ところが今度、再びこの用水が復活し、東京都の自然環境保全地域もできて、自然保護団体の注目を集めているようである。ここで特に注意したい点は、用水の説明は歴史を加えて詳しいが、肝心の野火止については一言も触れていないことである。これは、農耕文化の原点ともいうべき野火について歴史学や民族学から無視されてきたように、野火止も、また、同等の扱いを受けているためなのかもしれない。野火止用水は、いうまでもなく野火止という歴史的な遺構を利用して用水路をひいたものにほかならず、留意すべきことはこの野火止であり、この遺構を調べたら全国的にもかなりの数がみつかるのではなかろうか。昭和59年７月29日付の朝日新聞の俳句欄に「野火止を越えて蛍が飛び行けり」という句が載っていた。これは、兵庫県の芦屋市の人の句であるが、この句から想像されることは、野火止は一寸、飛び越えられない溝か、深い堀のようでその施設の様子まで明らかになってくる思いがする。野火付が歴史的なものであれば、野火止も、また、当然歴史的な存在である。野火止のことを考えると、さまざまな想像が拡がってくる。

野火は、単に農耕や牧畜の採草地における平和的な利用ばかりではなかった。ある時は過失の野火があり、放火によるものもあったであろう。さらに、問題は戦争のために武器として使われた野火があった。それらは原始社会にもあったろうし、古代社会の権力争奪の歴史の中にもみられたであろう。野火は平和な生活の原点でもあったが、また、戦の武器でもあった。部族や集団の戦に野火は、最強の武器だったのかも知れない。とするならば、野火に対する防備は原始時代からの発想でなければならない。殊に日本の家屋構造は、原始時代以来、竪穴住居から掘立家屋

にいたる千古の歴史を通じ、最も火に弱い草木構造である。火に対する警戒心、特に外部から不意打ちされる野火に対する警戒は常に厳重であったと思われる。家屋や屋敷、集落、さらに墓域や古墳を巡る周濠や環境、それらに類したものは、種々の目的が当然あったものと考えられるが、それらのなかには、野火止の用途を考えてつくられたものも多くあったのではないだろうか。とにかく、現代でいう防火線の役目を持つ野火止は歴史的にみて大切な遺構である。

"野火付" の地名から

御代田町に残されていた"野火付"の地名は、古代において大平原を想わせる中心付近にあり、農耕文化とともに、古牧等に関連する重要な歴史の遺産である。そのほか、隣接して"佃"とか"鋳師屋"とか歴史的にみて由緒ある地名が残されており、付近一帯は地名の宝庫といえよう。"野火付"という地名の発生は、これら周辺の地名とどんな関係があったのだろうかと思い、土地の郷土史家や古老達に尋ねてみたが古文書やいい伝えなど地名については何も分らないということであった。そこで安易な憶測は許されないが、野火付が非常に広大な区域に渉らなければならないことから、鋳師屋や佃という名称と同一期の発生とは思われない。また、鋳師屋や佃の廃墟の後に生れた考えることも無理があるので、これらの地名に先立って発生したと考えてみるのが自然であろう。それにしても、この古い地名が、ここに残されていたということは、特に人口に膾炙(カイシヤ)する何ものかがあったのではないか。例えば、この大平原の野火付には、周辺の集落による約束事とか、協同作業とか特に印象づけられる行事が行なわれたのではないかと推測される。特に佐久は古代、有名な官牧の存在した地域であり、ここでは一層、盛大な野火付が行事として行われたと考えられ、今後、地域の考古学的調査において注意してゆく必要があろう。

さて、全国的に行なわれたであろう野火付が、記録に何も残されず忘れ去られようとしていた時、この地に地名として存続していたことはすばらしいことだと私は思う。遺跡が文化財であると同様に、この"野火付"の地名は、大地に刻まれた貴重な遺産といえる。"野火付"のこの土地が、原始以来、様々な変遷を重ねてきたように、今後、どのように変化するかわからないが、しかし、この貴重な地名を永久に失わせないでほしいと心から願っている。

(由井茂也)

補　註

(1) 倭名類聚抄に登場してくる佐久郡下八郷は、美理（ミトリ）・大村・大井・餘戸（アマリベ）・青沼・刑部（オサカベ）・茂理（モタリ）・小沼であるが、そのうち御代田地域を包括すると考えられる郷名は青沼かあるいは小沼である。日本地理志料によれば、青沼が現在の御代田地区一帯をさし、小沼は小海・南牧・相木・川上一帯をさすという解釈がなされている。大日本地名辞書はその逆で、青沼は小海・海ノ口・海尻、小沼は旧小沼村・大井・長倉をさすものとしている。御代田地区一帯が、小沼郷に属するのか青沼郷に属するのか、現在のところでは決定できない。

(2) 菊池清人氏は長倉駅家が小田井に存在したと考えられる理由として、1)小田井には長倉という小字名が残ること、2)延喜式にみられる長倉神社は小田井の飯玉神社であるらしいこと、3)小田井付近に大きな寺があったらしいこと、4)駅の運営に必要な駅田の経営は、御代田地区以東の高冷地では不可能であること、5)駅の存在は長倉牧外でなければならない等々をあげている。（菊池　1980）。一志茂樹氏もまた長倉駅家を小田井の中屋敷地区と想定している。（一志 1958）。反対に、与良清氏は長倉駅家を、軽井沢町の借宿あるいは沓掛付近と考えている。（与良　1956）。なお、清水駅推定地（小諸市大里諸）より小田井までの距離は約10kmで、通常いわれている駅間の間隔（20km）の約半分の距離である。

(3) 本遺物を所有する集団は、長倉駅家に属する駅子らによって構成されると結論付けたが、駅の運営費用は駅田の経営によって賄われており、想像を逞しくすれば「大田」とは駅田をさしていたとも考えられようか。

(4) 岡田正彦氏の御教示による。

(5) 桐原健氏の御教示による。

付　編

野火付遺跡埋葬馬の年齢についての予備調査

信州大学農学部家畜生体機構学教室
大島浩二、松尾信一、森下芳臣

野火付遺跡において発掘された平安時代のものと推察される埋葬馬五頭のうち三頭（1号馬・3号馬・4号馬）について、歯の形態より年齢査定を行なった。

年齢査定にあたっては、Getty（1975）や加藤（1969）の家畜解剖書の記載を参考とし、切歯及び臼歯の摩滅の程度、とくに切歯の咬合面の形態（歯、黒窩、歯星などの消長）により推定した。

まず、4号馬は切歯や臼歯の摩滅が少なく、また、切歯の咬合面の形態から10歳前後と推察された。

1号馬は、不明瞭ではあるが、切歯の摩滅が4号馬より幾分進んでいるため、12歳前後と推測できる。

3号馬は、上顎、下顎の切歯及び臼歯が著しく摩滅しており、30歳以上の老齢馬と考えられる。

尚、これらの埋葬馬の年齢査定については、今後さらに詳細な検索が必要である。

付　編

野火付遺跡出土の馬骨、馬歯について

信州大学農学部家畜育種繁殖学教室

辻井弘忠

野火付遺跡より出土した馬骨、馬歯は、埋葬品等から平安時代のものと判定されている。この時代には、長野県下にも「牧」が存在していたことが記述されている。特に塩野牧や長倉牧が近在していたこと、また駅家が存在していたことから、それらの馬と考えられる。馬骨の状態（横位）から埋葬されたものであることがわかる。前歯の咬耗度による年齢については、古代の飼馬は今日程良種の飼料を食べてないと考えられることから、正確な年齢判定は出来ないが、２号馬と５号馬が５歳、１号馬が10歳、３号馬が15歳と考えられる。これらから、老馬によるに及んでもなおかつ使役に供されていたものと思われる。また、臼歯面の模様からみると、蒙古馬より朝鮮済州馬に類似していると思われる。頭骨がいずれも欠除しているため、蒙古馬、朝鮮済州馬、木曾馬のいずれであるか正確に判定出来ないが、下顎骨下縁角がかなり丸味を帯びている点から、蒙古馬及び木曾馬でなく朝鮮済州馬に近い特徴を有していると考えられる。さらに門歯と前臼歯との間隙距離、歯冠長、歯冠幅、個歯冠高などの計測の結果、1907年のW. Salensky、1939年の森の報告の蒙古馬の計測値により小さく、1939年徳永・森の報告による朝鮮済州馬の計測値とほぼ一致した。

馬骨において、肩甲骨、上腕骨、橈骨等の骨の長さ、太さからも朝鮮済州馬の大きさであると判断された。

性別については、判断する材料がなかったが、牝馬が主ではなかったかと思われた。

これらのことから、これらの馬の体高は、蒙古馬及び木曾馬の135cm前後より小さい122cm前後で朝鮮済州馬と近いものと思われる。尚、６号馬は、離れた場所から出土しており、平安時代以降の馬で、他の馬よりもう少し小型の110cm位と思われた。

これら出土した馬は、日本在来馬の一種の木曾馬の先祖であるかどうかについては、これらの結果からは言えない。しかし、長野県下において、古墳時代の遺跡の平出遺跡から出土した馬骨（上腕骨）より、今回出土した馬骨は大きかった。同様に日本の馬は古代から年々大きさを増していることが知らされている。現存する木曾馬がどのように改良されてきたのか、また同一先祖なのか等を探る貴重な出土産物と考えられる。

最後に、本調査に御協力下さった当研究室の浅井貴之君、行村浩昭君に感謝の意を表す。

付　編

野火付遺跡出土の馬骨について

前橋第二高校
宮崎重雄

野火付遺跡の土壙内から、平安時代のものと思われる５頭の馬骨と時代不明の馬骨１頭が出土した。いずれも保存が悪くて、骨の形態を詳しく知ることができないうえ、計測値もわずかしか得られなかった。

各馬の推定年齢は次のようである。

１号馬（11歳）、２号馬（４歳）、３号馬（20歳以上）、４号馬（10歳）、５号馬（５歳）、以上平安時代、６号馬（12歳）……時代不明。

２号馬は第四乳臼歯が生え換るところで、萠出途中の永久歯が歯槽内に見えている。この歯の交換時期から４歳と判断した。他の馬の年齢は、主に歯の咬耗度[1]によって推定した。

３号馬のような20歳以上の馬といえば、すでに激しい使役には耐えられない老齢馬である。それが、丁重に埋葬されていたことは、働きの良くなくなった老齢馬でも、天寿を全うするまで、大切に飼育されていたように思える。その一方で、２号馬や５号馬のような若駒が埋葬されているのは、何を意味するのだろうか。特にその死因を知りたいところであるが、骨には人工的損傷を受けた痕跡は見当たらない。病死したのだろうか。

現存する国内の在来馬には、中小の二型があり[2]、一つは長野県の木曾馬（平均体高133cm）[3]や宮崎県の御崎馬（平均体高132cm）などの中型馬で、もう一つは南西諸島のトカラ馬（平均体高115cm）[2]などの小型馬である。朝鮮の済州島馬は後者に属す。

野火付遺跡の馬が国内の在来馬のどの型に相当するのかを検討するため、４号馬の中足骨全長（26.3cm）を林田[4]の体高推定式に代入してみた。算出された体高は130.5cmで、木曾馬、御崎馬より幾分小さいながら、トカラ馬よりははるかに大きい中型馬であることを示している。第43表によって、中足骨全長を直接国内在来馬と比較しても、全臼歯列長の比較でも、４号馬が中型馬であることを支持している。すなわち、野火付遺跡出土の馬はどれも、駅馬として十分やっていける体格の持ち主であったといえる。

本遺跡の馬の系統については、中型馬ということで、御代田町の最も近くに現存する中型在来馬の木曾馬に近縁である可能性が考えられるが、他方に東亜在来馬の「体格と遺伝的近遠の程度、は無関係である」という研究例[5]もあって、骨形態学的にさらに詳細なデータでも得られない限り、系統についてのこれ以上の言及はできない。

第43表　野火付遺跡出土の馬骨と在来馬の計測値（宮崎付表）

標　　本	時　代	上顎全臼歯列長	下顎全臼歯列長	中足骨全長
野火付　1号	平　安		16.10	
〃　2号	〃		16.55	
〃　3号	〃		16.30	
〃　4号	〃	16.62		26.30
〃　6号	不　明		16.59	
(6) 木曽馬（最大）	現　世	18.40	19.30	27.35
〃　（最小）		16.25	16.80	26.00
〃　（平均）		17.32（N＝6）	17.99（N＝6）	26.74（N＝6）
(7) 御崎馬（最大）	現　世			27.50
（最小）				25.10
（平均）		16.38（N＝8）	16.72（N＝8）	26.30
トカラ馬（最大）	現　世			24.60 (8)
（最小）				22.50
（平均）			15.70（N＝1）	23.60（N＝3）
(6) 済州島馬	現　世	15.10	15.40	22.65

（単位cm）

第44表　野火付遺跡埋葬馬臼歯計測値（宮崎付表）

区分 / 標本	第2前臼歯	第3前臼歯	第4前臼歯	第1大臼歯	第2大臼歯	第3大臼歯	備　考
	歯冠長 〃 幅	歯冠長 〃 幅	歯冠長 〃 幅	歯冠長 〃 幅	歯冠長 〃 幅	歯冠長 〃 幅	
1号馬 （下顎）	3.14	2.60	2.40	2.17	2.22 1.66	3.17 1.37	
2号馬 （下顎）	3.37 1.50	2.88 1.77	2.62 1.65	2.60 1.57	2.62 1.35	2.86 1.25	エナメル幅
3号馬 （下顎）	3.10 1.44	2.57 1.64	2.50 1.63	2.20 1.63	2.36 1.40	3.66 1.27	エナメル幅
4号馬 （上顎）		2.76 1.61	2.50 1.52	2.63 1.38	2.44 1.44	2.97 1.31	エナメル幅
6号馬 （下顎）	3.36 1.79	2.86 1.93	2.75 1.92	2.44 1.72	2.31 1.70	3.10 1.51	

（単位cm）

本稿を草するにあたって、御代田町教育委員会の堤　隆氏、佐久市教育委員会の林幸彦氏、前橋市教育委員会の前原豊氏にはお世話いただいた。ここに記して感謝申し上げる次第である。

引用文献

(1) A. Goubaux　1892　「The Exterior of the Horse, philaclelpha.」

(2) 林田重幸　1979　「日本在来馬の源流一日本古代文化の探究」・馬（森浩一編）、ＰＰ213—262、社会思想社、東京

(3) 林田重幸　1957　「中世日本の馬について」日本畜産学会報、28・（5）、ＰＰ301—306

(4) 林田重幸ほか　1957　「馬における骨長より体高の推定法」鹿大農学部学術報告、6、ＰＰ146—156

(5) 野沢謙ほか　1981　「家畜と人間」出光科学叢書18、東京

(6) 岡部利雄　1953　「木曾馬について一日本在来馬に関する研究」文部省科学試験研究、№9、ＰＰ73—160

(7) 斉藤勇夫ほか　1972　「御崎馬の死亡調査と遺骨の測定一第3報、骨の測定値について」宮大農学部研究報告、19、1、ＰＰ295—304

(8) 林田重幸　1956「日本古代馬の研究」人類学雑誌、64、4、ＰＰ197—211

引用参考文献

小諸市教育委員会　1983　『曽根城遺跡』

佐久市教育委員会　1984　『若宮遺跡』

国平健三・他　1976　『草山遺跡』　神奈川県教育委員会

国平健三・他　1979　『上浜田遺跡』　神奈川県教育委員会

林　茂樹・他　1973　『本郷南羽場・陣垣外』　飯島町教育委員会

関野　克　1934　「日本古代住居址の研究」　(『人類学雑誌48－591』)

松村恵司　1977　「5．住居面積と居住人数の想定」　(『山田水呑遺跡』)

佐久市教育委員会　1981　『下小平遺跡』

吉田章一郎・田村晃一　1961　「千葉県我孫子町中学校校庭遺跡」　(『考古学雑誌』47・1)

沢田大多郎　1967　「古墳発生前における社会」　(『考古学研究』53)

河野真知郎　1975　「初期農耕集落の解明――ベッド状遺構の再検討――」　(『Circum Pasific』1)

桐原　健・御子柴泰正　1969　「長野県伊那市焉笠原堂垣外遺跡調査概報」　(『信濃』21)

石野博信　1975　「考古学から見た古代日本の住居」　(『家』)

土屋長久　1970　「信濃長倉牧址にある上代牧場遺構」　(『長野県考古学会誌』9)

菊池清人　1980　『佐久の交通史』

御代田村誌編算委員会　1958　『御代田村誌』

井原今朝男　1983　「東国荘園における佃の一形態」　(『中世の東国』冬)

岡田正彦　1973　「墨書・刻書土器小考」　(『信濃』25－4)

岡田正彦　1978　「信濃の墨書・刻書土器」　(『中部高地の考古学』)

花岡　弘　1980　『関口B遺跡』　小諸市教育委員会

小山靖憲　1965　「東国における領主制と村落」　(『史潮』94)

阿部芳春　1935　「清水駅址」　(『信濃』I・4—9)

一志茂樹　1969　「古代駅制について」　(『信濃』

黒坂周平　1974　「且理の駅について」　(『千曲』1)

一志茂樹　1949　「清水駅址考」　(『信濃』III・1—5)

一志茂樹　1958　「古代碓氷考」　(『信濃』III・10—6)

岡田正彦　1977　「平安時代土師器等の編年試論」　(『信濃』

辻井弘忠・吉田元一　1984　「木曽馬の体型調査」　(『信州大学農学部紀要』21)

野村晋一　1977　『概説馬学』

松本久喜　1948　『在来馬』

加藤喜太郎　1969　『家畜の解剖と生理』

Getty, R　1975　「Sisson and Grossman's The Anatomy of the Domestic Animals」

後　記

記録的な猛暑が続いた昨年の夏でしたが、調査が終える頃には、いつしか秋風のたつ頃となり、巡り来る季節の訪れは正直だというものの、時には暑すぎたり寒すぎたり、その逆に冷夏に苦しめられたり、自然現象の前にはまだまだ人間は振り回されます。

こんな状況のなかで発掘調査は、限られた予算と期間とスタッフで、より正確な遺跡の記録を保存するべく調査団は努力するわけですが、研究者の願望である、時間と金をかけて、古代のロマンを徹底究明するということは夢のまた夢であります。

野火付遺跡は、長野県が施工する圃場整備事業により破壊されることになり、記録保存をすることになったのですが、最良の埋蔵文化財保護である、現状での保存が難しく、止むなく開発に協力という嘆かわしい現在の実態は憂慮に耐えない次第です。

所謂開発が先か、保護が大切かを論ずる前に、文化財保護法でいう"人類の足跡を正しく理解することは、将来の我国の向上発展の基礎をなす"ということを咀嚼してみるのが大切ではないでしょうか。

この保護法の原点に戻って、関係部局のご理解を念ずるものです。

御代田町が、今回の発掘調査を契機に、今後予想される文化財保護に対応するため、専門職員を新規採用されたことについて、古越寅男町長のご英断に深く敬意を表します。

本遺跡の調査によって、奈良・平安時代住居址18軒、掘立柱建物址８軒、このほかに竪穴状遺構及び井戸址等を検出し、特に埋葬馬５頭の出土は余り例がなく、東山道及び牧、駅舎の関連等が今後ある程度解明されるのではないかと期待しながら、ようやく調査報告書刊行にこぎつけました。

おわりに調査にご協力いただいた、町文化財審議委員、町老人クラブ等の皆様に厚く感謝申しあげる次第です。

（調査団）

図版一　航空写真

1. 野火付遺跡付近(白丸が野火付遺跡)

図版二　H－1号住居址

1. H－1 号住居址(南方より)

2. H－1 号住居址　カマド(南方より)

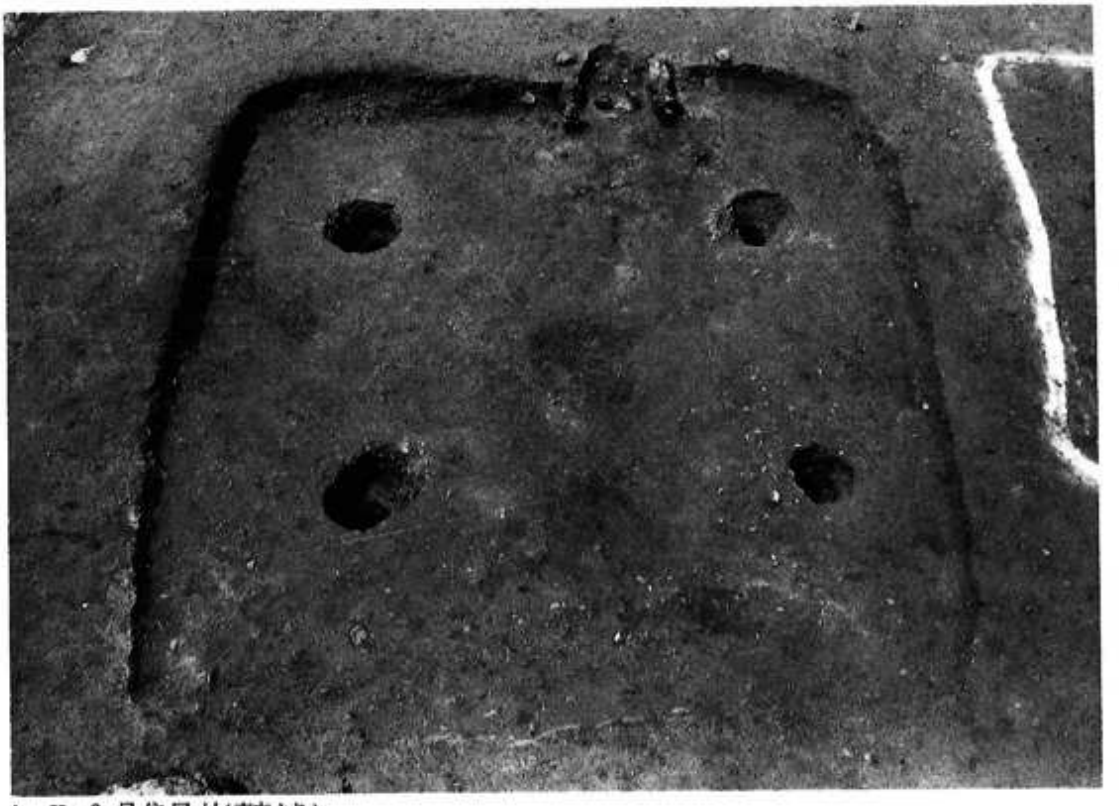
3. 出土遺物　7－3

図版三　H－2号住居址

1. H－2 号住居址(南方より)

2. H－2 号住居址　カマド(南方より)

図版四　H－3号住居址



1. H－3 号住居址(南方より)

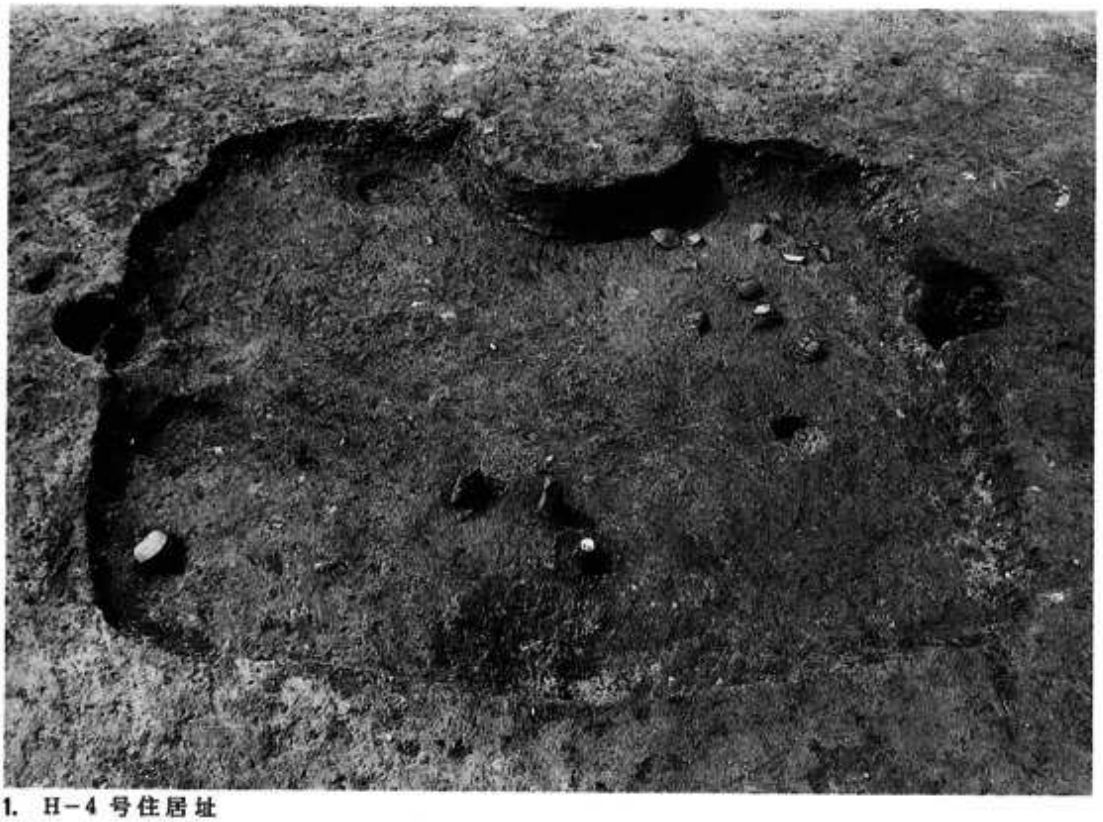
2. H－3 号住居址　掘り方(南方より)

3. H－3 号住居址　カマド(南方より)

4. 出土遺物　13－1

5. 出土遺物　14－5

図版五　H－4号住居址

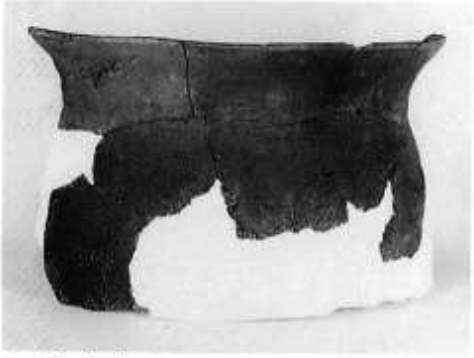


1. H－4号住居址

2. H－4号住居址　カマド

4. 出土遺物　17－3

5. 出土遺物　17－6



3. 出土遺物　17－1

6. 出土遺物　17－7

図版六　H－5号住居址

1. H－5 号住居址(南方より)

2. H－5 号住居址　掘り方(南方より)

3. H－5 号住居址　カマド(南方より)

4. 出土遺物　20－1

5. 出土遺物　20－3

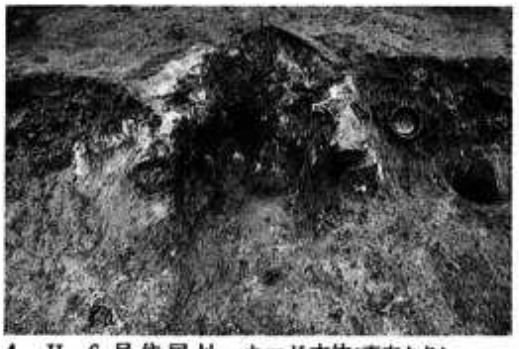
6. 出土遺物　20－4

図版七　H－6号住居址

1. H－6 号住居址(南方より)

2. H－6 号住居址　掘り方(南方より)

3. H－6 号住居址　掘り方(南方より)

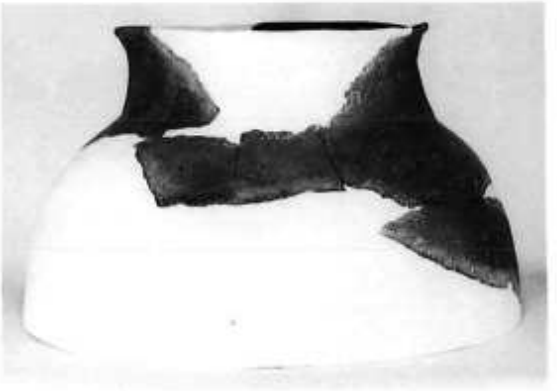


4. H－6 号住居址　カマド本体(南方より)

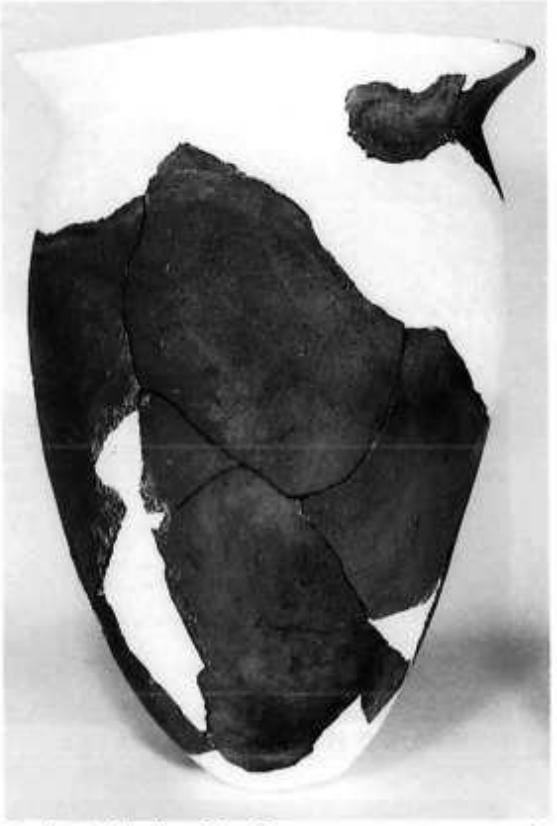
5. H－6 号住居址　カマド袖部芯の石組

図版八　H－6号住居址

6. 出土遺物　24－4



8. 出土遺物　24－6



7. 出土遺物　24－5

9. 出土遺物　25－11

10. 出土遺物　25－13

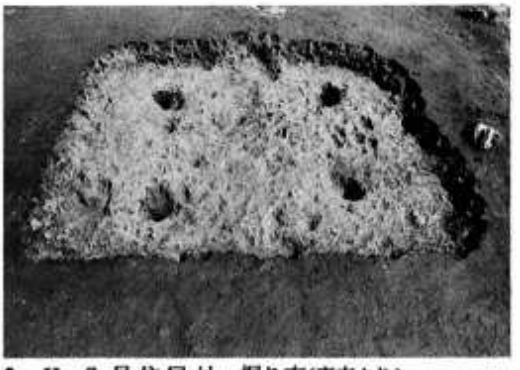
11. 出土遺物　25－15

12. 出土遺物　25－16

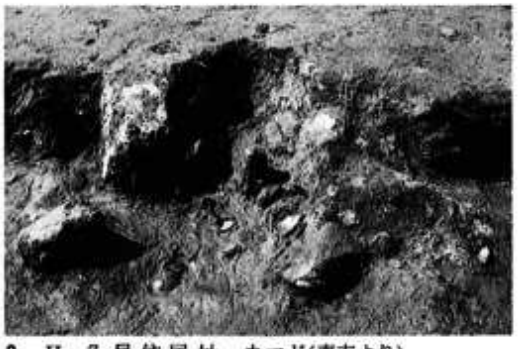
13. 出土遺物　25－17

図版九　H－7号住居址

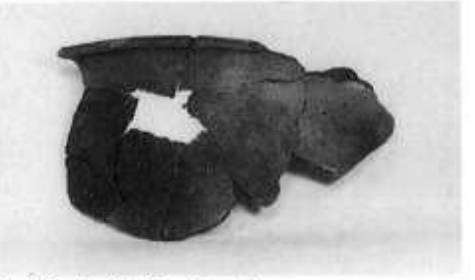
1. H－7 号住居址(南方より)



2. H－7 号住居址　掘り方(南方より)



3. H－7 号住居址　カマド(南方より)



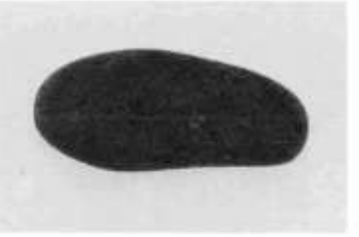
4. 出土遺物　28－2

5. 出土遺物　28－3

図版一〇　H－7号住居址（上段）・H－8号住居址（下段）

6. 出土遺物　28－4

7. 出土遺物　28－6



8. 出土遺物　29－8

9. 出土遺物　29－9

1. H－8号住居址　掘り方（南方より）

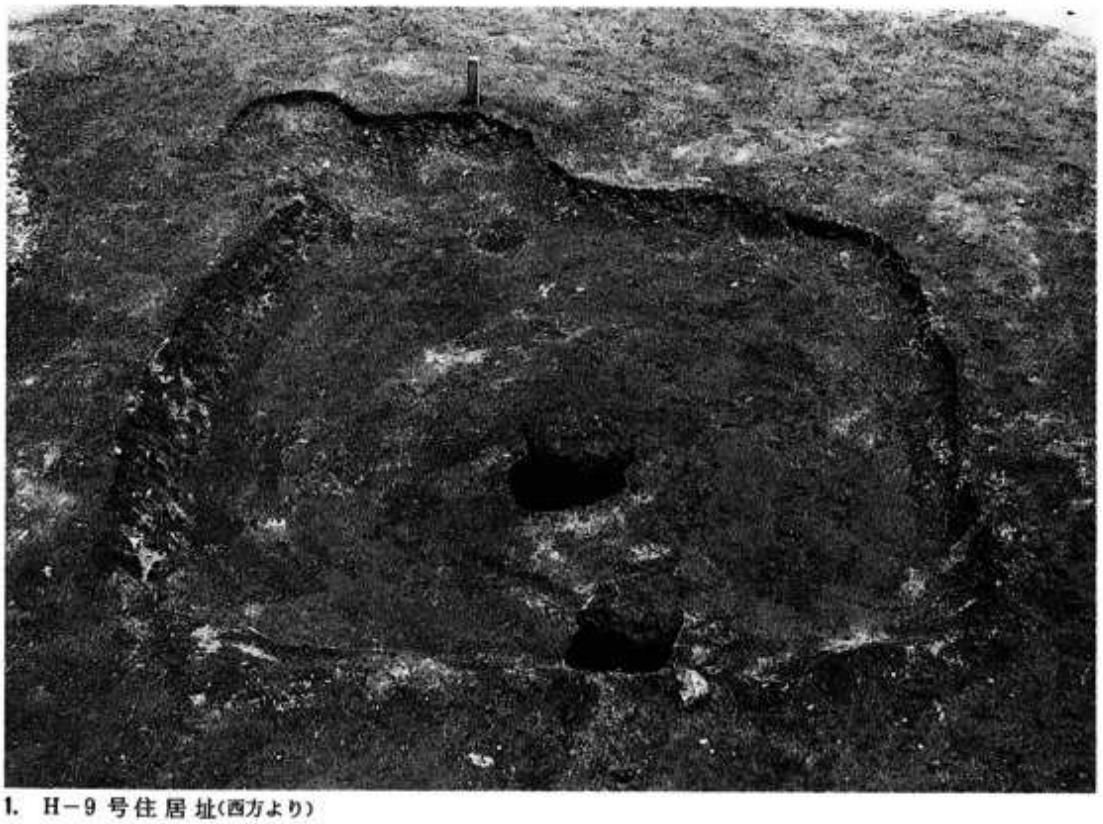
2. 出土遺物　31－2

3. 出土遺物　31－4

4. 出土遺物　31－5

5. 出土遺物　31－1

6. 出土遺物　33－10



1. H－9号住居址（西方より）

図版一二

H－9号住居址（上段）・H－10号住居址（下段）

2. 出土遺物 35－2

3. 出土遺物 35－4

4. 出土遺物 35－5

1. H－10号住居址（南方より）

2. 出土遺物 38－1

3. 出土遺物 38－2

図版一三　H－10号住居址（上段）・H－11号住居址（下段）

4. 出土遺物　38－9

5. 出土遺物　38－10

6. 出土遺物　38－11

7. 出土遺物　38－12

8. 出土遺物　38－13

9. 出土遺物　38－17

10. 出土遺物　39－18

11. 39－18　墨　書（八科〇）

12. 出土遺物　39－19

13. 出土遺物　39－20

14. 出土遺物　39－21

15. 出土遺物　39－22

1. H－11号住居址　カマド（西方より）

2. 出土遺物　42－1

3. 出土遺物　42－2

図版一四　H－11号住居址(上段)・H－12号住居址(下段)

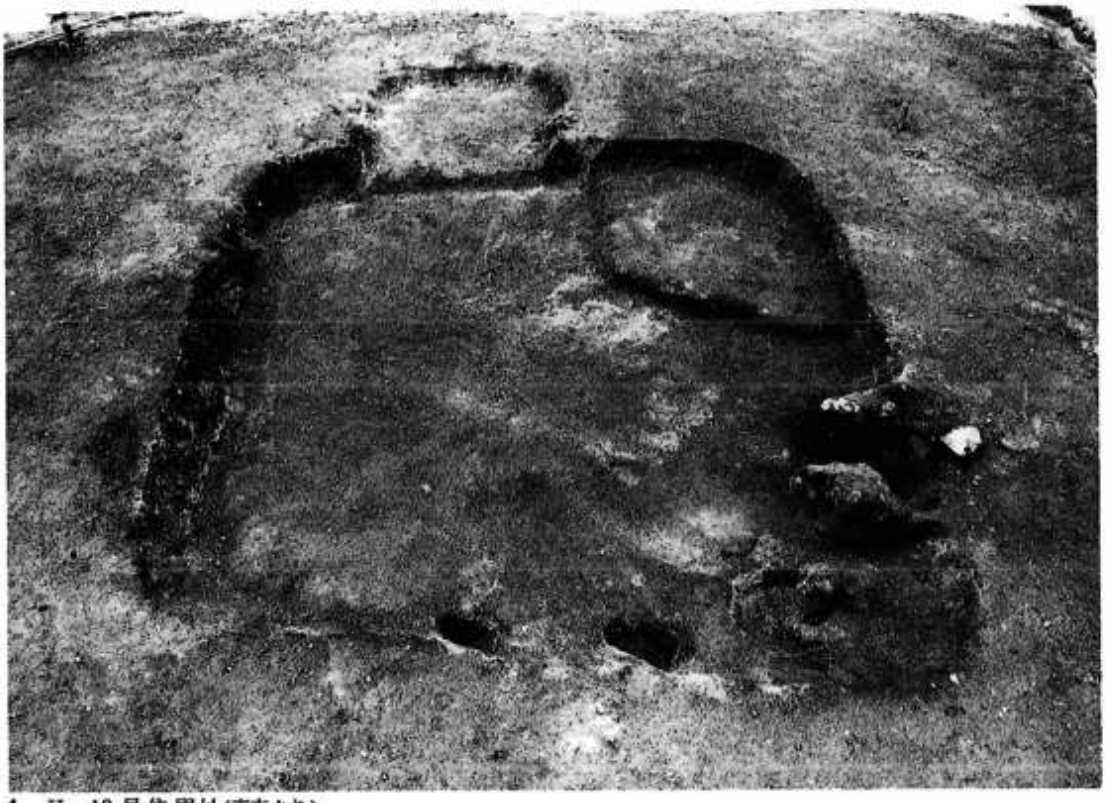
4. 出土遺物　42－3

5. 出土遺物　42－4

6. 出土遺物　42－6

7. 出土遺物　42－7

8. 出土遺物　42－17

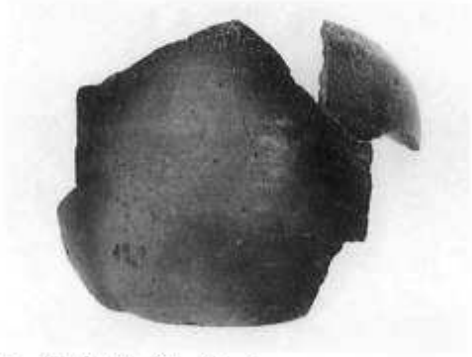


1. H－12号住居址(南方より)

図版一五　H－12号住居址

2. H－12号住居址カマド本体(西方より)

3. H－12号住居址カマド袖部芯の石組(西方より)



4. 出土遺物　45－1

6. 出土遺物　45－3

5. 出土遺物　45－2

7. 出土遺物　45－4

8. 出土遺物　45－5

9. 出土遺物　45－10

10. 出土遺物　45－11

11. 出土遺物　45－12

12. 出土遺物　45－13

13. 出土遺物　45－14

図版一六

H－12号住居址

14. 出土遺物　45－15

15. 出土遺物　45－16

16. 出土遺物　45－17

17. 出土遺物　45－18

18. 出土遺物　45－19

19. 出土遺物　45－20

20. 出土遺物　46－21

21. 出土遺物　46－22

22. 出土遺物　46－23

23. 出土遺物　46－26

24. 出土遺物　46－30

25. 出土遺物
47－32

26. 出土遺物
47－33

図版一七　H－13号住居址

1. H－13号住居址(西方より)

2. H－13号住居址　遺物出土状況

3. H－13号住居址　遺物出土状況

4. 出土遺物　51－1

5. 出土遺物　51－2

6. 出土遺物　51－3

7. 出土遺物　51－4

8. 出土遺物　51－5

図版一八

H－13号住居址（上段）・H－14号住居址（下段）

9. 出土遺物　51－6

10. 出土遺物　51－7

11. 出土遺物　51－8

12. 出土遺物　51－9

13. 出土遺物　51－11

14. 出土遺物　51－12

15. 出土遺物　51－13　墨書土器（大工）

16. 出土遺物
神功開宝

1. H－14号住居址　遺物出土状況

2. 出土遺物　54－5

3. 出土遺物　54－6

4. 出土遺物　54－7

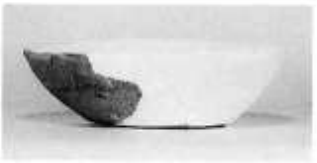
6. 出土遺物　54－11

5. 出土遺物　54－10

7. 出土遺物　54－12

8. 出土遺物　54－13

9. 出土遺物　54－14


10. 出土遺物　54－15

11. 出土遺物　54－17

12. 出土遺物　54－18

13. 出土遺物　54－20

14. 出土遺物　54－21

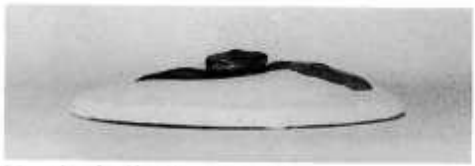
15. 出土遺物　55－28

16. 出土遺物　55－29

17. 出土遺物　55－30

18. 出土遺物　55－31

19. 出土遺物　55－32


20. 出土遺物　55－34

21. 出土遺物
56－45

図版二〇　H－15号住居址

1. H－15号住居址(西方より)

2. 出土遺物　59－2

図版二一　H－16号住居址

1. H－16号住居址(西方より)

2. 出土遺物　62－2

3. 出土遺物　62－3

図版二二　H－17号・H－18号住居址

1. H－17号，H－18号住居址（南方より）

発掘調査風景（第1区）

発掘調査風景（第1区）

図版二三　T－1号特殊竪穴状遺構

1. T－1号特殊竪穴状遺構(南方より)

2. T－1号特殊竪穴状遺構土層断面

3. T－1号特殊竪穴状遺構遺物出土状況

4. 出土遺物　65－1

5. 出土遺物　65－2

6. 出土遺物　65－3

7. 出土遺物　65－4

8. 出土遺物　65－5

9. 出土遺物　65－6

図版二四

T－1号特殊竪穴状遺構・D－16号土壙

10. 出土遺物　65－8

11. 出土遺物　65－14

12. 出土遺物　65－17

13. 出土遺物　65－18

14. 出土遺物　66－19

15. 出土遺物
66－20

16. 出土遺物
66－21

1. D－16号土壙墓　4号馬骨(東方より)

図版二五　D－16号・D－18号土壙墓

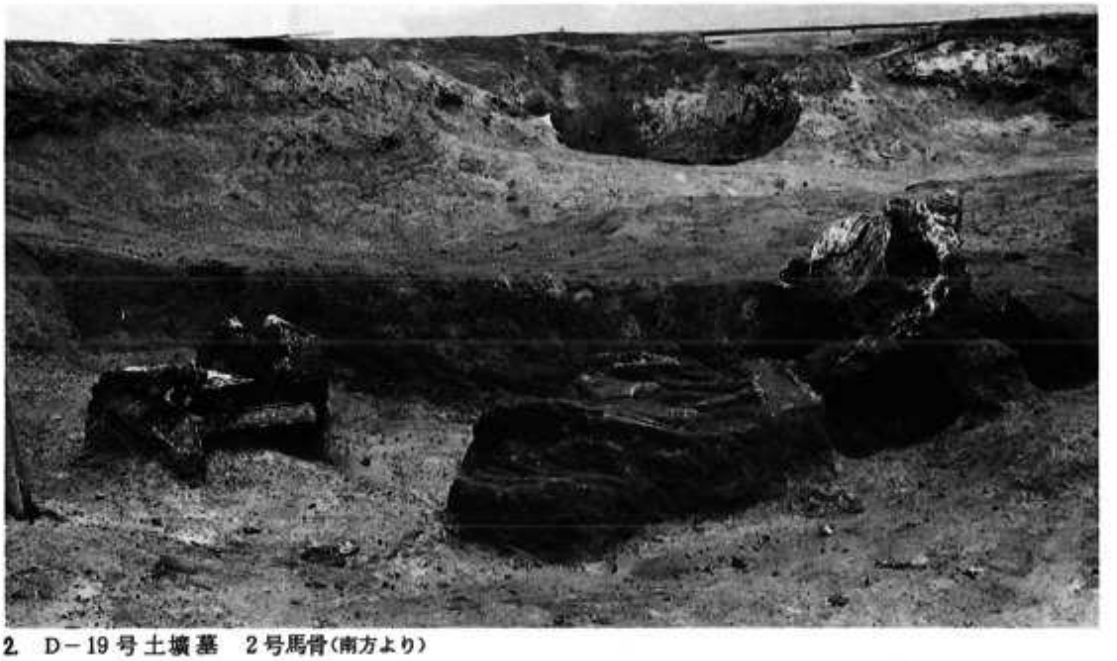
2. D－16号土壙墓　4号馬骨(西方より)

1. D－18号土壙墓　3号馬骨(南方より)

2. D－18号土壙墓　南北土層断面

図版二六　D－19号土壙墓

1. D－19号土壙墓　2号馬骨(北西より)



2. D－19号土壙墓　2号馬骨(南方より)

図版二七　D－20号土壙墓（上段）・土壙（下段）

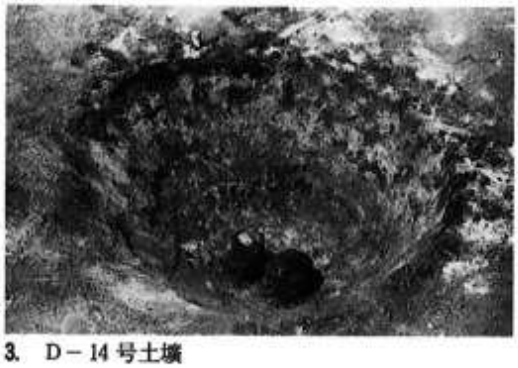
1.　D－20号土壙墓　1号馬骨

2.　D－20号土壙墓　馬頭骨と坏（71-1）

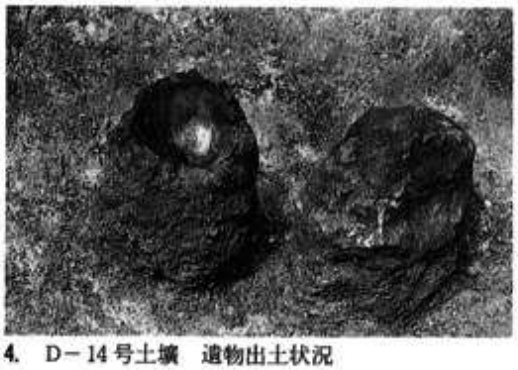
3.　出土遺物　71－1

1.　D－3号・D－4号・D－5号土壙

2.　D－91号・D－92号・D－94号土壙



3.　D－14号土壙



4.　D－14号土壙　遺物出土状況

図版二八　土壙（上段）・集石を伴う土壙（下段）

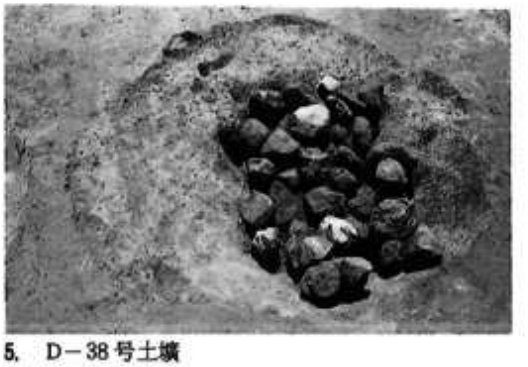
5. D－190号土壙

1. D－40号土壙

2. D－45号土壙　遺物出土状況（石皿）

3. D－48号～D－51号土壙

4. D－49号土壙（割り板は暗渠排水）



5. D－38号土壙

図版二九　集石を伴う土壙（上段）・石組みを伴う土壙（下段）

6.　D－47号土壙

7.　D－47号土壙　遺物出土状況

1.　D－48号土壙

2.　D－52号土壙

3.　D－54号土壙（前円部石組）

4.　D－54号土壙（掘り上がり）

図版三〇　灰を伴う土壙（上段）・土壙墓（下段）

1.　D－100号土壙（方形プランはS－6）

1.　D－55号土壙墓　人骨

2.　D－55号土壙墓　人骨

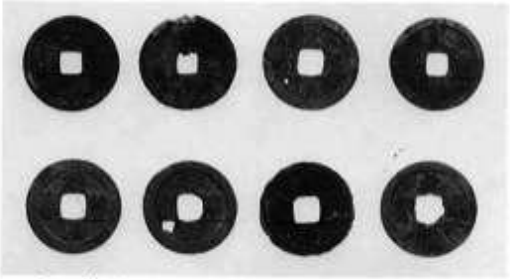
3.　D－56号土壙墓

図版三一　土壙

1. 出土遺物　85－3

2. 出土遺物　85－6

3. 出土遺物　86－11



4. 出土遺物

5. 出土遺物　88－12

6. 出土遺物　88－13

7. 出土遺物　88－14

8. 出土遺物　88－15

9. 出土遺物　88－16

10. 出土遺物　88－17

11. 出土遺物　88－18

12. 出土遺物　89－20

13. 出土遺物　89－21

図版三二　土壙

14. 出土遺物　89－19

15. 出土遺物　89－22

16. 出土遺物　89－23

17. 出土遺物　89－24

18. 出土遺物　89－25

19. 出土遺物　90－26

20. 出土遺物　90－27

21. 出土遺物　90－28

22. 出土遺物　90－30

23. 出土遺物　90－31

図版三三　土壙（上段）・竪穴状遺構（下段）

24. 出土遺物　90－32

25. 出土遺物　91－33

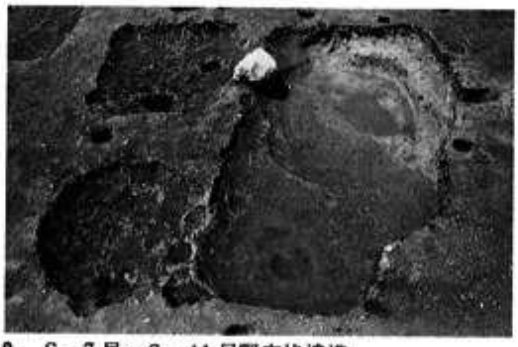
26. 出土遺物　91－34

27. 出土遺物　91－35

28. 出土遺物　91－36

29. 出土遺物　91－37

1. S－1号竪穴状遺構



2. S－7号～S－11号竪穴状遺構

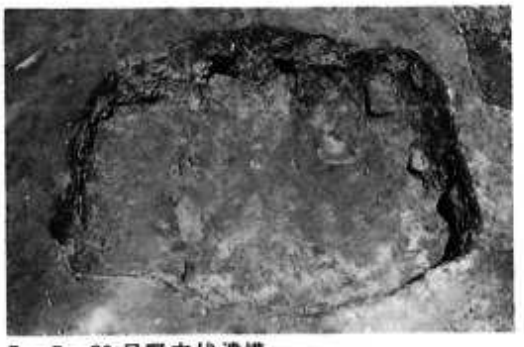
図版三四　竪穴状遺構

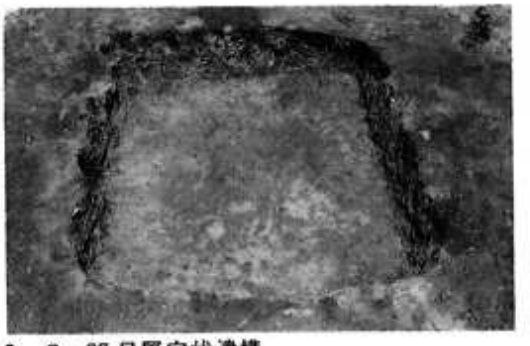
3. S－12号・S－13号竪穴状遺構

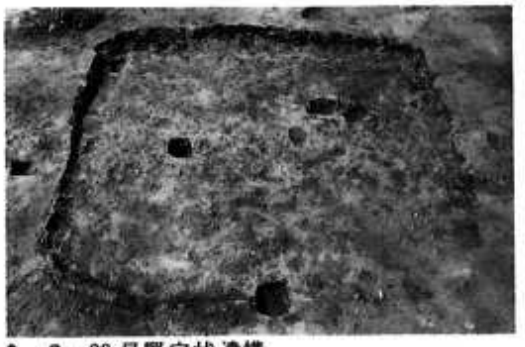
4. S－15号竪穴状遺構

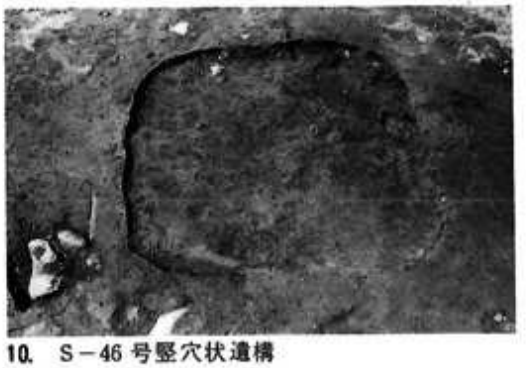
5. S－28号竪穴状遺構

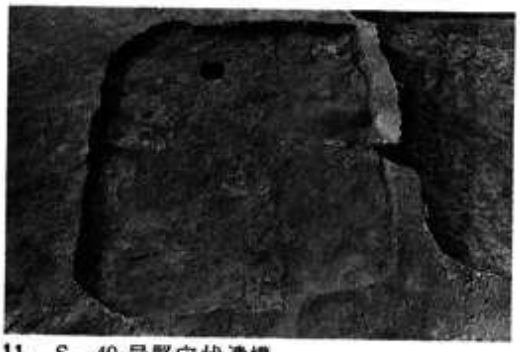
6. S－30号竪穴状遺構


7. S－30号竪穴状遺構


8. S－37号竪穴状遺構


9. S－39号竪穴状遺構


10. S－46号竪穴状遺構



11. S－49 号竪穴状遺構

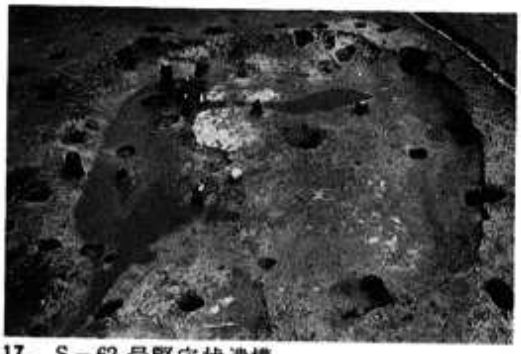
12. S－50 号竪穴状遺構

13. S－52 号・S－55 号竪穴状遺構

14. S－52 号・S－55 号竪穴状遺構

15. S－6 号竪穴状遺構

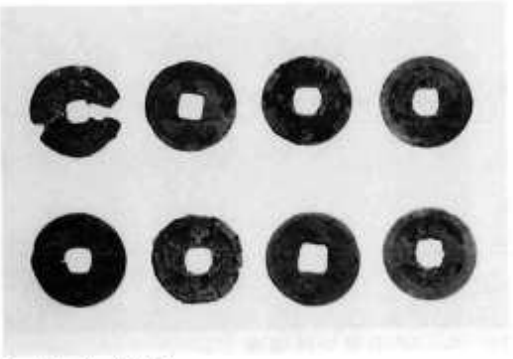
16. S－61 号竪穴状遺構



17. S－62 号竪穴状遺構

18. S－63 号竪穴状遺構

図版三六　竪穴状遺構



1. 出土遺物

2. 出土遺物　105－2

3. 出土遺物　105－4
青磁

4. S－62 出土　白磁

5. 出土遺物　105－12

6. 出土遺物
105－13

7. 出土遺物　105－14

8. 出土遺物　105－15

9. 出土遺物
105－16

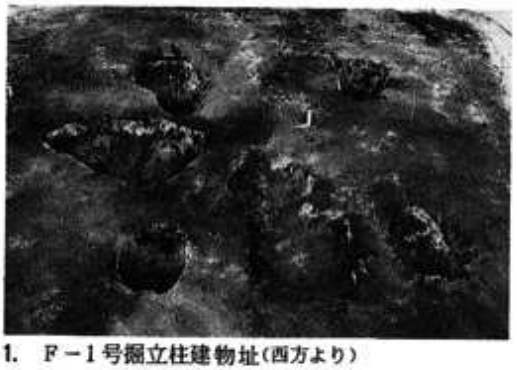
10. 出土遺物
105－17

11. 出土遺物
105－18

12. 出土遺物　105－19

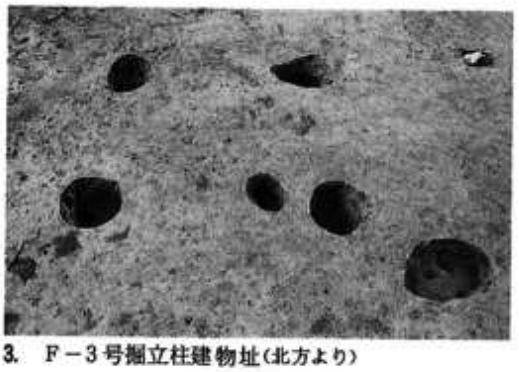
13. 出土遺物　106－20

図版三七　掘立柱建物址

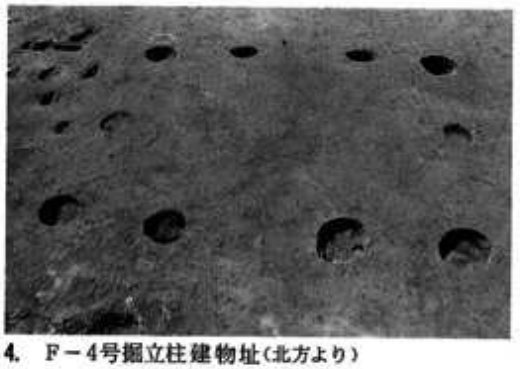


1.　F－1号掘立柱建物址（西方より）

2.　F－2号掘立柱建物址（南方より）



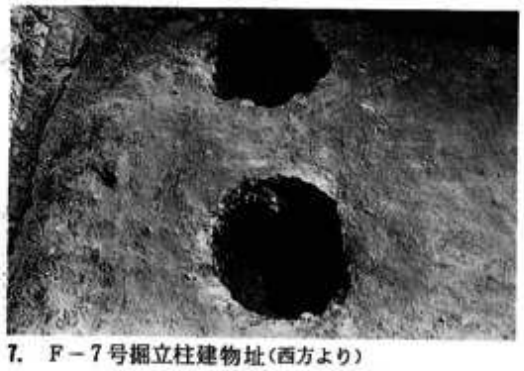
3.　F－3号掘立柱建物址（北方より）



4.　F－4号掘立柱建物址（北方より）

5.　F－6号掘立柱建物址（西方より）

6.　F－6号掘立柱建物址
土層断面



7.　F－7号掘立柱建物址（西方より）

8.　F－8号掘立柱建物址（南方より）

図版三八　ピット群・溝状遺構

1. ピット群出土遺物

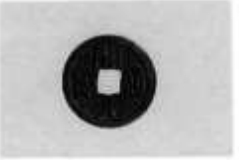
1. M－1号溝状遺構(東方より)

2. M－6号溝状遺構(南方より)

3. M－7号溝状遺構(西方より)

4. M－9号溝状遺構(西方より)

5. 出土遺物　133－21



6. 出土遺物　133－22

7. 出土遺物　133－23

8. 出土遺物　133－24

図版三九　表採

1. 表採遺物　135－3

2. 表採遺物　135－4

3. 表採遺物　135－5

4. 表採遺物

5. 表採遺物　134－1

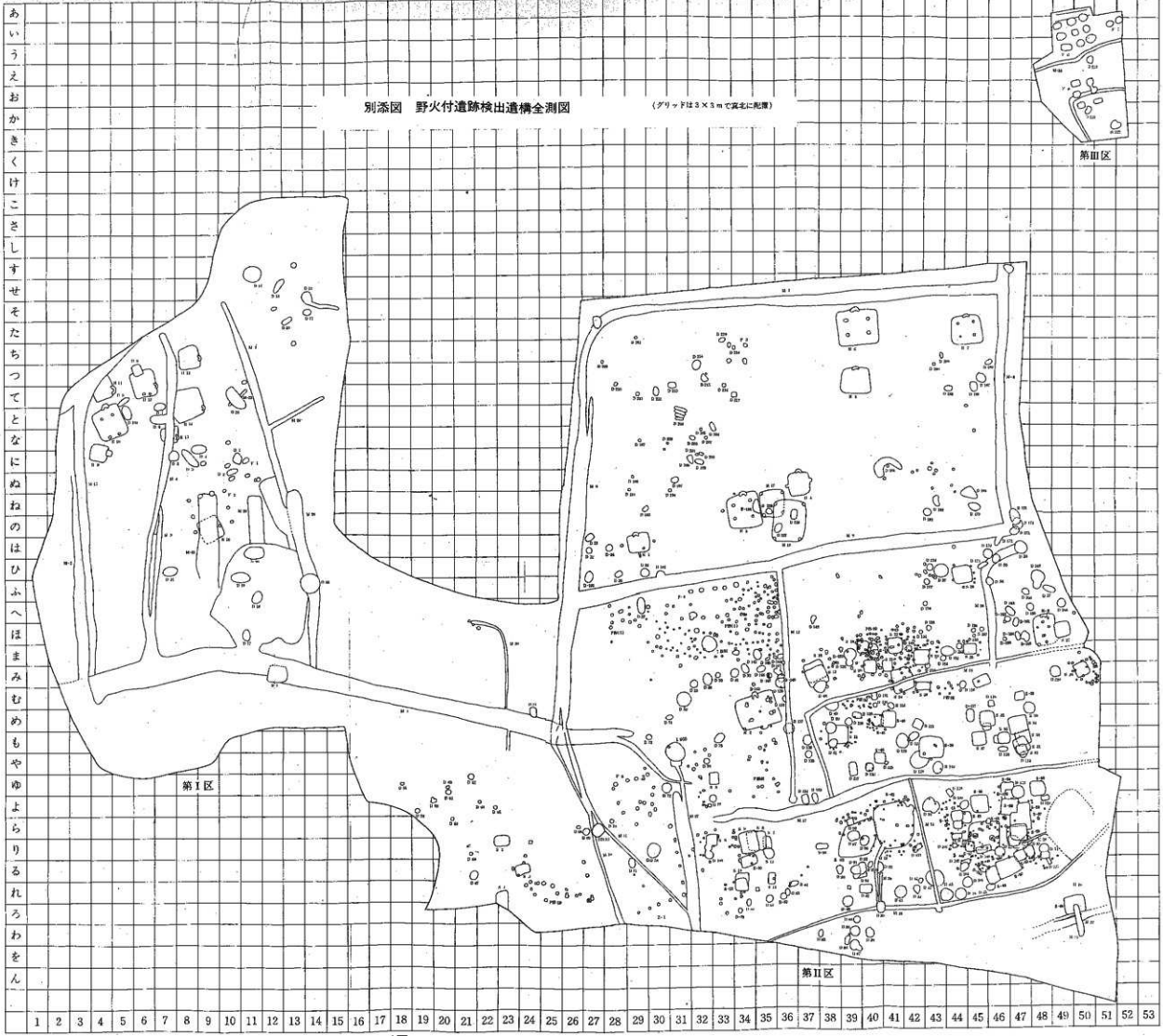
発掘調査風景(第Ⅱ区)

発掘調査風景(第Ⅱ区)

鋳師屋遺跡群
野火付遺跡
—発掘調査報告書—

昭和60年3月31日発行

編集　御代田町教育委員会
発行　御代田町教育委員会
印刷　ほおずき書籍株式会社


別添図　野火付遺跡検出遺構全測図
（グリッドは3×3mで真北に配置）
第Ⅰ区
第Ⅱ区
第Ⅲ区
あいうえおかきくけこさしすせそたちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよらりるれろわをん
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53